

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—茅野市・原村 その2—

昭和51年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

昭和34年10月 日

信州大学人文学部
日本史研究室 殿

長野県中央道遺跡調査団

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一冊
原存その二（昭和31年度）の贈呈について

拝啓。盛秋の候、益々御運勝のことと存じます。日頃、当調査団の業務については格別の御指導・御賜力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今般、3年ぶりて報告書を発刊することになりました。阿久・巻入尾根遺跡など継続調査分については略報にとどめた部分もあり、内容等につきましても不十分な点がありますが、何卒御高覧の上、種々御助言・御叱正を賜りたく、御礼尚々贈呈申し上げます次第です。

なお、ついでながら、当調査団も今年12月をもって、この長野本部を内搬し、新しく長野市内の旧県立図書館に移転することになりました。長年にわたる御指導・御援助に厚く御礼申し上げますと共に、今後とも相変わらぬ御交誼を祈願いたします。

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

——茅野市・原村 その2——

昭和51年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和51年度中央自動車道建設用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和51年4月19日から12月9日にかけて、茅野市・原村その2地区10遺跡の発掘調査を実施した。

この茅野市・原村の八ヶ岳山麓には、八ヶ岳連峰から放射状に伸びる長峰状丘陵が並び、この丘陵の標高900～1,000mの位置に多くの遺跡が分布している。中央自動車道は、これらの長峰状丘陵先端部を横断して建設されているが、丘陵先端部は山林地帯であり、遺跡の実態に明確さを欠くものが多く、新しい遺跡の発見が予想されていた。ちなみに、昭和51年度に発掘調査を実施した10遺跡のうち、居沢尾根、阿久（当初塩水）両遺跡以外の8遺跡は、中央自動車道の路線が発表されてから新たに発見されたものであり、予想以上に大規模な遺跡であることが明らかになったものである。

発掘調査の結果は、本報告書にみられるとおりであるが、特に、縄文時代前期の大規模な集落跡で、集石群の検出等未知の遺構の発見で注目された阿久遺跡、縄文時代中期の集落跡である居沢尾根、判の木山西、判の木山東の各遺跡などが注目される。丘陵上の平坦地には縄文時代前期・中期の集落が、丘陵南面緩傾斜地には縄文時代の小集落や平安時代の集落が立地する八ヶ岳山麓の集落立地の特色が明確になるなど、多大な成果をおさめ、学界に寄与することも大きいと自負している。

なお、居沢尾根、阿久、判の木山西の各遺跡は、予想以上に遺跡の規模が大きく、また、多くの遺構が重複していたため、計画年度内に調査を終了することが不可能になった。そのため、日本道路公団と協議し、次年度も継続して発掘調査を実施することとした。

本報告書の刊行にあたって、この発掘調査の実施に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、余寒未ださりやらぬ4月から、氷雪さえ見えた12月にかけて、長期間この調査に精励された大沢団長をはじめとする調査団の各位、この調査のために御協力いただいた諏訪中央道事務所、茅野市、原村当局並びに同地区被買収者組合等の関係各位に対し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和54年3月20日

長野県教育委員会教育長 水口米雄

例 言

1. 本書は、昭和51年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行なわれた発掘調査のうち、長野県茅野市および諏訪郡原村その2地区の調査報告書である。
2. 調査された10遺跡のうち、次年度以後も継続調査された阿久・居沢尾根・判の木山西の各遺跡についてはその概略を述べるに留め、又、時間的余裕の与えられなかった頭殿沢遺跡に関しては縄文時代に関する報告を割愛し、いずれも次回に正式報告することにした。
3. 調査結果に関しては、一部の遺物については類型化を試みたが、全般には十分検討する余裕は与えられなかった。若干錯綜する部分を含んでいるが、原則として検出された遺構・遺物の図示に重点を置いて編集した。
4. 小遺跡を多数報告することになり、担当者も多数にのぼったため、基本的事項のみを統一した。各担当者によって表現方法等に相違があることは了解されたい。
5. 作業分担は関係者全員の協議によって決定したが、途中退団者の分担分については整理担当者が補足を加えてある。
 - ・各遺構の発掘担当者は本文6ページに記載してある。
 - ・整理復元作業は、細川光貞・福沢幸一・矢島恵美子・関喜子・矢崎つな子・臼井泰彦・塚田敏彦が主として、山内志賀子・島田哲男・中村健一が一部をそれぞれ担当した。
 - ・実測・拓本・トレースは、根津清志・堀知哉・伴信夫・笹沢浩・青沼博之・坂野和信・松永満夫・高桑俊雄・岩崎孝治・村上孝・矢島宏雄・臼田武正・百瀬長秀が主として、丸山雅子・山下泰男・藤森美枝・佐藤信之が一部をそれぞれ担当した。
 - ・写真関係は、各発掘担当者および木下平八郎が主として、笹沢浩が一部をそれぞれ担当した。
6. 執筆に関しても協議の上分担し、文責は文末に記した。編集は百瀬長秀がおこなった。
7. 灰釉陶器については名古屋大学大学院生森田稔氏、日本考古学協会員江崎武氏の御教示を得た。
8. 石器の石質については信州大学教授田中邦雄先生の御教示を得た。
9. 本報告書関係の遺物・実測図等は、上伊那郡辰野町平出辰野東小学校内・長野県中央道遺跡調査団本部に保管してある。

凡 例

1. 住居地の主軸方向の計測は次の要領による。推定される入口と家の奥に相当する部分とを結んだ主軸線上に立ち、入口から屋内を見た場合の、主軸線と磁北との角度差を計測した。

2. 文章中の挿図、図版等は次の要領で省略した。






挿図 1 の 1 …… 図 1-1 図版 1 の 1 …… 図版 1-1

附表 1 …… 表 1

3. 文章中、住居地に付属するピットの計測値に関しては、特に明記しない限り、長径×短径・深さ（一）の順に記してある。

4. 註の中で、長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書は、中央道報告書と略した。

5. 挿図中の記号については次の通りである。

遺構図  焼土  粘土
——— 遺構中土質・硬度的に変化する部分
 ロームマウンド
遺物図  黒色土器  石器の磨耗痕部分

6. 図版の説明のうち、() 内の数字は実測図番号である。

7. ロームマウンドを、R・Mと略す場合がある。

目 次

序

例 言

I	調査状況	1
1	調査にいたるまで	1
1)	中央道関係の経過	1
2)	発掘調査委託契約	1
ア	発掘調査委託契約書	2
イ	長野県中央道遺跡調査会	3
ア)	長野県中央道遺跡調査会規約	3
イ)	昭和51年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿	6
ウ)	長野県中央道遺跡調査会調査団	6
2	調査の実施と経過	7
1)	調査の経過	7
2)	発掘調査協力者	7
3)	現地指導・視察者	8
3	発掘調査の方法	9
II	茅野市・原村の概況	10
1	茅野市・原村の自然環境	10
2	茅野市・原村地区内の遺跡	11
III	遺物の分類	24
1	縄文時代中期の石器	24
1)	打製石斧	24
2)	横刃型石器	26
2	平安時代後期の土器	26
1)	土師器	28
2)	灰釉陶器	28
IV	調査遺跡	31
1	入の日影遺跡 (SIRB)	31
1)	位 置	31
2)	発掘区の設定と調査の経過	31
ア	発掘区の設定	31
イ	発掘調査の経過	32
3)	土 層	32

4) 遺構と遺物	32
ア 縄文時代の遺構と遺物	32
イ 近世の遺構と遺物	33
5) まとめ	34
2 柏木南遺跡 (SKWC)	41
1) 位置	41
2) 発掘区の設定と調査の経過	41
ア 発掘区の設定	41
イ 発掘調査の経過	41
3) 土層	42
4) 遺構と遺物	42
ア 旧石器時代の遺物	42
イ 縄文時代前期の遺物	42
ウ 縄文時代中期の遺構と遺物	43
ア) 第1号住居址	43
イ) グリット出土の遺物	46
エ 近世の遺構	46
5) まとめ	46
3 阿久遺跡 (SAUB)	53
1) 位置	53
2) 発掘区の設定と調査の経過	53
ア 発掘区の設定	53
イ 発掘調査の経過	53
3) 検出遺構	57
4 中阿久遺跡 (SNAC)	58
1) 位置	58
2) 調査の経過	58
3) 出土遺物	58
4) まとめ	58
5 居沢尾根遺跡 (SIZB)	60
1) 位置	60
2) 調査の経過	60
3) まとめ	60
6 オシキ遺跡 (SOKB)	63
1) 位置	63
2) 発掘調査の経過と方法	63

3) 土 層	64
4) 遺構と遺物	64
ア 縄文時代の遺物	64
イ 平安時代の遺構と遺物	65
ア) 第1号住居址	65
イ) 遺構外遺物	66
ウ ロームマウンド	66
ア) ロームマウンド1号	67
イ) ロームマウンド2号	67
ウ) ロームマウンド3号	67
エ) ロームマウンド4号	67
オ) ロームマウンド5号	67
カ) ロームマウンド6号	67
キ) ロームマウンド7号	68
5) まとめ	68
7 上の原遺跡 (SUHB)	80
1) 位 置	80
2) 発掘調査の経過と方法	80
3) 出土遺物	80
4) まとめ	80
8 判の木山西遺跡 (SHNB)	82
1) 位 置	82
2) 調査の経過	82
9 判の木山東遺跡 (SHHB)	84
1) 位 置	84
2) 発掘調査の経過	85
3) 土 層	85
4) 遺構と遺物	86
ア 縄文時代の遺構と遺物	86
ア) 第8号住居址	86
イ) 第2号旧住居址	87
ウ) 第2号新住居址	87
エ) 第3号住居址	88
オ) 第5号住居址	89
カ) 第9号旧住居址	90
キ) 第9号新住居址	91

ク) 第11号住居址	92
ケ) 第12号住居址	93
コ) 遺構外出土遺物	94
イ 平安時代の遺構と遺物	95
ア) 第1号住居址	95
イ) 第4号住居址	97
ウ) 第6号住居址	98
エ) 第7号住居址	98
オ) 第10号住居址	99
カ) 遺構外出土遺物	100
ウ 土 塚	100
ア) 土塚1	100
イ) 土塚2	100
ウ) 土塚3	100
エ) 土塚4	100
オ) 土塚5	100
カ) 土塚6	101
キ) 土塚7	101
ク) 土塚8	101
5) まとめ	101
ア 縄文時代の遺構と遺物	101
ア) 集落と土器	101
イ) 石 器	103
A 石 鏃	103
B 石 匙	103
C 剥片石器	103
D 打製石斧	103
E 横刃型石器	104
F 大形粗製石匙	104
G 磨製石斧・石ノミ状石器	105
H 凹石・磨石	105
I 石 皿	105
J その他	105
K 接合された石器	106
L 石 材	106
M まとめ	108

イ 平安時代の遺構と遺物	108
10 頭殿沢遺跡 (STDB)	151
1) 位置	151
2) 調査の経過	151
3) 土層	152
4) 遺構と遺物	152
ア 平安時代の遺構と遺物	152
ア) 第1号住居址	152
イ) 第2号住居址	153
ウ) 第6号住居址	154
エ) 第7号住居址	154
オ) 第8号住居址	155
カ) 土壌	155
キ) 遺構外出土遺物	156
5) まとめ	156
あとがき	172

挿 図 目 次

第1図 茅野市遺跡分布図	12
第2図 原村遺跡分布図	13
第3図 茅野・原地区中央道用地にかかる遺跡分布図	14
第4図 平安時代土師器・灰釉陶器器種類図	29
第5図 入の日影遺跡地形図	35
第6図 入の日影遺跡発掘図および出土石器実測図 (その1)	36
第7図 入の日影遺跡集石・土壌・集石土壌実測図および土層図	37
第8図 入の日影遺跡出土土器・貨幣実測・拓影図	38
第9図 入の日影遺跡出土石器実測図 (その2)	39
第10図 柏木南遺跡出土区画文土器展開図	44
第11図 柏木南遺跡地形・発掘図およびC地区標準土層図	47
第12図 柏木南遺跡1号住居址実測図	48
第13図 柏木南遺跡1号住居址、遺構外出土土器実測・拓影図	49
第14図 柏木南遺跡1号住居址、遺構外出土石器実測図 (その1)	50
第15図 柏木南遺跡1号住居址、遺構外出土石器実測図 (その1)	51
第16図 阿久遺跡遺構全体図	55

第17図	中阿久遺跡地形・発掘図	59
第18図	中阿久遺跡出土土器実測・拓影図	59
第19図	居沢尾根遺跡地形・発掘図	61
第20図	居沢尾根遺跡遺構全体図	62
第21図	オシキ遺跡地形・発掘図および遺構全体図	69
第22図	オシキ遺跡1号住居址，ロームマウンド1・2号実測図	70
第23図	オシキ遺跡ロームマウンド3～7号実測図	71
第24図	オシキ遺跡ロームマウンド5～7号周辺出土土器拓影図，遺構外出土土器拓影図(その1)	72
第25図	オシキ遺跡遺構外出土土器拓影図(その2)	73
第26図	オシキ遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その3)	74
第27図	オシキ遺跡1号住居址，ロームマウンド1号出土土器実測図，遺構外出土土器実測図 (その1)	75
第28図	オシキ遺跡ロームマウンド6・7号出土土器実測図，遺構外出土土器実測図(その2)	76
第29図	オシキ遺跡1号住居址・1号住居址周辺出土土器実測図	77
第30図	上の原遺跡地形・発掘図	81
第31図	上の原遺跡出土土器実測図	81
第32図	判の木山東遺跡第1次調査分遺構全体図	83
第33図	判の木山東遺跡地形・発掘図	84
第34図	接合された石器の位置関係図	106
第35図	接合された石器実測図	107
第36図	供膳形態の石器の容量グラフ	110
第37図	判の木山東遺跡遺構全体図	112
第38図	判の木山東遺跡土層図	113
第39図	判の木山東遺跡5・8号住居址実測図	114
第40図	判の木山東遺跡2号住居址(旧)・(新)実測図	115
第41図	判の木山東遺跡3・11号住居址，土壌1実測図	116
第42図	判の木山東遺跡9号住居址(旧)・(新)実測図	117
第43図	判の木山東遺跡9号住居址(新)，土壌6実測図	118
第44図	判の木山東遺跡1・12号住居址，土壌2・3実測図	119
第45図	判の木山東遺跡1・2・7号住居址，土壌4実測図	120
第46図	判の木山東遺跡4・9号住居址，1号住居址カマド実測図	121
第47図	判の木山東遺跡6・10・11号住居址，土壌5・7・8実測図	122
第48図	判の木山東遺跡2・3・5・8・9号住居址出土土器実測・拓影図	123
第49図	判の木山東遺跡9・11・12号住居址，土壌5，遺構外出土土器実測図	124
第50図	判の木山東遺跡8号住居址出土土器拓影図	125
第51図	判の木山東遺跡2号住居址(旧)・(新)出土土器実測・拓影図	126

第52図	判の木山東遺跡2号住居址(新), 3・5号住居址出土土器実測・拓影図	127
第53図	判の木山東遺跡3・5号住居址出土土器実測・拓影図	128
第54図	判の木山東遺跡5号住居址, 9号住居址(旧)・(新)出土土器拓影図	129
第55図	判の木山東遺跡9号住居址(新)出土土器拓影図	130
第56図	判の木山東遺跡9号住居址(新), 11・12号住居址出土土器実測・拓影図	131
第57図	判の木山東遺跡12号住居址, 土壙3・7出土土器実測図, 遺構外出土土器実測・拓影図 (その1)	132
第58図	判の木山東遺跡遺構外出土土器拓影図(その2)	133
第59図	判の木山東遺跡遺構外出土土器拓影図(その3)	134
第60図	判の木山東遺跡遺構外出土土器拓影図(その4)	135
第61図	判の木山東遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その5)	136
第62図	判の木山東遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その6)	137
第63図	判の木山東遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その7)	138
第64図	判の木山東遺跡2・3号住居址出土石器実測図	139
第65図	判の木山東遺跡5・8・9号住居址出土石器実測図	140
第66図	判の木山東遺跡9号住居址出土石器実測図	141
第67図	判の木山東遺跡9・11・12号住居址出土石器実測図	142
第68図	判の木山東遺跡6号住居址, 土壙2, 遺構外出土石器実測図	143
第69図	判の木山東遺跡1・4号住居址出土土器実測図	144
第70図	判の木山東遺跡4・6・7・10号住居址出土土器実測図	145
第71図	判の木山東遺跡遺構外出土土器, 1・4・6号住居址出土石器・金属器実測図	146
第72図	頭殿沢遺跡地形・発掘図	159
第73図	頭殿沢遺跡平安時代遺構全体図	160
第74図	頭殿沢遺跡1・7・8号住居址実測図	161
第75図	頭殿沢遺跡2号住居址, 8号住居址内土壙, 土壙2・3, 2・6号住居址カマド実測図	162
第76図	頭殿沢遺跡1号住居址出土土器実測図	163
第77図	頭殿沢遺跡2号住居址出土土器実測図	164
第78図	頭殿沢遺跡6・7号住居址, 土壙2・3, 遺構外出土土器実測図	165
第79図	頭殿沢遺跡遺構外出土土器, 1・8号住居址出土羽口, 2号住居址出土金属器実測図	166

附表目次

第1表	茅野市・原村時代別遺跡数	17
第2表	茅野市遺跡一覧表	18
第3表	原村遺跡一覧表	22
第4表	打製石斧分類表	24

第5表	横刃型石器分類表	25
第6表	平安時代の土器器種分類表	27
第7表	オシキ・判の木山東・頭殿沢遺跡出土，平安時代の土器器種別個体数一覧表	30
第8表	入の日影遺跡出土石器一覧表	40
第9表	柏木南遺跡出土石器一覧表	52
第10表	オシキ遺跡出土石器一覧表	78
第11表	オシキ遺跡出土平安時代土器一覧表	79
第12表	打製石斧の破損	104
第13表	判の木山東遺跡出土石器石材別数	107
第14表	判の木山東遺跡出土石器一覧表	147
第15表	判の木山東遺跡出土平安時代土器一覧表	149
第16表	頭殿沢遺跡出土平安時代土器一覧表	167
第17表	頭殿沢遺跡出土鉄滓一覧表	169
第18表	柏木南・判の木山東遺跡縄文時代住居址一覧表	170
第19表	オシキ・判の木山東・頭殿沢遺跡平安時代住居址一覧表	171

図版目次

図版1	入の日影遺跡 景観	173
図版2	入の日影遺跡 集石	174
図版3	入の日影遺跡 出土遺物	175
図版4	柏木南遺跡 景観	176
図版5	柏木南遺跡 第1号住居址	177
図版6	柏木南遺跡 出土土器	178
図版7	柏木南遺跡 出土石器	179
図版8	中阿久遺跡 上の原遺跡 景観	180
図版9	オシキ遺跡 景観・第1号住居址	181
図版10	オシキ遺跡 第1号住居址・ロームマウンド2号	182
図版11	オシキ遺跡 ロームマウンド5・6号	183
図版12	オシキ遺跡 出土土器(縄文時代)	184
図版13	オシキ遺跡 出土土器(平安時代)・石器(縄文時代)	185
図版14	判の木山東遺跡 景観	186
図版15	判の木山東遺跡 第2・3号住居址	187
図版16	判の木山東遺跡 第5・8号住居址	188
図版17	判の木山東遺跡 第9号住居址	189

図版18	判の木山東遺跡	第9・11号住居址	190
図版19	判の木山東遺跡	第1号住居址	191
図版20	判の木山東遺跡	第4号住居址・第1号住居址カマド・土壙5	192
図版21	判の木山東遺跡	炉址	193
図版22	判の木山東遺跡	出土土器(縄文時代)	194
図版23	判の木山東遺跡	出土土器(縄文時代)	195
図版24	判の木山東遺跡	出土土器(縄文時代)	196
図版25	判の木山東遺跡	出土土器(縄文時代)	197
図版26	判の木山東遺跡	出土石器(縄文時代)	198
図版27	判の木山東遺跡	出土石器(縄文時代)	199
図版28	判の木山東遺跡	出土石器(縄文時代)	200
図版29	判の木山東遺跡	出土土器・金属器(平安時代)	201
図版30	頭殿沢遺跡	景観 第1・2号住居址カマド	202
図版31	頭殿沢遺跡	第1号住居址	203
図版32	頭殿沢遺跡	第2・7・8号住居址	204
図版33	頭殿沢遺跡	出土土器(平安時代・土師器)	205
図版34	頭殿沢遺跡	出土土器(平安時代・灰釉陶器)	206
図版35	頭殿沢遺跡	出土羽口・金属器・鉄滓・鍛冶滓	207
図版36	オシキ遺跡・判の木山東遺跡・頭殿沢遺跡	出土平安時代土器の製作技法	208

I 調査状況

1. 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

買収された用地は、昭和52年3月現在6,826,218㎡の広さに及ぶ。ルート内に含まれる埋蔵文化財包蔵地は195遺跡を数え、調査対象面積も1,125,495㎡以上に及んでいる。昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、昭和45年までの数年にわたり度重なる協議が日本道路公団名古屋支社との間に続けられ、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で7年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和51年までに184遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持たないので、「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。調査団の運営には、団長と共に、県教育委員会文化課に置いた指導主事が調査主任として現地へ出向し、当っている。昭和45・46年度には調査主任2名、調査班2班編成であったが、昭和47年度から増員され6名の調査主任が数班編成で業務に当たることになった。

昭和51年度は調査地区の関係もあって指導主事が4名に減員された。このことは調査進行上極めて大きな支障をきたした。4月12日、茅野市・原村その2地区10遺跡(調査費9,174,4万円)を契約し、3班編成で調査が開始されたが、各班とも夫々予想以上の大規模遺跡に遭遇し、年度内調査は不可能な事態に立ち至った。即ち、阿久・居沢尾根・判の木山西・頭殿沢各遺跡がそれで、頭殿沢遺跡を除いて次年度へ調査を延伸せざるを得なくなった。とくに阿久遺跡は予測し難い広大かつ類例のない遺跡として注目されている。更に前年度までの遺物整理作業の遅れは年々累積され、同時に工期に迫られて発掘調査が強行されるという、単年度契約方式の弊害が如実に現われており、度々の公団交渉で実情を訴えては来たが、その解決策が見出されず苦慮した年度である。

2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵

文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施工前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会は、公団と現地協議など度重なる事務折衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査費・調査期間・調査方法が定められる。その後相互の委託・受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結される。

ア 発掘調査委託契約書

- | | |
|-----------|--------------------------|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査（茅野市・原村 その2） |
| 2 委託期間 | 昭和51年4月5日から昭和52年3月20日まで |
| 3 委託金額 | 91,744,000円也 |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋建設局 |

日本道路公団（以下「甲」という）は、長野県教育委員会（以下「乙」という）に頭書の発掘調査の実施を委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議し書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し、委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調査其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和51年4月5日

委託者 名古屋市中区栄4丁目1番1号(中日ビル11~12階)

日本道路公団名古屋建設局

局長 平野和男 ㊟

長野県教育委員会

教育長 水口米雄 ㊟

イ 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和51年度役員・茅野市・原村地区調査団組織はつぎのとおりである。

ア) 長野県中央道遺跡調査会規約

(目 的)

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用を研究することを目的とする。

(名 称)

第2条 この調査会は、長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

(組 織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名

(事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるものの中から会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長
(5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は、調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること (2) 発掘調査の受託に関すること
(3) 規約の改正に関すること (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代理する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧 問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に必ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監 事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は1年とする。ただし、その職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の業務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の業務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 昭和51年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和51年10月現在)

顧問	一志 茂樹 (県文化財保護審議会委員長)		
会長	水口 米雄 (県教育長)		
理事	金井喜久一郎 (県文化財専門委員)	米山 一政 (県文化財専門委員)	
	桐原 健 (県文化財専門委員)	原 嘉藤 (信濃史学会理事)	
	村上 一 (県教育次長)	太田 波夫 (県文化課長)	
	下平 晃 (伊那教育事務所長)	名取 又男 (諏訪地区教委協議会長)	
	熊谷 大一 (辰野町教育長)	久保 義幸 (岡谷市教育長)	
	中村 文武 (諏訪市教育長)	木川 千年 (茅野市教育長)	
	小泉 真澄 (原村教育長)	小林 繁治 (富士見町教育長)	
	小島与四男 (諏訪教育会長)	林 茂樹 (長藤小学校長)	
	監事	小栗栄重郎 (県文化課課長補佐)	上原 寛 (茅野市教育次長)
		幹事	青沼 一之 (県文化課文化係長)
堀内規矩雄 (県文化課主事)	宮島 孝明 (県文化課主事)		
平野 益雄 (県文化課主事)	西沢 宏明 (県文化課主事)		
水品 良彦 (伊那教育事務所総務課長)	久保田秀明 (伊那教育事務所主査)		
寺沢 公明 (伊那教育事務所主事)	星野 政清 (伊那教育事務所社会教育課長)		
武井今朝人 (伊那教育事務所主任)	小口 幸雄 (伊那教育事務所諏訪支所長)		
今村 善興 (県文化課指導主事)	樋口 昇一 (県文化課指導主事)		
山田 瑞穂 (県文化課指導主事)	伴 信夫 (県文化課指導主事)		
丸山徹一郎 (県文化課指導主事)	笹沢 浩 (県文化課指導主事)		

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団

調査団長 大沢 和夫

調査主任 (総括) 今村 善興

A班 (中阿久・居沢尾根・オシキ・上の原遺跡)

調査主任 山田 瑞穂

調査員 堀 知哉 木下平八郎 平出 一治 高桑 俊雄 村上 孝

B班 (入の日影・柏木南・阿久遺跡)

調査主任 笹沢 浩

調査員 小松原義人 福沢 幸一 松永 満夫 中島 庄一 矢島 宏雄 岩崎 孝治

C班 (判の木山西・判の木山東・頭殿沢遺跡)

調査主任 伴 信夫

調査員 辰野 伝衛 根津 清志 細川 光貞 小林 正春 知名 定順 赤羽 義洋

2. 調査の実施と経過

1) 調査の経過

茅野市・原村その2地区の発掘調査は、3班編成で、4月19日より柏木南・オシキ・頭殿沢の各遺跡から開始された。その経過については次の表及び調査遺跡の項に誌された通りであるが、様々の困難の中、関係各方面の協力を得て進められ、最後まで残った阿久遺跡が終了したのは12月9日のことであった。この間、発掘調査の実働日数191日、のべ協力者は9,000人余りに及んだ。しかし、阿久・居沢尾根・判の木山西の3遺跡は、予想をはるかに上回る大規模な遺跡で、本年度内には調査しきれず、次年度へ繰り延べられたのである。

遺跡名	地目	全 体 積	用地内面積	調査予定面積	実調査面積	調 査 期 間 (月)												
						4	5	6	7	8	9	10	11	12-3				
入の日影	水田畑	9,850 ^{m²}	3,800 ^{m²}	2,200 ^{m²}	478 ^{m²}					23								
柏木南	畑	19,970	7,500	1,500	1,500	19												
阿久	畑	21,500	11,000	4,000	4,000		17											9
中阿久	畑	10,075	5,300	1,000	248		22											
居沢尾根	畑	27,500	17,400	3,000	3,884			31										19
オシキ	畑	16,320	5,600	1,700	872	19												20
上の原	山林	24,750	4,600	900	436													29
判の木山西	山林	29,750	7,850	3,000	1,726													13
判の木山東	山林	10,700	3,000	600	1,750					24								7
頭殿沢	畑	23,450	8,675	4,800	5,300					29								23
(合計)		193,865	74,725	22,700	20,194	19												9

遺物整理・報告書作成

2) 発掘調査協力者

発掘作業には茅野市・原村在住の方々を中心に、諏訪市・岡谷市等の方々の参加・協力を得、整理作業では諏訪市・辰野町在住の方々の協力を得た。調査はこのような熱心の方々の力に負う所が大であった。

赤沼 幸一	赤羽 淑子	赤羽三千江	秋山きみ系	朝倉 くに	東 勉
阿部よし子	荒木 弥生	有賀 栄作	有賀つた系	有賀 正男	伊東 竹之
伊藤 博文	伊藤やすえ	伊藤ゆかり	伊藤 洋児	今泉かめ子	岩佐 哲男
岩崎はつ系	岩波けさ江	岩波やよひ	植松 広	牛山 いね	牛山 英子
牛山恵美子	牛山 辰秋	牛山とく子	牛山よしみ	江里口省三	大島 あや
岡本ひさえ	荻原 茂	小薬 一夫	小倉 勇	小倉みつえ	長田あき子
小沢みつ子	小沢 万作	小沢 安喜	笠原 隆光	春日 房子	加藤きよの
金井 久代	金子さよ子	鎌倉 末男	鎌倉たけみ	鎌倉みき子	鎌倉みちえ
川上小夜子	菊池 正志	菊池ふたみ	北沢 志毅	北原 市子	北原今朝一
北原今朝嘉	木下とくよ	久保田英子	久保田 勝	窪田 壬	小池喜四郎
小池さだ系	小池むつ子	小倉みつ江	後町はる子	小林あさ系	小林あやめ
小林 英子	小林 悦子	小林 源次	小林 静子	小林 つか	小林 利昭
小林 利重	小林とみえ	小林 政幸	小林 万作	小林 ミサ	小林三代子
小林 初江	小林 花子	小林 美映	小林 儀平	小松 吉郎	五味かず系
五味けさき	五味とき子	五味 憲彦	五味はつね	五味ふさ子	五味 文男
桜井 弘人	篠原ふくよ	清水おとり	清水けさ子	清水さわの	清水しげ子
清水たけよ	清水たつみ	清水千代子	清水つね系	清水 初江	清水 好郎
鈴木御恵子	関 隆範	武井スミ江	立木あき代	田中 惇子	田中 文六
長林ときわ	長林みね子	中村ふさえ	中山幸次郎	中山 保	野沢 和代
野沢 博子	野村志めよ	野村 文彦	林 やす子	原 保	原 トメ
原 芳明	原 由子	原田りょう	樋口 誠司	樋口 真樹	日達イサ子
平林 きく	平林千代栄	福沢 春夫	藤森 開三	藤森 建芳	藤森ひろ子
藤森 正子	藤森ミツ子	藤原せつ子	藤原 千文	藤原ちえ子	古畑かのえ
細川 伝一	細野たつよ	堀内おこの	堀内けさを	堀内 政子	堀内 美江
堀内よし系	松尾 啓子	丸山 吉代	御堂島 正	水品 紫乃	宮坂 収一
宮坂とし子	宮坂 花子	宮坂はる子	宮坂ひろ子	宮坂 三男	宮島 章
守屋 かの	守屋 くに	守屋 里子	守矢 たつ	守屋 好	矢崎みさを
矢島 丑松	矢嶋恵美子	山岸 三代	山下 正康	芳沢 花江	芳沢みよ子
和田 文子					

3) 現地指導・視察者

日本道路公団	名古屋建設局庶務課長
県教委事務局	教育長・伊那教育事務所一行
市町村関係	原村村長・同助役・同村会議員一行・同教育長・茅野市教育長

研 究 者 会田進・安藤茂良・一志茂樹・鶴飼幸雄・岡田篤子・折井敦・笠原安夫・金子裕之・
小出義治・小林公明・河野喜映・末木健・田畑辰雄・戸沢充則・外山和夫・長崎元広
西克久・能登健・林茂樹・原嘉藤・松本豪・宮坂虎次・宮坂光昭・武藤雄六・森山公

そ の 他 労政事務所長・茅野市民新聞・桜映画社・信濃毎日新聞社

(敬称略)

3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、道路建設工事による全面破壊に伴う事前調査である。工事着工前に記録保存を目的として行なうので、用地内に限ってできる限り精密な記録化が望まれ、その結果を公表する事が義務づけられている。調査方法は『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針』に基づいている。

遺跡名は全てローマ字四文字で記号化している。頭のSは日本道路公団諏訪工事事務所の管括を表わし、次の2文字は遺跡名の頭文字2つ、最後の1文字は遺跡区分を表わす。この区分は、予め分布調査等で確認された遺跡範囲のうちどの部分を中央道が横切るかで四区分したもので、0—遺跡の全面、A—遺跡の頂部、B—遺跡の中央部、C—遺跡の先端部、をそれぞれ横切ることを示している。

事前調査であるから、原則として用地内は全面発掘するのが望ましいが、とりあえず全面にグリッドを設定し、グリッド調査の結果遺構検出の見込みがない遺跡については調査をそこで留め、遺構が検出された遺跡については全面発掘に切り替えた。尚、グリッド設定方法は、用地内をセンターライン沿いに50mずつに区分して「地区」とし、ローマ字で名称を与えた。この地区内をさらに25区画に区切り小牧寄りからローマ字名称を与えるとともに、センターラインに直交方向を2m毎に区切り、センターラインを50とし、東京に向かって左からアラビア数字2桁名称を与えた。この両者の組み合わせからなる名称を与えられた2m四方の区画が1グリッドとなる。表土剥ぎには重機を用い能率向上をはかった。

実測方法は平板測量を主体としているが、一部の遺跡では遣り方測量で行なっている。測量の基準点は日本道路公団作成の平面図に依っており、地形測量も同平面図を利用した。絶対標高は日本道路公団作成の水準点を利用し、方位は磁北を用いている。

発掘調査中の記録は、『調査日誌』、『住居址調査カード』を使用した。又、調査員の努力により『調査週報』を発行して協力者の方々の理解を深めた。

Ⅱ 茅野市・原村の概況

1. 茅野市・原村の自然環境

茅野市・原村は富士見町と共に諏訪盆地南半の行政区画である。諏訪盆地は糸魚川―静岡構造線とこれに付随する断層の陥没によって形成されたが、その南半部では八ヶ岳の火山堆積物も現地地形形成に大きな役割りを果たしている。糸魚川―静岡構造線の西側は隆起して赤石山脈を形成しており、その末端の入笠山系も急峻な地勢で生活には不向きである。一方、同構造線の東側は、古い火山である霧ヶ峰連峰と八ヶ岳連峰によって北側・東側をそれぞれ画され、火山地形特有の広い裾野によって広大な平坦面が形成されている。これが茅野市・原村の地勢の大半を占める。山浦地方と総称されるこの一帯は茅野市街東方の残丘状の大泉山・小泉山を境に南北で若干地形を異にするものの、全般に河川による浸食が進んでいない。南側では芳原川・碑田川・金山沢川・道祖神川・裏沢川・阿久川・大早川・前沢川・弓振川等が、糸魚川―静岡構造線に直交するように裾野を開析し、断層上で合流し宮川となって諏訪湖に流入するが、陥没部分を埋め立てて狭小ながらも沖積平野を形成する。この沖積地は富士見町神戸付近より諏訪湖まで続いている。一方、北側では柳川および角石川・渋川・滝ノ湯川・音無川等が合流した上川が、霧ヶ峰山塊のふもとを回るようにして流れ、流域に沖積面をつくっており、こちらの方が幾分か開析が進んでいる。

さて、諏訪盆地全体を、御岳・乗鞍岳を起源とし古・中・新の三期に区分される信州ローム層が厚くおおっているが、山浦地域では八ヶ岳に起因する火砕流が加わって堆積関係はやや複雑な様相をみせる。一方、先に記した河川の開析によって四つの段丘面が形成されている。中央自動車道は諏訪湖西側から諏訪盆地中央の、ローム層をもたず沖積層からなる第4段丘相当面を南下し、茅野市宮川坂室付近から新时期ローム風成層がのる第1段丘面に上がり、富士見町から山梨県へ抜けるのである。

茅野市・原村は最低位の茅野市の沖積面でも標高766mあり、中心部たる山浦地方は850～1100mもある。当然ながら、気温は全般に低く、日較差・年較差も大きい。ちなみに原村(註1)では、月平均気温は2月で-3.5℃、8月で21.2℃で、日較差の年平均値は9.3℃もある。降水量は年平均1296.4mmと県内では多い方である。

以上、茅野市・原村地区の自然環境を概観した。

註1 原村八ツ手、長野県農事試験場原村試験地の昭和42～47年の観測結果による。

尚、本項全般に、諏訪教育会、植松幹夫(岡谷西部中学校)、北沢和男(信大附属長野小学校)の諸氏・諸団体の御教示を得た。又、諏訪教育会編、「諏訪の自然誌地質編」(1975)を参照した。

(今村善興・百瀬長秀)

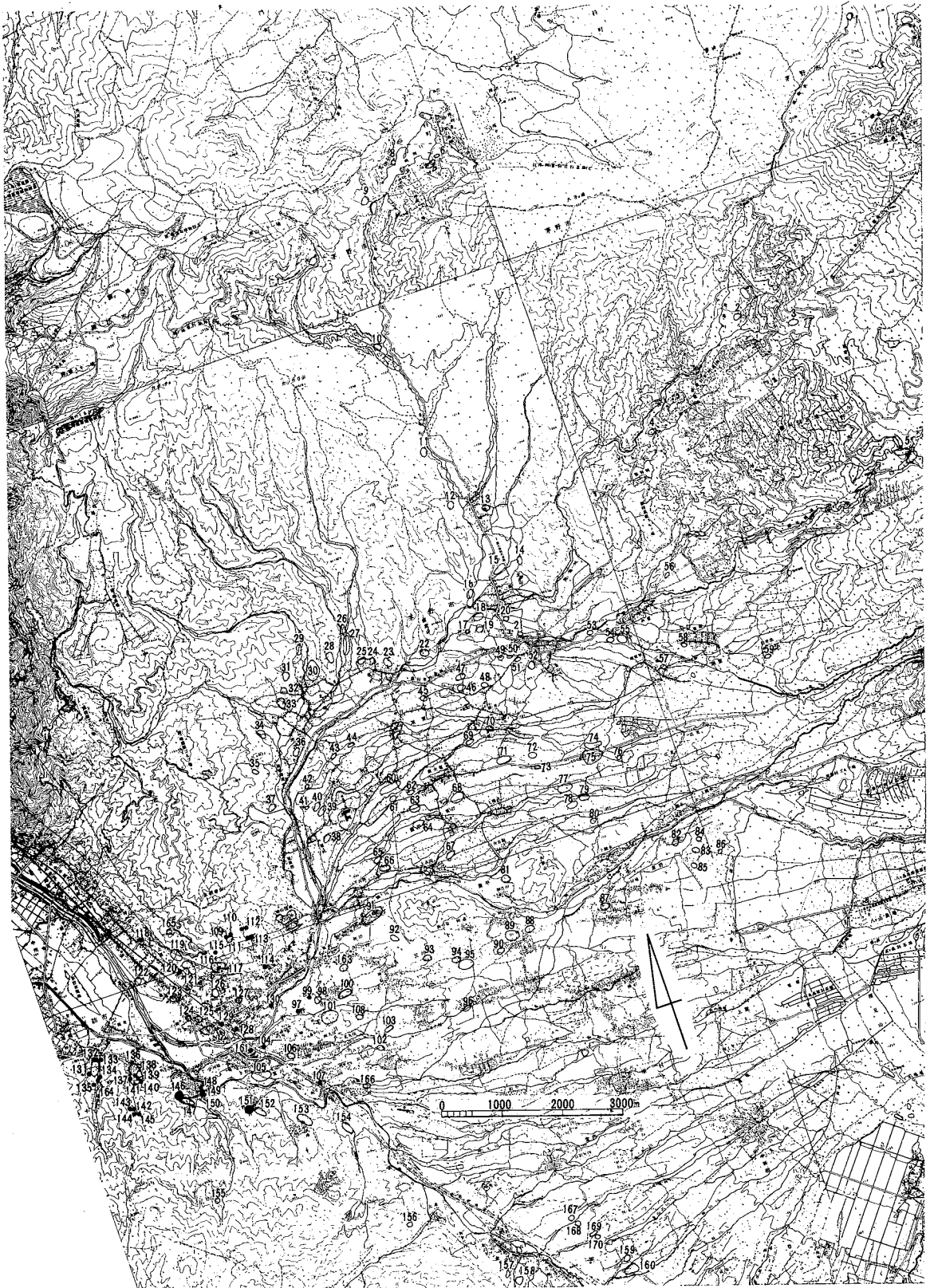
2. 茅野市・原村地区内の遺跡

屹立する八つの峰々が一つにまとまり、次第にふくらみをもち、なだらかで広大な裾を広げる八ヶ岳西南麓。その裾を幾筋もの沢川が南し、あるいは西南し、それらによって形成された谷や、段丘や丘陵状の尾根が数知れない複雑な駿を宮川の谷まで広げている。広大な裾が豊かな動物や植物を包み込み、人々に安定した生活を与えた結果であろう、この八ヶ岳西南麓の遺跡密度は非常に高い。茅野市、面積265.83km²遺跡数170ヶ所以上。原村、面積43.16km²、遺跡数86ヶ所以上。単純計算をただけでも茅野市では1.5km²に1つ、原村では0.5km²に1つの遺跡が存在していることになり、人々が住み得なかった山地等々を除きさらに遺跡の広がりを考え合わせれば、八ヶ岳の麓を覆ってしまう程の密度であるといえる。

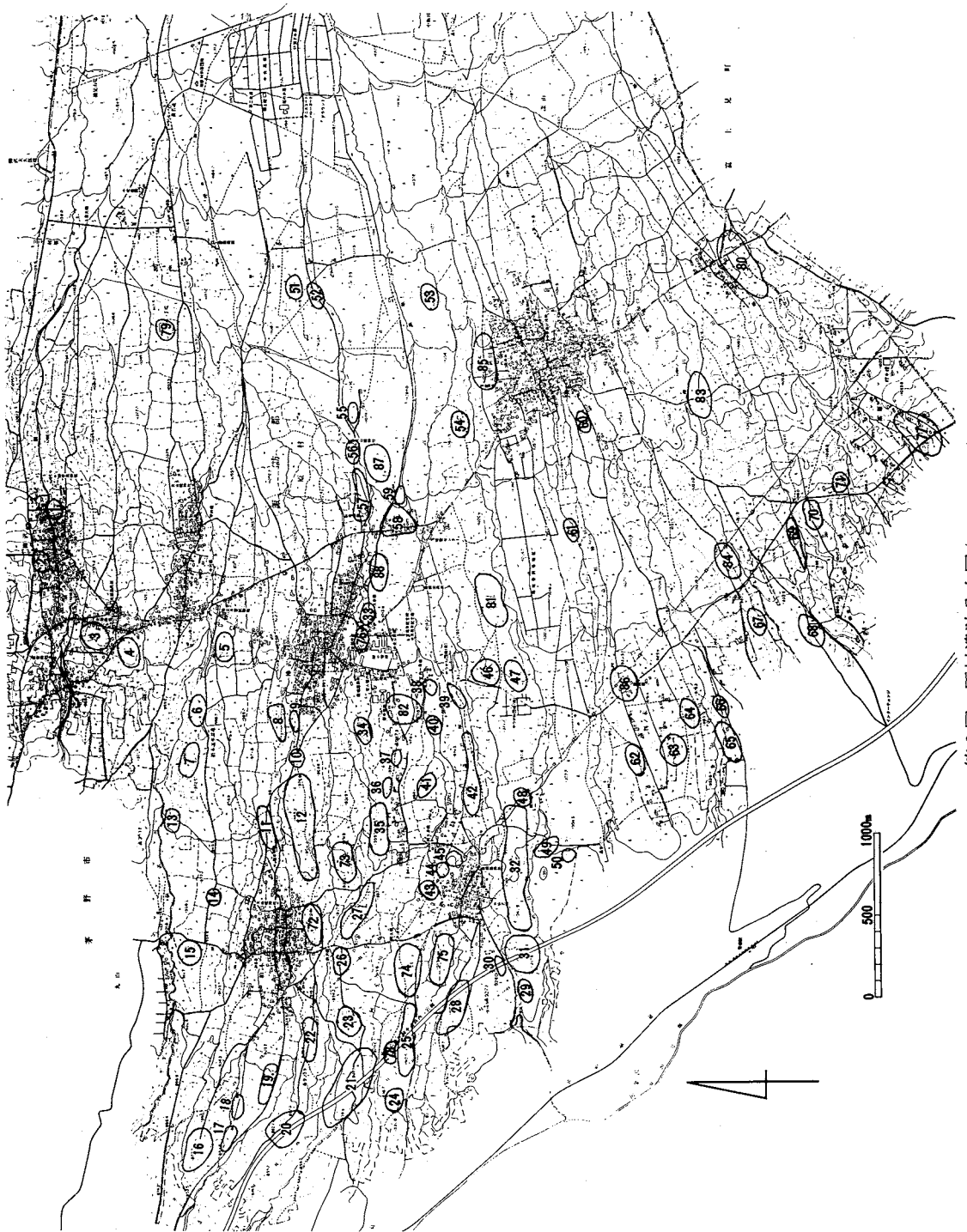
この八ヶ岳山麓の遺跡は、古くより土地の人々の開墾・耕作等により多量の土器・石器が出土することで知られていたようであるが、昭和初年より始まった尖石遺跡、与助尾根遺跡、富士見町の井戸尻遺跡、佐久川上村の大深山遺跡等大遺跡の発掘調査が縄文時代中期の大集落に日の光をあて、その規模、土器、石器の質・量ともに世界に誇り得るものであることを世に知らしめ、縄文時代研究に貴重な資料を提供しまた、研究の中心地ともなり幾多の先学諸氏のすぐれた業績があり、現在まで引継がれてきていることは周知の事である。

中央道西宮線は、諏訪湖南岸守屋山塊の麓を東進し宮川の沖積地帯に入り、茅野市宮川で国道20号線、国鉄中央東線を跨ぎ、八ヶ岳西南麓の最末端の台地上を縁どるように宮川と平行して走り、富士見町を経て山梨県へと続いていく。茅野市・原村の遺跡分布は第1・2図に示してあるが、このうち中央道が通過する遺跡は、茅野市では御社宮司(105)、入の日影(166)、上の原(167)、判の木山西(168)、判の木山東(169)金山沢北(170)、御狩野(159)、頭殿沢(160)の8遺跡、原村では柏木南(20)、阿久(21)、中阿久(23)、居沢尾根(25)、広原(28)、オシキ(30)、大石(31)の7遺跡、計15遺跡である。

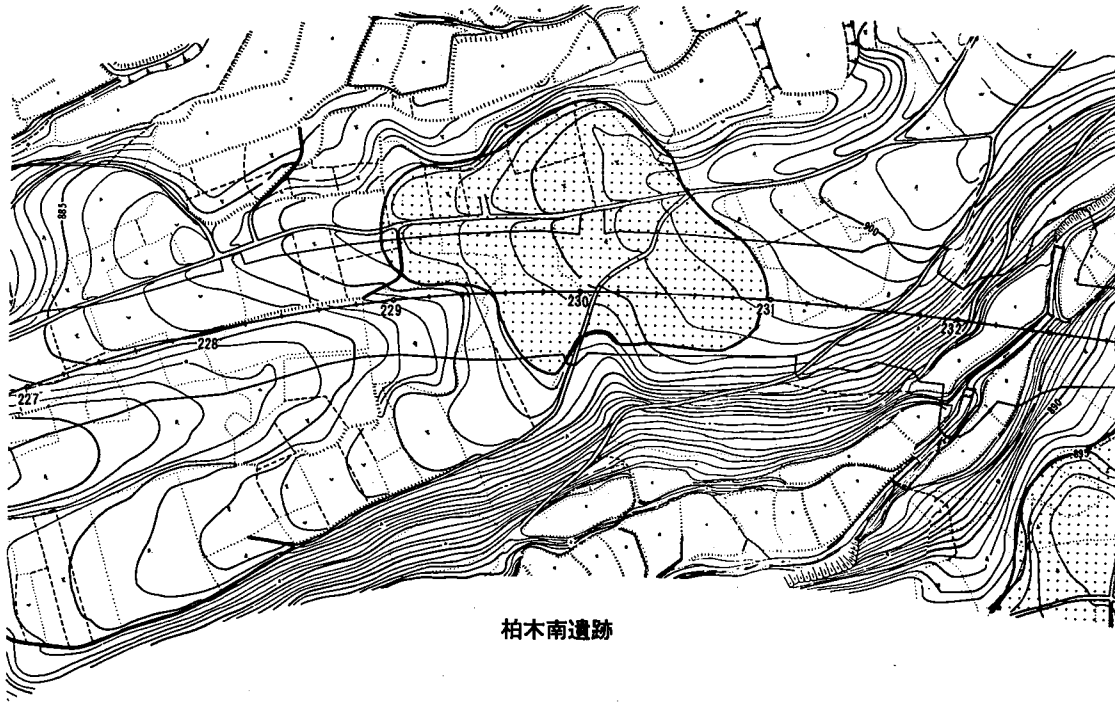
茅野市・原村の時代別遺跡数は表1に示してあるが、表にみられる如く、旧石器時代の遺跡は7ヶ所と少なく、白樺湖岸に3ヶ所と、渋川遺跡に至る海拔1500m～2000m附近に3ヶ所点在するのみで、あと1ヶ所は中央道の発掘調査によって確認された原村の柏木南遺跡だけである。縄文時代早・前期の数も多くはなく、白樺湖より流出する音無川・蓼科より西南流する滝湯川・柳川、合流して上川等の比較的大きな川の流域に沿って見られ、原村では中央道の調査により確認された例が多く、八ヶ岳西南麓が宮川によって断ち切られる縁辺に沿って分布するのみである。縄文時代中期になると遺跡の数は爆発的に増加する。茅野市・原村で179ヶ所、時期別全遺跡数の41%を占める。縄文時代のみ考えると60%が中期の遺跡であることがわかる。しかもこれらの中期の遺跡は海拔1000mから800m以内に78%が所在している。又、ほとんどの遺跡が、時代・時期を異にした複合遺跡であるが、縄文中期のみである単独遺跡は78ヶ所数えることができ、又、与助尾根遺跡、尖石遺跡、茅野和田遺跡、居沢尾根遺跡、大石遺跡、上前尾根遺跡等々大集落を営んでいたと考えられる遺跡が多いことも指摘できよう。他の時期の遺跡数との比較、立地の仕方等々これらの事実はここで言うまでもないことであるが、八ヶ岳西南麓に爆発的に開花した縄文時代中期文化を再認識させてくれる。後期になるとその数は49ヶ所と中期の約3.5分の1に減ってしまい、大小



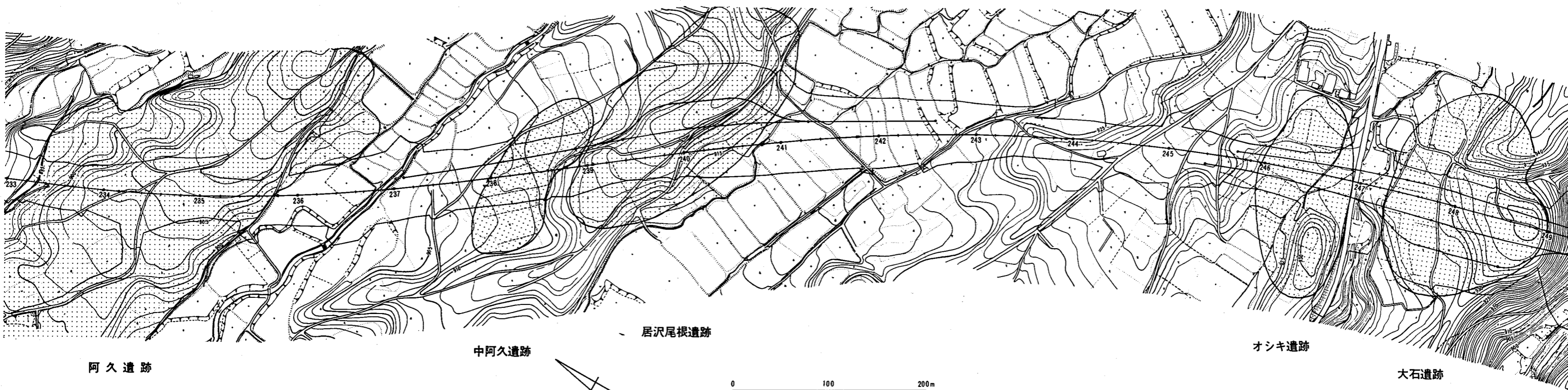
第1図 茅野市遺跡分布図(1:100,000)



第2図 原村遺跡分布図(1:40,000)



第3図 茅野・原地区中央道用地にかかる遺跡分布図(1:4,000)



の川沢に沿い、山麓全体に散在する。晩期になると7ヶ所しか存在せず、白樺湖と湖から流出する音無川の上流域と、下って上川、宮川の合流する附近に点在するのみである。未発見の遺跡がまだまだ埋もれてはいようが、縄文時代を通じ、中期の遺跡を除いた各期の遺跡数の少なさは、単に生産手段の相違のみでは解決されない、いくつもの要素が原因しているように感じられる。

弥生時代の遺跡数も11ヶ所と少ない。上川の流域にのみ点在しており、弥生時代の集落は、山麓部から沖積地帯へ移降してきていることがわかる。滝湯沢の源海拔2000mの場所に大河原遺跡があるが、大河原峠を経て佐久平へ通じる道路沿いであり、弥生時代からこの道が交通路として使用されていたことの証しとなる遺跡であろう。古墳は40基を数えるが、すべて茅野市

にあり、永明寺山南麓と、上川、宮川をはさんだ対岸の晴ヶ峰北麓に豊かな穀倉地帯であったであろう沖積地を見下すように分布している。土師器、須恵器、灰釉陶器が見られる、奈良・平安時代の遺跡は82ヶ所とその数を増す。沖積地帯には意外とその数は少なく、山麓部に多く見られるのは、水田耕作のみではなく、陸稲の栽培、畑作も盛んに行なわれていたことを示しているのであろうか。当時の権力者の経済的基盤となったであろうこれらの遺跡のあり方の追求や、水田址、畑址等生産の場が発見、調査されることを今後に期待したい。

中央道西宮線はこのような遺跡密集地帯を通過するためいくつかの大きな遺跡の存在が明らかにされてきている。例えば縄文時代前期の大集落を形成している片鱗を見せはじめた阿久遺跡、縄文前期から中期にかけての大集落であった大石遺跡、縄文時代中期後半の大集落の居沢尾根遺跡等々である。八ヶ岳西南麓における各時期の遺跡の立地、分布状態、それらからの生活の復元等々がさらに中央道西宮線にかかる遺跡の調査で、いくつかの内容が明らかにされていくことを期待したい。

遺跡地名表、分布図の作成にあたって、茅野市教育委員会、同鶴飼幸雄氏、原村教育委員会、同平出一治氏より資料の提供、助言をいただいた。記してお礼申しあげたい。

(青沼博之)

時代	茅野市	原村	合計	備考	
旧石器時代	6	1	7		
縄文時代	草創期	1	0	1	
	早期	16	5	21	
	前期	37	3	40	
	中期	103	76	179	単独遺跡 78
	後期	34	15	49	
晩期	7	0	7		
弥生時代	10	1	11		
古墳時代	40	0	40		
奈良・平安時代	41	41	82		
中世・近世	7	4	11		
合計	293	146	439		

第1表 茅野市・原村時代別遺跡数
(昭和54年3月現在)

第2表 茅野市遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代		古墳	奈良・平安			中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩	中		後	土	須		
1	大河原	北山字湯川									○					
2	城の平	南山栗平4035～1	○		○											
3	十文字平	北山5513	○													
4	蓼科	蓼科高原			○	○										
5	渋川	北山字笹平	○													
6	ピワ石	北山字笹平		○												
7	白樺湖南岸	北山本道3419～1	○													
8	御座岩	北山本道3418-1	○		○	○	○	○	○	○	○		○			
9	御小屋之久保	北山本道	○													
10	ナロウド	北山字相原											○	○		
11	栃窪	北山字相原3297			○	○	○	○	○	○	○				○	
12	上ノ棚	北山字相原			○											
13	キツネ原	北山字相原					○									
14	矢ノ口	北山字湯川				○	○	○				○		○		
15	上ノ段	北山字湯川1603			○	○	○	○	○	○	○	○	○			
16	高風呂	北山字湯川			○	○	○									
17	窪田	北山字湯川					○									
18	樹形	北山字湯川				○	○							○		
19	上ノ原	北山字湯川					○									
20	イモリ沢	北山字湯川					○									
21	上ヶ溝	北山字芹ヶ沢					○									
22	横山	米沢字塩沢				○										
23	上ノ平	米沢字塩沢					○									
24	丸山	米沢字塩沢					○									
25	よせの台	米沢字北大塩			○	○	○	○								
26	芝ノ木	米沢字北大塩					○			○						
27	一ノ瀬	米沢字北大塩				○	○	○								
28	鳥ノ窪	米沢字北大塩					○									
29	大六殿	米沢字北大塩					○									
30	駒形	米沢字北大塩			○	○	○	○								
31	上ノ山	米沢字北大塩					○									
32	向林	米沢字北大塩					○									
33	大桜	米沢字北大塩				○	○	○				○				
34	八幡坂	米沢字鑄物師屋					○	○								
35	中ノ平	米沢字鑄物師屋					○	○				○				
36	丸山	米沢字北大塩				○	○								○	
37	棚畑	米沢字植原田			○	○	○	○				○				
38	宮ノ上	豊平字福沢				○	○			○						
39	中原	豊平字福沢640の16					○	○								
40	子ノ神	豊平字福沢					○									
41	上半田	豊平字福沢					○					○	○	○		
42	高尾戸	豊平字福沢				○		○				○		○		
43	下菅沢	湖東字菅沢					○									
44	中村	湖東字中村					○									

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代		古墳	奈良・平安			中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩	中	後		土	須	灰		
45	辻屋	湖東字中村					○										
46	山口	湖東字山口					○										
47	中ツ原	湖東字山口					○										
48	松原	湖東字山口					○										
49	下島	北山字芹ヶ沢				○	○					○					
50	下原	北山字芹ヶ沢					○										
51	上原	北山字芹ヶ沢					○										
52	神ノ木	北山字芹ヶ沢7352				○	○										
53	滝ノ脇	北山字芹ヶ沢					○										
54	聖石	北山字芹ヶ沢					○										
55	長峯	北山字芹ヶ沢					○										
56	床並	北山字芹ヶ沢					○										
57	尾根	湖東字須栗平					○										
58	桂井戸	湖東字笹原					○										
59	瘦尾根	湖東字白井出			○												
60	山寺	豊平山寺1842					○					○	○	○			
61	経塚	豊平字南大塩					○										
62	権現林	豊平字南大塩						○				○					
63	日向上	豊平字塩之目			○	○								○	○		
64	塩之目尻	豊平字塩之目			○	○											
65	中ツルネ	豊平字塩之目						○				○					
66	梨之木	豊平字上古田					○										
67	師岡平	豊平字上古田			○	○											
68	向原	豊平字南大塩			○												
69	鎮辺坂	豊平字南大塩			○												
70	堀	湖東字堀					○										
71	立石	豊平字南大塩					○	○									
72	中ツ原	豊平字南大塩					○	○									
73	神立林	豊平字南大塩						○				○					
74	与助尾根	豊平字南大塩4734			○	○						○	○				
75	尖石	豊平字南大塩					○										
76	龍神平	豊平字南大塩			○			○				○	○	○			
77	新水掛	豊平字上湯沢					○	○									
78	金堀場	豊平字上湯沢			○	○											
79	鴨田	豊平字上湯沢					○	○									
80	稗田頭	泉野字下槻木					○										
81	上ノ平	豊平字御作田					○	○				○					
82	丸生戸	泉野字上槻木			○												
83	馬捨場	泉野字小屋場					○										
84	山ノ神	泉野字小屋場					○										
85	鹿垣	泉野字小屋場					○										
86	菖蒲沢	泉野字小屋場			○	○											
87	日鶴寺	泉野字中道6859の1					○										
88	中沢	玉川字中沢					○										

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代		奈良・平安			中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩	中	後	古墳	土	須		
89	尾根田	玉川字山田					○									
90	一本木	玉川字山田					○									
91	和田	玉川字粟沢					○	○				○				
92	和田日向	玉川字和田					○									
93	上御前	玉川字神の原			○	○	○		○							
94	山田畑	玉川字神ノ原					○									
95	藤塚	玉川字神ノ原3595の1					○									
96	屋敷添	玉川字菊沢					○									
97	川久保古墳	玉川字粟沢1732									○					
98	下の原	玉川字荒神			○	○	○	○	○							
99	石小屋古墳	玉川字粟沢1727									○					
100	中御前	玉川字粟沢					○									
101	長峰	宮川坂室					○									
102	稲荷社	茅野字宮川田沢										○	○			
103	北久保	玉川字北久保				○	○	○				○	○			
104	金鑄塚古墳	宮川字茅野5047									○					
105	御社宮司	宮川字中田5845・5848				○		○	○	○	○	○	○	○	○	古墳時代は住居址
106	林ノ沢	宮川字舟久保					○									
107	雨降塚古墳	宮川字坂室8011									○					
108	棚畑	茅野字矢ヶ崎					○	○				○				
109	矢穴1号古墳	茅野字塚原4426の口									○					
110	矢穴2号古墳	茅野字塚原4424									○					
111	矢穴遺跡	茅野字矢ヶ崎					○	○				○	○			
112	中矢穴古墳	茅野字矢ヶ崎5961・6004									○					
113	西入古墳	茅野字市矢ヶ崎6080・6079									○					
114	塚の越古墳	茅野字矢ヶ崎5913									○		○			
115	釜石古墳	茅野字塚原4252									○					
116	一本榎	茅野字塚原					○		○						○	
117	一本榎古墳	茅野字塚原									○					
118	鉄甲塚古墳	茅野字上原1987									○					
119	永明寺	茅野字上原				○	○					○	○			
120	藤塚古墳	茅野字上原1929の1									○					
121	十二坊古墳	茅野字上原2018									○					
122	地藏堂	茅野字上原					○									
123	光明寺(助ヶ端)	茅野字上原				○	○	○				○	○			
124	家下	茅野字横内					○	○			○	○	○			
125	下蟹河原	茅野字横内									○	○	○			
126	永明中グラウンド	茅野字塚原							○							
127	原地	茅野字塚原					○	○				○	○			
128	大塚古墳	茅野字塚原3497									○					
129	姥塚古墳	茅野字塚原3507									○					
130	王経塚古墳	茅野字矢ヶ崎4702									○					
131	疱瘡神塚古墳	宮川字高野479									○	○	○	○		
132	神長官古墳	宮川字高野362の1									○					

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代		古墳	奈良・平安		中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩	中	後		土	須灰		
133	甌塚古墳	宮川字高野357の口号									○					
134	高部遺跡	宮川字高野					○					○	○			
135	塚屋敷古墳	宮川字高野471									○					
136	蛇塚古墳	宮川字安国寺2031									○					
137	前宮古墳	宮川字安国寺									○					
138	石塚古墳	宮川字安国寺									○					
139	樋沢古墳	宮川字安国寺2366									○					
140	芳久保古墳	宮川字安国寺2365									○					
141	前宮樋沢遺跡	宮川字小町屋					○	○			○	○	○			
142	常坊主1号古墳	宮川字安国寺2195									○					
143	常坊主2号古墳	宮川字安国寺2093									○					
144	山ノ神1号古墳	宮川字安国寺2098									○					
145	山ノ神2号古墳	宮川字安国寺									○					
146	小飼通り古墳群	宮川字安国寺									○					
147	小飼通遺跡	宮川字安国寺					○	○				○	○			
148	コーモリヤ古墳	宮川字安国寺3647									○					
149	塚屋古墳	宮川字安国寺3664									○					
150	百々通り古墳	宮川字安国寺3575									○					
151	西茅野古墳群	宮川字茅野9089のイ・ロ・ハ・ニ号									○					
152	裏ノ山	宮川字西茅野					○									
153	山ノ神(横山)	宮川字西茅野山の神6735					○					○				
154	勝山	宮川字西茅野山の神					○									
155	暗ヶ峰	宮川字安国寺					○									
156	芝平	宮川字大池					○									
157	芥沢	金沢字大沢					○	○								
158	大沢	金沢字大沢					○	○								
159	御狩野	御狩野頭殿沢					○					○		○		
160	頭殿沢	御狩野頭殿沢					○	○	○			○	○	○		
161	四ツ塚1号墳	宮川字茅野9089のイ									○					
	四ツ塚2号墳	宮川字茅野9089のロ									○					
	四ツ塚3号墳	宮川字茅野9089のハ									○					
	四ツ塚4号墳	宮川字茅野9089のニ									○					
162	樋沢城址	宮川字安国寺													○	
163	上の原	玉川字粟沢					○									
164	神袋塚古墳	宮川高部神袋									○					
165	上原城址	茅野字上原													○	
166	入の日影	宮川字坂室							○						○	
167	上の原	金沢字南久保3405, 5433					○									
168	判の木山西	金沢字宍枚畑3223, 3236					○					○		○		
169	判の木山東	金沢字横道下5444の15, 3147の1					○					○		○		
170	金山沢北	金沢字御狩野					○					○		○		

第3表 原村遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代		古墳	奈良・平安	中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩	中	後				
1	前尾根	前尾根8313の6の9					○			○					
2	柳沢	柳沢					○								
3	大久保	大久保					○								
4	大久保前	大久保					○					○			
5	思膳A	八ツ手					○	○							
6	思膳B	八ツ手					○								
7	思膳C	八ツ手					○								
8	糖塚	弘沢					○								
9	裏之沢	弘沢					○					○			
10	上居沢	弘沢					○					○			
11	柏木明神	柏木					○	○							
12	上前尾根	柏木					○	○				○		○	
13	程久保	柏木					○					○	○		
14	上井平	柏木					○								
15	長峰B	柏木					○					○	○		
16	長峰A	柏木			○							○			
17	比久尼原C	柏木					○					○			
18	比久尼原B	柏木					○					○			
19	比久尼原A	柏木					○					○			
20	柏木南	柏木	○				○					○		○	
21	阿久	柏木				○	○	○				○	○	○	
22	前沢	柏木					○								
23	阿久C	柏木					○								
24	阿久B	菖蒲沢					○					○			
25	居沢尾根	菖蒲沢			○		○					○		○	
26	白ヶ原	柏木					○					○			
27	南平	柏木					○								
28	広原	菖蒲沢					○								
29	日向	菖蒲沢					○								
30	オシキ	大石10453			○	○	○					○	○	○	○
31	大石	大石10704・10703			○	○	○					○	○	○	
32	山の神尾根	金山沢					○	○				○			
33	南尾根	弘沢					○					○			
34	關盧沢	室内					○					○			
35	雁頭沢	室内					○								
36	家上の宮下	室内					○					○			
37	宮下	室内					○					○			
38	菖蒲沢提西	室内					○								
39	久保地尾根	室内					○					○			
40	上林向尾根	室内					○								
41	中尾根	室内					○	○				○			
42	上菖蒲沢	菖蒲沢					○					○			
43	裏尾根	菖蒲沢					○								
44	楡の木	菖蒲沢					○					○			

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代				弥生時代		古墳	奈良・平安			中近世	備考
				草	早	前	中	後	晩		中	後	土		
45	山の神B	菖蒲沢					○						○		
46	北芳原	室内					○								
47	向北芳原	室内										○			
48	水かけ平	菖蒲沢					○	○				○			
49	祓沢日影	菖蒲沢					○	○				○			
50	下原山	菖蒲沢					○					○			
51	上里	上里										○			
52	長尾根日向	上里					○								
53	払沢尾根	中新田					○								
54	観音久保	中新田					○								
55	古屋敷	払沢					○								
56	大山祇神社前	払沢						○				○			
57	臥竜	払沢					○	○							
58	上横道	払沢					○	○				○	○		
59	ワナ場	払沢					○	○							
60	六地堂	中新田					○								
61	番銅場	中新田					○	○							
62	判の木A	中新田					○					○	○		
63	判の木B	中新田				○									
64	判の木C	中新田					○								
65	御狩野	中新田					○					○	○	○	
66	祢宜坂上	中新田					○					○			
67	御射山北	南原					○					○	○	○	
68	判の木南	南原										○	○	○	
69	御射山沢	中新田					○					○	○		
70	泉	南原					○								
71	コケ尾根	南原					○								
72	上前尾根B	柏木					○								
73	清水	柏木					○					○			
74	一本松下	菖蒲沢					○								
75	宿尻	菖蒲沢					○								
76	向尾根	払沢					○	○							
77	南原	南原					○	○							
78	中阿久	菖蒲沢					○								
79	ハツ手堤	ハツ手										○			
80	二枚田	中新田					○								
81	北芳原上	室内					○								
82	宮平	室内												○	
83	経塚	中新田					○								
84	梨の木	南原										○	○		
85	中新田裏屋根	中新田					○								
86	頭殿沢	中新田										○	○	○	
87	栃の木	払沢					○								
88	払沢中尾根	払沢													無頭石棒

Ⅲ 遺物の分類

1. 縄文時代中期の石器

本書中で報告されている縄文時代の石器は、入の日影、柏木南、オシキ、上の原、判の木山東の5遺跡から出土したもので、その総点数は188点である。このうち入の日影遺跡は縄文時代晩期、オシキ遺跡は縄文時代前期を中心としており、他の3遺跡が縄文時代中期を中心とした遺跡で、石器136点を出土している。この時期としては遺跡数の割に石器の出土量が少量であるが、これは遺跡の中心を中央道が避けていたこと、少量の遺物が散布しているのみの遺跡もあったこと等が原因している。そのため縄文時代中期の石器136点の約80%が、縄文時代中期初頭から末葉にかけての竪穴住居址9軒が検出された判の木山東遺跡に集中している。ここでは出土量が一番多い縄文時代中期の石器を分類の対象とした。

出土した石器は打製石斧が最も多く46点、34%、横刃型石器36点、26%、凹石10点、7%、石鏃7点5%、石皿、石匙各4点の3%と続く。石器の形態分類は、数も多く各遺跡に普遍的に見られる打製石斧と横刃型石器をその対象とした。

1) 打製石斧

分類の基準となっているものは、刃部と側縁の形態であり、基本形とした形態は、従前より打製石斧分類の対象とされてきた、撓形、短冊形、分銅形の三形態(註1)である。刃部と側縁の形態の組合せにより表4の分類ができた。

I類は撓形で側縁の線が頭部へ行くに従いその巾をせまくしているもの、II類は短冊形で側縁の線が平行の状態を保つもの、III類は分銅形で側縁に挟り込みがあるものとし、I～III類を、A一直刃、B一円刃、C一斜刃に分けたものである。打製石斧が、植物採集や植物栽培のための農具、竪穴や土壌等の土掘り、その他に用いられ土掘具としての機能をも

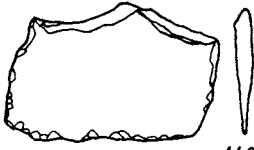





	A	B	C
I			
II			
III			

第4表 打製石斧分類表
(番号は判の木山東遺跡の石器番号)

つものであるとするならば(註2)、側縁の線は着柄の違いを物語るものであろうし、刃部はその用途によって違う刃形を利用した方がより便利であったろうと考えるからである。もう少し具体的に記すならば、撓形の側縁の線は、刃部に力が加わる度に、石器と柄を緊縛した部分がより幅の広がって行く刃部へと近ずき、柄と打製石斧がより強く、堅く結ばれるための形であることが想像でき、現在のクワかスコップのような着柄のし方が考えられ、短冊形は、第65図—429、第68図—478に代表される小型のものから、第68図—477、483等の大型のものまで大きさ、形態にバラエティが見られることから各種各用に使われていたと想定でき(註3)、クワ、スコップ的な着柄が考えられる。分銅形は胴部がくびれ、石斧の両端が同型を示すものであるから、石斧長軸に対し直角に着柄され、オノのような使われ方が考えられる(註4)。

刃部はどうであろうか、使用回数が多くなるにつれ、その欠損、磨耗等により形は変っていくのではあろうが、やはり作業内容に応じた刃部の作られ方が中心になると考えたい。直刃は広い部分を掘るのに有効であり、又、浅く土を掘るのにも有効な刃部といえよう。円刃はその頂点部により大きな力が加わるために、深く掘るのに力を発揮するはずである。そして斜刃はその刃部のあり方から、斜め方向に力が加わるための作業(例えば畝を作る、掘った土をわきへ寄せ等)に便利な道具と見ることができようが(註5)この斜刃をもつ打製石斧からは、それらを立証できる使用痕跡などが観察できないのは残念である。

以上のような観点から打製石斧の形態分類を行なったが、資料が少ないこともあり、十分な内容ではない。又、想像される事象での分類観点も多く、今後、実験等により実証していく必要を感じる。打製石斧は最近多方面から分析、分類されてきており、その結果が報告されている(註6)。ここでは、刃部、側縁の形のみで形態分類を行ない、他に言及できなかったが、縄文中期の生産形態を考察する上では、さら

	A	B	C
I	 442	 472	 471
II	 458	 487	
III			 498

第5表 横刃型石器分類表(番号は判の木山東遺跡の石器番号)

に詳細な石器研究が必要となつてこよう。今後に期待したい。

2) 横刃型石器

打製石斧に次ぎ出土量が多い石器である。この事は特に縄文時代中期の遺跡に普遍的に見られることであり、打製石斧とならんで、横刃型石器の検討は縄文時代中期の生産手段を考える上で非常に重要な意味をもっていると言えよう。打製石斧の形態分類と同様、刃部の形と身部の状態によって形態分類をした。



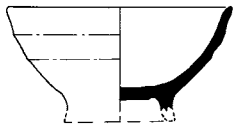
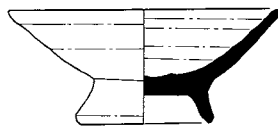


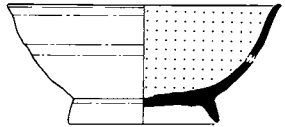

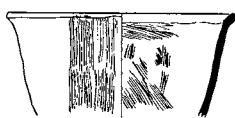
I類は直刃をもつたもの、II類は外湾する刃をもっているもの、III類はII類よりもさらに丸みをおびた円刃に近い刃をもつものである。I～III類をさらに身部の状態によりA～Cの三類に分けた。Aは最大厚1cm以下で、ほぼ厚さが一定している薄身のもの、Bは最大厚1.5cm以上あり断面が楔形を呈している厚目のものである。Cは石器の長軸方向に挟りがいられているものである。これらの組合せにより表5の分類ができた。

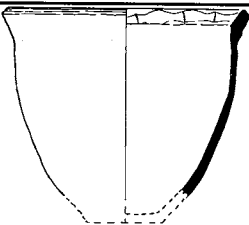

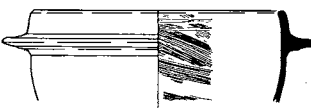
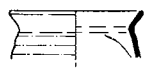
- 註1 大野雲外「打製石斧の形式に就て」人類学雑誌22 1907年
- 2 大山柏「神奈川県新磯村字勝坂遺物包蔵地調査報告」 1927年
武藤雄六他「曾利」 富士見町教育委員会 1976年
- 3 武藤雄六他「曾利」
小田静夫「縄文中期の打製石斧」 どんめん10号 1976年
- 4 註3と同
- 5 「曾利」ではこの形の打製石斧を浅耕用の石鎌（中耕除草具）に分類している。
- 6 前掲書
小川良祐「前島、島之上、出口遺跡出土の石器について」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 1977年
小林康男「打製石斧について」 長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書 明科町教育委員会 1979年
(青沼博之)

2. 平安時代後期の土器

オシキ・判の木山東・頭殿沢の3遺跡は、ともに八ヶ岳西南麓の丘陵先端、第1段丘面上に立地し、出土遺物の大半を平安時代後期の土師器と灰釉陶器が占めることから、これらを一括して分類することにした。分類基準は、器形・法量・成形技法・胎土等の相違に基づいている。第6表を見られたい。

第6表 平安時代の土器器種分類表

器種	器形	器形および整形の特徴
杯	Aa	 <p>口縁部は底部から直線的に開く。器肉は3~5mmで杯Cに比べて薄い。内面及び口縁部外面はロクロナデされ、底部には糸切り痕が明瞭に残る。口径14.8~15.2cm、器高4.1~4.6cm、$\alpha=28\sim30$を示す。</p>
	Ab	 <p>口縁部はゆるやかに外反し、いわゆる玉縁状の口縁をつくり出す。ロクロ成形後、体部下半から底部にかけてヘラケズリされる。器肉は3mm前後で極めて薄い。口径15~15.6cm、器高4cm、$\alpha=26\sim27$を示す。</p>
	B ₁	 <p>杯A_aに高台のつくものである。口縁部は湾曲して立ち上がる。高台は全器高の約5分の1以下である。口径12cm、器高6.2cm、$\alpha=52$を示す。</p>
	B ₂	 <p>口縁部は直線的に開いて外反する。体部の形状は杯Cに類似するものが多い。高台の高さは全器高の約3分の1を占める。口径13~14.4cm、器高5~6.2cm、$\alpha=36\sim49$を示す。</p>
	C	 <p>口縁部は直線的に開く。器肉は6mm前後で口縁部底部とも杯Aに比べて厚い。底部から立ち上がる部分でくびれるものが多い。内外面ともロクロナデされ底部には糸切り痕が残る。口径9.8~12.8cm、器高3.1~4.8cm、$\alpha=32\sim38$を示す。</p>
	黒色A	 <p>杯Aと同形である。内面は黒色でヘラミガキされる。暗文が施されることが多い。底部には糸切り痕が残る。口径11.8cm、器高3.8cm、$\alpha=32$を示す。</p>
	黒色B	 <p>杯B₁と同形で短い高台がつく。黒色A同様、内面黒色でヘラミガキにより暗文が施されることが多い。口径14.4~15.4cm、器高6.2~6.6cm、$\alpha=43$前後を示す。</p>
甕	A	 <p>おおむね、やや張り出した胴部に最大径をもち、口縁部は短く外反し屈曲部内側にはやや甘い稜がつく。内外面共ハケ調整されるものとロクロ成形で外面がヨコ方向にヘラケズリされるものがあり、赤褐色~黄褐色で胎土の荒いものややち密なものがある。口径は10.5~15.5cm程で小形である。</p>
	B	 <p>直線的に開く口縁部に最大径をもつ。口縁部は短く外反、屈曲部内面には甘い稜がつく。端部は丸く収めるが作りは雑である。胴部内外面ともやや細かにハケ調整され、口縁はナデ調整が多い。黄褐色~橙褐色でややち密な胎土をもつものが多い。口径11.0~15.0cm程の小形のもの19.5~24.5cm程の大形のものがある。</p>

器種	器形	器形および整形の特徴
甕		垂直に近い角度で直線的に立ち上がる口縁に最大径をもつが、さほど深くない形態らしい。口縁ははっきりと稜がつけられて「く」の字状に外反し、大部分は端部を折り返して肥厚させた上、面取りをして平坦な端部をつくる。胴部内面はヘラケズリもしくはヨコ方向のハケ調整、外面はタテのハケ調整が多く、口縁内面にもハケ調整が顕著である。赤褐色～茶褐色、荒い胎土で金雲母等の含有鉱物も多い。口径21.5～35.5cmと大形のものが大多数を占める。
		いく分胴部が張り気味だが口縁部に最大径を有する。口縁部はゆるく外反して長めである。胴部内面にヘラケズリがされ胎土がややち密なもの、ナデのみで荒い胎土のものがある。口径11.5～15.5cmと小形である。
		羽釜の類で、口縁部は若干内湾するもの、直立するもの、若干開き気味になるものがあり、端部に面取りをするものもある。内外面ともハケ調整、ナデ調整の両者がある。茶褐色で胎土は荒く、甕Cに似ている。口径25.0cm前後で大形である。
		やや張り出した胴部に最大径を有し、口縁部はゆるく長めに外反する。ロクロ整形されており、黄褐色でややち密な胎土を用いる。口径14.0cm前後と小形である。

1) 土師器

土師器には杯と甕がある。杯はA・B・C、甕はA・B・C・D・E・Fがそれぞれあり、内面黒色土器(註1)のA・Bを含め、計11器種に分類できる。杯Aは整形技法の相違により、ロクロ成形だけによるAaと、ロクロ成形後底部から体部にかけて外面を手持ちヘラケズリ整形するAbの2類型に分類できる。杯Bは高径指数(註2)によりBⅠとBⅡに細分できる。Ⅰは高径指数 $\alpha = 52$ 前後、Ⅱは $\alpha = 36 \sim 49$ を示す。(各器種の器形・整形の特徴については第6表を、法量については第4図を参照されたい)

2) 灰釉陶器

灰釉陶器は、出土個体数が土師器の半分以下と少なく、器種も椀と皿に限られている。こうした資料的制約から分類は充分なものとなっていない。

器種は、椀A・皿A・皿B・皿C・瓶の5種ある。皿Aは普通の皿、皿Bは輪花皿、皿Cは段皿をそれぞれ示す。椀Aは高径比から、大形品のAⅠ(口径14.4～17.8cm、器高4.6～7.0cm、 $\alpha = 30 \sim 49$)と小形品のAⅡ(口径11.4～14.2cm、器高3.5～4.7、 $\alpha = 27 \sim 36$)とに細分できる。皿Aも同様に、大形品のAⅠ(口径12.5～14.2cm、器高2.0～3.0cm、 $\alpha = 15 \sim 23$)と小形品のAⅡ(口径11.6～11.8cm、器高2.3cm前後、 $\alpha = 19 \sim 20$)とに細分できる。皿Bと皿Cについては個体数がごく僅かで法量の差もないことから、細分は行なわなかったが、そのほとんどは皿AⅠの法量に匹敵する。瓶についてはそのほとんどが小破片で

器形の断定さえ困難であった。

尚、灰釉陶器の場合、生産窯による分類も不可欠であるが、今回は問題点の一部を判の木山東遺跡のまとめの項で指摘するに留め、詳細については資料の充実をはかり、今後の課題としたい。

註1 内面黒色土器については、内面をヘラミガキの上、焼成時に表面をいぶして炭素を吸着させたと思われる類をさす。

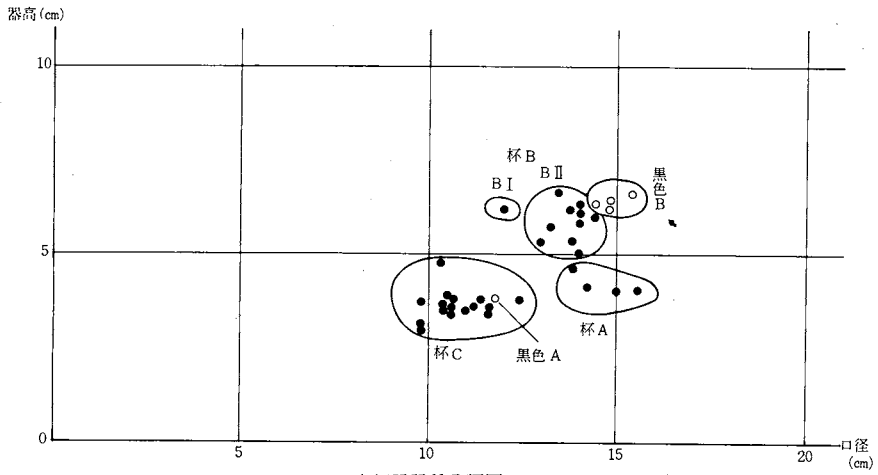
市道 長野県佐久市教育委員会・市道遺跡調査報告書刊行会 1976年

小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」(1)(2) 考古学研究70・71 1971年

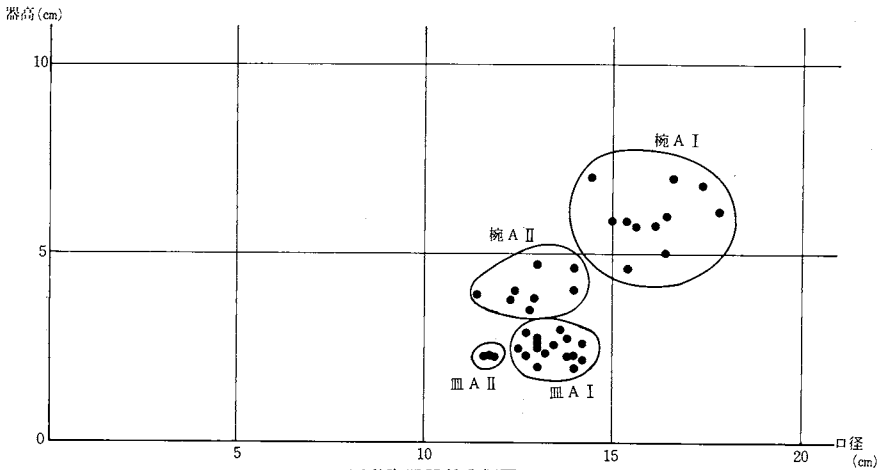
註2 高径指数 $\alpha = \text{器高} \div \text{口径} \times 100$ として算出した。

平城宮発掘調査報告 VI 奈良国立文化財研究所学報第二十三冊 1974年

(臼田武正)



1. 土師器器種分類図



2. 灰釉陶器器種分類図

第4図 平安時代土師器・灰釉陶器器種分類図

第7表 オシキ・判の木山東・頭殿沢遺跡出土、平安時代の土器器種別個体数一覧表

種別 器種 類型 遺跡 遺構	土 師 器											灰 釉 陶 器						總 計	備 考							
	杯				黒 色			合 計	甕						椀	皿				瓶	合 計					
	A	B	C	計	A	B	計		A	B	C	D	E	F		計	A					A	B	C	計	
オ シ キ	住居	5	5	5	15	1	1	2	17	2						2	5				1	6	25			
	他	1	3	2	6	4	1	5	11	1	1	1				3	1			1	2	16	須恵甕 1 四耳壺 1			
	計	6	8	7	21	5	2	7	28	1	3	1				5	5	1			1	2	8	41		
	%	21.4	28.6	25.0	75.0	17.9	7.1	25.0	100.0	0.0	20.0	60.0	0.0	20.0	0.0	100.0	62.5	12.5	0.0	0.0	12.5	25.0	100.0	—		
	%	68.3				(84.8)				12.2						(15.2)		19.5				100.0				
判 の 木 山 東	住居	8	7	6	21	1	4	5	26	2	2	9	2	2	1	18	2	3	3	6	2	10	54	須恵器甕 1 土師器杯 1		
	他	9	2	4	15	2	3	5	20	1	10		5		16	3	2				2	3	8	44		
	計	17	9	10	36	3	7	10	46	3	2	19	2	7	1	34	5	5	3	8	5	18	98			
	%	37.0	19.6	21.7	78.3	6.5	15.2	21.7	100.0	8.8	5.9	55.9	5.9	20.6	2.9	100.0	27.8	27.8	0.0	16.7	44.4	27.8	100.0	—		
	%	46.9				(57.5)				34.7						(42.5)		18.4				100.0				
頭 殿 沢	住居	10	12	25	47	2		2	49	6	5	1		12	17	12	1	4	17			34	95			
	他	12			12	1	6	7	19	3	7	7	11		28	33	9	1	10	2			45	92		
	計	10	24	25	59	1	8	9	68	3	13	12	12		40	50	21	1	5	27	2			79	187	
	%	14.7	35.3	36.8	86.8	1.5	11.8	13.2	100.0	7.5	32.5	30.0	0.0	30.0	0.0	100.0	63.3	26.6	1.3	6.3	34.2	2.5	100.0	—		
	%	36.4				(63.0)				21.4						(37.0)		42.2				100.0				
總 計	33	41	42	116	9	17	26	142	6	16	34	2	20	1	79	60	27	1	8	36	9	105	324			
%	23.2	28.9	29.6	81.7	6.3	12.0	18.3	100.0	7.6	20.3	43.0	2.5	25.3	1.3	100.0	57.1	25.7	1.0	7.6	34.3	8.6	100.0	—			
%	43.5				(64.3)				24.1						(35.7)		32.4				100.0					

個体数は分類可能なものだけに限定した。

() 内百分比は土師器全体に対するものである。

IV 調査遺跡

1. 入の日影遺跡 (SIRB)

1) 位置 (図1, 3, 5, 図版1)

入の日影遺跡は茅野市宮川日影7821番地に所在する。その位置は、立地のあり方からも、八ヶ岳西南麓遺跡群の西端の遺跡というよりも、むしろ、諏訪湖盆周辺の遺跡群の1つであろう。すなわち、本遺跡は八ヶ岳西麓に源をもつ弓振川が、宮川に合流する少し手前の、弓振川左岸の中位段丘上に立地しており、八ヶ岳西南麓遺跡群特有の尾根状丘陵上に立地はしていないのである。中位段丘上の幅は約80m余、狭長な段丘面で、西流する弓振川にそって、西方へゆるやかに傾斜している。北側背後には上位段丘の崖が眼前にせまる。遺跡前面には弓振川の比較的広い沖積面が発達しているが、その幅は200mを少々欠ける。弓振川面との比高差は約10m、上位段丘面とは20m余ある。

2) 発掘区の設定と調査の経過

ア. 発掘区の設定 (図6-1)

発掘区の設定は基本的には従来の方針を踏襲した。しかし、この方法であると、広い面積をもつ遺跡では、グリット設定に矛盾が生ずるので、それを是正するために、公団用道路センター (STA) の2点を任意に選び、それを結んだ直線を基準線としておこなった。もちろん、本来的には、国土地理院の座標にのせた発掘区の設定が、事後の処理上望ましいが、道路という線開発にともなう事前調査をおこなうためには、より混乱の少ない発掘区の設定と、従来の方針を踏襲する建前もあって、前述の方法をとることとした。しかし、遺跡の広がりには全て路線内におさまる例は少なく、むしろ、広がる例が多い。従って、遺跡全体を将来的展望の上にならって、発掘区を設定するには、この方法は最善ではない。

本遺跡の発掘区の設定は STA 214+20 と STA 214+80 を直線で結んで南北の基準線とし、STA 214+80 の点で直角に振って、それを東西の基準線とした。南北の基準線は磁北を向き、真北は30° 20′ 西に振れる。

大地区の設定は予想される遺跡範囲が完全に含まれるように配慮して決定した。大地区は南北50m、東西200mとした。東西200mの中心は南北の基準線がくる。大地区名は小牧から東京よりつけた。つまり、STA 214+20はB地区の、STA 215+20はD地区の起点とした。小地区 (グリット) の設定は、大地区の設定法にあわせた形で、従来の方法を踏襲した。

測量は全て、遣り方測量法をとった。その基準点は地区設定の基準線を用いたが、基準点は STA 214+20 とした。つまり、STA 214+20 を起点とし、東西・南北の基準線にそって、3m 方眼で水系を配置した。

イ. 発掘調査の経過

8月23日、阿久遺跡の調査班から、調査員1名と作業員9名で分遣隊を組織し、本日から調査にはいる。遺跡は畑地であり、若干の遺物が表採されるものの、その量も少なく、かつ、遺跡の立地のあり方から、さほど大規模な遺跡の存在は考えられなかったために、小規模な調査体制で臨むこととした。しかし、調査の進行過程で必要に応じて、阿久遺跡の調査班から応援体制をとれるようにしておいた。トレンチは、段丘上路線内全域がほぼ把握できるように、任意に設定し発掘作業にとりかかる。

9月8日、少人数のため能率は若干下がったが、本日までほぼ、路線内の遺物の広がりが把握できた。つまり、中位段丘面先端部に近い BA 47 を中心とした地域に、条痕文系土器片が集中して出土しており、ほぼこの地域が、本遺跡の中核部と考えられ、ここを中心に発掘区を拡張してゆくこととした。

9月16日、BB 45・BE 45 付近に土壌、集石等の遺構を検出した。また、条痕文系土器の出土地域での遺構検出は困難であり、従って、遺物の出土状態の記録化をおこなうこととした。

10月13日、本調査を終了。阿久班と合体。

3) 土層 (図 7-4)

本遺跡のの中位段丘面は、弓振川ぞいに西に傾斜する一方、南北にも傾斜している。土層もまた、現地表の傾きに応じて変化するが、すでに過去に水田造成のために地表面が削平された部分もあった。ローム層(2次堆積)は高位段丘崖下から中位段丘面下方(BEライン)までほぼ堆積がみられたが、それから段丘先端部にかけては、弓振川の氾濫によりローム層が削られ、多量の玉石を含む黒色土が堆積している。条痕文系の土器は主としてこの黒色土層中に出土した。

4) 遺構と遺物

ア. 縄文時代の遺構と遺物 (図 6-2, 8-1~23, 9, 図版 3)

遺構 AX 46 を中心とした、ほぼ 10×10m の範囲内に条痕文系土器片と石器が集中して出土した。しかし、遺構の検出はできなかったが、何らかの生活の場であった可能性は強い。

遺物 土器と石器がある。土器は全て破片であって、総数 142 点である。しかし、いずれも破片であって全器形を知りうるものはない。

壺と深鉢がある。壺は頸部 2 点 (21・22) と胴部 2 点がある。頸部は太い篋描の沈線で飾る。22 は篋描沈線を数条平行にひき、それを一定間隔を保って縦にきるものである。器形にゆがみがみられ、あるいは特殊なものであろうか。全体に篋でていねいに磨いている。胴部破片は深鉢と同様に櫛描条痕が施されてい

る。他に、口縁直下に凸帯をもつ細片がある。壺口縁部の破片であろうか。

深鉢は条痕文で飾られる。破片総数101点で、内訳は口縁部15点、胴部片84点、底部片2点である。胎土または色調から2大別される。暗褐色または濃褐色で、硬い焼きのもの(84点)と、淡黄褐色の、軟質のものも2個分体17点ある(2・12)。前者は口縁部のあり方から6個体分ある。口縁部形態は外反しながら立ち上るであろう。口縁端部は指頭圧痕をもつもの(1・3・5)、棒による短線をほどこしたもの(8)、内外面からそいだもの(9)、角ばるもの(6)がある。文様は櫛描条痕文を口縁端部から斜走または縦位に描くもの(2・2・12)と、口縁部を無文帯とし、頸部から胴部を条痕文で飾るもの(3・5・6・8・9・11)とがある。2と12には内面にも条痕がほどこされる。条痕文は櫛で描かれるが、棒で描いたものも2例ある。いずれも内面は篋で削っている。長石粒を主体とした細粒を多く含ませている。

縄文をもつ土器(4・7)は3点ある。細い斜縄文で飾られている。

石器は横刃型石器7点、打製石斧15点、石鍬6点、剥片等である。

横刃型石器(1~4・15・16)は平面形が短冊形をなすものと三角形状をなすものがある。両側端部に大きな階段剥離を1ないし2回加えているか、自然面をそのまま残すだけで細部加工はほどこしていない。細部加工は刃部またはその対辺にのみ施される。中央断面形は刃部またはその対辺の先端部で三角形状となる。使用痕と思われる磨耗痕は両側端にはみられない。

打製石斧(5~14・17~19)はIA 1、IB 2、IIA 1、IIB 6、IIC 1、IIIA 1、その他3の計15点ある。IIBが最も多い。使用時の磨耗痕をもつものは少ないが、あるものは、正面は顕著であるが、裏面は余り目立たない(12)。その他としたもののうち17は粘板岩製の円礫に自然面を一面に残しながら剥離を加えたもので、他とは異なる要素をもつ。他は破片で細部は不明である。

打製石鍬(図6—1~6)は全て黒耀石製で、抉りがある。

その他、黒耀石製の剥片41点と打製石斧または横刃型石器の剥片が39点ある。このうちの1点は横刃型石器(4)と接合した。この事例は多量の剥片の存在とともに、本遺跡で若干の石器加工がなされたことを示しているものと思われる。

イ. 近世の遺構と遺物(図7—1~3, 図8—24~25, 図版2)

遺構 条痕文系土器の出土地点に接したBA 45からBE 45にかけて、集石、集石土壌、土壌を各一基ずつ検出した。集石は東西方向に列状に検出された。最大幅2m、長さ7.2mである。こぶし大の円礫を集めてあり、あるいは一種の暗渠施設か。土壌は最大幅3.6mの円形状のもので、壁の立ち上りはまるい。埋土は自然堆積であることを示している。集石土壌は、こぶし大の円礫を径1.20mの範囲内にぎっしり集め、その下方に深さ64cmの土壌を穿ったものである。

これらの遺構の時期決定は困難であるが、集石内に近世陶器片が出土しており、これらの遺構にほぼその年代を与えても大きなまちがいが無いものと思われる。これらの遺構の用途はわからない。

遺物 土師質土器(24)、文久永宝、その他陶器片が出土している。

5) ま と め

今回の調査で検出しえた諸遺構は近世のものと思われる集石・集石土壙・土壙の3基以外には確認されなかった。特に、条痕文系土器の出土が、前述したように、半径5mのほぼ円形状に分布しており、この中に、竪穴住居址の存在を予想し、十分な注意力で精査を試みたが、生活の直接の痕跡はついに確認しえなかった。従って、この地点が居住場所でなかった事は予想される。ただ、かなりの量の打製石斧等の剥片が集中して出土しており、あるいは短期間の石器製造の場とも考えられるが、剥片の量は少なく、定かでないが、路線外への遺跡の広がりも考えられるので、本遺跡の検討は今後の課題であろう。

出土遺物の中で注目されるのは、条痕文系土器がある。これは弥生時代中期初頭の庄ノ畑式土器(註1)に見られる条痕文と全く異なる(註2)。ほとんどが、櫛描条痕で描かれるなど深鉢にみられる口縁部と文様構成はむしろ、縄文晩期の氷式土器(註3)のそれに酷似している。しかし、氷式土器を最も特徴づける浮線網状文土器の出土は皆無である(註4)上に、壺にみられる篋描文様はいまだ例をみない。出土総量が少ない点で、これ以上のことを追求することは困難であるが、総じて、縄文晩期最終末の土器群であろう。

本遺跡の下方、弓振川ぞいに約2.5km下ると、茅野市御社宮司遺跡が(註5)ある。縄文晩期最終末の大遺跡であり、今後両遺跡の検討の中で、本遺跡の役割がはたされるであろう。

本遺跡も加えて、諏訪湖盆地方における氷式土器を出土する遺跡は、岡谷市庄ノ畑・経塚原(註6)・新井南(註7)・茅野市御社宮司の諸遺跡などその数は増加しつつあり、その中に本遺跡例も加わる。

弥生文化との接点を考える上で重要な調査例であったといえよう。

(矢島宏雄・笹沢浩)

註1 藤森栄一・桐原健ほか「岡谷市庄ノ畑遺跡」長野県考古学会研究報告書1 1966年

2 中部高地の初期の弥生土器の条痕文は基本的には東海地方の水神平式系の貝殻条痕文から発展してきたものと考えられる。つまり、貝の入手の困難な中部高地では貝殻条痕を模倣した、先端幅広の歯をもつ櫛や、篋で描く条痕文を発展させた。本遺跡のような歯の先端がすどい櫛で描いた条痕文は少ない。

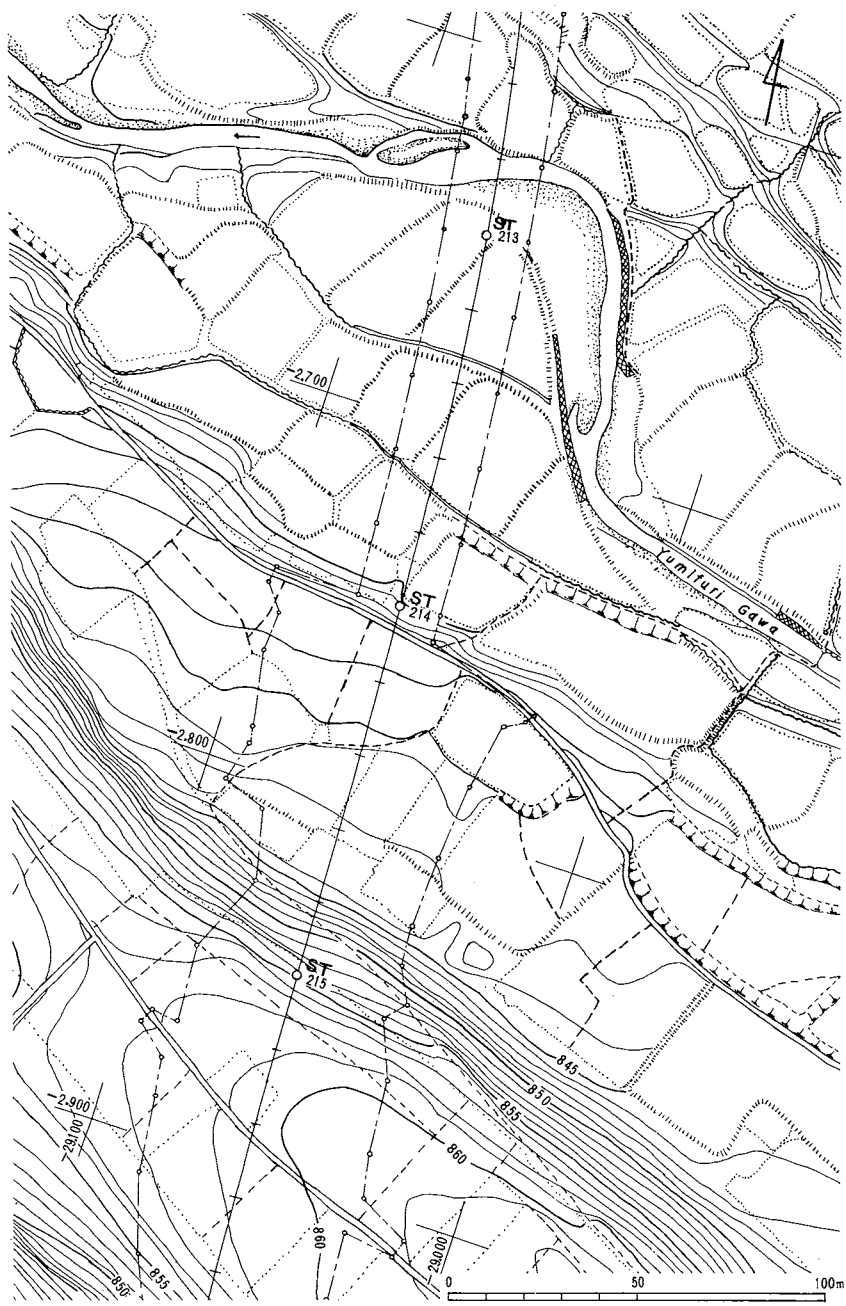
3 永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」石器時代9 1969年

4 同様の例は気賀沢氏によって指摘されている(気賀沢進・小原晃一他「荒神沢遺跡」1979年)ように、上伊那郡飯島町うどん坂Ⅱ遺跡(中央道報告書上伊那郡飯島町内その3・駒ヶ根市内 1973年)駒ヶ根市湯原遺跡(吉村進「湯原遺跡」一大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・湯原・射殿場・南原・横前新田・塩木・北原・富士山緊急発掘調査報告 1974年)などがある。

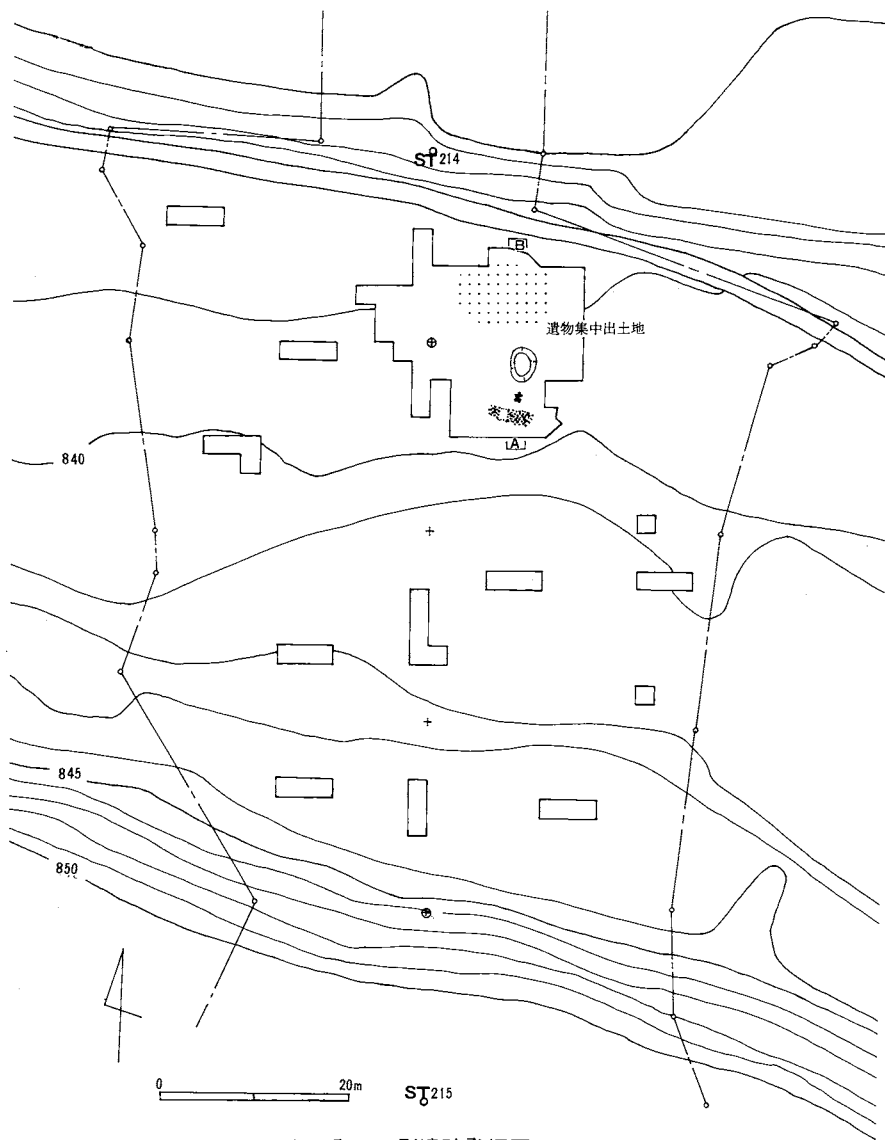
5 中央道遺跡調査団によって1978年度に調査された。

6 中央道遺跡調査団によって1977年度に調査された。

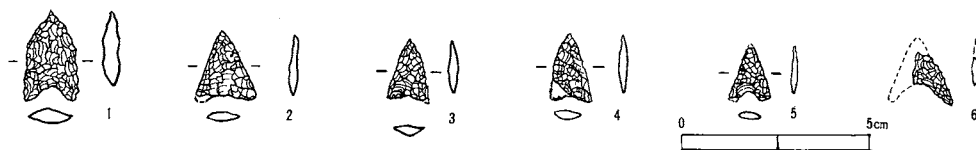
7 「中央道報告書 岡谷市その3」1975年



第5図 入の日影遺跡地形図(1:2000)

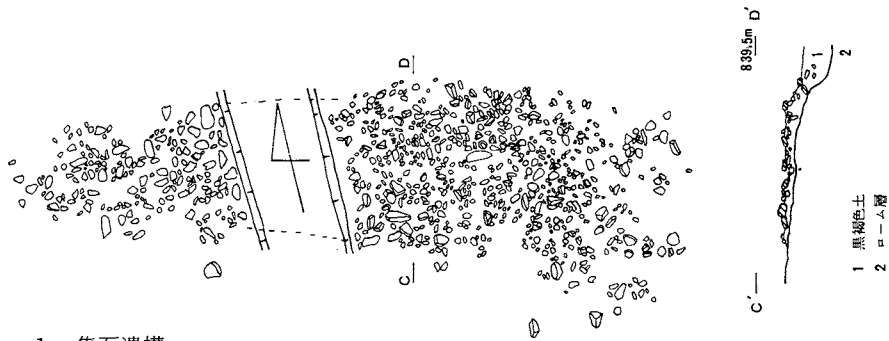


1. 入の日影遺跡発掘図(1:800)

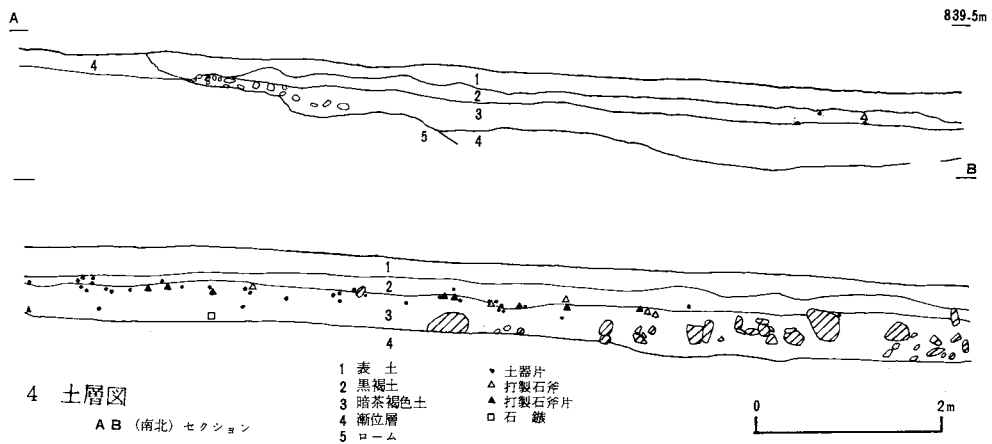
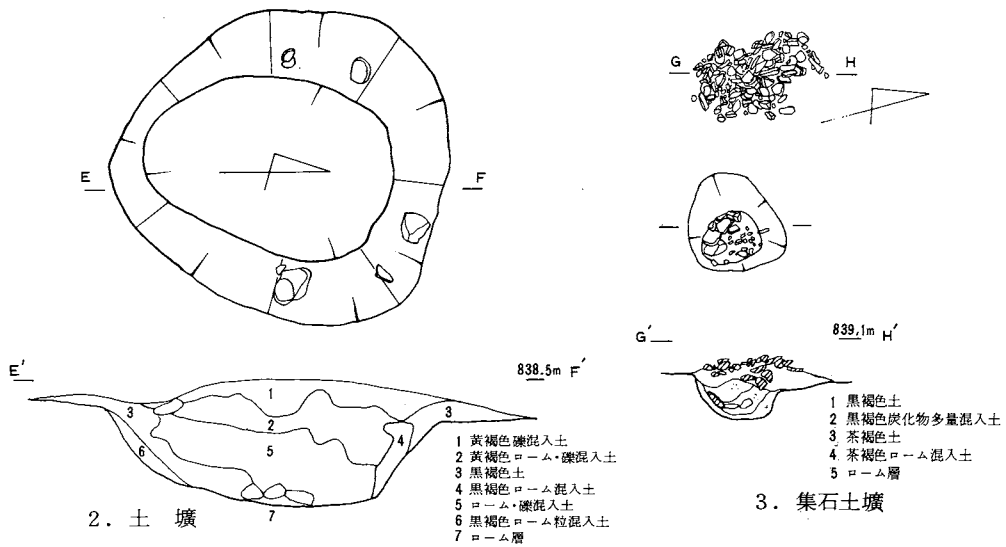


2. 入の日影遺跡出土石器(その1)(1:2)

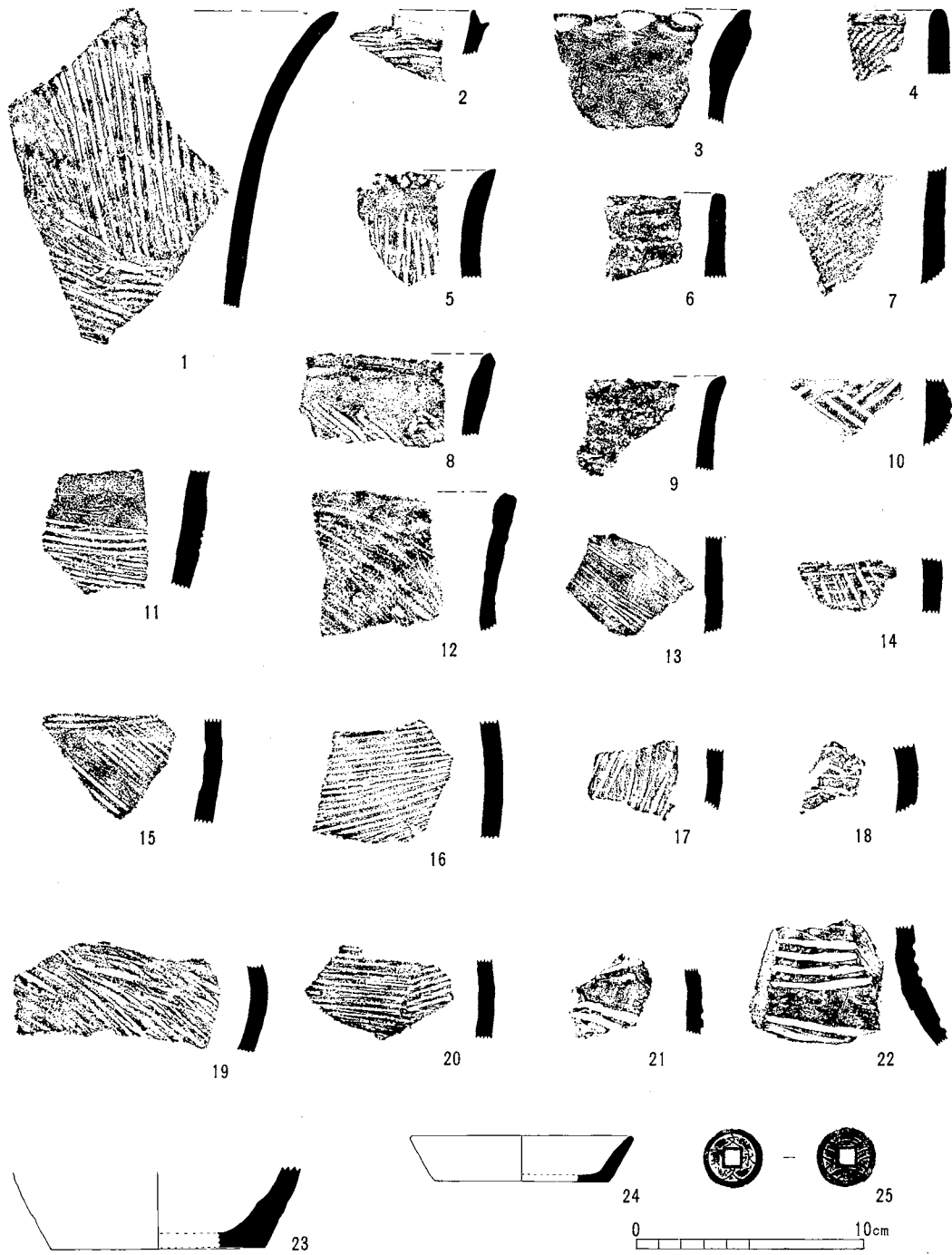
第6図 入の日影遺跡発掘図および出土石器実測図(その1)



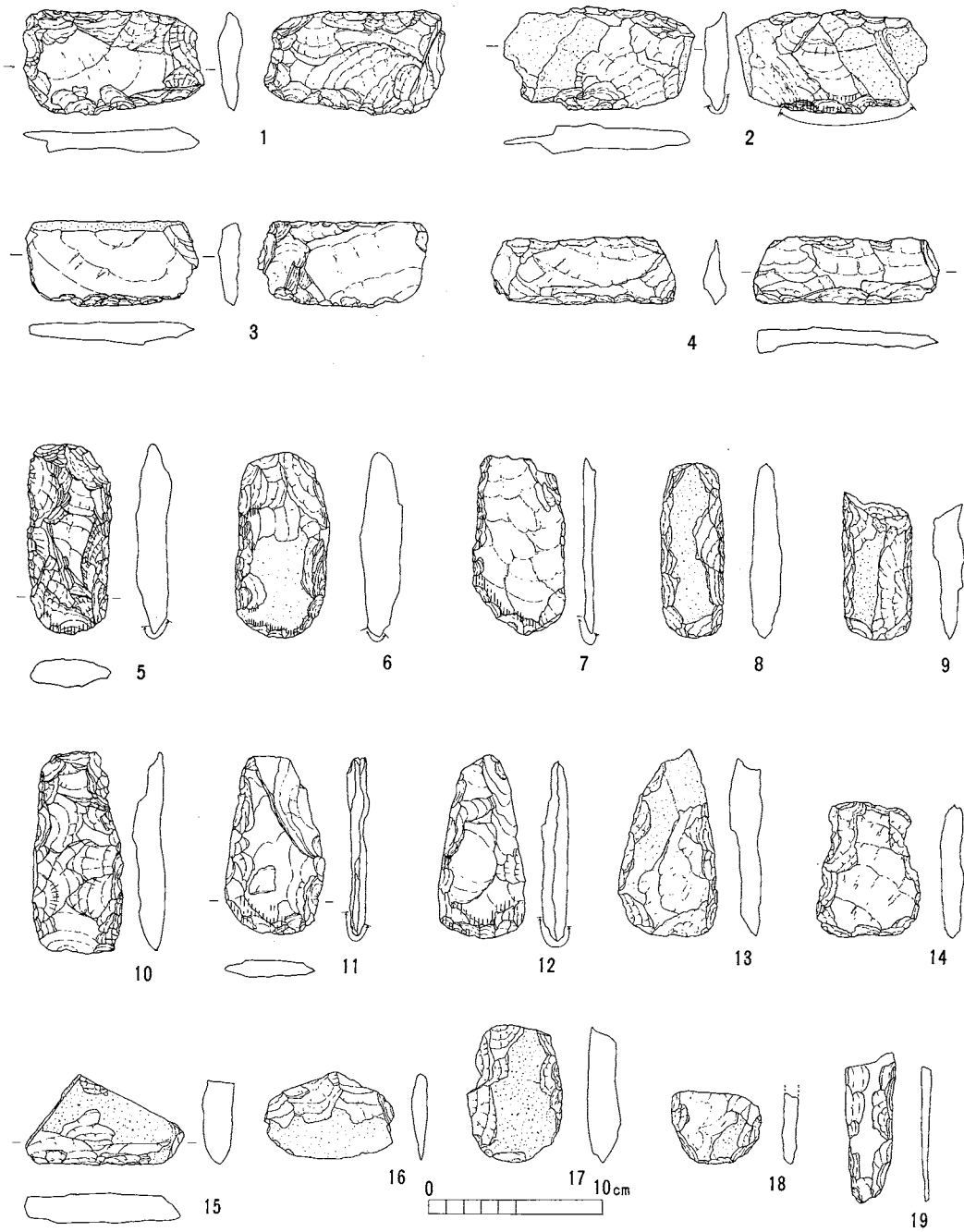
1. 集石遺構



第7図 入の日影遺跡集石・土壙・集石土壙実測図(1:80)および土層図(1:80)



第8図 入の日影遺跡出土土器・貨幣実測・拓影図(1:3)



第9図 入の日影遺跡出土石器実測図(その2)(1:4)

第8表 入の日影遺跡出土石器一覽表

挿図 番号	器 種	形 態	長 さ (cm)	幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 さ (g)	石 質	破損部位	備 考
6-1	石 鏃	無茎凹基	2.35	1.4	0.45	1.1	黒 耀 石	完 形	
6-2	石 鏃	無茎凹基	1.85	1.55	0.2	0.4	黒 耀 石	完 形	
6-3	石 鏃	無茎凹基	1.6	1.1	0.3	0.3	黒 耀 石	完 形	
6-4	石 鏃	無茎凹基	1.7	1.15	0.3	(0.3)	黒 耀 石	片 脚 部	
6-5	石 鏃	無茎凹基	(1.35)	1.05	0.2	(0.2)	黒 耀 石	先 端 部	
6-6	石 鏃	無茎凹基	1.55	1.0	0.3	(0.1)	黒 耀 石	先 端 片 脚 部	鋸 齒 状
9-1	横刃型石器	平面四角形	10.5	6	1.3	125	緑 泥 片 岩	完 形	
9-2	横刃型石器	平面四角形	10.5	6	1.3	130	緑 泥 片 岩	完 形	
9-3	横刃型石器	平面四角形	9.5	5	1.1	90	緑 泥 片 岩	完 形	
9-4	横刃型石器	平面四角形	10.5	4	1.1	80	緑 泥 片 岩	完 形	
9-15	横刃型石器	平面三角形	9	5	1.6	105	緑 泥 片 岩	完 形	
9-16	横刃型石器	平面三角形	7.5	5	0.8	40	緑 泥 片 岩	完 形	
	横刃型石器	平面四角形	(6)	6	0.9	(60)	緑 泥 片 岩	中 央 部	
9-5	打製石斧	ⅡB	11	5	1.7	150	緑 泥 片 岩	完 形	
9-6	打製石斧	ⅡB	10.5	5.5	2.1	200	緑 泥 片 岩	完 形	
9-7	打製石斧	ⅡC	(10)	5.5	0.6	(70)	緑 泥 片 岩	頭 部	
9-8	打製石斧	ⅡB	10	4	1.6	100	緑 簾 緑 泥 片 岩	完 形	
9-9	打製石斧	ⅡB	(8.5)	4	1.5	(70)	緑 泥 片 岩	頭 部	
9-10	打製石斧	ⅡA	11.5	5.5	1.4	130	緑 泥 片 岩	完 形	
9-11	打製石斧	ⅠB	10	5.5	0.9	90	雲 母 片 岩	完 形	
9-12	打製石斧	ⅠB	10.5	5	1.4	110	緑 泥 片 岩	完 形	
9-13	打製石斧	ⅠA	10.5	6	1.2	(110)	緑 泥 片 岩	刃部の一部	
9-14	打製石斧	ⅢA	(7.5)	6	1.2	(90)	石 墨 緑 泥 片 岩	頭 部	
9-17	打製石斧		7.5	5.5	1.7	100	硅 質 砂 岩	完 形	
9-18	打製石斧	B	(4)	5	0.7	(30)	緑 泥 片 岩	胴 部	
9-19	打製石斧		(8.5)	(3)	(0.6)	(20)	緑 泥 片 岩	破 片	
	打製石斧	ⅡB	(12)	5	1.7	(120)	緑 泥 片 岩	胴 半 部	
	打製石斧	ⅡB	(6.5)	5.5	0.8	(50)	緑 泥 片 岩	胴 部	
	磨 石		7.5	6	4.5	270	安 山 岩		

2. 柏木南遺跡 (SKWC)

1) 位置 (図2, 3, 11-1, 図版4)

柏木南遺跡は長野県諏訪郡原村柏木字大早川17401の2番地外に所在する。北に小早川、南に大早川が西流する、その両河川に挟まれた丘陵上に立地する。この丘陵は八ヶ岳方向から、本遺跡の所在する地点までは、ほぼ東西方向にあるが、ここから、向きを西北方向に変え、かつ、丘陵幅はせばまる。丘陵上は南北幅で150m余りあり、ゆるやかに北西にむけて傾斜しているが、比較的平坦である。小早川と大早川との比高差はそれぞれ10、30mである。大早川を経た南側の丘陵上には阿久遺跡が所在する。

2) 発掘区の設定と調査の経過

ア. 発掘区の設定 (図11-1)

発掘区の設定は入の日影遺跡と同様の方法をとった。公団用道路センター STA 231 と STA 230 を結んだ直線を南北方向の基準線とし、東西方向は STA 230 の点から、直角に振って求めた。大地区は STA 230 を C 地区の起点とし、その小牧寄りを B・A 地区、東京寄りを D・E 地区とした。

測量は全て遣り方実測によった。測量用の基点もまた、発掘区設定の基準点 (STA 230) と基準線を用いた。南北方向の基準線は真北より 35° 西に振ってある。

イ. 発掘調査の経過

4月19日 発掘調査開始

4月21日 C・D地区はかなりの範囲に平坦部が続き、しかも山林原野で遺物の包含状態が全く分らないために、C・D地区50ラインと、それに直行して DA・DY ラインに、ほぼ偶数ごとにグリット掘りすることとし、作業を始めた。その結果、C・D地区では、表土からローム層までは黒褐色土層となり、約50cmから60cmと比較的厚いが、ほとんど遺物は出土しなかった。僅かに、D地区東側に、縄文時代前期の遺物が散在していた。従って、C・D地区は遺跡の中心地をはずれた地域と判断し、35のグリットを調査したにとどまった。

4月23日 A・B地区を主体に調査をすることとした。この地域は畑地でもあり、遺物の散布がみられたことと、ブレイドが表採され、旧石器時代の遺跡である可能性があったからである。

5月10日 BE 36 を中心とした地域に第1号住居址検出、1部は路線外にのびるらしい。

5月17日 ほぼ調査終了、一部実測者等を残し、主力は阿久遺跡の調査にとりかかる。

5月24日 柏木南遺跡の調査完全に終了。

3) 土層 (図11-2)

本遺跡の土層は基本的にはどの地点も変わらない。ただ丘陵先端部は、表土・黒褐色土が流され、ローム層が露呈している所もある程度である。

4) 遺構と遺物

ア. 旧石器時代の遺物 (図14-1~5・9)

B地区からC地区にかけて散在して出土した。黒褐色土から漸位層出土である。120㎡程度、ローム層を掘り下げ、包含層を追求したが、ついに主体部は確認するに至らなかった。

出土遺物は石刃、尖頭器、石核、剥片である。

石刃(1) C地区表採資料である。主要剥離面右側辺にリタッチがみられる。背面には、逆方向からの剥離がほどこされている。先端部は欠損。黒耀石製。

尖頭器(9) 長さ3.4、最大幅1.2cmの両面加工の尖頭器と考えられる石器である。基部は自然面を残している。良質の黒耀石製。C地区表採。

石核(3) 打撃面に調整のみられる石核で、小石刃の剥離痕が4面みられる。BP60漸位層出土。蛋白石製。

剥片(2・5) BP42、DA50漸位層出土。黒耀石(2)と蛋白石(5)製である。他に、黒耀石のチップが何点かみられるが、まとまりのある出土でないため、旧石器時代のものであるか否か、判断できない。

イ. 縄文時代前期の遺物 (図13-9~14・図14-8)

ほとんどがD地区出土であるが、一部は、第1号住居址覆土から出土している。D地区では、本線Aラインの東側路線外に接して、特に多くの出土をみた。しかし、土器片は12点と少なく、その中心部は、路線外東方にあるものと思われる。土器片は、繊維を含み、単節の斜縄文をもつもの(13)7点、指頭圧痕をもつ薄手土器(9~12)5点である。後者は口縁部内側に1条の沈線をもつもの(9)、口縁端部に刻目をもつもの(10)、胴部に櫛描の条線文をもつもの(11・12)、無文のものなどがある。前期初頭の木島式土器の破片であろう。

石器には石匙とスクレパーがある。石匙は横型で頁岩製である。BM38出土。スクレパーはチャート製で、先端片面調整のエンド・スクレパーである。DA36出土。

ウ. 縄文時代中期の遺構と遺物

ア) 第1号住居址 (図10・12~15、図版5~7)

遺構 本遺跡で検出された唯一の竪穴住居址である。その約半分は用地外にかかっており、完掘はできなかった。そのため、平面形は確実につかむことはできないが、おそらく直径約4.50m位の不整形形になると思われる。

遺構は漸移層中で確認され、ローム層への掘り込みは約10cmときほど深くない。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、しっかりしたものではない。住居址覆土は2層から成る。下層は、ローム・ブロックを含んだ黒褐色土で、壁際から住居の中心に向かって傾斜しながら堆積している。上層は、ローム細粒子を少量含んだ黒褐色土である。

床面は堅くしまっており、全体に平坦である。その床面上に計7個のピットが検出されたが、そのうち主柱穴は、P₁、P₂、P₅、P₈の4個と、用地外の未発掘部分に予想される2個を合わせた計6個と考えられる。P₇は、貯蔵穴と考えられ、南側半分が袋状になっており、径10cm内外の礫が、床面から20cm下方に5個、底に11個、固まって入っていた。なお、底の礫に混って、幅広いうずまき状の隆帯のついている小土器片が1点見つかった。

床面の中心から少し北側に寄ったところに、方形の石囲炉がある。長さ約15~20cm、厚さ約10cmの平らな面をもつ3枚の安山岩で、30×40cmの範囲に、東、南、西の三方を囲んでいた。炉の北辺の石は抜き取られたものであろう。炉床は約10cm程掘り凹められ、そこに約3cmの厚さで焼土がみられた。焼土は、石囲炉の南側の床面にも及んでいる。

遺物の出土状態 本住居址からの出土遺物は、土器と石器である。土器は、完形の深鉢2点と半完形の浅鉢があり、他はほとんど復元不可能な細片で約50点ある。深鉢は、石囲炉付近と南壁に近い床面上に、浅鉢は、西壁寄りの床面上に出土した。これらは住居址に伴うものであろう。深鉢は、藤内Ⅰ式比定土器である。細片土器の約60%は、住居址の北西部に、また約15%は南東部に、大きなまとまりをなし、床面より10cm以上離れた検出面に近い位置から出土した。

石器は、横刃型石器8点、黒耀石製の剥片石器3点、黒耀石の原石6点等が出土した。黒耀石の原石は10cm大で、P₃の西側に床面より約10cm浮いて固まって出土した。横刃型石器8点のうち5点は、黒耀石の原石とほぼ同一地点の、比較的床面に近い位置から出土した。他に、黒耀石製、及び黒耀石以外のフレイクが約30点散在していた。

土器、石器とも、大部分は2層からの出土で、壁際の3層からのものはほとんど無かった。

遺物一土器 1は、口径約17cm、器高約28cm、器厚約10mmの深鉢である。口縁部に2個の山形把手と、その前後にややねじった小突起2個とこぶ状の小突起1個がついている。蛇身把手の退化したものであろう。口縁部はヨコナデされ、幅2cm前後の無文帯となっている。胴部は単節の斜縄文で飾るが、胴部下方から底部にかけては、縦方向に、縄文を消してヘラでなでている。底部から胴部下半は、そのヘラナデののちに、横方向にヘラで磨いている。器内面は、ヘラで横方向に磨いている。器内外面に粘土紐の巻き上げ痕跡を部分的に残す。底部には、その成形方法を知り得る痕跡がある。すなわち、まず粘土円板をつくり、その上に順次粘土紐を巻き上げたものである。胴部下半から底部は赤褐色ないし橙褐色で2次焼成を

受け、胴外側上半部と内側下半部は炭化物の付着がみられる。

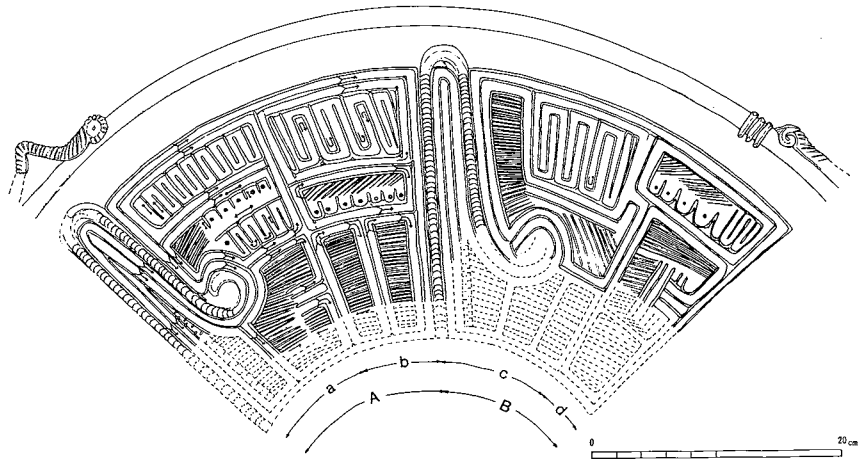
2は、口径22cm、器高約33cm、器厚1cmの深鉢である。口縁部は“く”の字状に屈折し、胴部が外反ぎみに底部に至る器形である。底部は欠損しているので不明であるが、僅かにふくらみをもつものと思われる。口縁部は、ヘラで丹念にみがかれており、刻目をもつ蛇身体の把手がつく。それは、一方の先端部は外側に、他方は内外の両側に渦文をもち、かつその両端の約 $\frac{1}{2}$ の所で山形状に高まり、その内側に渦文を描いている。内外両側に渦文をもつ把手先端に近接した口縁部には、刻目をもつ4条の隆線が縦にはりついている。この把手の対面は約10cmに亘って欠損しているが、その欠け方から、おそらく対になる小把手があったのであろう。胴部は、区画文で飾られている。その文様割付（施文方法）は土器面に残された施文の際の痕跡から、以下のように4段階に分けて考えられる。ただし、胴下半から底部は欠損しているので、復元的に考えてみた。

第1段階、土器を均等に縦位に半截竹管工具で下書きして2分割する。そして、それらの上に粘土紐をはりつけた、連続した2本の隆帯を2個所に描く。1本は底部まで垂下し、他は口縁部屈折部下で逆“U”字状となったのち、斜めに垂下し、その先端は左巻きの渦文となって終わる。隆帯部は、連続爪形文が施される。2本の隆帯のほぼ中間位置に、各々の把手がつく。把手と隆帯の成形順位はわからないが、胴部文様を描くためには、土器を逆さにすることもありうるので、把手の成形は最終段階であろう。

第2段階、隆帯で2分割した空間部に、半截竹管工具を用いた平行沈線でA・Bの大区画をする。その描き方は、まず、逆“U”字状隆帯の右肩から他の隆帯の左肩まで平行沈線を引き、次に垂下する隆帯沿いに描き、さらに渦文となる隆帯沿いに描いたのち、逆“U”字の屈曲部から、底部上半の肥厚部上端まで垂直線を描く。隆帯沿いに垂下させた2条の平行沈線は、底部肥厚部上端で、口縁部と平行させた平行沈線で結ぶ。

第3段階、A・Bの大区画をさらに、半截竹管工具を用いた平行沈線で2分割し、Aはaとb、Bはcとdに中区画する。さらに、これらは横方向にも3段に区画する。つまり、最小の区画であり、これらの基本は長方形となるが、渦文があるために、必ずしも、そうはならない。

第4段階、小区画は、篋描文と円形竹管文で飾る。これらは各段で異なるが、上段と下段は統一性があり、中段は、上・下段の文様が併用されている。上段の小区画文は、bとcが共通し、aとbが1部共通する。つまり、bとcは基本的には連続鉤の手文とも呼ぶべき文様で飾っているが、aは、上下から交互に引いた篋描文で飾り、dでは



第10図 柏木南遺跡出土区画文土器展開図(1:6)

aの文様に中段bの文様とが併用されている。

中段は、全て文様構成は異なるが、aとb、cとdでは共通性が強い。すなわち、aは三叉文風に描いた文様を連続し、それに円形竹管文を附加した文様に、上段aの文様と、篋描平行沈線文の三種で文様構成をし、中段bでは、それらからaの上段の文様を欠く。中段cとdは、全て篋描平行沈線文で描く。

下段の区画文は、おそらく8区画から成り、それらは全て、篋描平行沈線文で飾られるものと思われる。隆帯によって挟まれた部分の文様構成には交互刺突文がみられる。

このように、本土器の区画文は、上・中段にそれぞれ4、下段に8の計16の小区画文から成っているものと思われる。そして、それらは、単に同一の区画文を繰り返すのではなくして、全体のバランスの中でアクセントをつけた、華麗な区画文土器と言えよう。

なお、文様の施文方法は、文様部分に残された施文上の痕跡の観察から解釈した。

4は、深鉢の口縁部片で約 $\frac{1}{2}$ が残存している。口径約21cm、器厚8mmである。口縁は“く”の字状に屈折し、その屈折部に指頭圧痕を施した隆帯を横にめぐらしている。暗褐色で、粒子が荒く器面はざらざらしている。胎土は後述の浅鉢と似ている。

5は、口縁部から胴部へかけての深鉢片である。全周の約 $\frac{1}{2}$ が残存していた。口径約10cm、器厚12mmである。口唇部は平坦である。口縁端部から約5mm下で内、外面ともにかすかにくびれている。器面は、ヘラで丁寧にみがかれているが、部分的にオサエ痕が残る。焼きは非常に堅くしっかりしている。

6は、口径約20cm、器高約12cm、器厚約8mmの浅鉢である。約 $\frac{1}{2}$ 個体の残存である。口縁部内面に幅約3.5cmの段がついている。九兵衛尾根式土器にみられた文様が退化し、その痕跡が段という形で残ったのであろう。器面は、ヘラケズリにより整形されているが、胎土が不良でざらざらして非常にもろい。内面は、外面に比べ丹念にみがかれている。なお、この浅鉢には、内、外面ともに炭化した種子圧痕がみられる。

7は、深鉢の底部で、胴の立ち上がり部は約 $\frac{1}{2}$ 残存している。底部径は約11cm、器厚約13mmである。胴部は、縄文を施文した後ヘラでけずっている。器外面は橙褐色、内面は暗灰色である。胴部内面には炭化物が付着している。また底部内面に、焼成前のものと思われるヘラ描きの痕跡がみられる。焼成は非常に良好である。

細片約50点の内訳は、区画文の一部をもつもの8点、縄文のみのももの4点、いわゆるキャタピラ文をもつもの2点、無文のもの4点などである。

石器 本住居址から出土した石器は、横刃型石器、粗製大形石匙と、剥片石器、凹石の4種15点である。横刃型石器は、A (15、16)、B (22~24)、C (19~21)、のいずれも出土している。

Aは、薄く偏平な滑石片岩の石片を加工したもので直線刃である。なお、16は途中で折れている。

Bは、直線的な刃部とその断面がV字形をなす両面加工のもの(19)、舟底形の刃部をもつもの(22)、丸みを帯びた外周のほとんどに剝離痕がみられるが、断面はぶ厚く刃部に鋭さのないもの(23)、直線刃はもつものの、身が厚く形態的にも不定形なもので、横刃型石器として扱えるかやや疑問なもの(24)などがある。

Cは、図示したもの以外にさらに1点ある。

粗製大形石匙(10)は、細かい剝離痕のみられない大ざっぱなつくりである。凹石(25)は、一方に2個、他方に1個の凹みがある。剥片石器は、いずれも黒耀石で、5は丹念に加工した刃部をもつが、7は鋭

利な縁辺をそのまま利用したものと思われ、使用痕が残っている。図示されていないが、5と同様な石器がもう1点出土している。6は、風化が進んでおり剝離が明確でない。

これらの石器以外に、乳棒状磨製石斧の加工途中で破損したと思われる石片がある(18)。

イ) グリット出土の遺物 (図13~15)

土器 ほとんどが第1号住居址周辺で出土した。いずれも藤内I式土器であるが、量は多くない。

8は、深鉢の口縁部片である。口径約38cmで、約 $\frac{1}{6}$ 残存している。口唇は平坦であり、口縁部には、隆帯を三条めぐらす、上下の隆帯のみ半截竹管による連続爪形文を施す。器内面はヘラで丁寧にみがかれている。胎土は荒い粒子を多く含むが、焼きは良い方である。類例が、荒神山遺跡第93号住居址出土土器の中にある。

他に、区画文3点、キャタピラ文3点、縄文のみのもの2点等の土器片がある。

石器 打製石斧 IB (13)、IC (12)、II B (11)、その他 (14) の計4点、横刃型石器A (17) 1点、黒耀石製剥片石器1点の他、黒耀石のフレイク7点、黒耀石以外の石片3点が出土した。その大部分は、B区の1号住居址周辺から出土したものである。

エ. 近世の遺構 (図版4)

近世頃と思われる溝状のおちこみが、BL41からBT46にかけてほぼ帯状に東西方向に検出された。幅約6m、長さ15mで、深さは10cmと浅い。その性格等は不明である。

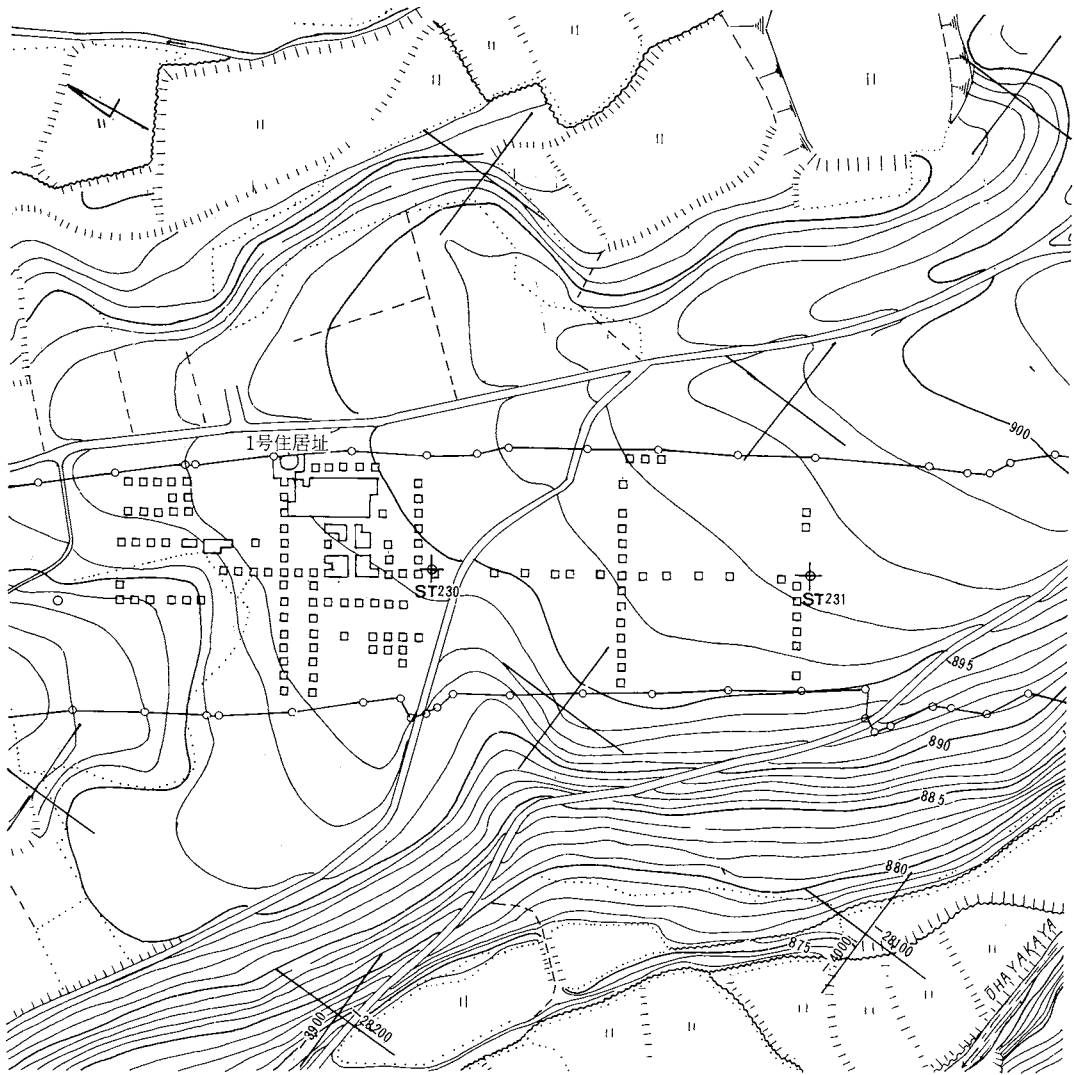
5) ま と め

柏木南遺跡の中心をなす時代は縄文時代前期初頭と中期前葉である。いずれも今回の調査ではその中心部をはずれた。しかし、僅かではあるが、前期の遺物がこの丘陵上から出土したことは、南隣の阿久遺跡を考える場合に重要である。本遺跡の資料が阿久遺跡に若干先行するだけに興味を持たれる。

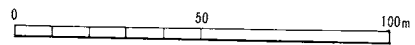
中期前葉でも、中心地ははずれたにせよ、竪穴住居址の検出をみ、藤内期の集落立地のあり方を考える上で重要である。多分、藤内期の集落は、第1号住居址北側の小早川寄りに予想されるが、丘陵先端までは僅かな距離しかなく、集落の規模は小さかったものと思われる。

遺物では藤内I式土器のセットが、単純遺跡の中で、しかも、その出土状態から一括と考えられる形で得られたことは今後の藤内式土器を検討する上で重要であろう。特に、区画文土器の存在は、今後のこの種の土器を検討してゆく上で好資料と言えよう。

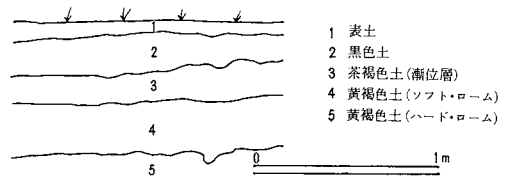
(岩崎孝治)



← A地区 — * — B地区 — * — C地区 — * — D地区 — * — E地区

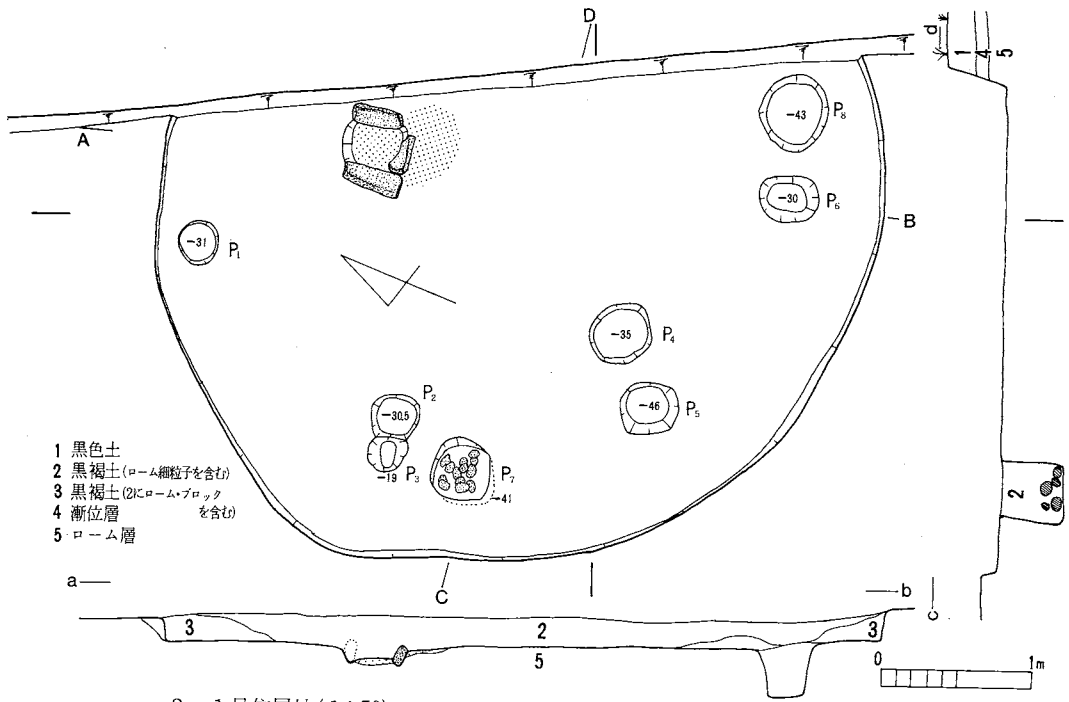
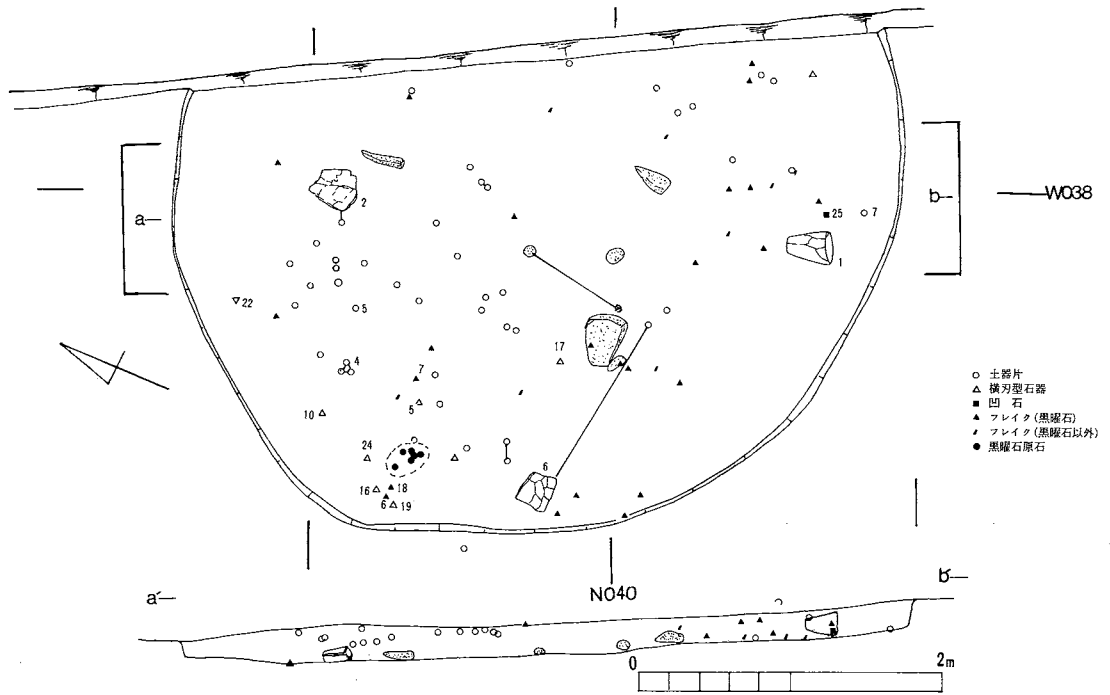


1. 柏木南遺跡地形・発掘図(1:2000)

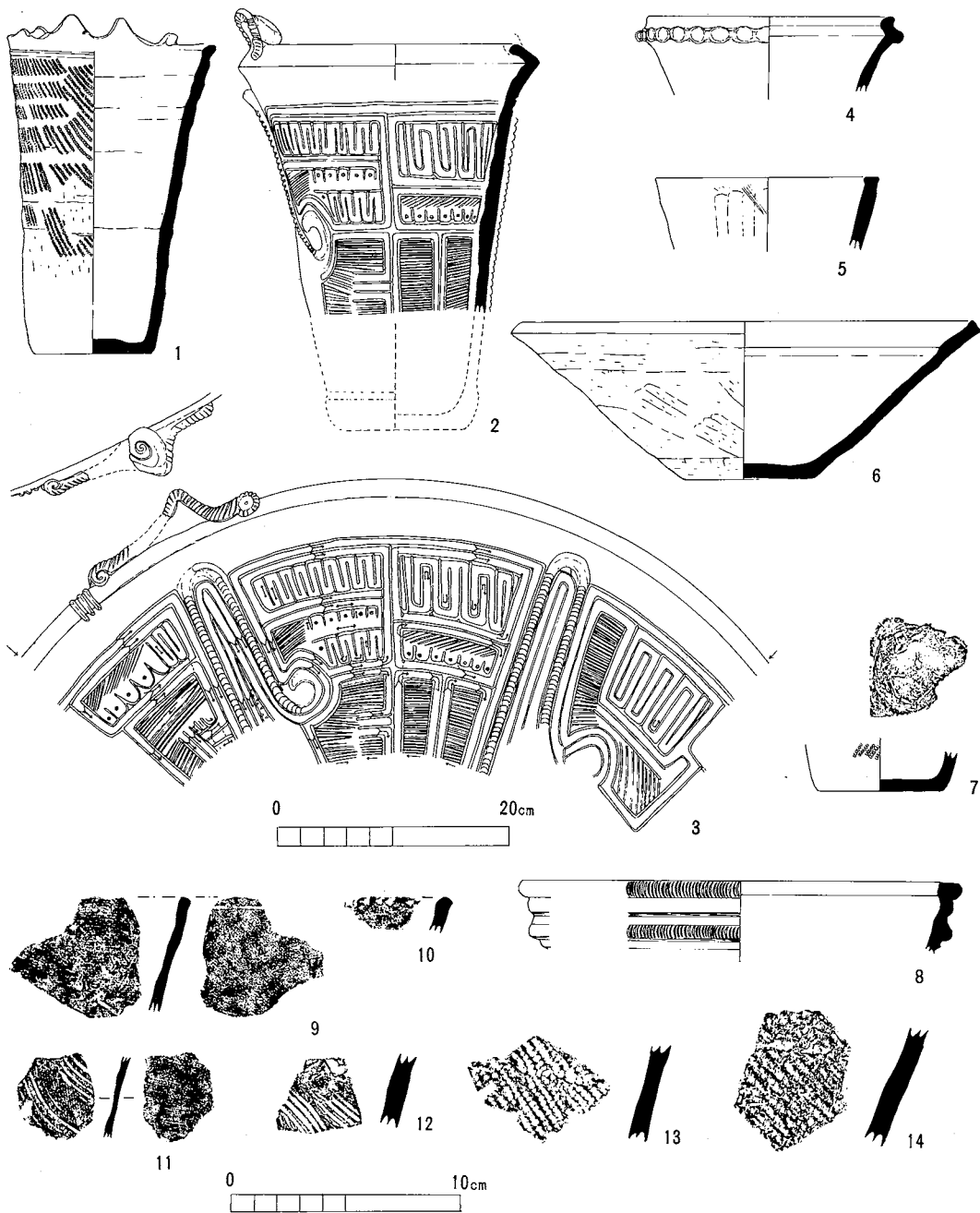


2. 柏木南遺跡 C地区標準土層図(1:40)

第11図 柏木南遺跡地形・発掘図(1:2000)およびC地区標準土層図(1:40)



第12図 柏木南遺跡 1号住居址実測図 (1:50)

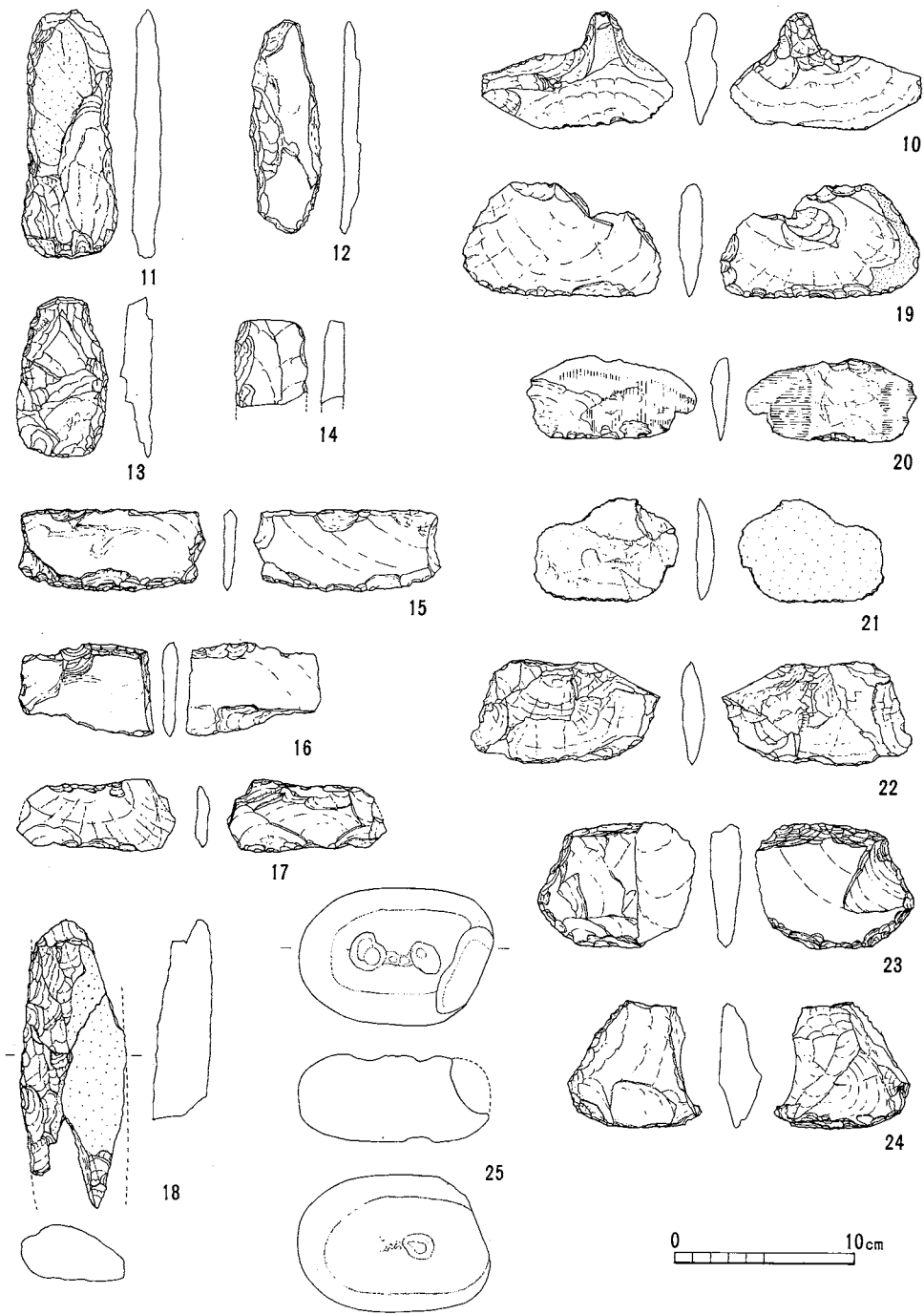


第13図 柏木南遺跡1号住居址，遺構外出土土器実測・拓影図(1~8 1:6, 9~14 1:3)

(1~7 12・14 1号住居址, 8~11・13 遺構外)



第14図 柏木南遺跡1号住居址，遺構外出土石器実測図(その1)(1:2)
 <5・6・7 1号住居址，他は遺構外>



第15図 柏木南遺跡1号住居址，遺構外出土石器実測図(その1)(1:4)
 (10・15・16, 18~25 1号住居址，他は遺構外)

第9表 柏木南遺跡出土石器一覧表

挿図番号	器種	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石質	破損部
14-1	石 刃		5.3	4.5	1.9	40.4	黒 耀 石	先 端 部
14-2	剥 片		4.4	2.3	0.8	9.3	黒 耀 石	—
14-3	石 核		2.5	2.1	—	12.5	玉 髓	—
14-4			2.6	1.8	0.9	4.6	チャート	—
14-5	スクレイパー		3.1	2.9	0.7	7.2	黒 耀 石	—
14-6	?		6.0	4.4	1.3	40	硅 質 砂 岩	—
14-7	剥片石器		4.3	1.5	1.1	4.7	黒 耀 石	—
14-8	石 匙		6.8	3.1	1.2	22.6	硅 質 粘 板 岩	完 形
14-9	尖 頭 器		3.4	1.2	0.6	3.6	黒 耀 石	完 形
14-10	粗製大形石匙		10.5	6.5	1.8	90	輝 緑 凝 灰 岩	完 形
14-11	打製石斧	II B	13.5	5.5	1.5	165	緑 簾 緑 泥 片 岩	完 形
14-12	打製石斧	I C	11.5	4.0	0.9	50	緑 簾 片 岩	完 形
14-13	打製石斧	I B	9.0	5.0	1.4	90	緑 泥 片 岩	完 形
14-14	打製石斧	その他	4.5	4.0	1.2	40	硅 質 砂 岩	洞 部
14-15	横刃型石器	I A	10.0	4.5	0.8	65	滑 石 片 岩	完 形
14-16	横刃型石器	I A	7.5	5.0	0.9	30	滑 石 片 岩	中 央 部
14-17	横刃型石器	I A	8.5	4.0	0.7	35	硅 質 砂 岩	完 形
14-18	(磨製石斧)		16.0	5.5	3.0	33.5	緑 簾 緑 泥 片 岩	—
14-19	横刃型石器	I C	11.0	6.0	1.3	90	砂 岩	完 形
14-20	横刃型石器	I C	9.5	4.5	1.0	40	砂 岩	完 形
14-21	横刃型石器	I C	8.0	5.5	1.0	40	砂 岩	完 形
14-22	横刃型石器	II B	10.5	5.5	1.2	90	硅 質 砂 岩	完 形
14-23	横刃型石器	II B	8.5	7.0	1.6	110	石 墨 緑 泥 片 岩	完 形
14-24	横刃型石器	II B	7.5	7.0	2.4	110	砂 岩	完 形
14-25	凹 石		11.0	8.0	4.8	480	安 山 岩	先 端 部

3. 阿久遺跡 (SAUB)

1) 位置 (図2、3、16)

阿久遺跡は長野県諏訪郡原村柏木9308の2番地外に所在する。通称、阿久尾根と呼ばれる低い尾根状の丘陵は、東方の八ヶ岳山腹から西方に向って、ほぼ東西方向に伸びている。この尾根状丘陵の北方は大早川が流れ、その北に、柏木南遺跡の所在する尾根が、南方は阿久川が流れ、その南に、居沢尾根遺跡が所在する居沢尾根がある。大早川の谷は幅がせまく、しかも深く「V」字谷状となる。阿久尾根との比高差は30m余ある。一方、阿久川の谷は比較的広い沖積面をもち、浅い。阿久尾根との比高差は5m余である。

阿久尾根はこのように、南北の2本の小河川によってはさまれた丘陵で、丘陵幅は場所によって異なる。丘陵幅の広い所は、丘陵上は平坦となり、せまい所では馬の背状となる。

阿久遺跡は、このように変化する阿久尾根の中でも、最も幅が広まった所に立地し、その最大幅は南北方向で約200m余ある。そして、阿久遺跡の前後(東西)の尾根は馬の背状のやせ尾根となっている。

2) 発掘区の設定と調査の経過

ア. 発掘区の設定

昨年度の試掘調査の結果を踏まえると、丘陵南斜面から丘陵上全域に遺跡の広がりが予想されるので、発掘区(地区割)の設定は、その予想範囲内を方眼で区割できるように配慮した。その方法は前述した、入の日影、柏木南遺跡と同様である。南北方向の基準線は公園用道路センター STA234とSTA235を結ぶ直線を、東西の基準線は、それをSTA235の点で直角に振って求めた。C地区はSTA234を、D地区はSTA235を始点として求めた。C地区の北方をB・A地区とし、D地区の南方をE・F地区とした。

測量は全て遣り方実測によった。測量用の基準点はSTA235を用いた。地区割設定に用いたSTA234と235を結ぶ南北線と、STA235の点で直角に振った東西線を基準線とし、STA235の基準点から、測量用の水系配置をおこなった。水系の配置は原則として3m間隔としたが、2m間隔も用いた。

STA234と235を結ぶ南北の基準線は真北から30°30′西に振ってある。また、STA235は国土地理院座標、 $X = -4,269,3291$ 、 $Y = -27,817,7611$ である。水準点は公園用BMNo.H = 2、H = 904,486を用いた。

イ. 発掘調査の経過

5月17日 柏木南遺跡から発掘器材搬入、グリット設定

5月18日 グリット設定と並行して、丘陵南斜面(E・F地区)から調査開始、この地区では、以降の

調査で、主として、平安時代後期、縄文時代中期、前期の竪穴住居址群が検出された。

5月24日 これまで少人数によって、柏木南遺跡の調査を続行してきたが、本日から併合、阿久遺跡の調査一本となる。

6月17日 南斜面での遺構検出がほぼ一段落したので、丘陵上の表土剥ぎ作業を、遺構調査と併行しておこなうこととする。すでに、試掘調査で丘陵中央部までトレンチが入れてあり、ここまで遺跡が広がっていることが明らかとなっていた。しかし、丘陵全域については、山林地帯であったこともあって、遺跡の広がりなどは全く不明であった。このため、すでに、丘陵全域に小試掘溝を何本か入れてきた。その結果、ほぼ丘陵の本線部分全域にわたって、遺物が包含されていることを知った。したがって、本年度の調査の計画段階（調査開始時）での遺跡の予想範囲をはるかに越えることが考えられ、調査の方法も変更せざるを得なくなり、日本道路公団との協議を重ねる中で、本年度の調査予定範囲をセンターから西側部分（Bライン）に主力を置くこととした。これはひとつには、工事用道路をBライン側に設けたいという公団側の要望もあったからである。

このように本遺跡の調査の進行過程の中で、調査開始時まで考えられていた、縄文中期の遺跡であるという考え方は訂正され、むしろ、縄文時代前期の遺跡である可能性が深まってきた。この点については、前年度の試掘調査では、ほんの僅かな面積と遺物包含層の上部で中止せざるを得なかった事情もあって、知る由もなかった。もともと、阿久遺跡の範囲は、丘陵南斜面の畑地のみが遺跡として把握されていたにすぎなかったもので、試掘調査によって、遺跡の広がりがある程度示されたのは、それなりの意義はあった。

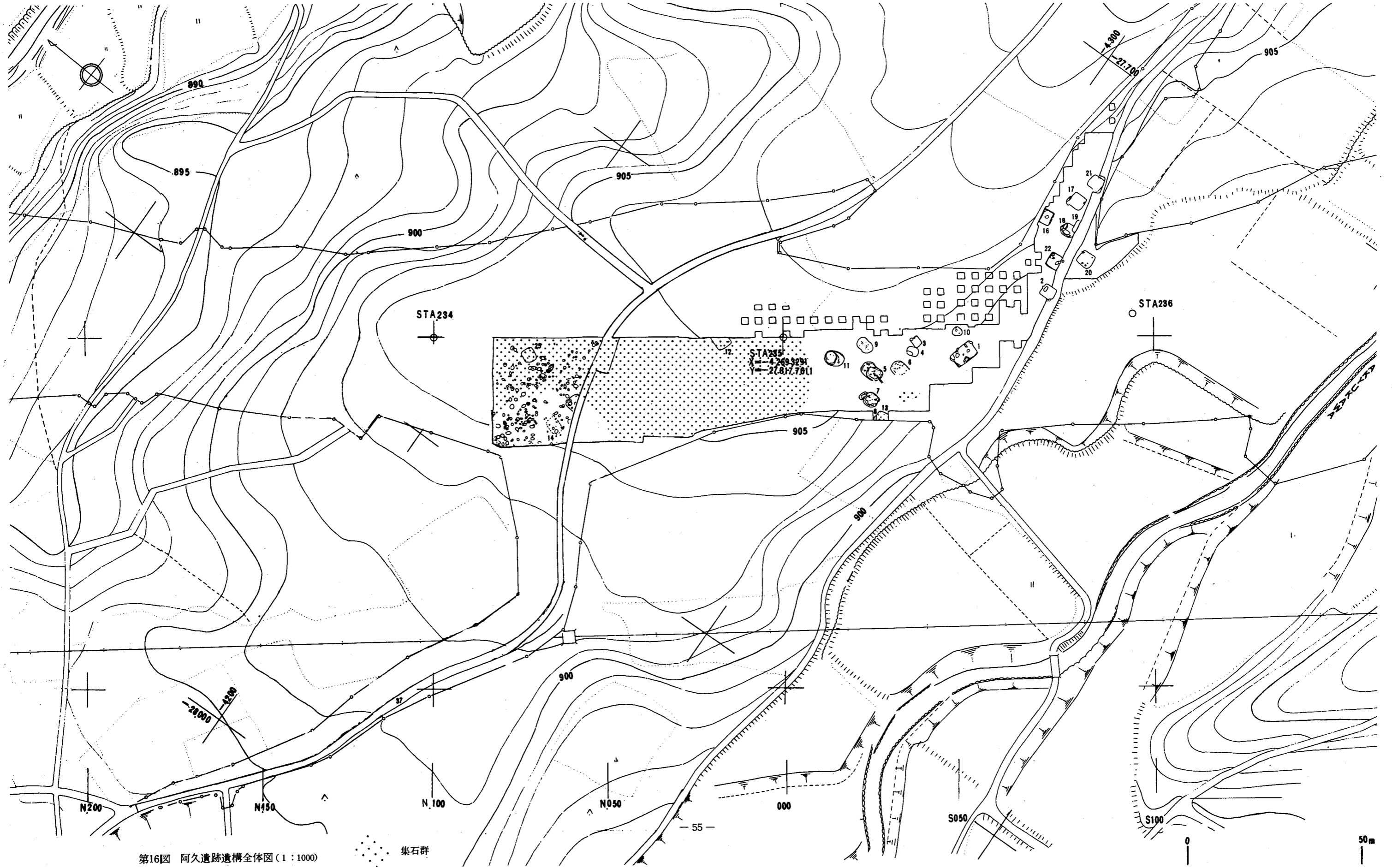
このような経過を経て、丘陵上中央部の農道の北側（C地区）を任意に選んでグリット掘りを始めた。ユンボーによる表土剥ぎ作業のデータを得る目的と、僅かではあるが、表土中に遺物の包含が認められるので、表土層からの調査を一部地域で実施したかったからである。C地区のJ～N、50～53である。この結果、地表下30～40cmで、すでに試掘溝で確認されている集石が、丘陵上北側にまで及んでいることが予想された。この集石の広がりが余りにも広範囲に及んでいることと、集石の検出面で調査をとどめたために、この段階では、これら集石が人為的所産であるか否かの判断は困難であった。ただ、遺構でないという積極的根拠が得られない以上、その扱いは慎重を期すこととした。従って、ユンボーによる表土剥ぎは、松等の大木の根をさけ、表土層10～15cmをとり除くこととした。これは、抜根によって、集石が破壊されることを防止するためであり、抜根は全て人力でおこなうこととした。かくして、人力による抜根は数百本に及んだ。

6月18日 表土剥ぎ作業の終了したD・E地区のグリット設定とグリット掘りを開始する。E・B地区ラインから北側にかけて、黒褐色土層中に集石がみえ始め、C地区に検出中の集石群との関連が予想され、それらが人工物であることを確認する。南斜面では平安期および縄文前期の住居址群の調査を続行する。住居址の調査は、建て替えを予想し、住居址内出土の遺物の出土状態を全て記録する。

7月28日 集石の細部調査と併行して、平面実測を開始する。集石群内には諸磯A・B式土器片、石器原石が多量に出土する。石器と原石については、その出土地点を略測する。

8月12日 C地区のグリット掘りに本格的にとりかかる。

8月17日 Bライン農道南側ではほぼ集石検出終了、集石は単に散在しているのではなく、全体としてひとつのまとまりがありそうである。また、南斜面の住居址群とは明確に区別して構築しており、両者に



集石群

は何らかの関連がありそうである。C地区のグリット掘りがすすむ中で、56ラインから西側では集石がみられず、板・柱状の石塊が点在して検出される。従って、この地域では、黒褐色土をとり除き、ローム直上の漸位層まで掘り下げる。土壌群が検出され始める。

8月23日 入の日影遺跡を並行して調査するため、その準備にとりかかる。

8月30日 C地区で集石下方に下層遺構があるらしいことを確認。今後の調査方法の再検討せられる。

9月18日 調査が全面にわたり、調査員の不足が痛感される。南斜面の住居址群の調査ほぼ終了。C地区の土壌の検出数は80を越える。石塊の多くは下方に土壌があり、中には土壌上に立ったものもあり、立石をもつ土壌がかなりあることがわかる。土壌群の調査は、土層観察のための2分の1分割法をとり、断面実測、平面実測を並行して、作業を進める。

9月29日、調査予定地域を再三変更、Bライン全域の調査を断念。南斜面東方の、農道とりつけ部分(F地区)の調査開始。表土層が浅いため、全て人力で発掘をすすめる。

10月13日 入の日影遺跡の調査ほぼ終了。一部作業員は阿久遺跡に戻る。C地区の土壌群90を越える。これらは、A. 大形で深く、壁がほぼ垂直で、平面形が隋円またはややかまぼこ形で埋土に多量のロームブロックを含むもの、C地区西北隅に「L」字状に配列したように検出され、いずれも壁ひとつを残して掘りこんでおり、同一構造の土壌と考えられる。B. 小形で深く、壁がほぼ垂直に立ち上るもの。これには、立石をもつものとそうでないものがある。C. 形が不定形で深さもなく、全てが遺構としてよいか、判断に迷うもの、さらに、小石を数個から十数個つめたものも少数ある。

10月27日 土壌群、集石群の全体撮影、一時中止していた、南斜面農道とりつけ部分の調査再開。平安期の住居址群検出され始める。7月末からの集石の平面実測はほぼ終了。一部断面実測にとりかかる。

10月30日 昨日の冷えこみで八ヶ岳は完全に雪におおわれ、遺跡全面に霜柱たつ。本年度の冬の来襲は早い。平安期の住居址群の調査と集石の断面実測本格化する。

12月9日 本日をもって、本年度の調査予定は終了とする。結局、中途変更した調査予定地域のうち、Bライン側もC地区Iラインまでの上層部まで、ほぼ完了したにすぎなかった。調査面積は約4,000㎡である。これは、全く予想だにできなかった多量の遺構群と出土遺物、さらにいつになく多い降雨日が重なり、加えて、少ない調査員ではいかんともしがたかったことによる。降雪中での調査も何回もおこなったが、いつになく早い冬將軍の到来で本日が、調査のギリギリの日程であった。調査の進行過程の中で、調査地域を広げれば広げるほどに、累々とわれわれの眼前に姿を見せる集石群、集石群の欠如した地域には住居址群と土壌群、阿久尾根全域がまさに、遺構の連続であった。しかも、縄文時代前期に、このような大規模な遺構があることは、学会に報告がないだけに、われわれはとまどいもした。いわんや、集石の下層にさらに前期前葉の遺構があるらしい事を知った時には、今後の調査の行末を案じた。集石群が環状になるらしいことを予想しながら。

3) 検出遺構 (図16)

縄文時代前期前葉住居址1、前期中葉住居址1、前期後葉住居址8、集石91、土壌103、中期後葉住居址2、平安時代後葉住居址10、土壌4、溝1 (笹沢浩)

4. 中阿久遺跡 (SNAC)

1) 位置 (図2、3、17、図版8-1)

本遺跡は諏訪郡原村大字阿久9325番地に所在している。遺跡は八ヶ岳の麓より西流する払沢川の支流と阿久川の浸蝕によって形成された居沢尾根と、阿久川、大早川によって形成された阿久の尾根にはさまれた、尾根より一段下の低地で、海拔912m～907mの西にゆるやかに傾斜する地域に広がっている。現状は桑畑、畑、水田である。附近の遺跡は、阿久川を隔てた北西の尾根上に阿久遺跡、さらに大早川をこえ柏木南遺跡、東南に隣接し居沢尾根遺跡、広原、オシキ、大石遺跡と続き、北に阿久C遺跡、東に一本松下、宿尻遺跡と縄文時代中期を中心とした遺跡が広がっている。本遺跡は中央道用地内の分布調査で縄文中期土器片を採集しており、居沢尾根遺跡と隣接しているところから新たに遺跡として登録された。

2) 調査の経過

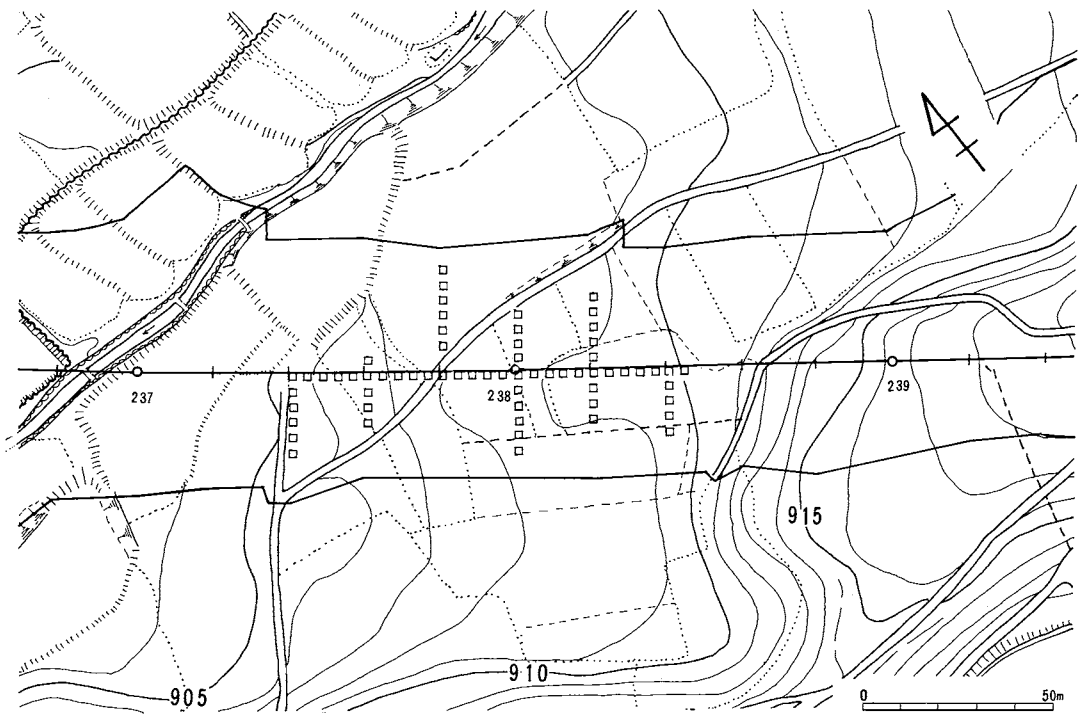
本遺跡の調査は昭和51年5月22日より開始した。グリッドの設定は、センターラインのSTA237+40を基点とし、20m毎にあるセンター杭を結び50ラインの基線とし2m間隔の基準方眼でグリッドを設定する方法をとった。調査区西から25区50m毎にA・B・Cの大地区を東に向かって設定し各大地区A～Yを横軸に、縦軸は最高37～60までがとれた。居沢尾根遺跡との境は判別し難いのでCC-50グリットまでを一応中阿久遺跡とした。調査は50ラインを1グリッドおきに、20m毎に直角に交わるグリッドを1グリッドおきに発掘し、遺構が検出された場合に周辺を拡張する方法を基本としたが出土遺物はほとんどなく、わずかに縄文中期土器片が10数点出土したのみである。63のグリッドを発掘したが遺構は皆無であった。5月29日、中阿久遺跡の調査を終了し居沢尾根遺跡の西斜面へ調査を継続していった。

3) 出土遺物 (図18)

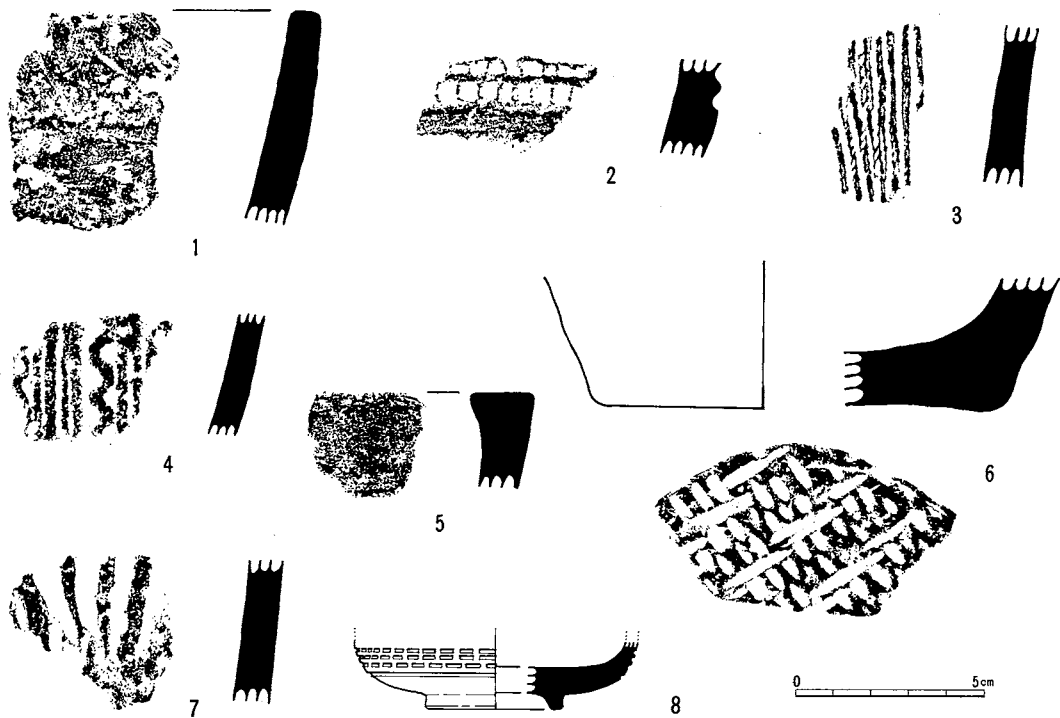
縄文土器12点、近世のものと思われる陶器底部片1点のみである。2・4は半截竹管文で、猪沢期、曾利Ⅰ式に該当する土器片と考えられ、3は捺糸文が施文されている。井戸尻Ⅰ式期のものと思われる。6はアンペラの圧痕が底部にのこり、土器表面に指圧痕が見られる。8は内面に鉄釉が、外面には透明の灰釉が施されている。

4) まとめ

出土遺物が極少であり、遺構も発見されない結果に終わったが、居沢尾根遺跡の西斜面下であり、出土遺物も居沢尾根遺跡と同時期のものであるため、おそらく本遺跡は独立した遺跡ではなく、居沢尾根遺跡のつながりとしてとらえた方がよいと思われる。
(山田瑞穂・青沼博之)



第17図 中阿久遺跡地形・発掘図(1:2000)



第18図 中阿久遺跡出土土器実測・拓影図(1:2)

5. 居沢尾根遺跡 (SIZB)

1) 位置 (図2、3、19)

本遺跡は諏訪郡原村菖蒲沢9854、10315番地に所在する。遺跡は八ヶ岳の麓から西流する弘沢川の支流と阿久川の浸蝕により形成された、ほぼ東西にのびる細長い尾根上の海拔916m～925mの内に立地している。附近の遺跡は、前述した、4. 中阿久遺跡に書かれているが、この附近にはほぼ同等高線上に各尾根毎に遺跡が分布しており、縄文時代の各時期を通じ、大規模な集落が営まれていたことが知れる。遺跡はちょうどサーブスエリアに属し、尾根のほとんどが用地内に含まれる。尾根は海拔923m～920m附近で一旦やせ尾根となり、915mラインまでやや広くなり、又やせ尾根となり西へなだらかに傾斜していている。尾根の北側は阿久川の浸蝕によりなだらかにけずり取られており、かつて水流があったのであろうか、東から北にかけ谷状の地形となって阿久川へ傾斜していている。南北にある水田面より比高差4～6mの尾根状台地である。

2) 調査の経過

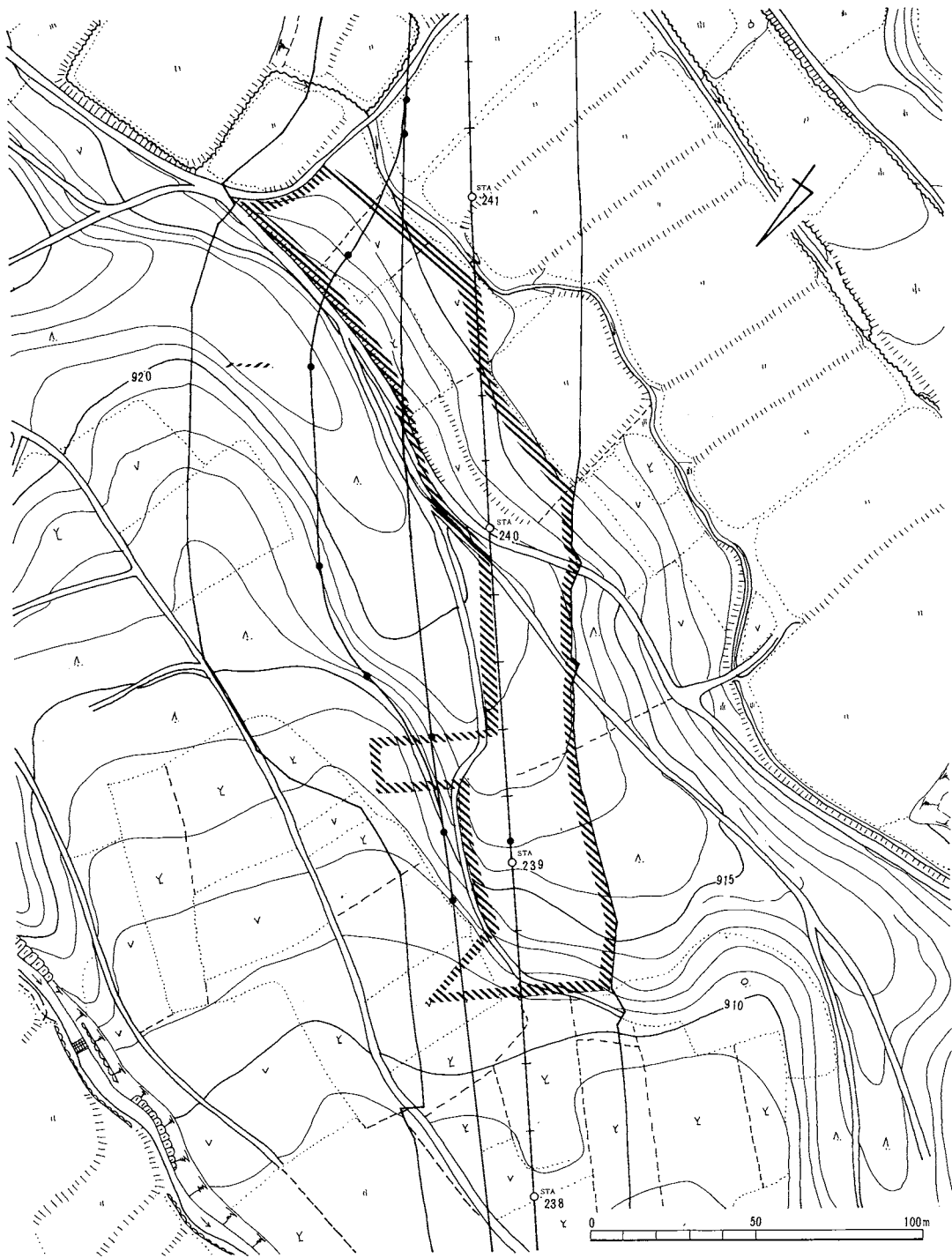
本遺跡の調査は西接する中阿久遺跡の発掘調査終了に引続き5月31日より着手した。グリッドは中阿久遺跡のグリッドを延長して設定し、西からC・D・E・F・G・Hの大地区が設定できた。本年度は用地の関係でセンターラインより西側(Bライン)部分の発掘が中心であるが、一部Aライン側まで及んだ箇所もある。中阿久遺跡でのグリッド掘りに引続き、尾根西斜面へと調査が進むにつれて出土遺物もその数を増し、斜面に土器捨場一ヶ所を確認、さらに尾根上に移るに従いBラインのほぼ全域に縄文時代中期住居址の落込みが確認され、9月1日より着手した。南斜面では平安時代の住居址が検出された。

11月9日、極寒の中で22号住居址の写真、測量が終了し、本年度分の調査を終了した。

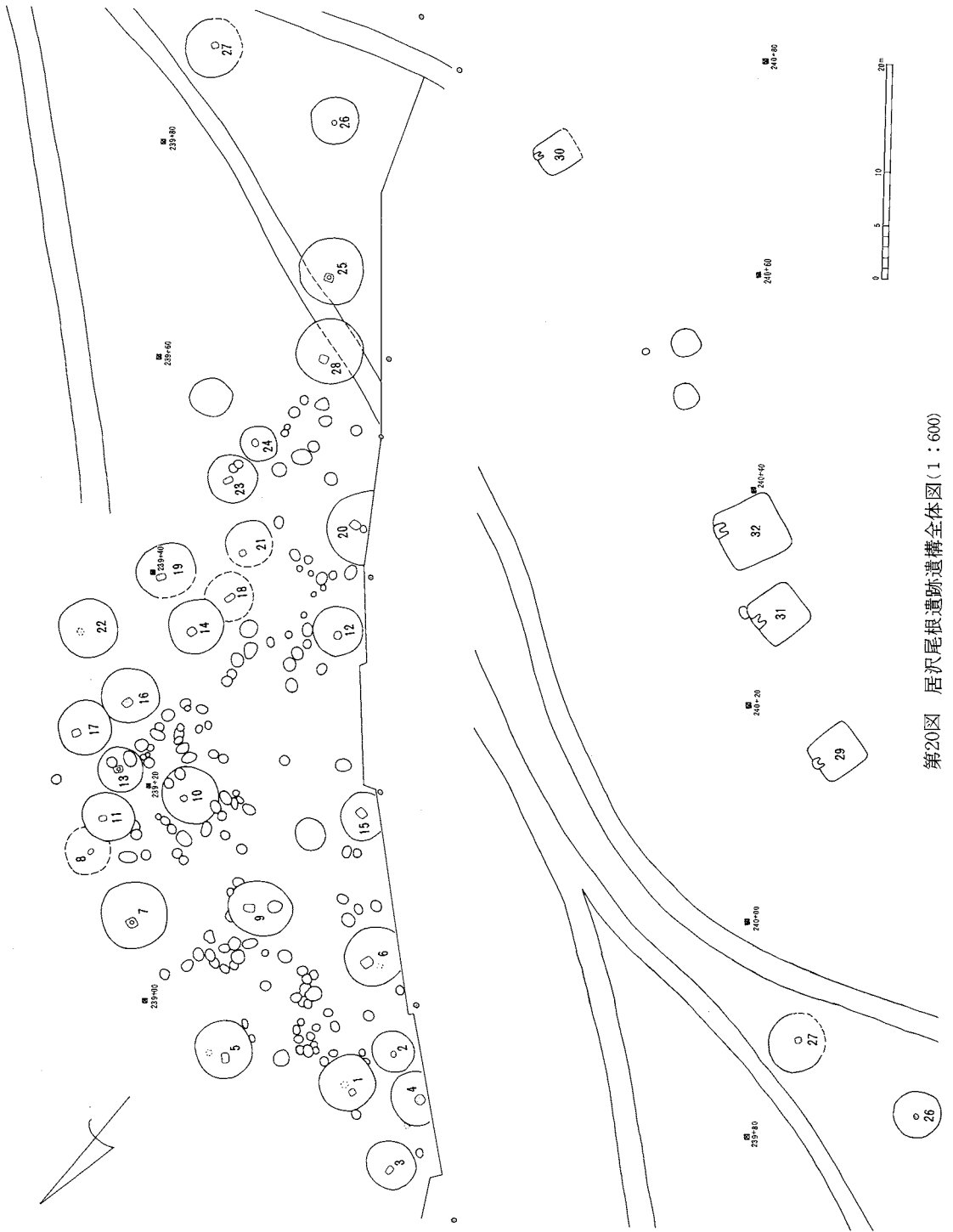
3) まとめ (図20)

図20に見られるように、尾根上部でほぼ円形に広がる縄文時代中期後半の住居址28軒、土壙141、を検出、南斜面では平安時代後期住居址4軒を検出した。縄文時代の住居址は、中期中葉の新しい時期の井戸尻Ⅲ式のものから、後葉の曾利Ⅱ式までのきわめて短い期間に営まれたものであることがわかった。さらに個々の住居址群の同時存在については細かな検討を加えておらず断言できないが、ほぼ円形に並ぶ、いわゆる環状集落の存在がうかがえる。来年度は尾根東方、Aライン側の発掘が予定されており、集落の立地、あるいは集落外における状態が確認される可能性が高い。本年度確認された集落は南西の方向へ広がりをもつことが推測できるが、用地外のため調査できないのは残念である。平安時代の住居址は、尾根東方へと広がっていくものと推測される。

(山田瑞穂・青沼博之)



第19図 居沢尾根遺跡地形・発掘図(1:2000) (斜線内は発掘調査部分)



第20図 居沢尾根遺跡遺構全体図(1:600)

6. オシキ遺跡 (SOKB)

1) 位置 (図2、3、21-1、図版9-1)

オシキ遺跡は諏訪郡原村大石10453番地に位置している。阿久川と裏沢川とに開析された丘陵は、原村菖蒲沢部落付近からさらに小河川に開析されて2つに分かれる。北寄りが居沢尾根遺跡のある居沢尾根で南寄りの尾根にあるのがオシキ遺跡である。ハレン沢という小河川に開析された南向き緩斜面に立地し、地形は良好といえる。ハレン沢を隔てた南側の尾根には大石遺跡・日向遺跡が控えている。

2) 発掘調査の経過と方法

本遺跡の調査方法は、まず全範囲にグリッドを設定し、遺構が検出された場合その周囲を拡張するという方法をとった。グリッド設定方法は調査団の基準に従い、基点は日本道路公団設定のSTA245+80を用いた。すなわち、基点から東京側へ50m毎にA～C区、小牧側へY区を設け、各区内は2m四方のグリッドに分割、グリッド名称は調査団の基準に従ってつけた(9ページ参照)。

測量は平板測量を用いた。測量の基準点は、日本道路公団設定の中央道センター杭・幅杭を利用した。方位は磁北を使用している。

4月19日 現地にテントを設営し作業を開始した。

4月22日 灰釉陶器片・土師器杯の完形品等の出土に続いて、B区T66グリッドを中心とした黒褐色土中の落ち込みを確認した。

5月6日 上記の落ち込みは、方形プランで東壁にカマドをもつ竪穴住居址であることを確認した。これを第1号住居址とする。カマドにかかるように東西方向のセクションベルトを設ける。

5月7日 第1号住居址覆土上層より焼土ブロックを検出する。壁の確認は困難で、若干黄色がかった黒褐色土を壁面と考えた。ロームマウンド1号・2号を確認する。

5月10日 ロームマウンドの調査は次の順序で行なう。まず検出されたマウンド部分を四分分割して断面を観察・実測する。続いてマウンド部分を除去し、落ち込み部分を四分分割して断面を観察・実測する。1基のロームマウンドで3～4日を必要とし、マウンド部分と落ち込み部分の担当者が変更される等、若干の不手際があった。第1号住居址、遺物の出土地点を実測しながら取り上げ、床面・カマド・柱穴等を検出、続いて住居址の実測、カマドの実測を行なう。

5月20日 作業を終了し撤収、中阿久遺跡の調査準備をする。

3) 土 層

STA245+80以北ではロームが地表に露出している。遺跡の中央部 STA246+00 から STA246+40 にかけては、北側の尾根もしくは菖蒲沢部落のある丘陵から流出したかと思われる礫混じりの黒色土が深く堆積する。県道とその北側の農道とに挟まれる付近は、耕作土・黒褐色土・ロームの順に一定した堆積状況を示す。

4) 遺 構 と 遺 物

ア. 縄文時代の遺物 (図24~28、図版12・13—6・7)

本遺跡において縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は、土器・石器・石製品がある。土器は前期を主に早・中期に属するものも若干ある。石器・石製品は量は少ないが器種は多様である。遺物は県道寄りから多く出土し、中央部から北側にかけては少ない。

縄文時代早期の土器(図24—11~18)には押型文土器と繊維土器がある。押型文土器は11と12である。11は口縁部に押圧痕を残しネガティブな楕円文が押捺される。胎土に多量の石英を含み、黒褐色で焼成は悪い。12は形が崩れた楕円文で、胎土は良質で赤褐色、焼成は良い。両者とも細久保式土器に類する。繊維土器は11点出土、13~18がそれぞれである。13は微量の繊維を含み爪形文を施してある。粕畑式に類似した土器である。14・16・17・18は繊維を多量に含み、外面には斜方向の条痕文が施され、内面にも同一工具の条痕文がみられる。褐色或いは黒褐色で断面は黒灰色を呈し、胎土中には長石・石英粒が多量に含まれ、器厚は9~12mmである茅山上層式に属するものだろう。

縄文時代前期の土器は最も豊富である(図24—19~31、25、26—66~84)。19~23は繊維を含まず、半截竹管による数条の平行沈線を用いて、三角形・菱形の構図を描いている。褐色~黒褐色で胎土に多量の砂粒を含む。有尾式に類すると思われる。24~27は神ノ木式と同一の施文がみられるが、明褐色で焼成は良く胎土には長石・石英粒を多くふくむ点や施文用具の櫛の用い方は後述する諸磯A式と共通しており、どちらも判断できない。48~50は平口縁で、口縁部には半截竹管による沈線文を施す。同様の沈線文は胴部にも水平又は斜方向に強く施されるため、器面が荒くなっている。若干薄手で胎土は良くしまり少量の繊維を含む。黄褐色~黒褐色で焼成は良好である。黒浜式土器に含まれるだろう。28~31は櫛描沈線文と竹管による円形刺突文を組み合わせた構図で施文しており、諸磯A式に比定できよう。32~47は諸磯B式に類するものと思われる。32~41は口縁部に半截竹管やへら状工具の刺突・押し引き文を施し、口唇部上にも同様工具の押し引き文(32・37)や押捺文(38・40)を加えている。34は焼成前に2個の孔を穿っている。42~47は地文に縄文を施し、その上に半截竹管による平行沈線文や横位の条痕状の文様を加えている。いずれも胎土は砂質で、黒褐色を主に黄褐色~赤褐色を呈し、焼成は並みである。43・44は薄手で特に焼成が良い。

縄文を施した土器には2種類ある。60~63は平口縁で平底、粗く大きな単節斜縄文に加えて、図示し得

ないが、ヘラ状工具による横位の条痕が加えられるものもある。器面には煤状炭化物が付着し、内面はよくナデられている。黒褐色で微量の繊維を加えた胎土はしまりも良く良質である。64～84はわずかに外反する平口縁を有するものが多く、一部に口唇部に縄文(71)・竹管による刺突文(67)・同押捺文(73)等が加えられている。おそらく器面全体に縄文が加えられたと思われるがその多くは単節斜縄文で羽状縄文が認められるものは少ない。縄文原体の撚りは固く、横位に回転押捺している。少数だが竹管による押捺が加えられるものもある。赤褐～黒褐色で胎土には長石・石英を多く含む。82・84には微量の繊維が、67には多量の金雲母がそれぞれ含まれる。器厚は6～9mmである。一部に煤状炭化物が付着している。黒浜式～諸磯B式土器の胴部と考えられるものが多いが、諸磯A・B式に比定できそうなものが大半を占める。

他地域からの搬入もしくは他地域の模倣と思われる土器も若干ある。51・52は少量の繊維を含み、貝殻による連続爪形文を施す。黄褐色で胎土中には最大4mmの径をもつ石英粒が含まれる。器厚は6mm、焼成は良い。東海地方に類例が求められよう。53・55～59はいずれも北白川下層Ⅱ式に類似する。53・55・56は縄文を地文としたり或いは無文であったりするが、横位に一系列の貝殻腹縁圧痕文を施す。黒褐色で焼成はよく器厚は4～6mmと薄い。57～59は底部付近が強く外へ張り出す器形で(58)、口縁～胴部にかけて全面に単節斜縄文を浅く施している。54は単節斜縄文を丁寧に加えている。明かるい褐色で胎土はよくしまり、焼成も良好である。関西系の土器であろう。

縄文時代中期の土器は7点出土した(図26—85—91)。85～88は半截竹管を用いて渦巻状や直線状の構図を描く。黄褐色～褐色で胎土に砂粒を含む。中期初頭に位置づけられよう。89・90は竹管文による区画内に縄文を施しており赤褐色を呈する。中期後葉に属する。91は無文の浅鉢で黒褐色を呈し器厚は6mm程である。詳細な時期比定は困難である。

石器は34点出土した(図27・28、表10)。中でも特徴的な5点について説明する。

10はキメの細かい安山岩製のいわゆる特殊磨石である。断面三角形であるが三面とも研磨される。また、角も丸い外湾面を呈する程まで研磨を受ける。この為断面形は隅丸の三角形とでも言うべき形態となっているが、これはこの種の石器に一般的にみられる形態である。器体の約半分は欠損しているが、残存する先端部には敲打痕が残る。11はキメの荒い安山岩製の凹石であるが、凹みに加えて敲打痕を有する。10同様、断面三角形の石材の稜線部分が丸く外湾する形態となっている。特殊磨石と同形態だが、石質が荒いためもあつてか研磨の痕跡が確認できない。凹みは平坦な面に2ヶ所ずつ並んでいるが各々の径・深さはまちまちである。敲打痕は両先端部と外湾面2ヶ所、計4ヶ所に残るが、幅広い外湾面に顕著に残る。13は輝岩製の石製品で、表面及び側面は丁寧に研磨されるが裏面は研磨痕はない。この種の石材がよく用いられる乳棒状石斧の刃部を再加工したもの、もしくはその未成品ではなからうか。14は軟質の安山岩製石製品で全面が研磨され方形であったと推測される。外縁部分より中央部分の方が薄くなっている。18はチャート製スクレイパーの一種と考えられる。三角形でそのうち一辺は外湾、残り二辺が内湾し、いずれにも刃がつけられている。3つある先端のうち2つは尖り、1つは丸くつくられている。

イ. 平安時代の遺構と遺物

ア) 第1号住居址(図21—2、22—1・2、27—1、29、図版9—2、13—1～5)

遺構 調査範囲の南西端近く、大石遺跡寄りに存在する竪穴住居址である。比較的平坦な地形であるが、西側に比高10m程の小山塊があり、そこから流入した土砂が耕作土～黒褐色土に若干認められた。

灰釉陶器瓶(図29-17)と土師器杯(図29-3)の出土により遺構が予測され、黒褐色土中で本址を確認した。南北4.35m、東西4.60mの隅丸方形プランで主軸方向はN79°Eである。

床面は黒褐色土中で住居の中央部がやや堅緻、周囲は軟弱であった。カマドの南側にはこぶし大から人頭大程度の礫が多数みられたが、それらのうち幾つかが床面の一部を破壊しており、意図的に配されたものではなく住居廃棄後に転落したか投入されたものであろう。壁も黒褐色土中につくられるが、こぶし大～小児頭大の礫を多量に含んだ土層のため、それらの礫が壁面に突出している。壁の傾斜は緩やかで、壁高は4辺とも19～22cmである。柱穴は4ヶ所検出された。P₁はやや四角ばっており、78×60cm、-38cm、P₂～P₄は円形で、P₂は径62cm、-39cm、P₃は径40cm、-19cm、P₄は径45cm、-11cmをそれぞれ測る。P₂の覆土中からは本址覆土中に見られたと同様の焼土が検出された。カマドは石組粘土カマドで、東壁の中央やや南寄りに位置する。壁に対して直角ではなく、やや北東向きに斜めに構築されている。カマド左袖は北側からの圧力を受けて内側へ大きく崩れており、袖石に使用されたとと思われる石が床面に転がっていた。焼土はカマド内にはごく少なく、焚口付近に若干みられた程度である。

屋外施設は検出されなかった。

遺物 出土遺物は土器と石器があるが石器は覆土中から出土した。

土器には土師器と灰釉陶器がある。土師器には杯A・B・C各5点、黒色土器A・B各1点、甕C2点があり、灰釉陶器には碗5点、瓶1点がある。又、この他器種分類不能な小破片も出土しているが量はさほど多くない。このうち図29-20はカマド右袖上に密着して出土した。1・4・16・21はカマド内から出土したが、1・4は床面出土の破片と接合した。尚、4・16には焼土の付着が著しく破損後に焼成を受けているらしい。土師器杯では、2は覆土中の遺物であるが、ゆがみが激しい。甕では、13と16は胎土やハケ目等が極めて似ており同一個体の可能性がある。又、16の底部にはヘラによって×印が刻まれている。灰釉陶器で目立つのは17の瓶で、成形、焼成、胎土等特に良好であり、猿投窯の製品の可能性がある。

石器は先に記した通り覆土出土の図26-1が1点あるのみである。器種名称をつけられずにいるが、安山岩製の平丸石を素材とし、表裏の平坦面の器表が薄く剥落している。又、全面に漆黒の煤状炭化物が付着しているが、器表剥落以前にも以後にも付着したことが観察される。

イ) 遺構外遺物(図29-11・15)

土器のみ出土している。第1号住居址の南側10m程の地点の黒褐色土中より土器がややまとまって出土した。土師器の杯B・C各2点、黒色土器A3点(図29-11)、B1点、甕B1点(図29-15)、灰釉陶器片、四耳壺片等がそれであるが、土器廃棄場所といえる程の量ではない。このほか、表面採集遺物の中では、皿・瓶等の灰釉陶器片がみられた。

ウ. ロームマウンド

本遺跡からは7基のロームマウンドが検出された。土層の堆積状態はロームマウンド4号を除いてほぼ一定であるため、代表的なロームマウンド1号についてのみ記述した。他については実測図を参照されたい。遺物についてはその大半がマウンドを検出する際に出土したもので、マウンド周囲にベルト状に落ち込んでいる黒色土中から出土したものも若干あるが、マウンド自体に包蔵されてはならず、全てロームマウンドには共伴しないものと判断した。

ア) ロームマウンド1号 (図22-3、27-2・3、28-15)

マウンド部の中心と落ち込み部の中心とは少々ずれているが、検出面で見れば、マウンド部の周囲に落ち込み部がめぐるといふ配置である。マウンド部は検出面より40~45cm盛り上っており、中心にあるロームブロックと、その周囲を包み込むような形の褐色土とから形成されている。325×120cmの不整楕円形で上面は平坦である。落ち込み部は350×290cmの楕円形で深さ60cmを測る。マウンド部の中心となったロームブロックが、そのまま落ち込み部底部にまで及んでおり、その周囲もマウンド部から連続する褐色土で埋まっている。褐色土は落ち込み部の壁に沿ってクサビ状に入っている。落ち込み部の底面には小さな落ち込みが2ヶ所認められた。落ち込み部上面から石器が3点(図27-2・3、図28-15)出土した。このうち3は先端を敲打・磨耗した敲打器と思われる。

イ) ロームマウンド2号 (図22-4、図版10-2)

マウンド部が落ち込み部の東側に偏っており、幾分ずれたロームマウンドである。マウンド部は375×180cmの瓢箪形で、検出面から25~40cm盛り上がる。落ち込み部は中央がややくびれた不整形で、400×225cm、深さ52cm、底面には径70cm程の落ち込みが3ヶ所残されている。

ウ) ロームマウンド3号 (図23-1)

マウンド部は落ち込み部のほぼ中央にあるが心もち東側にずれている。マウンド部は260×180cmの不整楕円形で、検出面から30cm程盛り上がる。落ち込み部は365×280cm、深さ88cmの不整楕円形である。

エ) ロームマウンド4号 (図23-2)

マウンド部は東側に偏在し、一部は落ち込み部からはみ出す程ずれている。土層は他のロームマウンドと異なり、各土層がブロック状に堆積している。マウンド部は315×160cmの長楕円形で、検出面から26cm程盛り上がる。落ち込み部は440×360cm、深さ65cmの楕円形を呈する。

オ) ロームマウンド5号 (図23-3、24-1~5、図版11-1)

ロームマウンド6号と切り合って検出されたが、その新旧関係は把握できなかった。マウンド部は落ち込み部のほぼ中央に在るが幾分か東に偏っている。長楕円形で335×160cm、検出面から34cm程盛り上がる。落ち込み部は400×315cm、深さ90cmの不整形である。周辺から縄文時代の土器(図24-1~5)が出土した。

カ) ロームマウンド6号 (図23-3、24-6~8、28-16、図版11-2)

ロームラウンド5号と切り合っているが新旧関係は把握できなかった。マウンド部は落ち込み部のほぼ中央だがやはり心もち東に偏る。マウンド部は275×185cmの長方形で検出面から27cm程盛り上がる。落ち込み部は、395×310cm、深さ85cm、不整楕円形を呈する。周辺からは縄文時代の土器(図24-6~8)と石器(図28-16)が出土した。

キ) ロームマウンド7号(図23-4、24-9・10、28-17)

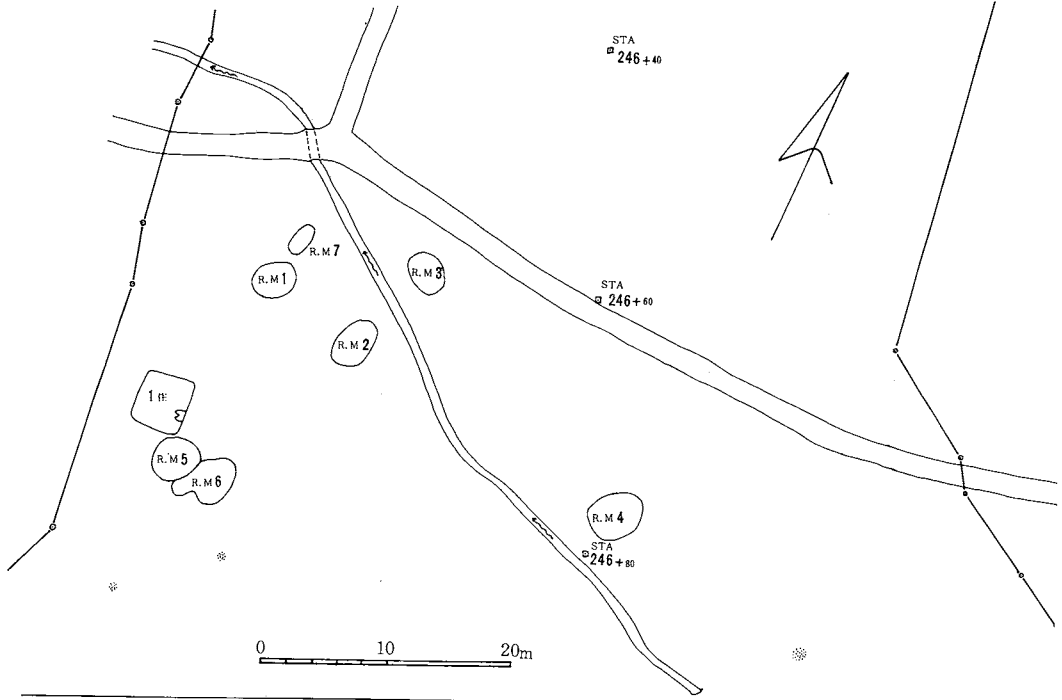
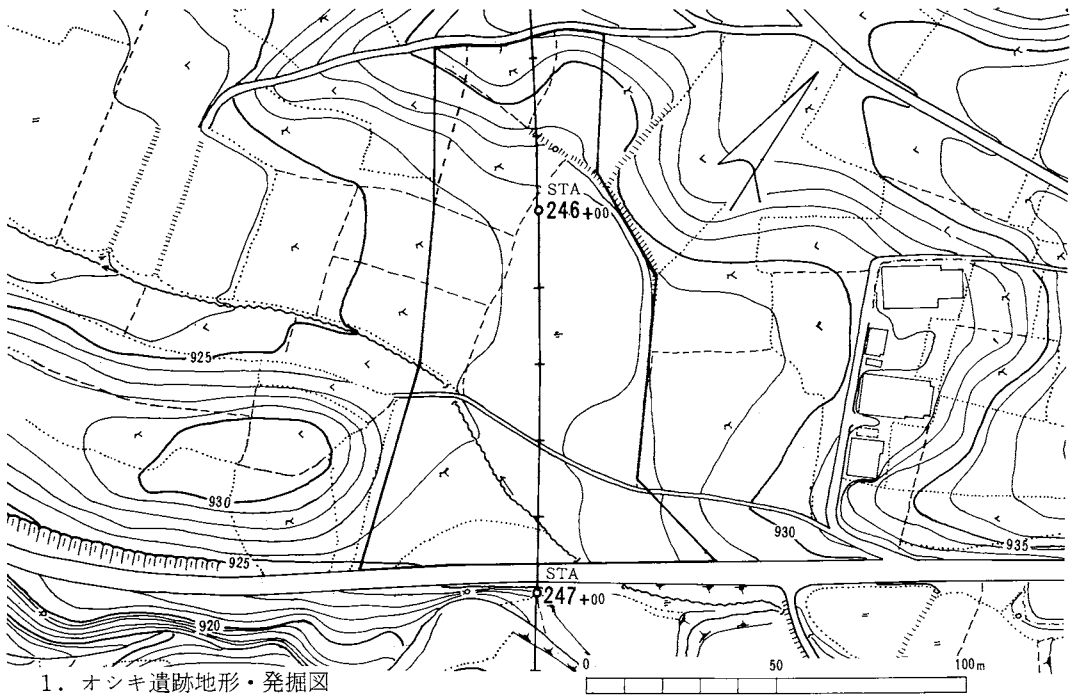
マウンド部の検出に留めたため、マウンド部と落ち込み部との関係は不詳である。マウンド部は中央がややくびれた長楕円形で270×140cm、検出面から27cm程盛り上がる。マウンド部上面及び周囲より縄文時代の土器(図24-9・10)と石器(図28-17)が出土した。

5) ま と め

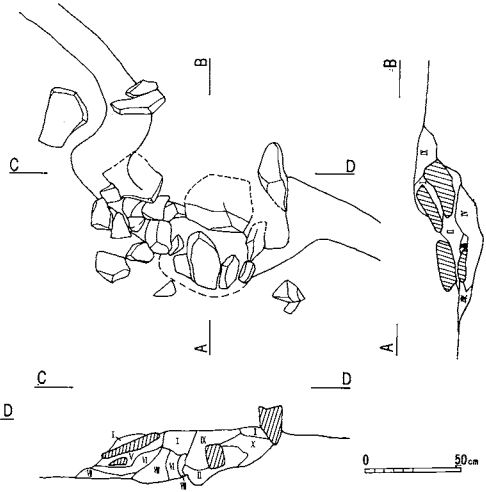
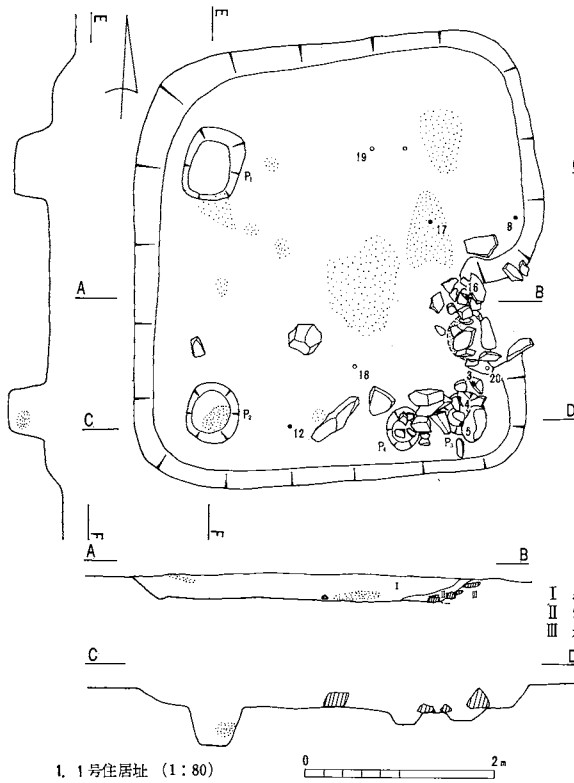
今回の発掘調査では、縄文時代前期中葉を中心として縄文時代早期から中期までの土器・石器類と、平安時代後期の住居址一基、それとほぼ同時期の土器片若干、時期不詳のロームマウンド7基を検出することができた。

縄文時代については、遺構は検出できなかったが、隣接する大石遺跡の関連から本遺跡を考える必要がある。また、平安時代の住居址に関しても、1軒のみ単独で存在したとは考え難く、その中心を大石遺跡に置いた集落の一部が川を隔てたこのオシキ遺跡にまで及んでいたと考える方が妥当であろう。ロームマウンドについてみると、結果的にはすべて落ち込み部の上にマウンド部がのっていたのであるが、当初は、ロームマウンド3号を除いてマウンド部が片寄った側に見られ、そのため反対側は黒色土の落ち込んだ部分が明確に検出されるという状態であった。遺物については前述の如くであり、遺構としてのロームマウンドからの出土とは言い難く、むしろ自然的影響による流れ込みの可能性が強い。

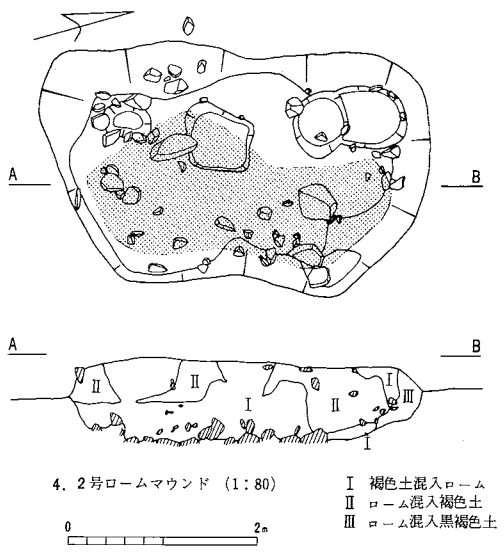
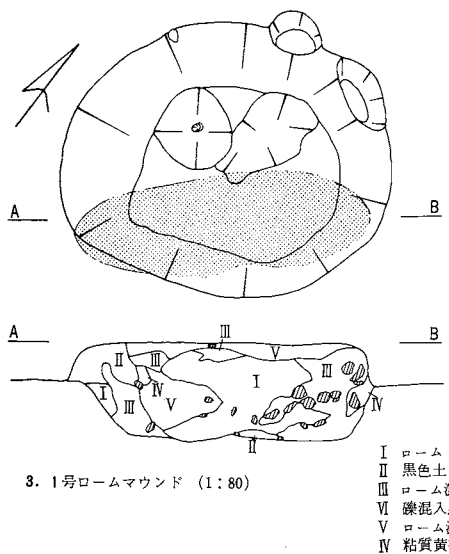
また、県道寄りの地区、耕作土下の土層中より焼土が3ヶ所検出されたのであるが、それは縄文時代の包含層である黒褐色土より若干浅いレベルであり、なんら遺物を伴っていない。やや傾斜地、あるいは凹地での短時間の火気の使用の痕跡なのであろうか。(高桑俊雄)



第21図 オンキ遺跡地形・発掘図(1:2000)および遺構全体図(1:600)

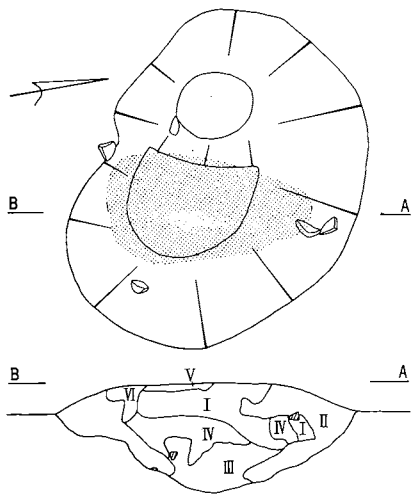


- I 黒褐色土
- II 焼土炭化物混入褐色土
- III カマド袖
- IV 黒褐色土
- V ロームブロック粘土混入褐色土
- VI ローム・焼土・炭化物混入黒褐色土
- VII 黒褐色土
- VIII ローム混入
- IX 炭化物混入黒褐色土
- X 焼土炭化物混入褐色土



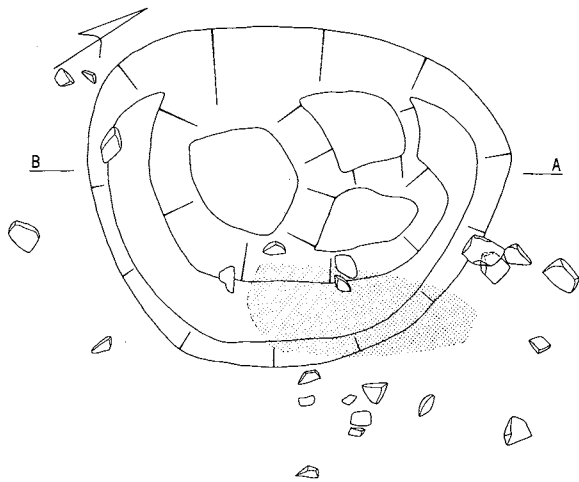
- I ローム
- II 黒色土
- III ローム混入褐色土
- IV 礫混入黒褐色土
- V ローム混入黒褐色土
- VI 粘質黄褐色土
- I 褐色土混入ローム
- II ローム混入褐色土
- III ローム混入黒褐色土

第22図 オシキ遺跡1号住居址, ロームマウンド1・2号実測図(2 1:40, 他は1:80)



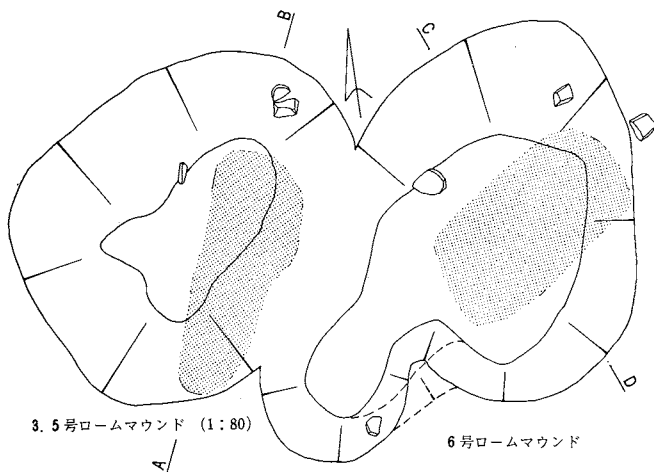
1. 3号ロームマウンド (1:80)

- I 礫混入ローム
- II ローム混入黒色土
- III ローム混入粘質黄褐色土
- IV ローム混入褐色土
- V ローム混入黒褐色土
- VI 礫混入黒色土



2. 4号ロームマウンド (1:80)

- I 黄褐色土
- II 黄黒褐色土
- III 明褐色土
- IV 黒色土

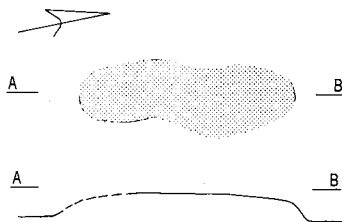
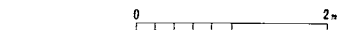


3. 3.5号ロームマウンド (1:80)

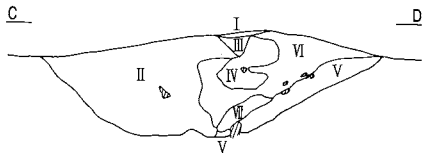
6号ロームマウンド



- I 黒色土
- II ローム混入黒褐色土
- III ローム混入黒色土
- IV ローム
- V 礫ローム混入褐色土
- VI 黒褐色土
- VII 粘質黄褐色土

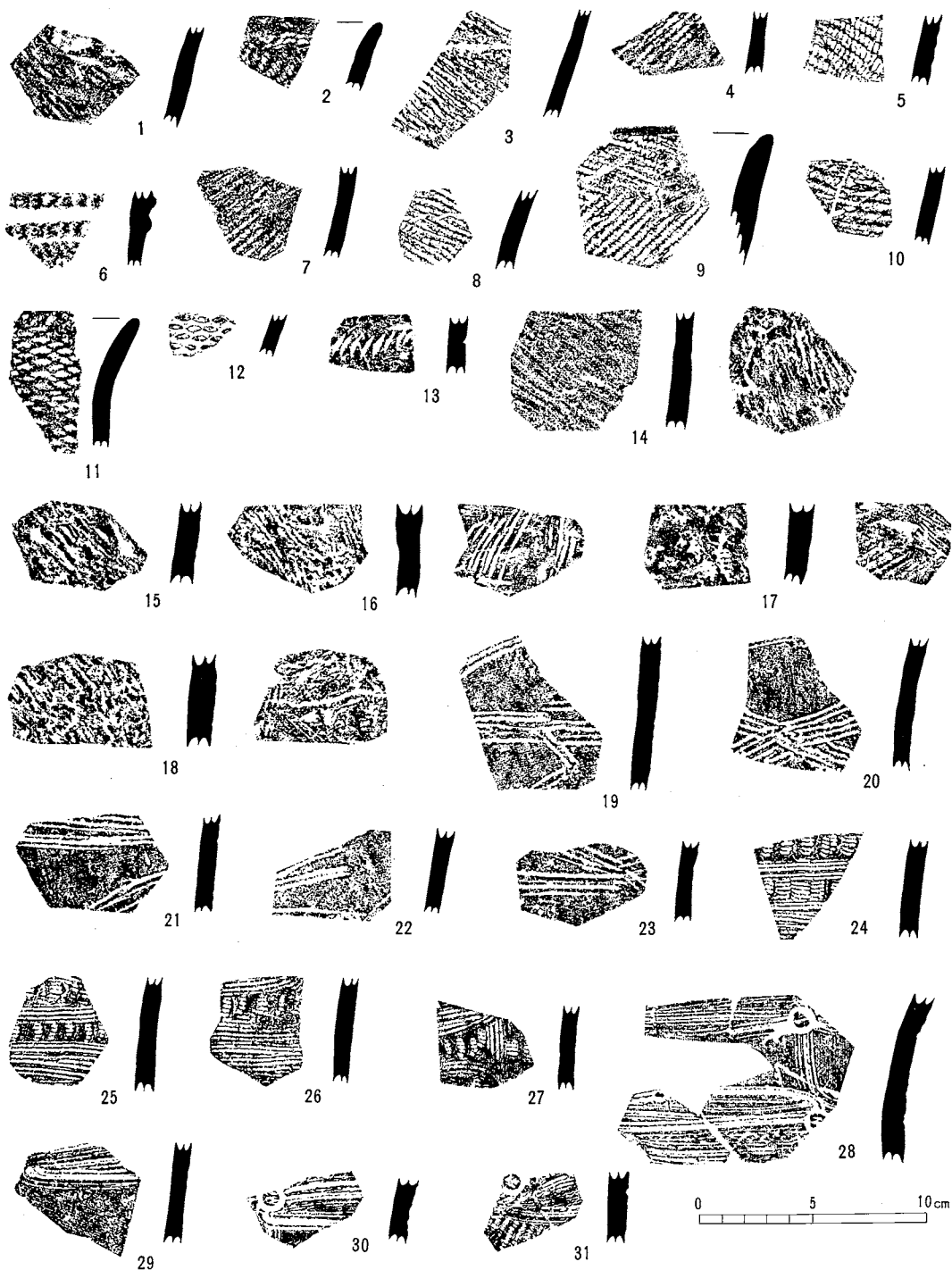


4. 7号ロームマウンド (1:80)

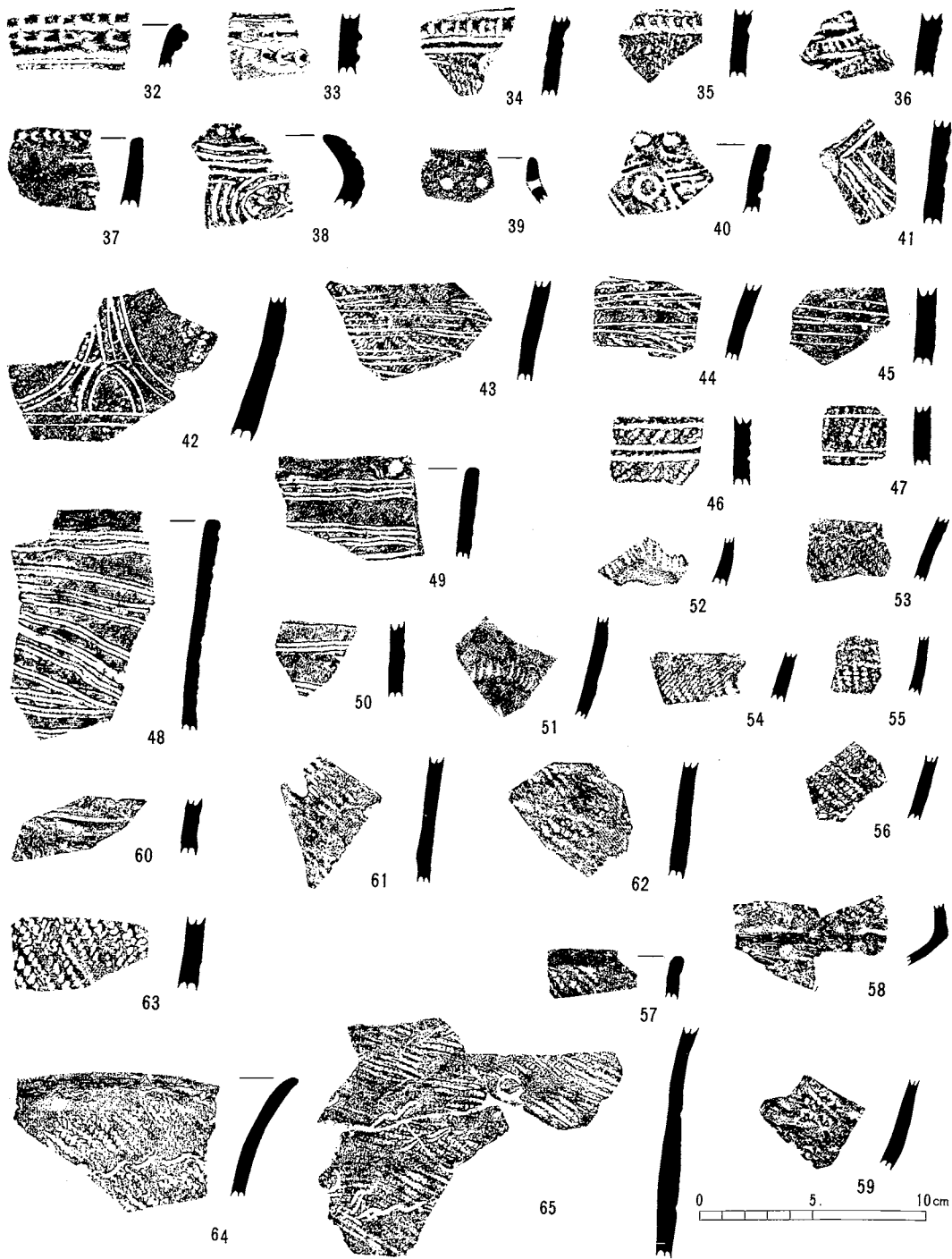


- I 礫混入黒色土
- II 黒色土
- III 礫混入黄褐色土
- IV ローム
- V 礫黒色土混入ローム
- VI ローム混入黒褐色土
- VII ローム混入褐色土

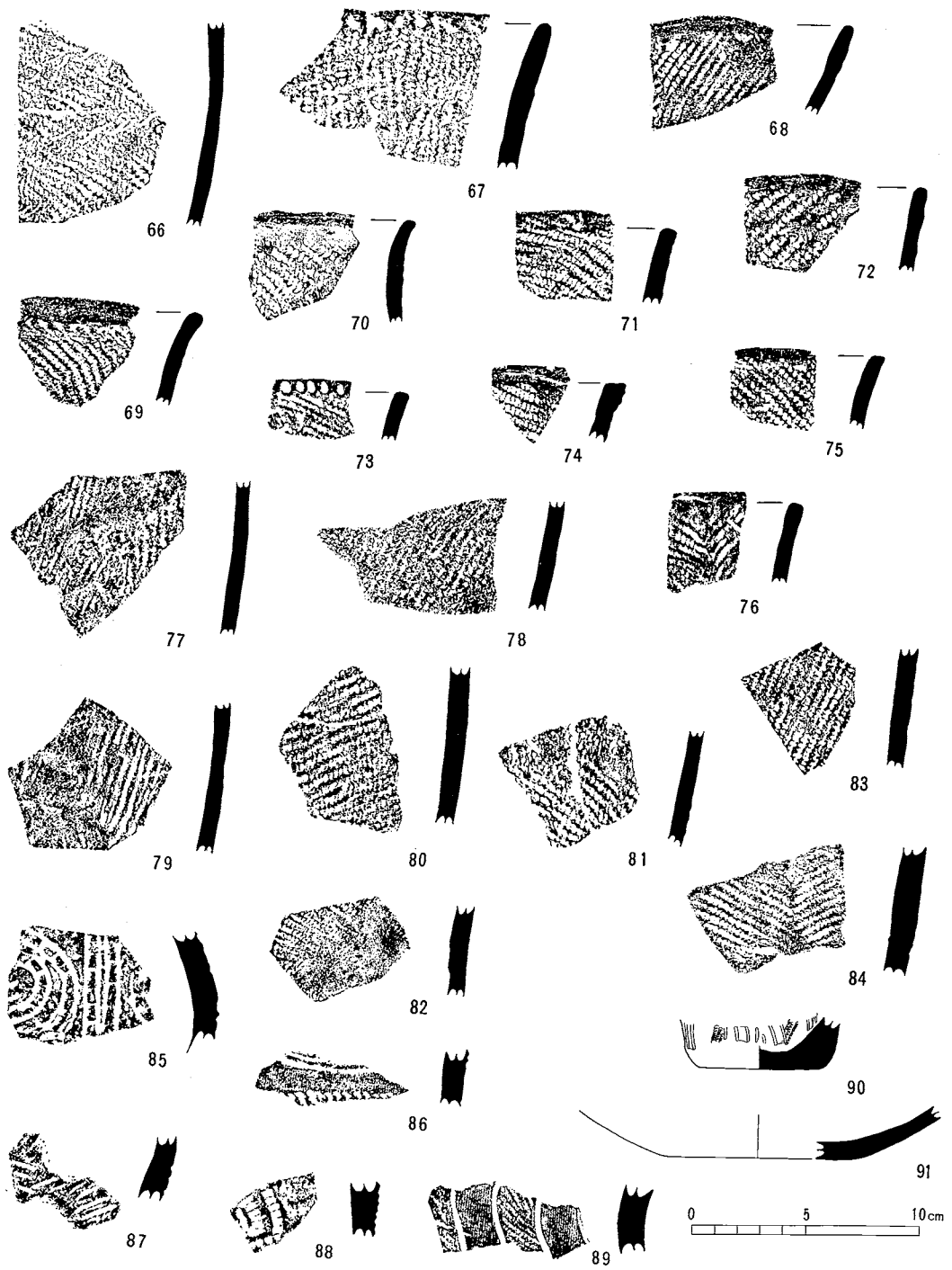
第23図 オシキ遺跡ロームマウンド3~7号実測図(1:80)



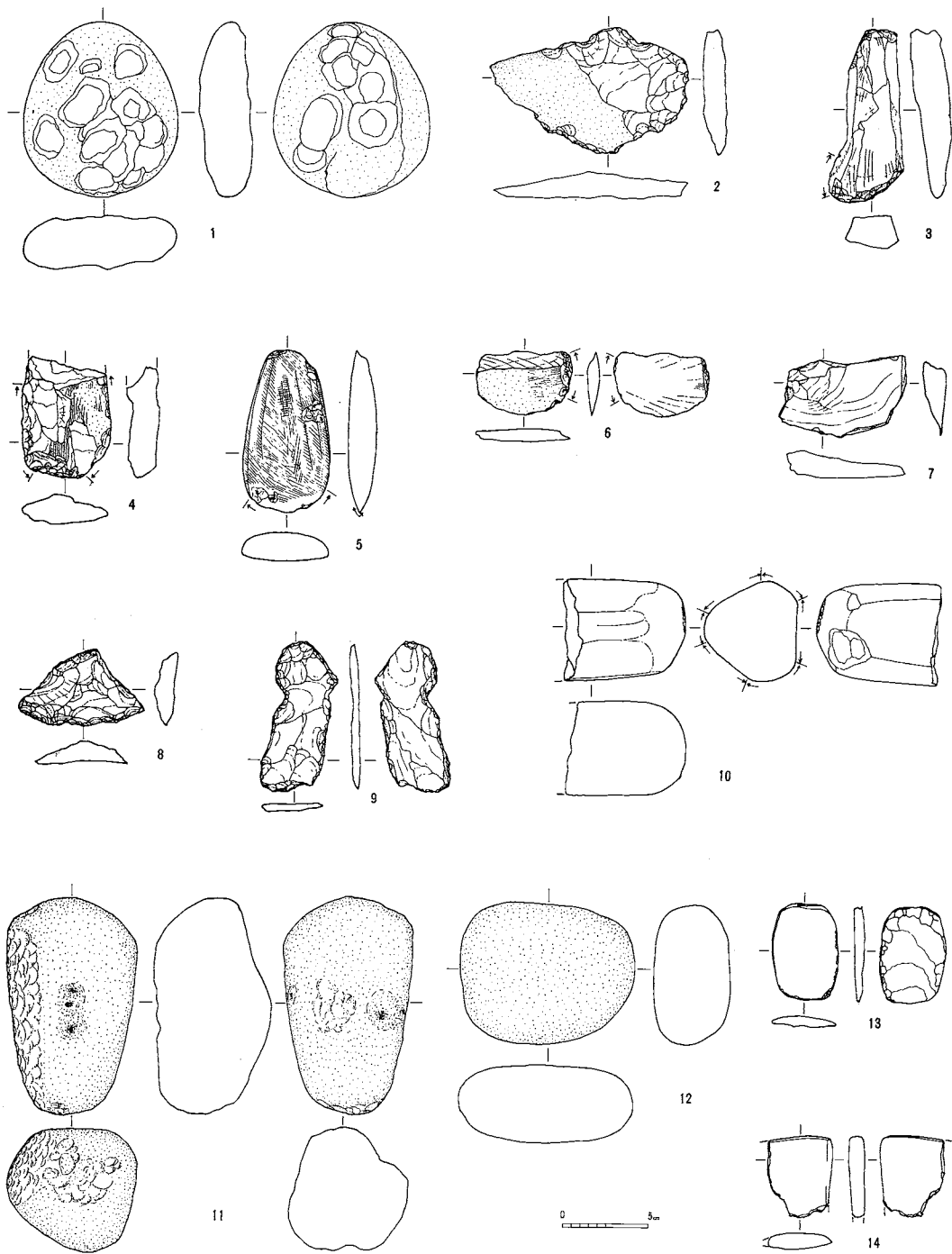
第24図 オシキ遺跡ロームマウンド5～7号周辺出土土器拓影図(1:3), 遺構外出土土器拓影図(その1)(1:3)〈1～5 R・M5号周辺, 6～8 R・M6号周辺, 9・10 R・M7号周辺, 11～31 遺構外〉



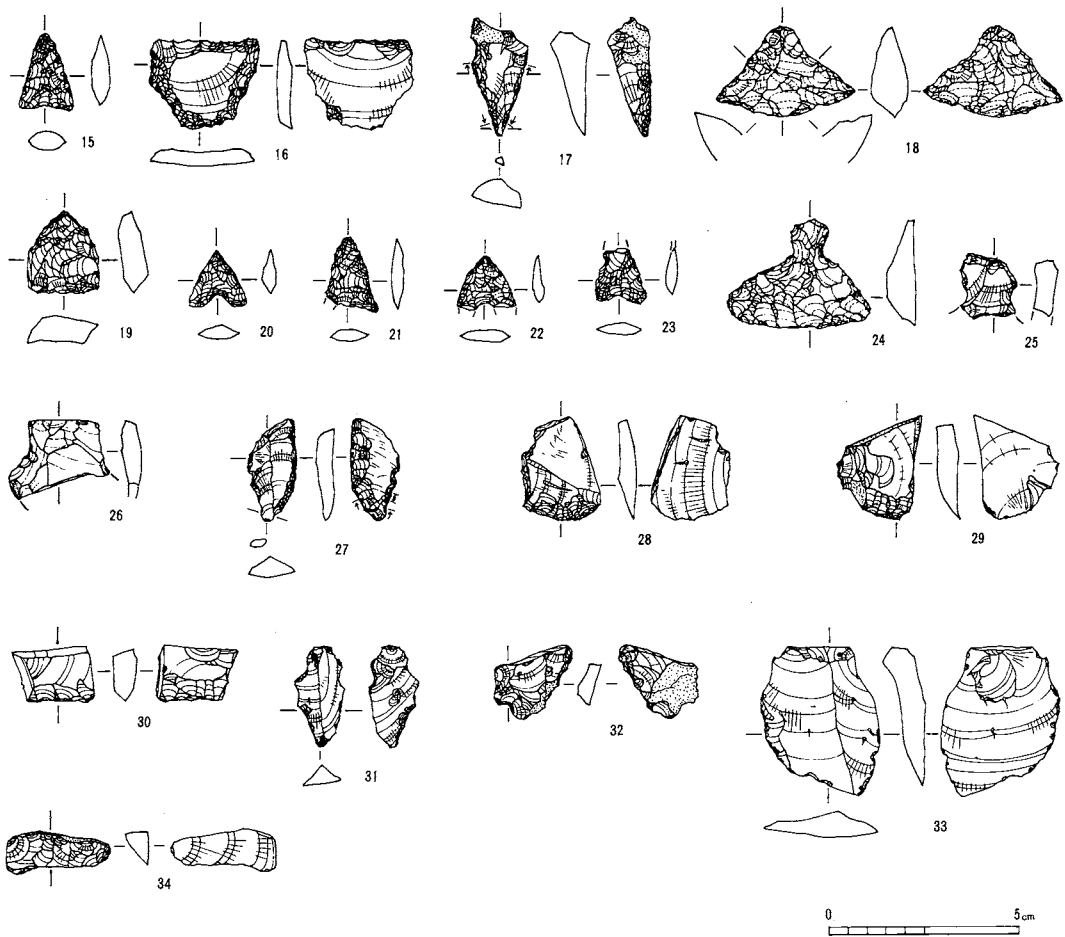
第25図 オシキ遺跡遺構外出土土器拓影図(その2)(1:3)



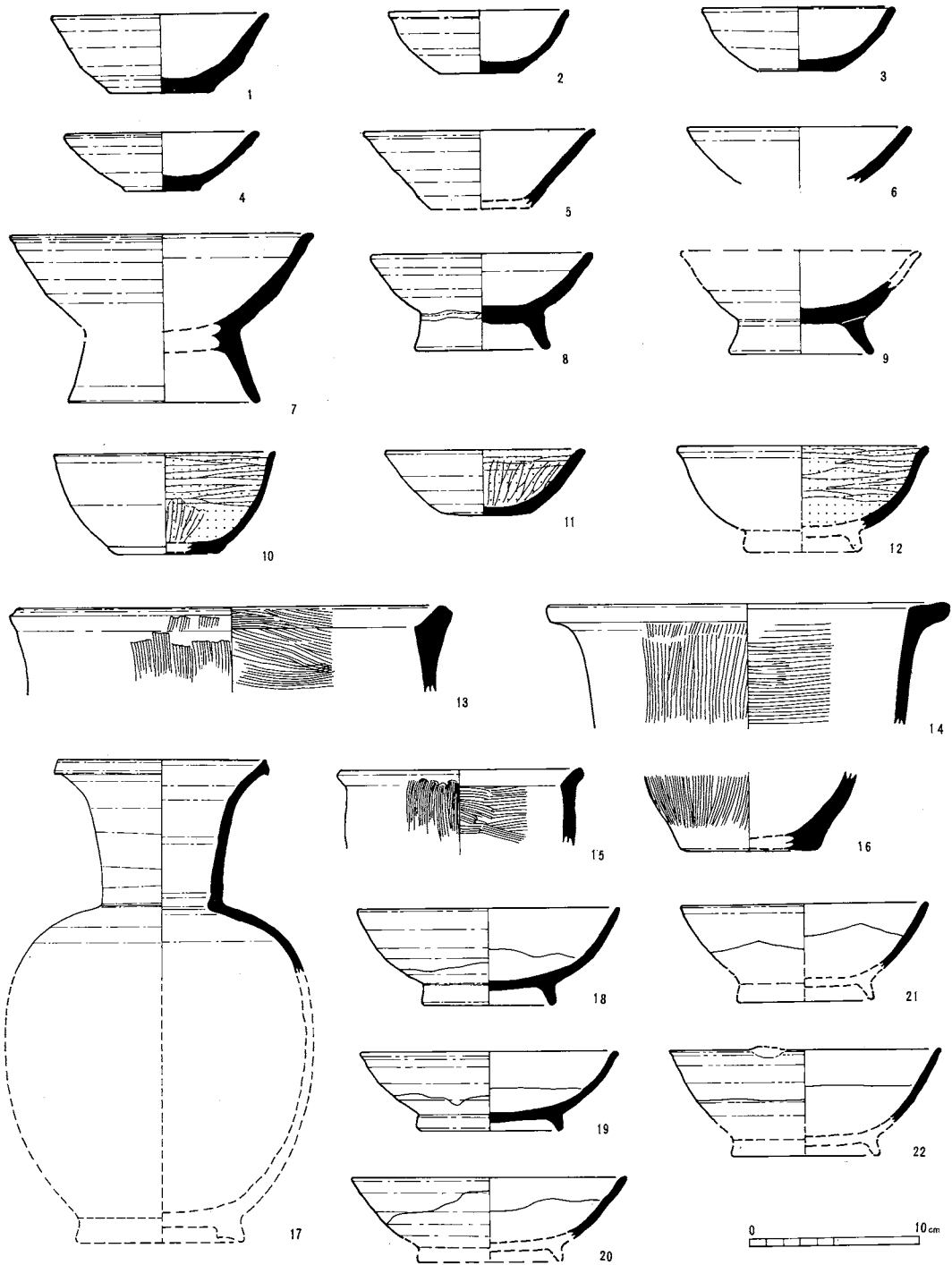
第26図 オシキ遺跡遺構外出土器実測・拓影図(その3)(1:3)



第27図 オシキ遺跡1号住居址，ロームマウンド1号出土石器実測図(1：4)，遺構外出土石器実測図
 (その1)(1：4) 〈1 1号住居址，2・3 R・M1号，4～14 遺構外〉



第28図 オシキ遺跡ロームマウンド6・7号出土石器実測図(1:2), 遺構外出土石器実測図(その2)(1:2)
 〈15 R・M1号, 16 R・M6号, 17 R・M7号, 18~34 遺構外〉



第29図 オンキ遺跡1号住居址，1号住居址周辺出土土器実測図（17 1：8，他は1：4）

第10表 オシキ遺跡出土石器一覧表

挿 番 号	出土地点	器 種	長 さ (cm)	幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 さ (g)	石 質	備 考
27-1	1号住居址	?	10.2	9.1	3.3			
27-2	R・M1号周辺	石 匙	7.3	12.5	1.5	130	輝緑岩	刃部の一部破損?
27-3	R・M1号周辺	敲打器	10.2	4.4	2.2	110	緑泥片岩	
27-4	その他	打製石斧	(6.9)	5.1	1.8	(90)	緑泥岩	基部破損
27-5	その他	磨製石斧	9.5	4.9	1.7	130	蛇紋岩	完形
27-6	その他	剥片石器	3.7	5.5	0.7	20	緑泥岩	打製石斧からの転用?
27-7	その他	剥片石器	4.6	7.5	1.4	47	粘板岩	使用痕のみ見られる
27-8	その他	スクレパー	4.4	7.3	1.2	41	緑泥片岩	打製石斧からの転用
27-9	その他	石 匙	8.9	3.7	0.5	27	緑泥岩	完形
27-10	その他	特殊磨石	5.4	(7.1)	5.6	(310)	安山岩	約半分欠損
27-11	その他	凹 石	12.9	7.5	7.5	710	安山岩	
27-12	その他	磨 石	10.2	8.4	4.5	600	安山岩	完形
27-13	その他	石製品	5.7	3.8	0.7	21	輝 岩	
27-14	その他	石製品	(4.7)	3.9	0.9	(19)	安山岩	欠損品
28-15	R・M1号周辺	石 鏃	2.0	1.9	0.5	1.0	黒耀石	片脚欠損
28-16	R・M6号周辺	剥片石器	2.5	2.8	0.4	3.6	黒耀石	完形
28-17	R・M7号周辺	石 錐	3.1	1.5	0.9	3.1	黒耀石	完形
28-18	その他	スクレパー	2.4	3.6	1.0	5.8	チャート	完形
28-19	その他	石 鏃	2.1	1.9	0.7	3.0	黒耀石	完形
28-20	その他	石 鏃	1.4	1.5	0.4	0.5	黒耀石	完形
28-21	その他	石 鏃	2.0	(1.4)	0.3	(0.5)	黒耀石	片脚欠損
28-22	その他	石 鏃	(1.4)	(1.5)	0.3	(0.6)	黒耀石	両脚欠損
28-23	その他	石 鏃	(1.5)	1.3	0.3	(0.5)	黒耀石	頭部欠損
28-24	その他	石 匙	2.4	3.8	0.8	6.8	チャート	完形
28-25	その他	石 匙	(1.7)	(1.5)	(0.7)	(1.6)	黒耀石	つまみ部のみ
28-26	その他	石 匙	(2.1)	(2.6)	(0.6)	(3.0)	頁 岩	つまみ部のみ
28-27	その他	石 錐	2.7	1.3	0.5	1.7	黒耀石	先端部の磨滅激しい
28-28	その他	剥片石器	2.7	(2.0)	0.5	(3.1)	黒耀石	外湾部に刃部
28-29	その他	剥片石器	2.6	(2.4)	0.8	(4.9)	チャート	外湾部に刃部
28-30	その他	剥片石器	1.5	(2.1)?	0.6	(2.8)	チャート	直線部に刃部
28-31	その他	剥片石器	2.7	1.3	0.6	1.3	黒耀石	内湾部に刃部
28-32	その他	剥片石器	1.7	2.2	0.7	2.5	黒耀石	内湾部に使用痕あり
28-33	その他	剥片石器	3.9	3.1	0.8	7.6	黒耀石	周囲に使用痕あり
28-34	その他	?	1.1	2.7	0.5	1.3	黒耀石	

第11表 オシキ遺跡出土平安時代土器一覧表

挿図 番号	出土地点	種別	品 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	備 考
1	1号住居址	H	杯 C	12.8	4.6	6.2	底部は糸切り後ケズリ
2	1号住居址	H	杯 Aa	10.7	3.7	4.8	ゆがみが大きい
3	1号住居址	H	杯 Aa	11.4	3.7	4.8	完形で出土
4	1号住居址	H	杯 C	11.5	3.4	4.5	
5	1号住居址	H	杯 Aa	13.7	(4.7)	—	
6	1号住居址	H	杯 C(?)	13.2	—	—	
7	1号住居址	H	杯 B II	18.0	10.0	11.3	
8	1号住居址	H	杯 B II	13.2	5.7	8.0	体部下にヘラケズリ
9	1号住居址	H	杯 B II	(14.2)	(6.1)	8.1	
10	1号住居址	H	黒色A	13.1	5.9	5.9	暗文あり
11	グリット (CA-68)	H	黒色A	11.9	3.9	5.2	底部は糸切り後ナデ 暗文あり
12	1号住居址	H	黒色B(?)	14.8	(6.2)	—	
13	1号住居址	H	甕 C	26.2	—	—	
14	1号住居址	H	甕 C	24.0	—	—	
15	グリット (CA-70)	H	甕 B	14.2	—	—	
16	1号住居址	H	甕 C	—	—	8.2	底面に×印線刻あり
17	1号住居址	K	瓶	12.3	(28.4)	—	貫入あり 猿投窯? 精良品
18	1号住居址	K	椀 A I	15.6	5.7	7.9	
19	1号住居址	K	椀 A I	15.4	4.7	8.7	
20	1号住居址	K	椀 A I	16.4	(5.0)	—	
21	1号住居址	K	椀 A I(?)	14.6	(5.7)	—	
22	1号住居址	K	椀 A I	16.1	(6.3)	—	輪花椀 精良品

7. 上ノ原遺跡 (SUHB)

1) 位置 (図30、図版8-2)

本遺跡は、広大な八ヶ岳の裾野が宮川によって割される付近、茅野市金沢南大久保3405、5433番地一帯にある。八ヶ岳方向より放射状に流れ出る小河川によって形成された幾つかの舌状尾根のうちの一つ、北側に矢の口川、南に蟹出沢川が流れほぼ東西に走る尾根の上、端部より700m程さかのぼった南半一帯が遺跡地となっている。沢を隔てた北の尾根上には大石遺跡が、南の尾根上には判の木山西、同東遺跡がある。南と北の沢は共に深く、20m強の比高差がある。遺跡のある尾根南半は北半よりやや高く5m程の段差を持ち、東側は西へ緩く傾斜する平坦面で、西側は湾状の凹地部となっている。現在、東側は松林で、西は、開墾後の落葉松林である。中央道用地は、その凹地部が始まる付近で尾根を横断しており、標高は936～945mを測る。

2) 発掘調査の経過と方法

かつての分布調査の際、土師器小片、黒耀石片が採集された。昭和51年10月29日～11月13日まで実施された今回の発掘調査は、遺跡の性格を知るという点に主眼を置き、S T A 253+80～255+20の範囲を20m毎のセンターラインを基準線として2m方眼のグリッドを設定して行うという簡便な方法で行った。

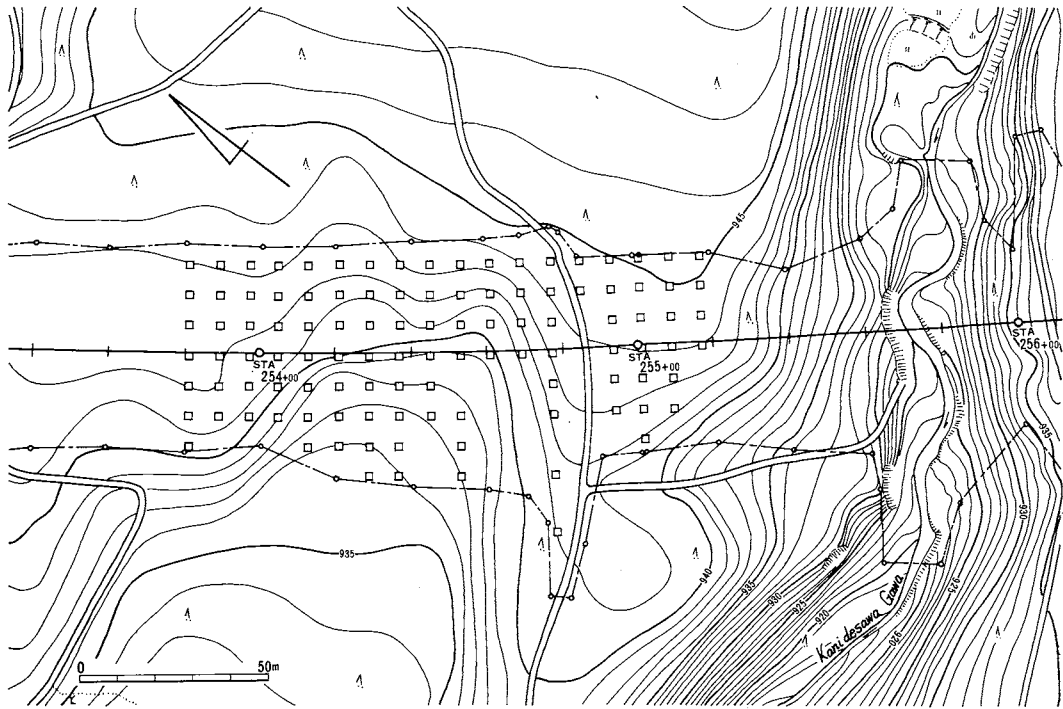
土層は、表土、黒土、漸移層、ロームと続くが、東側および南の平坦面は黒土が無く、表土を剥ぐとすぐ薄い漸移層を経てロームに達するのに対し、西側の凹地部は黒土が深い。

3) 出土遺物 (図31)

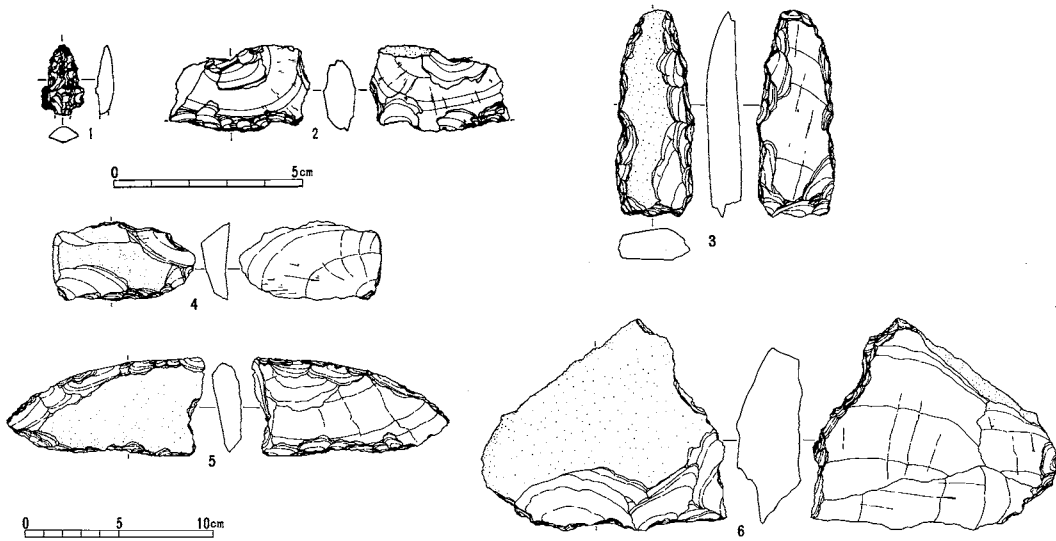
今回の発掘調査区域では、遺構の確認はなく、平坦面の端部とその下付近の黒土と表土層中より、ごくわずかの遺物を得たにとどまった。図31の石器類がそれである。他に図化出来ない縄文土器片、黒耀石塊、陶器片等がある。なお、図31の6は用地外である尾根北端での採集品である。

4) まとめ

半月程の短期間となった今回の調査では、遺構は検出されず遺物も極めて少なかった。先述した様に南と北の谷が深く、尾根上でも一番高い付近であり、居住条件の良くない地形でもある。西はさらに谷が深くなり、東の平坦面もその下端である本地区に遺構がない事から、付近に大規模な遺跡は無いと思われる。狩猟採集の場といった性格の地域でもあろうか。 (村上 孝)



第30図 上の原遺跡地形・発掘図(1:2000)



第31図 上の原遺跡出土石器実測図(1~2 1:2, 3~6 1:4)

8. 判の木山西遺跡 (SHNB)

1) 位置 (図1、3)

茅野市金沢壱枚畑3223、3236番地に所在する(図1、3)。八ヶ岳山麓から広がる台地は、本遺跡西方の金沢部落のある宮川の谷へ急崖となって落ち込む。そのため、台地の端部では宮川支流の小河川によって開析され長尾根状の地形を幾つかつくるが、本遺跡は蟹出沢と金山沢によって浸食され形成された長尾根にのる。この尾根一帯は判の木山と呼ばれており、蟹出沢寄りには小規模な河岸段丘面を残しているが、この全面が遺跡の範囲内に入るものと思われ、中央道は遺跡中央部を通過する。蟹出沢へは急崖となり、同沢と遺跡ののるテラスとの比高は15~21mで西へ緩傾斜する。標高は940m前後である。崖の急斜面を4m程降りると豊富な湧水があり、恰好な水場となっており、本遺跡の住人たちも飲料水として利用したであろう。

蟹出沢の対岸は上の原遺跡、判の木山長尾根の背となる無遺物地帯の台地をはきんで、判の木山東遺跡、金山沢北遺跡となる。これらの遺跡は昭和50年に行った分布調査の際に発見された新遺跡で、判の木山東遺跡と区別するため、便宜的に判の木山西遺跡と呼称することとしたものである。

現状は山林であるが、畑として利用されたこともあるようで、周辺にはその跡を留めている。

2) 調査の経過 (図32)

調査を担当したC班は頭殿沢遺跡で予想外に広範囲の調査をしなければならなくなったことと、判の木山東遺跡では黒土中で住居址が複雑に切り合っており調査に時間を取られたため、本遺跡の調査を開始したのは9月24日であった。しかし、8月中旬で知名調査員が退団、辰野調査員が脳卒中で倒れられ退団、細川調査員が農繁期入で欠席がちという状況で、調査班の勢力は半減してしまった。遺構検出は10月19日以降である。

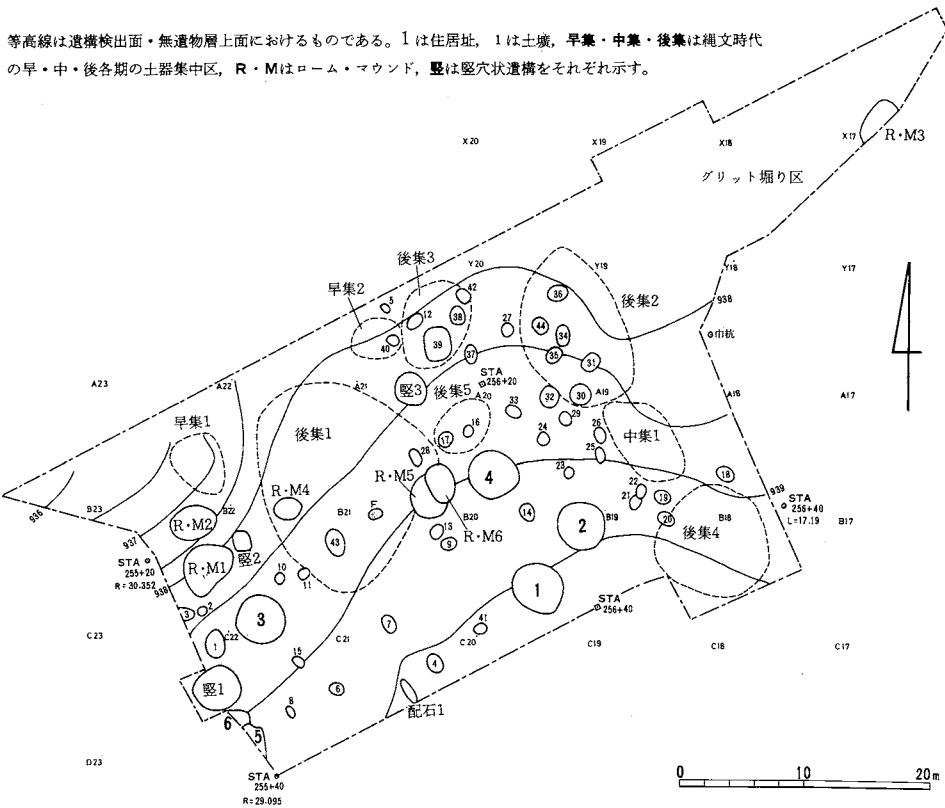
年度当初は10月で発掘作業は終了させる予定であったが、公団の強い要請もあって発掘期間を延ばして来たが、12月に入ると厳寒と凍上によって調査不可能となることで、本遺跡の全面調査終了は無理となった。そのため、公団と協議し蟹出沢のボックス工事で破壊されるSTA256+40から以北の部分とパイロット道路に必要な東側10mを終了させることで調査を進めた。しかし、同道路が中央を通ることに変更になったため、東側部分は遺物のみ記録して取上げ埋め戻し、来年度調査に回し、新規道路部は簡易舗装した上で通過することで合意をみた。最終段階ではB班の応援を得て12月7日に漸く調査を終了させた。

本遺跡では遣り方実測を行なっているが、STA256+20を基点に10m方眼を組み南ABC……列を、北へYをとり、基点より東へは19より順次若返る数の、西へは20、21、……となる列をとって、例えば基点

の南西に接する区はA20と表示する方法を取っていることを付記しておく。

本年度の発掘調査で検出した住居址は6軒であるが、縄文時代中期初頭1軒、縄文時代中期中葉3軒、平安時代1軒、平安時代以前の時期不詳1軒となる。平安時代の竪穴状遺構1基を含め、竪穴状遺構3基、土坑46基、ローム・マウンド6基がある。なお、前記時期以外の遺物では縄文時代早期の押型文土器少量と相木式土器1片、茅山式土器片若干、縄文時代後期加曾利B式土器片若干を得ている。

現在、整理作業進行中であるが、第二次発掘調査と併せて報告する予定となっている。(伴 信夫)

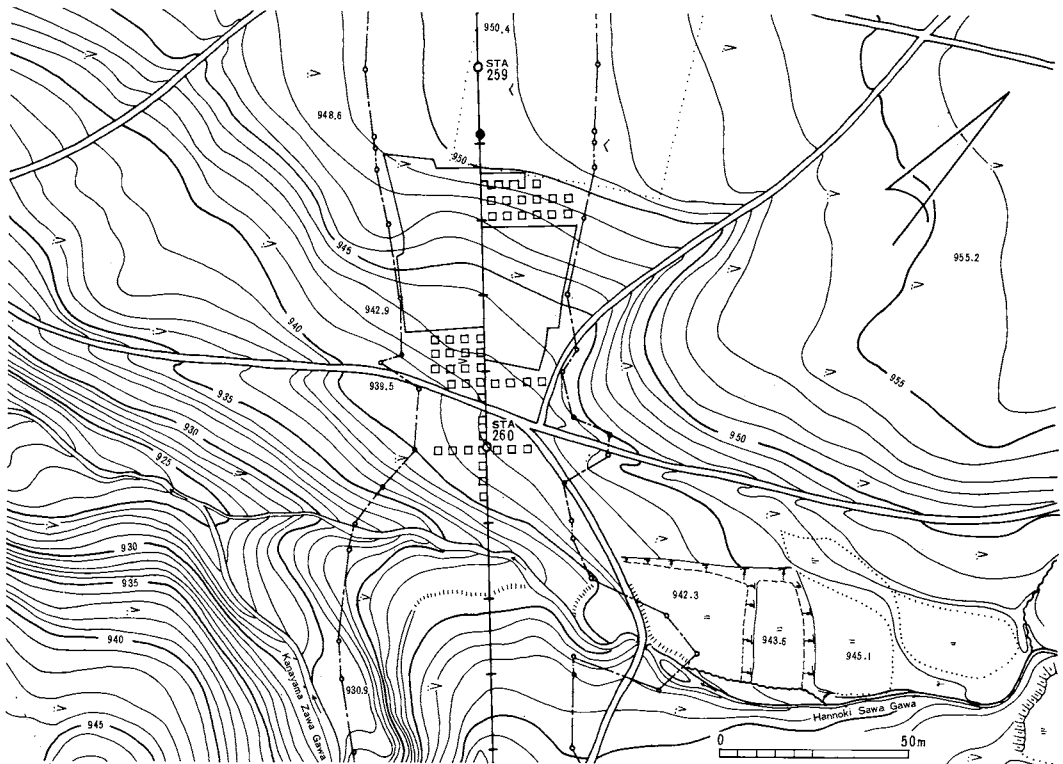


第32図 判の木山西遺跡第1次調査分遺構全体図(1:600)

9. 判の木山東遺跡 (SHHB)

1) 位置 (図1、3、33、図版14-1)

茅野市金沢横道下5444-15、3147-1番地の山林が本遺跡の所在地である(図1、3)。30年生の松林であるが、畑地として利用されたこともあるようである。判の木山東遺跡は判の木沢が形成した、ごく小規模な河岸段丘上にあり、西および北側は判の木山の長尾根頂部台地からの段丘崖を背にし、東側は判の木沢と蟹出沢によって開析された小さな尾根に囲まれている。いわゆる日だまりとなった地形で強風等も避けられる絶好な場所である。遺跡中心部は判の木部落より金沢に下る林道より北側、段丘崖斜面にかけてで、判の木沢との比高は用地内部分で7~15mである。標高は940~950mである。本遺跡東部南側では判の木沢の水量が少なく浸食が緩慢であったため浅く、比高数mである。然し、西部の南側では金山沢北遺跡の南を回ってくる金山沢の水量が豊富で、これと合流するため激しく下刻作用を受け急峻な崖となる。なお、用地内での遺跡の範囲はS T A 259+40~260+20である。



第33図 | 判の木山東遺跡地形・発掘図(1:2000)

本遺跡は山林であったため事前の分布調査では確認できず、昭和50年度、御狩野遺跡調査終了後に行った分布調査の際に発見されたものである。また、この時の部分的なピット掘り調査を金山沢北遺跡でも行っているが、遺物を検出できなかった。本遺跡調査に並行して重機で試掘溝を入れて、はじめて遺跡であることが判明したものである。遺跡名では別遺跡扱いになるが、両遺跡は一体となるものである。

2) 調査の経過

本遺跡の調査に入ったのは昭和51年7月29日である。頭殿沢遺跡が調査未了のため調査班を二分して先発隊によってグリット掘りを行なった。8月17日には頭殿沢遺跡の調査が完了したため、本格的な遺構確認作業に入った。その後発見される全住居址が黒土中に掘り込まれたもので、検出作業は難行することになった。それに加えて、判の木山西遺跡の項でふれたように調査員が半減し、学生調査補助員の休暇終了などが重なり、調査体制は最悪の事態となってしまった。

調査進行を速めるため9月7日以降センターライン東側と段丘崖斜面上部の表土除去作業をバック・ホーを使って行なった。また、判の木山西遺跡との間の平坦面140mにも幅約2mの試掘溝をセンターと用地境の間に二本入れたが、縄文土器細片・フレイク数点を得たのみで、遺構は皆無であることから、遺跡の範囲外であることを確認した。

9月20日には施工を急ぐ公団と現地協議し、判の木山西遺跡全面終了は困難なことと、新発見遺跡である金山沢北遺跡の取扱いについて説明した。後者についてはパイロット道路を無遺構部分を選んで通すことで合意をみた。9月下旬、判の木山西遺跡へ別動隊が入り、本遺跡の発掘調査が終了したのは10月23日のことであった。

グリットはSTA259+40を基点AAに、20m毎のセンター杭を結ぶ線に直交させる方法で、STA260+14まで設定したが、予想に反して、農道より南には遺物が殆んどみられず、段丘崖下に遺物・遺構がみられたため基点より小牧寄りにY区を設定している。また、遺構実測図は平板測量によるが、第6・10・11号住居址については部分的に遣り方を組んで測量している(図37)。

3) 土層 (図38)

センター・ラインに沿って土層観察用ベルトを残した。北の段丘崖斜面は表土(腐植土)層が20~40cm堆積し、薄い漸移層を挟んでローム層となる。遺構の存在する段丘裾部から、下段テラスへ移行する部分では表土(暗褐色を呈する腐植土)層10~20cm、黒褐色土層10~20cm、茶がかかった暗褐色土層8~25cm、暗褐色土層8~15cmで漆黒色土層となる。漆黒色土層は相当深く、ロームへ近づくと人頭大から拳大の礫を含む混礫黒色土層となるが、部分的に掘り下げただけである。なお、漆黒色土層の暗褐色土層が平安遺物包含層である。

暗褐色土層が平安遺物包含層となることを考えると、平安時代の遺構構築の際に掘り上げたロームはあ

ったとしても僅かな量であり、斜面や周辺が相当裸地となり畑等となった時期が平安時代にあり、上部から流れ堆積したものと思われる。

南部は2m間隔に掘ったグリット壁面での測定をつなげたものである。林道より南は実測してあるが、遺構が存在しないこともあり割愛している。(伴 信夫)

4) 遺構と遺物

ア、縄文時代の遺構と遺物

ア) 第8号住居址(図39-1・3、48-10、50、65-431~436、図版16-2)

遺構 暗褐色上層まで削った段階で、少量の土師器片、比較的少量の縄文中期初頭・中葉の土器片が集中するので、遺構の存在する可能性を考え、表層遺物の位置を記録した上で取り上げ、黒土層まで削り下げて住居址の輪郭をつかんだ。覆土は微量の炭粉・ローム粒を含んだ黒褐色土で壁の小礫が多少入るという程度で壁外とほとんど差がない。本址東側に焼土がみられ、確認のトレンチを入れたため、本址東壁部を破壊してしまった。また、南壁部に比し、北壁部が柱穴から離れすぎることから、第5号住居址寄りに掘りすぎている可能性がある。

本址は第5号住居址(井戸尻Ⅲ)によって切られ、東西5.40m、南北4.70mの卵形の竪穴住居址である。主軸方向はP₅、P₆間を入口と考えるとN66°Eである。壁は北で残存壁高6cm、南で0cmである。床面はすべて黒土中で、炉址からP₁、P₂にかけてや、硬い床面で良好であるが、他は軟弱で南へ僅かに傾斜する(図39-1、図版16-2)。炉はほぼ中央にあり径85×75cmの地床炉であるが、炉石を3個置いていた可能性があり、痕跡がみられた。炉底は硬く木炭混入焼土が2~3cmみられた。その上に焼土粒・木炭片混入黒褐色土が充満し、深鉢片25、定角石斧1が包含されていた(図39-3)。

主柱穴はP₁~P₄であり、P₅、P₆は補助柱穴で入口施設の柱穴であろう。P₁ 40×33 -21cm、P₂ 32×30 -33cm、P₃ 38×39 -37cm、P₄ 37×38 -27cm、P₅ 30×30 -38cm、P₆ 30×30 -33cm。

遺物 炉址内に遺物が多く、図50-30~35・38・39と図示できなかった深鉢片3個体分があり、いずれも九兵衛尾根Ⅰ式である。42~44・47~50・52は床面出土であり、他は覆土遺物である。整理不充分的段階で図版を作ったため壁外遺物の37・40・41・45・51・53・54を入れてしまったが、前の4点は本址と関連のある遺物であろう。

30~43のように篋あるいは半截竹管の内面を利用した平行沈線文が多用される。30は隆帯に連続押引爪形文を密施し、32・36・45は半截竹管による連続刺突文を横か上下方向から押圧する。52は同具内面利用により深く引いて隆起化させた平行沈線文のミニチュア土器胴部である。

34・43~49は単節縄文を縦に回転させるものが多い。34と同一個体片が他にもあるが、全面縄文を施文する。45は頸部に竹管による連続押引を、47は結節縄文を持つ。

50は口唇部に隆帯を貼り押圧刻目をつけ、口辺に棒状具による沈線文を施すもので、本遺跡出土の中期初頭の土器では少数派に属する。以上は九兵衛尾根Ⅰ式である。

46・51・53～58は井戸尻期の深鉢片であるが、本址への混入もしくは覆土上層のものである。有孔鏝付土器底部48図10はP₁から壁外の焼土にかけて上層に散乱したが、第5号住居址と関連する遺物であろう。

石器では打製石斧65図433～436の4点、定角石斧431の1点がある。431は炉址内、434～436は床面、433は覆土出土である。

本址は地床炉であること、炉址内遺物からみて縄文中期初頭・九兵衛尾根Ⅰ式の住居である。(伴信夫)

イ) 第2号旧住居址(図40-1、51-59~64、64-412、図版15-2、21-1)

遺構 黒土層中に検出された遺構である。第1号住居址(平安時代)、第2号新住居址(井戸尻Ⅱ式)に貼床されていた住居で、新旧住居址の炉石のレベル差が12cm前後あることから、本址の覆土が僅かに残存していたことが確認された。

規模は新住居址と殆んど差がなく、ほぼ、同大であることが柱穴の配置から推定され、径4.30m程度の円形の竪穴住居址と考える。上層からみても拡張、縮少の痕跡は確認できなかった。主軸方向はP₆、P₁₀の間を入口と推定するとN16°Wとなる。壁は北壁が僅かにローム層まで掘り込むが、大部分は黒土であり良好である。新旧住居址が共通して利用していたと思われる北壁で、高さ28cm、床面は炉より北はロームであるが、南は黒色土への貼床で、若干、南へ傾斜しやや硬い。周溝は確認できなかった。

北壁よりある円形石囲炉は60×50cmの中規模の大きさを持ち、内部に焼土粒、炭粉混入褐色土が充満していた。炉石は安山岩で奥の1個が抜かれていた。主柱穴は5と推定されるが、黒土の床面では確認できず、床面より下げて検出したものである。柱穴の埋土から新旧住居址への帰属を決定することはできなかった。P₃に切られるP₁₀上面に炭化材・石が覆う、P₉は本址に帰属する。旧炉に近いP₆～P₁₀を本址のものと推定した。P₆ 36×33 -44cm、P₇ 30×29 -15cm、P₈ 40×36 -63cm、P₉ 47×41 -49cm、P₁₀ 52×48 -49cm。

遺物 残存する本址覆土遺物は少ない。図51-59~64の深鉢片があるが、61・62は篋状具で連続して押圧し刻み、後者はその下に幅広の半截竹管による平行沈線文帯を持つ。図示しなかったが、平出第3類A系統の底部片もある。

石器 打製石斧図64-412は焼土下層にあり、本址の覆土遺物と考えられるものである。

少量の遺物で本址の所属時期を決定するのは無理があるが、新住居址が縄文中期中葉井戸尻Ⅱ式であり旧住居址の炉よりも古い形態を示すことから、本址は井戸尻Ⅰ式の住居と考えられる。(伴 信夫)

ウ) 第2号新住居址(図40-2、48-1・2、51-65~84、52-85~103、64-410・411-413-416、図版15-1、21-2.24-5・6)

遺構 平安時代の第1号住居址に切られているが、黒土層上面を削って発見した住居である。覆土は壁外と殆んど色調差がなく、含まれている少量の炭粉を手懸りに輪郭線と考えた。仮定した輪郭線に不安が残るため、ロームの床面となる可能性が強い北半部で壁・床面を把握して作業を進めたが、本址床面が軟弱だったことと、炭化材・焼土の全面的な拵がりに気をとられ、旧住居址床面まで掘り下げてしまい、炉址が2箇所検出されてから、新旧2時期の床面の存在に気づいた状況であった。遺物は原位置に残して来ているため、確実に旧住と思われるもののみ旧住遺物として、他は本址のものとして図示している。

覆土はローム粒の微量混入黒色土（Ⅰ）層が凹レンズ状に堆積し、下層では床面や、上部で多くの炭化材・焼土が検出された。大きな炭化材は110×15cmの屋根材とみられるもので、P₂とP₃の中間から炉方向へ傾斜していた。他は数十cm以下である。P₂上部及び炉周辺の焼土は3～5cmの層をなしている。

プランは東西5.20m、南北5.30mの円形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN9°Eである。屋外施設は確認できなかった。壁は大部分が黒土で、北側が僅かローム層に達している。北壁で28cm、南壁で18cmである。床面は北壁寄りがロームで旧住と一致するが、大部分は旧住覆土に貼床したもので軟弱である。炉は中央南よりの位置に径87cm程の円形石圍炉があり、縄文中期中葉としては大きい方である。炉内にはレンガ状にしまった焼土が14cm程の厚さにあり、焼けた土器片が出土している。炉石は安山岩で北東側の石を欠き、焼土がそちらへ広がる。周溝は確認できなかった（図40-2、図版15-1、21-2）。

本址の主柱穴として確実なのはP₁で、旧住より浅い柱穴と旧住炉より遠い柱穴を選んでもと、旧住とはほぼ同一構造の5本柱で主軸線に対称的に配置するものとなった。従って、P₂～P₅は本址のものとして推定したものである。P₁ 33×28 -49cm、P₂ 38×34 -61cm、P₃ 40×35 -62cm、P₄ 45×40 -51cm、P₅ 39×32 -28cm。同心円の拡張例とみて良からう。

遺物 覆土には深鉢片で九兵衛尾根Ⅰ式十数点、新道式1片、堀之内式3片が含まれたが、井戸尻期の小破片が焼土層より上部に多い。深鉢図48-1・2はP₃の真上、床面より20cm浮いて炭化材とともに出土しており、本址廃棄時の生活面上のものかと思われる。1は胴部最大径17.4cm、胎土に雲母が目立つ明赤褐色の深鉢で2対の具象文を胴部に持つらしく、図60-325と同一個体と考えられる。2は器高21.1cm、口径10.8cmで底部は削り、上部は丁寧な磨き胴部に平行沈線文帯を持っている（図版24-5・6）。

図51-65は左側に中空の半球上のふくらみを持ち、口辺部の隆帯の両側に窓をあける把手部、66はミミゾク把手、67-69は楕形文、69-78は棒状か半截竹管による平行沈線文で埋めるもの、79は指圧痕を持つ隆帯、80-82は円文、楕円区画文部、81-85-97は粗い縄文のものである。

66・68-73・78・79・85・89は炉址内或いは床面出土で、他は覆土である。

図52-85の蛇身把手はグリット遺物の図59-293と接合し、駒ヶ根市南原遺跡4号住居址（註1）、飯田市宮城A地点1号住居址（註2）に類例を求めることができ井戸尻Ⅱ式期のものである。井戸尻Ⅲ式と思われる101、102は覆土最上層のもので、床面遺物を含め井戸尻Ⅱ式である。

但し、84は第3号住居址122と同一個体片と思われ、第3号住居址に帰属するものであろうが、北陸的な、馬高系で移入品であろう。

石器では粗製石匙図64-410・411、打製石斧413～415、凹石416があり、410は覆土より、他は床面から出土したものである。

本址の所属時期は出土遺物、炉の形態からみて井戸尻Ⅱ式である。 （伴 信夫）

エ）第3号住居址（図41-1、48-3-6、52-104-106、53-108-122、64-417-422、図版15-2、24-4）

遺構 段丘崖裾部の斜面にあるため、本址北壁はロームへの漸移層、南部は暗褐色土層中で輪郭線を確認したものである。南壁部はグリット掘りで破壊してしまったが、東西4.10m、南北は推定3.60mの楕円形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はP₃とP₄間を入口部と考えるとN26°Eとなる。覆土は斜面上方の北からの流入が強く行なわれ、炭粉混入黒色土である（図41-1、図版15-2）。

北壁は26cm、南寄りの壁は残存高0cmであるが、地形からみて南部は壁の低い構造であったと思われる。P₃—P₅以北はロームで良好な壁、硬い床面であるが、南半は軟弱である。床面は北へ12cm高まり、僅かに傾斜するが平坦である。周溝はない。中央や、北よりに方形石囲炉があり、45×40cmと推定され、内部には炭化物混入黒色土が認められた。奥の2個の炉石は抜かれたか欠如する。

主柱穴はP₁—P₅で、P₁の北に切り合うピットとP₃脇の小ピットは根穴と考えられる状況であった。P₁ 34×? —40cm、P₂ 40×35 —59cm、P₃ 40×40 —26cm、P₄ 42×39 —38cm、P₅ 40×34 —35cm。

遺物 床面には、密着した土器は図48—3・6、図53—117・118、床面より浮き10cm以下のもの4・5・104・105・109・111—113・116・122、床面より10cm以上浮く覆土内のもの106・108・110・114・115・119—121である。

3は口縁最大部推定径20.5cmで楕形文の粗形段階のものか頸部を欠くため断定できないが、平出第3類A系でP₂脇出土である。4は胴部にRL縄文を施文する深鉢で、中央部床面より浮いて散乱していた底径12cmのものである。5・6は口縁キャリパー状となり、底部は内折気味か、くの字形に屈折する深鉢である。5は口辺最大径14.3cm、残存器高18cmでRL縄文を施文する。6(図版24—4)は口辺最大径13.6cm器高14.8cmで、撚糸を縦或いはや、斜方向へ回転施文する。5・6は半周強の残存部からの推定復元であり、5は104と同一個体で炉脇に、6は121と同一個体でP₂脇にあったことが散乱状況から推察される。

104・106は新道式から藤内式に盛行する頂部円形・ドーナツ型の周囲に押圧刻目を持つ把手で、や、古い要素と思われる。105・108は口縁キャリパー状となり無文帯で、109・110は隆帯による区画内を篋描き沈線で埋める。111は半截竹管による平行沈線下に角押文を付す紐線文を貼付する。113は頸部に隆帯を持っている。114は竹ペン状施文具による三角押引文、115・116は角押文を持つ口辺部片であるが、117・118の底部片とともに平出第3類Aに属する。119—121はグリット掘りの際の出土で覆土上層で、図示しなかったが浅鉢底部片もある。

122は第1・2号住居址覆土中に各1片が混入していた図51—84と同一個体である。胎土に雲母・石英が含まれる赤色の強い褐色を呈している。口唇内側には隆帯を貼つけ有段とし、外面は隆帯と棒状具による深い沈線で文様を構成するもので馬高式系の土器と思われる。

石器(図64)で床密着は421、床面からの10cm以下は418・420で、他は覆土遺物である。工具である定角石斧417、石ノミ421はP₁周辺出土で、工具類をまとめて置く場所が壁近くにあったものであろう。打製石斧418—420の内420は先端部使用痕が顕著である。凹石422の他、黒耀石フレイク少量が出土している。

本址は方形石囲炉であることと、出土遺物から藤内Ⅱ式期の住居である。(根津清志・伴 信夫)

オ) 第5号住居址(図39—1:2,48—7—9,52—107,53—123—139,54—140—150,65—423—430,図版16—1)

遺構 遺物は暗褐色土層でもみられ住居址の存在を予想できたが、プランの輪郭が摺めたのは黒土層まで下げてからである。覆土にはごく微量のローム・炭粉が入るが、壁外とほぼ同色で識別に困難を感じた。楕円形を呈する竪穴住居址は東西5.45m、南北4.30mで主軸方向はN70°Eである。壁高は北東部が最高で42cm、南東が最低で12cmである。壁は漆黒土でや、硬さを感じる程度、床面はすべて黒土上で部分的にたたき状の堅緻な床面もみられるが、全般には幾分硬くなって南へ20cm傾斜する。炉址はP₂とP₆間を入口とすると奥まった東壁へより、95×90cmの円形石囲炉である。平板な石5個で囲み、内部には炭粉・焼土粒

を含む黒土が充満し、土器片も出土した（図39-1・2、図版16-1）。

P₄がやや小さいくらいはあるが、主柱穴はP₁~P₅で、補助柱穴はP₆~P₈となろう。P₁ 32×26 -34cm、P₂ 56×56 -39cm、P₃ 32×32 -29cm、P₄ 20×17 -31cm、P₅ 38×32 -16cm、P₆ 26×25 -17cm、P₇ 19×16 -43cm、P₈ 29×28 -14cm。

遺物 出土した土器は殆んど小破片である。浅鉢図48-7は推定復元したものであるが、一部の破片は床面から出土した。8の浅鉢主要部分は床面出土である。図52-107、図53-123~125・127・128・130・135・136、図54-140・143は床面出土、132は壁外出土で他は覆土遺物である。

107、123~132、140、146は隆帯と沈線で襜冑区画文などを構成する。9、133~135はLR縄文を横方向に回転施文するもの、136~138は有孔鏝付土器片であるが、137は赤褐色の地に暗褐色を呈する顔料で彩色され、絵画的文様が施されているが、胎土には透明な石英粒が含まれる点で138と同一個体の可能性が高い。

141は覆土上層出土で小波状をなす突起下部に蕨状の隆帯文を垂下させ、口縁に半截竹管による深めの平行沈線文を埋め、赤褐色、胎土精選され、雲母がきらめくものである。第3号住居址出土の122に類似する深鉢片で馬高系のものであろうか。

142~145は半截竹管による平行沈線、145は角押文、147~150は竹ペン状施文具による連続押引文を持つ深鉢片で、伊那谷に多い胴部に楕形文を持つ平出第3類A系のものであろう。

浅鉢7は井戸尻Ⅰ式期であろうか、井戸尻期後半の要素を持つものが多く、床面出土の107、124は井戸尻Ⅲ式である。

石器（図65） 石鏃423、チャッピング加工のある黒曜石製剥片石器424・425、粗製石匙426、打製石斧427~430がある。床面出土は424~426・430で、他は覆土である。

本址は円形石囲炉で出土遺物からも井戸尻Ⅲ式の住居であろう。（伴 信夫）

カ）第9号旧住居址（図37、42-1・3、48-11、54-151~158、65-437~441、66-442・443、図版17-2）

遺構 井戸尻Ⅲ式期に属する第9号新住居址の貼床下の黒色土層中から検出された（図37）。新住居址の遺物の多出と出土位置へ残して来たためと、黒土中の床面であったため一部では新住居址の床面を本址の覆土まで喰い込んで把えている可能性もある。

プランは新住居址とほぼ同大であった可能性が高い。主軸方向はP₁・P₅間を入口と考えるとN12°W、P₁・P₄間を入口と考えるとN19°Eである。床面はすべて黒土で炉周囲から北壁よりは良好である。壁は北35cm、東33cm、西25cmで、ほぼ垂直である。周溝は確認できなかった。炉址は中央や、北壁よりにあり、炉石は西側を残し他ははずされ、北側の炉石は半割され新住居址に転用されていた。内部には炭粉はあるが、焼土はみられなかった。径は50cm弱と思われる（図42-1、図版17-2）

北西壁ぎわには径48×43cm、深さ57cmの袋状の貯蔵穴P₆があり、内部には石皿片が入っていた。

主柱穴はP₁~P₆の6個で、P₇は補助柱穴と思われる。調査終了後、床面を掘り下げたが他には確認できなかった。P₁ 32×31 -52cm、P₂ 31×27 -58cm、P₃ 36×28 -57cm、P₄ 32×24 -56cm、P₅ 40×40 -45cm、P₆ 33×30 -28cm、P₇ 24×21 -11cm を計測する。（小林正春）

遺物 新住居址とのレベル差は10cm前後であることから、出土遺物は僅少である。図48-11、図54-151~158は本址に伴出するものである。151~152は藤内期の、11は井戸尻Ⅰ式の特徴を示す。

154は厚さ5mm強で折返し口縁下に9mmと幅広の竹管による平行の低い半隆起帯を縦に施文するもので、胎土は土着の土器と差がない。P₃内出土であるが、東海地方の清水ノ上貝塚第3群2類C(註3)かその影響を受けたものであろう。

石器(図65、66) チッピング加工の黒耀石製剥片石器437、打製石斧438、439、乳棒状磨石斧440、441、横刃型石器442、粗大石匙443がある。いずれも床面か、僅かに浮くもので本址に伴出すると考えて良い。

出土遺物、炉の形態からみて井戸尻Ⅰ式の住居址である。(伴 信夫)

キ) 第9号新住居址(図37、42-2・43-1~3、48-12~17、49-18~23、54-159~170、55、56-202~208、66-444~459、67~460~466、図版17、18、21-5、22、23、24-1)

遺構 段丘崖裾の黒土が最も厚く堆積する位置にあり、平安時代の第4号住居址に南東部を切られている。同住居址の床面にも遺物が顔を出し、他の部分は黒土層で検出した(図37)。

プランは東西4.90m、南北4.75mの楕円形を呈する竪穴住居址である。壁高は北21cm、東17cm、西34cmを計る。北壁は垂直に近い。主軸方向はP₁・P₅間を入口と考えたとN5°Eである。炉の周囲から北壁よりには貼床があり、旧住居址との境を明確に摺めた。床面は南へ若干傾斜する(図43-1、図版17-1)。

炉址は中央北壁よりであり、径70×55cmの円形石囲の内部に埋甕を持っている。炉内部には焼土が厚く認められ、埋甕炉内には木炭片・灰を含む黒土が充満している(図43-3、図版21-5)。

柱穴はP₄内から旧住居址の152の一部が出土したということ以外、新旧を区別することは不可能であった。本住居址は、ほぼ同一プランで建て替えが行われている。炉は古い炉の一部を破壊して作られており、旧炉石の1つを半割して新炉石の一つとして転用していることから考え、新旧住居址の時間差は少なく、同一住人か、近接した人間によって建て替えられたものであろうか。また、炉から南西方向へ焼土が比較的多くみられるのに、火災の痕跡がないところから、炉の使用形態を示しているのではないかと思われる。(小林正春)

遺物 本遺跡の住居址群中では最も遺物が多い。床面出土は図49-18、図55-181、図56-203・204、図66-444・445・465であり、床面からの浮き15cm以下で炉石の上面レベルまでの床面遺物に準ずるものは12、20、159、161、163、164、168、169、172、175、178、180、182~190、202、205~208、447、448、451、452、454、457、459、461、462、464で、160、166は新旧両住居址に破片が分かれる。他は覆土上層の遺物である。

遺物の出土状態はいわゆる吹上パターン状況を示し、同一個体でも相当散乱しているものが多い。P₄東側とP₁北は第4号住居址の土師片が各1片入り込み、攪乱されている(図42-2、43-2、図版18-1)。

藤内式 図48-13は胴部最大径15cmの小形深鉢であるが竹ペン状施文による三角押文がみられる。

井戸尻Ⅰ式 173、174、178、183、194であり、旧住破壊時の遺物が入ったものかも知れない。

井戸尻Ⅱ式 15の他に、床面より10cm浮いて出土した20がある。20(図版22-2)は口径15cm、器高約24cmの深鉢で、口縁から胴部へ隆帯文を貼付しており、胴部は棒状具による沈線文で埋める。楕形文を胴部に持つ166、175、176は本式と考えて大差はない。

井戸尻Ⅲ式 14は底径16.6cmの大形深鉢の底部で、17と同様に胴部に楕円区画文帯を持つものであろう。18は埋甕炉に使われていたもので、底を欠くが、口径17.7cm、器高34cmの胴部文様が2単位(A+A')と

なり、丁寧に研磨された赤褐色の深鉢である（図版23-1）。19は口径14.5cmの口縁に沈線で渦文を波状口縁下に、残りを渦文左脇の交互刺突を加えた縦の文様帯を5箇所配し、間を縦走沈線で埋める（図版23-2）。楡形文でも口縁下にもつ167、頸部に持つ168は、その下部にも半截竹管による縦走沈線文で埋め、169は隆帯に代えて平行沈線で弧状区画をする。200は台付土器の頸部以下で、ミミズグ把手からのひねり紐状隆帯懸垂文部が剥落する。179、180、201～202も井戸尻Ⅲ式であろう。

井戸尻期に所属すると考えるのは16の隆帯を胴に持つもの、184～195の縄文を施文するもの、有孔鋳付土器片203、204があるが、前者は古いかも知れない。

東海系のもので清水ノ上貝塚第3群第2類A（北屋敷式）と思われるものがある。205～208は4～6mmと薄く、焼成堅緻で黄褐色、長石細粒を比較的多く含み、土着の土器とは様相を異にする。小波状口縁をなし、隆帯にそって竹ペン状施文具によって三角連続押引文を横走させるものである。205～207は同一個体片と考えられるが、最も東海色の強い典型と思われる（図版24-1右上の3点）。208は胎土が土着のものに近く、施文具が鋭角すぎる点で、この類ではないかも知れないが、影響を受けたものの可能性はあり、伊那谷によくみられるものである（図版24-1左4点）。いずれも床面より十数cm浮いているが、本址に伴う井戸尻Ⅱ～Ⅲ式と共伴している可能性の強い遺物である。

曾利Ⅰ式 21は無文のキャリパー口縁で、胴部は押圧刻目を持つ隆帯で弧状に1カ所、図示した右側の長楕円形隆帯文を3カ所に貼付し、間を篋がき沈線で埋める（図版23-3）。口径15.4cm、器高16cmである。22は半截竹管内面を用いた縦の平行沈線で埋めるものである。23は押圧刻目をもつ隆帯で変形蛇体文を2カ所につけ、半截竹管による平行沈線文で埋める2単位の文様構成となるものである（図版23-4）。口径15.5cm、器高32.4cmである。

この3個体は新住居址炉石上部との間に10cm強の間層を持って、炉及びその周辺上部に主要部がつぶれていたもので、明らかに、本址廃絶後の凹地を利用して、周辺の住居から投棄されたことを示すものであろう。破片が相当広範囲に散布することからも、平安住居によって攪乱されたものと考えするには広すぎる。恐らく、一カ所へまとめて置かれたものとは考えにくい状況にある（図43-2、図版18-1）。

石器（図66・67） 石鏃444～446、チップ加工され使用痕を持つ剥片石器447、打製石斧448～452、粗大石匙453～454、横刃型石器455～458、石ノミ459、凹石460～463、磨石464、裏面が蜂ノ巣石となった完形石皿があり、完形石皿は新炉址北脇に伏せられて出土した床面密着というより、旧住居土へ喰い込む形で出土したものである。

本址は井戸尻Ⅱ式の完形土器も含まれるが、より新しいⅢ式の要素をもつ完形土器の方が多く、炉に使われていた深鉢からいっても井戸尻Ⅲ式期の住居址と考える。

なお、本址埋甕炉内に包含されていた木炭のカーボン＝デイトーピングでは、学習院大学木越邦彦氏によりBP5010年（BC3060年） ± 190 年、 $\delta^{13}C = -25.3 \pm 0.3$ という測定結果を得ている。（伴 信夫）

7) 第11号住居址（図41-2・4、49-24、56-209～217、67-467・468、図版18-2、21-3・4、22-1）

遺構 傾斜面の黒土中に掘り込まれた円形と推定される竪穴住居址である。平安時代の第10号住居址に東部を破壊されていた上に、傾斜地のため、北側の奥壁寄りの一部を残存させているだけで、全体形を把握することはできなかった。径3.50m程の小形の住居であったと思われる。また、炉以外の床面上施設も

確認不可能であった。主軸方向は地形等からみてN6°Wと推定する。北壁の残存高は25cmである。

北壁よりに円形石囲炉と埋甕炉が、若干、位置をずらして作られており、ほぼ同一プランで建て替えが行なわれていたと思われる(図41-2、図版18-2)。

古い住居地に所属する炉は埋甕炉で底部を欠いた深鉢が埋設されていたが、新炉構築及び床面整備のとき一部破壊され、口縁の一部が内部に落ち込んでいた。内部には新炉より若干多くの焼土が含まれている(図39-4、図版21-3・4)。

新住居址は炉から北壁下にかけて黒色土及び褐色土の貼床がなされており、床面と北壁上にも炭化材・焼土が散乱している。新住居址は火災にあっていることを示す。また、旧炉上にある焼土は使用中のものでなく、火災時の焼土と思われる。新住居址の石囲炉は5個の石を円形に組んだもので、西側の1個が抜かれているが、径35cmである。内部には若干の焼土があるのみであった(図41-4)。

以上の状況から、新住居址の差はあまりないと思われる。そして、新住居址が火災で放棄されたと考えられるのに遺物出土量が極めて少ないのは、その廃棄の仕方においてなんらかの問題を示唆していると思われる。(小林正春)

遺物 出土土器は僅かである。旧住居址の埋甕炉、図49-24は口径29.1cm、残存高16.2cmの口辺がくの字に内折し、頸部がしまる深鉢である。口辺には押圧刻目を付す隆帯を貼付して半円状区画し、内部にRL縄文を横回転させた後、玉抱き三叉文を沈線で描き、円と三叉文内部の縄文を磨消する。この文様を1単位として同様文様を4単位つけ、更に1単位分弱の無文部中間には、刻目隆帯を1本垂下させる。頸部にも縄文がつけられている。玉抱き三叉文は沈線がかく退化形で、藤内期の雰囲気を残しながらも器形では井戸尻1式となっている。埋甕炉に使用された土器は一般的に他の遺物より古いといわれるが、本資料も井戸尻1式の古い様相とみて良いと考える(図版22-1)。その他、床面遺物は指圧痕を持つ隆帯文を持つ深鉢胴部片図56-209と小破片数点である。

210~217はグリット掘り段階での住居址該当区の遺物であるが井戸尻I式に属する深鉢片である。

石器ではチップ加工のある剥片石器、図67-467、磨石468の他に凹石1点が床面で出土している。

本址は新旧住居址の遺物の差は殆んどなく、埋甕炉を石囲炉の副炉とみることもできる状況と考えられ、そうすると新旧関係は解消する訳であるが、井戸尻I式期の類例の増加まで結論は待ちたい。(伴 信夫)

ケ) 第12号住居址(図37、44-1、49-25~27、56-218~227、57-228~247、67-469~474、
図版21-6、24-2、25)

遺構 本遺跡住居址群中で最も低い位置にある。平安遺物包含層の暗褐色土層中から縄文遺物がやや集中する傾向をみせ、後に炉址と判定した焼土部を検出してからは、それを手がかりにプランの輪郭の把握に努めたが、土層の差が最後までつかめず壁線を確定できなかった。

本址は平安時代の土壌2に切られていると考えられるが、プランは本址の遺物と推定される遺物の散布範囲からして、炉跡と埋設土器から南東方向へ長軸方向をとる楕円形の竪穴であったのかも知れない(図44-1)。

屋内施設は炉と埋設土器を確認しただけである。床と考えられそうな部分が軟弱なため、焼土の散布域を炉の範囲と考えたが、炉縁石らしい礫が残っており石囲炉だった可能性がある。炉内の土層はブロック

状の黒色土が入るなど、やや攪乱を受けているかも知れない。炉壁は不明瞭である。炉内には井戸尻式深鉢片220、横刃型石器が包含されていた。推定炉址から約50cm東に井戸尻Ⅲ式の大形深鉢（図49-27、図版21-6、25）が埋設され、口縁部レベルは炉址よりも10cm以上高く、床から口縁が出た状態で使用されたものかも知れない。底部を欠いているが、内部には炭粉混入黒色土のみが堆積、縄文中期初頭深鉢片、井戸尻期深鉢片数点、横刃型石器470が転落している。

埋設土器の状況は曾利期の埋甕とは埋設位置、方法が異なり、住居内で実用的に使用された可能性がある。この埋設土器以外の遺物は特記すべき出土状況を示さない。（小林正春）

遺物 住居址推定範囲内の出土土器は縄文中期初頭が若干、藤内式・堀之内式数片があるが、大部分は井戸尻期に属する。埋設土器図49-27（図版25）は口縁最大径47.5cm、残存器高58.5cmの大形深鉢である。口縁は小波状をなし4単位の断面ほぼ三角形の幅広の隆帯を貼付し更に粘土紐で蛇行した隆帯文を加飾して把手を配し、その上部の口唇には玉抱き三叉文を配している。胴部は把手から垂下する隆帯で4単位の分割し、内部を渦文、三叉文等で埋める半楕円区画文を配する。隆帯は板状具による押圧刻目を付している。図56-224-227は同様のモチーフとなるものであろう。本址の主体となる土器群である。

26・218は台付土器の一部であるが、前者は円と三角か菱形となる窓をあける脚部で井戸尻Ⅰ式の猪沢4号住居址出土例に類似する。後者は頸部に楕形文と隆帯を釣り紐状にたらし、下部を沈線で埋めるもので井戸尻式後半の特徴を示す。

219-223は井戸尻Ⅱ式の可能性のあるものを含む。

棒状具による刺突列点文を有する図57-228、楕形内を三角押文で埋める231、篋あるいは半截竹管による縦平行沈線文をもつ232-242は曾利Ⅰかと思われる234も混じるが井戸尻Ⅲ式が大部分をしめるとされる。

縄文あるいは撚糸原体を斜回転する手法のもの243-246は井戸尻期と判明しても細分はできない。浅鉢247は口唇に棒状具による沈線文を持つものであるが、同様である。

伊那谷からの影響を受けたと思われる深鉢図49-25（図版24-2）は隆帯で区画した内部を棒状具による深い沈線と三角押引文で埋める。諏訪地方の土器と胎土は差を認めたいが、口縁では隆帯が渦文となりそうである。塩尻市焼町遺跡（註4）・小段遺跡（註5）等に馬高式類似例があるが、竹ペン状施文具による連続押圧（引）文は、これらと異った要素と思われる。

石器では打製石斧図67-469、凹石473は炉の西3m、横刃型石器471-472は炉の北西4.5m離れ、本址に直接結びつくか不明である。石皿474はその一部が炉の北1.3mで出土し、本址に所属する可能性は高い。本址に確実に所属するのは埋設土器内出土の横刃型石器470のみである。

本址は埋設土器からみて縄文中期中葉井戸尻Ⅲ式の時期の住居である。（百瀬長秀・伴 信夫）

コ）遺構外出土遺物（図49-29、57-250-253、58-63、68-476-492、図版24-3）

遺構外出土遺物は相当量あるが形式細分は十分行なうことができなかった。

縄文早期末～前期前半 図57-250は貝以外による浅い条痕を外面で斜走、内面で横走させ、少量の繊維を含み、口縁に半截竹管による平行沈線文をめぐらせる。茅山式～黒浜式とも異なるが、対岸の金山沢北遺跡が繊維土器を主体にする遺跡であることから、これとの関連を考えてみる必要がある。

縄文中期初頭 252-279・281-292・293-301が該当する。隆帯部に連続爪形文を密施するもので255

～262、270がある。29（図版24-3）、251・255・258・260・262は前期末に盛用されるものより、やや粗らい結節状沈線文を有する。276～284は幅のせまい連続角押文というより、結節状凹線文が施文され、276・277・282は棒或いは半截竹管外面による押圧刻目を付し、口縁下や沈線に沿って下方または上方からの連続刺突文も有する。255・279～292は地文として縄文か結節縄文を有する。以上は九兵衛尾根Ⅰ式である。296・297は原村大石遺跡第5・18号住居址の埋甕炉（未報告）と同一手法とみられ、薄手、焼成堅緻で竹管による深い平行沈線文を持ち、後者は篋切刻目をつける蕨状隆帯文と三角交互刺突文を有する。298～301は沈線文によるものであり、より新しい施文手法である。301は浅鉢口縁部片で類例をみないが、一応、この群に含めておきたい。

縄文中期中葉 302、303は新道式か藤内式でも古い時期のものである。藤内式期と考えられるのは、304～313・389～393であり、280・311～312は平出第3類Aである。

井戸尻期と考えられるものが最も多く、314～388がある。井戸尻期を破片で細分することは無理があるが、あえて細分を試みた。

井戸尻Ⅰ式 314～322・326・327・329～336・341・346～352・357がある。

井戸尻Ⅱ式 293・325は図46-1と同一個体である。337はⅡ式以降と思われる沈線で描く文様で半隆起化したものとなる。

井戸尻Ⅲ式 319・356は台付土器片と思われる。324・328は楕円区画文である。353はこの群かと思われる。有孔鏝付土器386は胎土に透明な石英粒が多量に含まれる赤褐色のもので同様である。

井戸尻期 338・339・342～345・355。縄文・撚糸文の358～384の内367～369は同Ⅰ式、360は同Ⅱ式の可能性が強いと思われる。394～396は竹ペン状施文具による三角押文で伊那谷に多い楕形文系の深鉢口縁である。浅鉢397、有孔鏝付土器387～388は井戸尻期である。

曽利Ⅰ式 398～402がある。底部の沈線の末端が不揃いのものであるが、一応の目安である。

縄文後期 堀之内式と思われるものに403～407、409があり磨消縄文帯を持つものである。408は粗大な縄文で、若干、古い要素かと思われる。409は注口部である。なお、後期土器片は第12号住居址周辺に散布していた。

石器（図68） 打製石斧476～484、磨石斧片485、横刃型石器486～487、粗大石匙488、凹石489～490、敲打器491、石皿片492がある。 （伴 信夫）

イ. 平安時代の遺構と遺物

ア) 第1号住居址（図44-2、45、46-1、69-501-514、71-571・572、図版19、20-3、29-2、3、5～9、11～13）

遺構 第7号住居址を切り、第2号住居址に貼り床をして造られた竪穴住居址である。土層の差が不明瞭で、遺物の出土から本址の存在に気づいた時には東壁の一部を破損してしまっていた。暗褐色土層より検出された住居址で、輪郭線が充分把握できなかった為、黒色土層まで掘り下げた所、覆土である黒色土中に屋根を被覆した「ススキ」と思われる炭化物が含まれており、本址が火災に遭っている可能性が想定でき

た。そこで、この炭化物の広がりを手がかりにして、住居址の輪郭を把握した。覆土は自然埋没の状態を示すが、IV層の黒色土層中から樺木等上屋の建築材と思われる炭化材が多量に出土した(図44-2、図版19-1)。炭化材は住居址中央部を中心にして放射状並び、壁上部から覆土IV層に沿って凹レンズ状に落ち込んでいた。特定の樹種を選んではいないようで、最長1.7m、多くは1m内外で、径13cm以下の針葉樹・広葉樹の丸太材である。これらの炭化材の間には「ススキ」の炭化茎が大量に残る箇所もあった。

プランは東西4.80m、南北4.45mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN67°Eである。壁高(残存高)は北壁で52cm、南壁で36cmあり、北壁付近ではローム層まで掘り込まれているが他では黒色土層で止まっている。カマド付近を除き深さ3~5cmの周溝がめぐる。床面は北西隅付近ではローム層~漸移層中に、中央部付近から南東寄りでは黒色土中につくられ、後者の方が硬い。柱穴はP₁~P₆で、配列は不規則である。P₁は径33×34cm、-25cm、P₂ 34×22cm -24cm、P₃ 37×33cm -24cm、P₄ 28×27cm -36cm、P₅ 45×41cm -32cmをそれぞれ計測する。P₆は貼床下にあり、ローム、ブロック混入黒色土で埋まっており貯蔵穴の可能性が高い。

カマドは南東隅に設けられている。90×120cmの石組粘土カマドで天井石も残る良好な遺存状態であったが支脚石は確認できなかった(図46-1)。

屋外施設は精査したが確認できなかった。

遺物 カマド周辺では通例どおり遺物出土量が多い。P₁と南壁間の逆三角形堆土中より灰釉皿が二個体(508・512)出土したが、いずれも床面から30cm前後浮いており、壁上に置かれたものが転落したものかも知れない。東壁中央部直下の床面から505が出土しているほか、カマド周辺の床面と考えて良いレベルでの出土土器が多い。刀子(571)が西壁中央寄りから、ピンセット状の鉄器(572)がP₄と北西壁間の床面からそれぞれ出土している。いずれも特に設置された状況を示してはいない。(伴 信夫)

出土遺物は決して豊富とはいえませんが、本遺跡中ではもっともまとまっており、埋没状態からして生活什器類はセット関係にあったと考えられる。土師器杯・甕、灰釉陶器、鉄器が出土している。まず目立つのは甕類がC類1個体(506)しか保有されていないことで、これに対し供膳形態の器種は質・量とも一応揃っている。土師器の杯は、量的にはC・BⅡ類が優勢で図示し得たものの大半を占める。中で類型に含まれなかったのは浅い酒杯状を呈する505である。体部はロクロピキによる成形らしく、内外面ともナデ調整される。高台部分も同様の調整をされ、端部を丸くつくっている。胎土は砂粒を若干多く含むが他器種と大差はない。体部内・外面とも煤状或いはより粒子の大きい炭化物が付着し、高台部にも及んでいる。灯明皿として用いられた可能性が高いが、皿形土器が転用された可能性もある。形態的に似た皿形土器は大熊道上(註6)・新井南(註7)・手洗沢(註8)・足場(註9)など近隣各遺跡に少量ずつつながりみられるが、足場・新井南遺跡のように黒色土器に同形態がある場合が少なくない。いずれの例も505程浅くはないが、一括して考えてよいのではないだろうか。

灰釉陶器には椀・皿・瓶がある。椀・皿では507~512まで全て篠岡窯の折戸53号窯期の製品である。512はその初期、507・510は後半期にそれぞれ位置づけられるらしい。胎土は暗灰褐色、釉薬は白っぽく見栄えはしない。瓶は底部のみ出土しているが、いずれも東濃の産らしく外面は回転ヘラケズリされている。

金属製品は鉄器が2点出土している。571は刃先端が若干欠損する可能性がある刀子で、全長15.3cm、基部付近の最大巾1.0cm、背の厚さ0.5cm、重さ19.1gを計測する。基部背面は抉りが入るが、恐らくは袋

状の柄に装着されたものであろう。572は全長8.0cm、基部巾1.2cmでピンセット状を呈する。厚さ1mmの鉄板を素材として、厚さ2mm、巾5mmの角張った中空のパイプをつくり、それを折り曲げて器体を造っている。先端部は幾分鋭く、内側へ若干折り曲げられており、ものをつまむのに適する形態になっている。現在も用いられている「毛抜き」にそっくりで、相似た鉄器は、平安時代に属する杉の木平B遺跡3号路址(註10)、中世のものとする城平遺跡3号地下倉(註11)より出土例がある。

本址は出土した灰釉陶器から判断して平安時代後期に属する。(百瀬長秀)

イ) 第4号住居址(図46-2、69-515-526、70-527、71-570・573、図版20-1)

遺構 暗褐色土層で検出された方形の竪穴住居址で、縄文時代中期中葉の9号住居址を切り、貼り床している。東西4.45m、南北4.04m、主軸方向はN64°Eである。覆土は炭片・炭粉を含んだ暗褐色土で、土層差が判別しにくく、床面付近まで掘り下げた時点でようやくプランを確認し得た。このため壁高はつかめなかったが、残存部分は北壁で3cm、東壁で5cmである。床は黒色土中につくられており軟弱で、9号住居址上の貼り床部分も部分的に堅さがある程度である。

カマドは東壁中央部に築かれ石組粘土カマドである。石は散乱し被覆した粘土の一部と思われる焼土混入褐色土も広範囲に散っていて崩壊状態であった。

柱穴は4個確認したが主柱穴かどうか疑問がある。P₁は径57×55cm、-36cm、P₂は50×47cm -23cm、P₃は70×51cm -30cm、P₄は40×55cm -44cmをそれぞれ計測する。尚P₃は鉄製品(573)が出土しており、灰溜め又は貯蔵穴の可能性もある。

遺物 特殊な出土状態を示すものはないが、図示しえたものの大半は床面遺物であり、カマド周辺に集中する。須恵器の甕(527)は、1・2・7・10号各住居址と本址及びその周辺に散乱していたが、本址カマド付近よりその1片が出土しているので本址に属するものと考えておきたい。(伴 信夫)

さて、出土遺物には土器・石器・金属器がある。

土器では土師器の杯・甕、須恵器、灰釉陶器があるが、土師器甕の占める比率が高い事と須恵器の大形甕を有する事が特徴的である。土師器の杯はAa・BI類に加えて黒色土器B類があり、BⅡ・C類を欠く。甕は個体数も多く器種も多様だが、主体となるものはC・E類である。518・519はC類だがいずれも口縁部の屈曲部直下より内面にヘラケズリがなされている。C類は本址では完形品がなく、器形・技法とも完全には把握できないが、さほど深くない砲弾形となるかもしれない。又内面のヘラケズリは普遍的に行なわれた可能性もある。522は本遺跡では唯一のF類で成形にロクロを用いており、胎土も独特の黄褐色を呈するなど他類型に比べて独自である。他地域との関連が考慮される。527は須恵器の大形甕で、口縁端部は外反し頸部はロクロで成形され施釉される。体部は巻き上げ成形のあと叩きしめられており、内面には板状工具の痕跡が、外面には格子目状のタタキメ痕跡が顕著に残される。体部は上半のみ施釉されるらしい。

石器は砥石の破片が1点出土している。570は流紋岩製で表面・側面とも使用されているが裏面は自然面のままである。

金属器は鉄器が1点出土している。571がそれで厚さ2mm、現存最大巾9mmであるが、刃はつけられていない。刀子の基部もしくは茎部に相当するかも知れないが詳細は不明である。

出土遺物からみて平安時代後期に属する。(百瀬長秀)

ウ) 第6号住居址 (図47-1、70-528~535、71-574 図版29-1・10・14)

遺構 調査範囲内の北東隅、遺跡の立地する緩傾斜面から急傾斜面へ移る付近にあり、第11・10号住居址を切っている竪穴住居址である。黒色土中に検出され、その輪郭は土質の差が不明瞭な事と斜面のためレベルの低い側の壁が曖昧になる事からして確認が困難であったが、住居内の埋没土の方がやや褐色がかっており、この差を手がかりとしてプランを把んだ。斜面である点からみても比較的短期間に埋没したもののようである。推定3.60m×3.60mの隅丸方形を呈し、主軸文向はN70°Eとみられる。

床は黒色土中につくられた事もあって軟弱で、固められた様子はうかがわれず、カマドの周囲のみがはっきりと把えられただけである。壁高は北壁で60cm、東壁では30cm程度でほぼ垂直である。柱穴等の屋内施設は全くつかめなかった。カマドは南東隅に設けられた石組粘土カマドである。天井石が1個残っているのみで大半は崩壊してしまっただが、焚き口付近から天井石下部にかけて火を受けた跡が顕著にうかがわれる。このほか南壁東隅近くの壁ぎわ床面に径50cm程度の浅い不整形の凹部があり、粘土・焼土・礫等が集中していた。屋外施設は検出できなかった。

遺物 特記さるべき出土状態を示す遺物はないが、灰釉の皿(533)がカマドの天井石の下より、鉄製紡錘車がカマドの北東、壁ぎわより出土している。

遺物の出土量は少ないが、土器と金属器があり、土器には土師器の杯・甕、黒色土器、灰釉陶器がある。土師器の杯はBⅡ・C類を欠き、黒色土器の比率が高い。甕はA～Cの3類がある。532は鮮橙褐色の小形甕で口縁屈曲部を把厚させる。B類に入るが、頸部が長めである点などはD類に接近している。灰釉陶器は皿のみで、折戸53号窯期のものばかりである。生産地は篠岡窯と東濃窯とがある。

金属器では鉄製紡錘車が1点出土している。574がそれで、はずみ車部分は厚さ3～4mm、やや四角ばった整円形である。錆化のため十分な観察ができないが、板状の鉄材を切断・整形したものかと思われる。軸貫通部分は図右側から左側へとふくらんで歪んでしまっている。整形されたはずみ車に貫孔したものと思われるが、その歪みからみて打撃を加えて貫孔するような方法を用いたようである。軸ははずみ車と接合する部分で径5mm×6mmの方形断面を呈するが、末端部分では径4mmの円形断面となる。本来方形断面の棒状の鉄素材を用い、太さを調節して作ったものではなからうか。全長(現存)25.7cm、重量51.1g、はずみ車の径5.1cm×5.4cmを計測する。(小林正春・百瀬長秀)

エ) 第7号住居址 (図45、70-536-541)

遺構 第2号住居址が埋没した上に造られた竪穴住居址で、第1号住居址・土壌4にそれぞれ切られている。1号住居址の屋内の発掘を進めつつ屋外施設を検出しようとした所、黒色土中でプランを確認した。推定径5.30m程度の方形もしくは隅丸方形のプランをもつ竪穴住居址で主軸方向はN60°Eと考えられる。プランは南壁付近では明瞭であったが土壌4号に切られる付近から不明瞭となった。このため西壁はついに確認できず推定線のみ示しておいた。屋内の土層は自然埋没状態を示している。

さて検出面のみならず床面も黒色土中であり、全体として軟弱であったことに加え、住居址の大半が1号住居址によって壊されてしまっているため、柱穴をはじめとする屋内諸施設は一部分が把握されたにすぎない。壁はほぼ垂直で南壁高15cmを計る。又南壁中央部壁ぎわの床面に、1.2×0.6m程度の広がりをもってロームが貼られている。カマドは東壁の東南隅に築かれているが、このカマドと先記したロームを貼った

部分との間に、径30～40cm程の平板な礫が2枚並置されている。使用目的等は不明である。カマドは石組粘土カマドで、その範囲は大略つかめたが、石がほとんど抜きとられており、残存する粘土の中に石を配した痕跡を示す黒色土部分が何ヶ所か確認された。カマド内及其周辺は焼土が散布している。尚、1・7号住居址ともカマドが同位置に配されており、住居の建て替えに関して興味あるデータになろう。

遺物 特記すべき出土状態を示す遺物はないが床面出土遺物の一部を示すと、杯536が第1号住居址・2号住居址に接する付近より、同537はカマド焚き口とロームを貼った付近より出土したものである。

出土遺物は貧弱で土器のみである。土師器の杯・甕、黒色土器、灰釉陶器がある。やや目立つのが土師器杯Abの2個体(536・537)で、体部下半～底部のヘラケズリは、器体を手持ちにして時計方向に回転させながら行なっている。胎土は粒子がやや粗く、砂・鉱物粒子を比較的多く含む。山梨県～南関東地方には同様の器種が存しており(註12)、関連が予想される。又、杯BⅡ・C類が欠如する。甕は2点のみ出土している。540は色調・胎土・調整技法等が一致するところからみて、C類の底部になるものと思われる。灰釉陶器は皿(541)のみで、篠岡窯産の黒笹89号窯期のものである。

出土遺物からみて平安時代後期の住居である。

(小林正春・百瀬長秀)

オ) 第10号住居址(図47-1・2、70-542~548 図版29-4)

遺構 第11号住居址を切り、第6号住居址に切られている竪穴住居址である。第6号住居址とほぼ同範囲をプランとして築造されたらしく、カマド部分を除けばほとんど残存部分はない。本址カマドは良好な遺存状態であったが、焚口付近の袖石が崩されており、火床上には礫の流入がみられることなどから、第6号住居址築造によって破壊されたものと判断、先後関係決定の根拠とした。プラン全体の把握は困難であったが西壁ぎわの床にカマド付近より粘土が帯状に貼られており、ここから西壁を推定した。規模不明ながら方形もしくは隅丸方形プランの竪穴住居址で、北壁壁高26cm、主軸方向はN3°Eを推定する。北壁西隅のカマド付近に黄白色のやや粗い粘土で貼り床がみられる以外は屋内施設は全く揃えなかった。

カマドは石組粘土カマドで、やや偏平な自然石を立て粘土を間隙につめて袖とし、同様な石を平置して天井石としている。天井石付近の方がつめられた粘土が良好に残っている。カマド内はよく焼成をうけ、焼土・灰の遺存量は多かった。出土遺物を検討すると6号住居址とは時間差がほとんど認められないが、本址と比較して、主軸方向が若干ずれること、カマドの位置が対角線上になること等、興味ある関係を示している。

遺物 やはり特記すべきものはないが、カマド焚口付近より545が、西壁ぎわのローム貼床から543がそれぞれ出土している。

出土遺物は貧弱で、土器、それも土師器のみである。杯はややまとまっている。Aa・BI類とBⅡ・C類とは約2:1くらいの割合となり、本遺跡では後者の比重が高い方である。甕はC・D類が出土しているが、547はつくりが雑でややゆがんでいる。

第6号住居址に切られているが遺物には大差がないため、近接した時期の住居址であろう。平安時代後期のものと考えられる。

(小林正春・百瀬長秀)

カ) 遺構外出土の遺物 (図71-549~569)

遺構外遺物のうち特記すべきもの若干をあげる。550は土師器の杯の一種かと思われるが、形態的にはむしろ鉢形に近接する。553は黒色土器B類であるが体部下半~底部の外周付近にかけて器体を時計方向に回転させた回転ヘラケズリを用いている。杯ではAb類を除いて唯一のケズリ技法を用いる個体であるが、高台の断面形は灰釉陶器の高台に近似しており技法を含めてその影響を受けたものとみられる。甕はC類が圧倒的だがE類の羽釜も少なからず存する。557はC類の底部と思われ、内面には器体を逆時計方向に回転させて板状工具を螺旋状に連続押圧させた痕跡が残り、外面には板状工具を時計回りの順序で用いたハケメの痕跡が明瞭に残る。灰釉陶器のうち椀・皿類は大部分が篠岡窯の製品に近似している。図示しないが小形の瓶が1点出土しており、これも篠岡産のものと近似する。567は器種不明で茶褐色の厚い釉薬がかけられる。この他ふいごの羽口の破片が1個体分出土している。(百瀬長秀)

ウ. 土 壙

ア) 土壙1 (図41-3)

漸移層からロームに掘り込まれており、径78×72cm、深さ47cmの円形を呈する。覆土は3層からなり、上層から、炭粉・焼土粒混入の黒色土、暗褐色土、ローム混入黒褐色土となる。遺物は縄文中期中葉土器片、4片のみである。(根津清志)

イ) 土壙2 (図44-1)

黒色土中に確認された長方形の土壙で、径290×209cm、深さ55cmを計る。人頭大の礫多数を含む黒色土で埋まっており、上部より灰釉陶器・土師器・縄文土器の各々小片、若干が出土している。平安時代後半の墓壙かも知れない。(原 芳明・伴 信夫)

ウ) 土壙3 (図44-1、57-248)

黒色土中に掘り込まれ、暗褐色土を覆土とする円形の土壙で、土壙2に切られている。径80cm、深さ62cmで、遺物は248ほかが出土した。縄文中期、井戸尻期の土壙と思われる。(原 芳明・伴 信夫)

エ) 土壙4 (図45、70-527・536)

第2号、7号住居址の覆土中に検出された。両者を切っており、黒褐色土が落ちこんでいる。プランは長楕円形で193×125cm、深さ30cm、縄文中期中葉の深鉢形土器片、平安時代後半の土師器杯(536)・須恵器甕(527)のそれぞれ一部分等が出土しているが、いずれも周囲の住居址に由来する遺物であろう。本址は輪郭線を判断の上発掘したが、誤認の可能性もある。(伴 信夫)

オ) 土壙5 (図47-3、49-28、図版24-7)

黒褐色土中に検出された小判形の土壙で底はたらい状を呈し、径127×98cm、深さ46cmを計る。傾斜地に

造られており一方の壁が高くなっている。覆土は2層に分かれ、上層は黒色土、下層はローム粒・ロームブロック混入黒色土で、完形に復元できた深鉢28が拳大の礫とともに土壌の中央、底より20cm浮いて潰れた状態で出土した。28は口径15.0cm器高22.4cm、第2号住居址出土の深鉢2と同器形を呈する。井戸尻Ⅱ式とみて良いと思われ、土壌自体もこれから判断して縄文中期中葉のものと思われる。

(小林正春・伴 信夫)

カ) 土壌6 (図43-4)

暗褐色土層に掘り込まれた黒色土を覆土とする土壌である。120×74cm、深さ17cmの長楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

(伴 信夫)

キ) 土壌7 (図47-4、57-249)

312×246cm、深さ80cmの大規模なロームマウンドである。自然堆積の黒色土混入礫群が周囲に広がる中、中央に不整形で礫混入褐色土のマウンド部分があり、その周辺及び下部に黒色土が入り込んで地層が逆転している。壁部分は、下部はロームでしっかりしているが上部は軟弱で不明瞭である。底は軟弱で凹凸があり、人為的なものとは考えにくい。遺物は北西端の覆土上層・暗褐色土中より、縄文中期初頭の深鉢破片249が出土したのみである。縄文前期以前に南西風を受けてできた倒木の跡ではなかるうか。

(岩佐哲男・伴 信夫)

ク) 土壌8 (図47-5)

第2号住居址に接するロームマウンドで、210×185cm、深さ54cm、東半分にロームが入り込む。西もしくは南西風を受けてできた倒木によるものではないか。遺物は出土せず時期不詳である。

(小林正春・伴 信夫)

5) ま と め

ア、縄文時代の遺構と遺物

ア) 集落と土器 (図35・37)

縄文時代の住居址は中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式1軒、中期中葉藤内Ⅱ式1軒、井戸尻Ⅰ式3軒、井戸尻Ⅱ式1軒、井戸尻Ⅲ式3軒が検出された。

縄文中期前半の住居址の選地は、台地上の平坦部が近くにありながら利用せず、段丘崖の斜面や裾部に立地することは頭殿沢遺跡に類似している。

縄文中期初頭の遺跡は本遺跡を中心として半径1km前後内に密集した遺跡群を構成している。九兵衛尾根Ⅰ式を主体に同Ⅱ式もある大石遺跡、同Ⅰ式を主体とする判の木山西遺跡、同Ⅱ式を中心とする頭殿沢遺跡がある。周辺の遺跡が充分調査されていない段階で、云々することは論外かも知れないが、テリトリ

一内での集落移動範囲を示唆しているのではないと思われる。

井戸尻期の良好な遺跡として居沢尾根遺跡があり、約2km離れる。隣りの判の木山西遺跡にもあり、この遺跡とは同時に居住していた時期もあるかも知れないが、縄文中期前半までは、中央道の通過する山麓台地の縁辺部を好んで立地しているようである。曾利期、特に曾利Ⅱ式以後は多少上って、台地中央部に近い選地をするようである。微地形の好みが変化するように思われるが、どのような背景によるものであろうか。

集落の復元は用地外未調査のため限界はあるが、調査範囲内で考えると、第11号住居址の埋甕炉は藤内の色彩も残すもので、井戸尻Ⅰ式でも古く第3号住居址は深鉢6が荒神山遺跡第4号住居址の一括出土土器（註13）に類例を求め得るとしたが、同第4号住居址は井戸尻期に近い新しい要素を持つことから、別形式として分けた。然し、第3号、11号住居址の併存した可能性は残される。住居地の選地、規模も類似点が多い。第2号旧住居址、第9号旧住居址は井戸尻Ⅰ式の併存の可能性が考えられる。井戸尻Ⅲ式期の最終段階という以外では組合せを取りにくい、第9・12号住居址が覆土或いは周辺に曾利Ⅰが含まれること、機能はちがっても埋設土器を持つ点から併存した可能性は強い。

本遺跡の縄文中期中葉の住居址には、他地域から搬入されたと考えられる土器がある。新潟方面との文化交流現象が本遺跡でも、かすかに見られる。藤内Ⅱ式とした第3号住居址準床面出土の深鉢片84と同一個体とみられる122がある。この類例は荒神山遺跡93号住居出土が胴部無文となるのに対し、胴上半部にも施文される点で小異はある。同址は藤内Ⅰ式期であるが、その覆土上層に廃棄された藤内Ⅱ式に伴うものである。岡谷市海戸遺跡第42号住居址例も、藤内Ⅱ式に伴出する（註14）。井戸尻期へ入ると、この系統の資料は増加する。塩尻市焼町遺跡第1号住居址例（註15）、井戸尻Ⅰ式期の小段遺跡第4号住居址例（註16）、井戸尻Ⅱ式期荒神山遺跡102号住居址例（註17）、井戸尻Ⅱ式期の本城遺跡第3号住居址出土例（註18）があるが、この井戸尻Ⅱ式とされるものは最近の武藤雄六氏の編年で井戸尻Ⅱ式を欠番とされる考えに立てば、いずれも井戸尻Ⅰ式期に分類されるものの住居である。岡谷市上向遺跡例（註19）は本城例と類似点が多く、この時期のものであろう。井戸尻Ⅲ式期の本遺跡第12号住居址出土の深鉢25は、色調・胎土・隆帯部の文様構成からみると、上記の系統をひくものと考ええる。しかし、隆帯による区画内を、先端があまり鋭くない竹筥状施文具による連続三角押文を横走させている点で、馬高系との差異を感ずる。この三角押文は伊那谷に比較的多くみられ1例として丸山南遺跡第25号住居址例（註20）があげられよう。いずれにしても、この土器は類例がなく、現在のところ馬高式の影響下で成立した、馬高式文化圏の周辺部の土器であらうか。

次に東海系の土器と思われるものがある。第9号新住居址準床面出土の深鉢片205～207で井戸尻Ⅲ式期と考える住居である。薄手で口縁部に三角押文を持つものであるが、清水ノ上貝塚第3群2類A（北屋敷式に比定）（註21）と考えられ、在地の土器とは異り、明らかに搬入されたものである。他に同旧住居址出土の深鉢口縁片154は、同貝塚第3群2類Cに比定されるのではないかと考えている。

南信での類例を求めると、駒ヶ根市大城林第31号住居址例（註22）、丸山南遺跡第41号住居址例（註23）、南原遺跡第4号住居址例（註24）、喬木村伊久間原遺跡第20・28号住居址例（註25）があるが、これらは井戸尻Ⅱ式に伴うものである。

上記の場合は、本遺跡での組合せとほぼ一致しているが、飯田市宮城遺跡2号住居址例（註26）、岡谷市海戸遺跡53号住居址例のように、藤内Ⅱ式に伴出する類品もあるので、十分な検討をしてみたい。現在の

ところ、井戸尻期に東海の北屋敷系の影響があることを指摘しておきたい。

(伴 信夫)

イ) 石器 (図34・35、表12・13)

判の木山東遺跡から出土した石器は総点数 111 点を数える。その器種別・石材別数は表13に示してある。本遺跡からは縄文中期の住居址が9軒検出されているが、住居址数にくらべ石器の出土量は少ないと言える。以下器種別に石器の概略を述べる。

A. 石鏃

6点のみの出土である。3点は9号住居址、5号住居址、2号土壌から各1点を出土した。石材は444のチャート製をのぞきすべて黒耀石製である。形態は、基部に抉りのあるものと、有茎で返しをもつものに大別でき、基部に抉りのあるものは、423、444のように細長のプロポーションをもつ鏃と、446のズングリした鏃の二種類に分かれる。有茎石鏃は2点とも側辺を意識的に鋸歯状に加工しており、返しの部分がつく。475は先端から胴部中央にかけてややふくらみをもつ二等辺三角形を呈し、ふくらみもちながら大きな返しの部分へとつながっていく。ちょうど湿地にはえる「おもだか」の葉を連想させる形である。長さ3.15cmの大形品で、出土石鏃中の最優秀品である。全体に調整はしていねいにされている。

B. 石匙

3点出土している。いずれも石匙としてはやや大ぶりであり、加工調整も念入りに行われていない。410は表裏に第一次剝離面を残し、つまみ部、肩部、刃部に簡単な打撃を加え調整しているだけである。411も第一次剝離面が裏面に認められ、表のつまみ部には自然面が残る。第一次剝離によってできた鋭いエッジを刃部にあてている。製品になった後火災にあつたらしく、両面に焼けこげと思われる黒く変色した部分があり、裏面はほぼ全面が黒く変色している。426は原石からはがされた剝片そのままを使用しており、一面はすべて自然面を残し、裏面は刃部とつまみ部の抉り部分に数回打撃を加えたのみで、未製品とも思われる程雑な作りである。3点とも刃部に使用痕と思われる痕は認められない。

C. 剝片石器

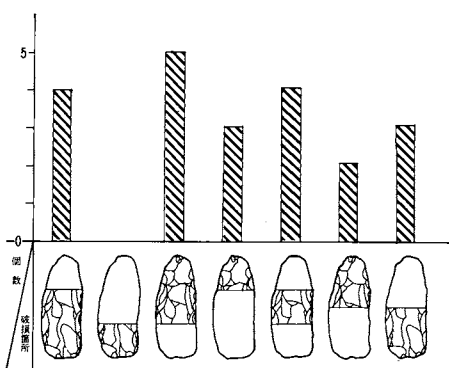
黒耀石の剝片を用い、1辺あるいは2辺に簡単な調整を加え刃部としているものを剝片石器とした。5点出土しているがいずれも3cm以内の小さな剝片を用いている。刃部両面を調整してあるのは424のみで他は裏面に第一次剝離面をもち、一面のみからの調整で刃部を作っている。スクレイパー的な使用のための石器と見ることができよう。

D. 打製石斧

出土点数は41点あり、本遺跡より出土した全石器の40%弱を占めている。このうち完形品21点、破損品20点である。形態別に見ると、I B-1点、破損品で刃部の形はわからないがI類に属するもの2点、II A-8点、II B-10点、II C-3点、刃部破損のためA・B・Cいずれに属するかわからないがII類に属するもの14点、III A-1点、III C-1点に分けられる。側縁が平行であるいわゆる短冊形の打製石斧が35点

とほぼ85%を占めているのがわかる。短冊形で刃部の違いを見ると、直刃8、円刃10、斜刃3と直刃、円刃が大部分を占める。石材は緑泥片岩類・硬砂岩が多用され、石材の種類は出土石器の中で一番豊富である。

ほとんどの打製石斧の側縁は刃潰しが行われており、全体的に丁寧な剝離がされていると言える。自然面を残しているものが6点ある。414、452、477に見られるように頭部の一部が残るものと、418、476、484に見られるように片面のほぼ全面に自然面が残るものに大別できる。自然面が残る打製石斧については、小田静夫氏が「どるめん」10号(1976)「縄文中期の打製石斧」の中でふれられており、「し



第12表 打製石斧の破損 (白ヌキ部分が破損箇所)

いて特徴を言えば、自然面のなめらかさと、円礫のカーブを必要とした石器と考えられないこともない。」と打製石斧の1つの必要条件として推論しているのは興味深い。

検出された打製石斧のほぼ半数は破損品である。破損箇所を、頭部・胴部・刃部に分けてみると、それぞれの個体数は表の如くなる。刃部がないもの11、胴部のみ4、頭部のみ6、刃部を欠くもの数が多い。「欠損した刃部はその場所に捨てられ」て、柄についている部分のみ部落内に捨てられたため(小田静夫・前掲載書)からであろうか。打製石斧の大きさは、一番数の多い短冊形-II類一で見ると、長さ10~15cm、巾3.5cm~5.5cm、厚さ1~2cmの内にいるものが標準型としてとらえることができる。483は胴部のみ破損品であるが、巾7.9cm、厚さ1.7cmを数え、復元される大きさは出土打石斧中最大のものとなる。

使用による痕跡は413に顕著に見ることができる。胴部中央から刃部にかけての側縁と、刃部の表1cmから裏面2cmにかけ研磨されたようになめらかになっている。他の打石斧には使用痕跡はほとんど見られず、破損品の刃部についても同様である。

E. 横刃型石器

打製石斧に次いで出土量が多く23点を数える。形態別にあげると、I A類は442、455、456、457、497、他の9点、I B類は472他の4点、I C類は471 1点、II A類458他の4点、II B類486、487、他の4点、III C類498 1点である。I類の合計が14点と一番多く、直刃の横刃型石器が多用されていたと思われる。II類の外湾刃をもつものは8点、円刃をもつもの1点である。石材は緑泥片岩類と硬砂岩がほとんどを占め、粘板岩、砂岩類も若干用いられている。横刃型石器に共通している点は、礫から剝離された時の鋭いエッジを利用し、簡単な調整を加えたのみで使用されていることである。使用痕がはっきり認められるものはない。

F. 大形粗製石匙

形態的には、420、443、453、488に見られる縦長のものと、454の横長のものの二形態に分かれる。いずれもやや薄めの身部をもち、側縁、刃部、つまみ部に簡単な調整がなされている。その中でも454はプロポジションも整っており、石材も堅い質のものが使用されている。420は一見打製石斧状であるが頭部4

分の1程の所に両側から浅い抉り込みが入られており、つまみ部が作られているので、大型粗製石匙と分類したが、刃部に顕著な磨耗が見られ、又、他の縦長石匙にくらべ細身でありすぎるので、後に述べる、石ノミの範ちゅうに入るものかもしれない。他には使用痕跡はみとめられない。

G. 磨製石斧・石ノミ状石器

磨製石斧は417、431、441の3点のみである。417は小型の定角式の磨製石斧、431は大型の定角式磨製石斧の頭部のみ、441は乳棒状石斧の胴部から内部が残っているものである。他に磨製品として421、440、459、485の4点があるが、3点ともその形状からして磨製石斧とは言い難く、例えば木を割る時の割れ口にあてるくさびを連想させ、石ノミ状石器として、磨製石斧とは別器種に考えた。421は胴部が太めで丸い厚めの刃部が研ぎ出されている細身のもの。440は上半分に剝離面を磨いた痕がのこり、全体によく磨かれている。459は薄い身部をもち、後に他グリッドから出土していた破片とつながり第35図に見られるように細長いプロポーションをもっている。485は刃部より急に身が太くなり、刃部裏面は湾曲している。

H. 凹石・磨石

凹石は9点出土した。489、490のグリッド出土をのぞくと他の7点は住居址にともなうものでそのうち半数にあたる4点が9号住居址（新）より出土している。2、3、12号住居址からは各1点ずつの出土である。形は同一のものはほとんどなく、自然石をそのまま使用している例が多い。416、462、489は八ヶ岳泥流で熱変化をうけ、赤褐色に変色した転石に穴をあけそのまま使用している。422、460、461も転石をそのまま利用しているが、凹みのある面と側縁部に若干の磨り痕が見られる。460、463、473には側縁に顕著な磨痕が見られる。凹みは両面に各1つずつあるものがほとんどである。両面に2ヶ所ずつ凹みのあるものは473 1点のみ、463は片方のみ2ヶ所、490は3面に凹みがあり、そのうちの1面にのみ2ヶ所あけてある。

磨石は3点出土している。464、468、491である。いずれも円形を呈し、全体に磨痕が認められる。491は花崗岩製のため風化が進んでいる。464は9号住居址（新）からの出土であるが、50cm程はなれた箇所から465の石皿がほぼ同レベルで出土しており、石皿とのセットが考えられる。

I. 石皿

9号住居址（新）より2点、12号住居址より1点、遺構外より1点、計4点出土した。465は完形、474、492は半欠、486は4分の1のみ残っている。465は長軸38.2cm巾29.0cmの大形品であり、炉のそばにふせた状態で発見されたことも考え合わせれば、日常使用していた姿で検出されたといえる。裏面には大小百二十数個の穴があけられており、蜂巢石としての機能もあわせてもっていたものと考えられる。474・492は、泥流で熱変化をうけ全く茶褐色に変色している安山岩で、使用できたかどうか疑問を持つぐらい石質が悪い。474をのぞき他の3点は凹部が深い。

J. その他

496は尖頭器状の打石器である。硬砂岩製で、半分に分れていたのが接合された。打石斧の頭部と思わ

れていたものである。埋没した後の状態の差であろうか、頭部と基部は茶褐色と灰色を呈し色調の差がある。先端部・側縁部に使用痕跡は認められない。

493 は平安時代の第6号住居址より出土した。転石の平坦な面に溝状の痕が無数につけられている。溝の幅は広いもので約2mm、せまいものは1mmかそれ以下で、溝の長さは9cmが一番長く、5cmが標準的な長さである。溝の深さは1.5mm程度のものが一番深く三本あり、他は0.5mm以下の浅いものである。溝の状態から見て、石器類でつけられた痕とは考えられず、おそらく金属器を研磨したものか、金属器によってつけられた痕と思われる。石材は輝石安山岩である。

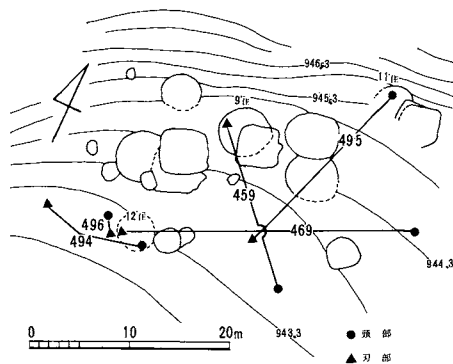
K. 接合された石器

第34図 494～497、459、469 は接合できた石器である。494、495、469 は打製石斧、496 は石槍状石器、497 は横刃型石器、459 は磨製石ノミである。497 の横刃型石器が同じ12号住居址内から検出された2片が接合したのみで、他はすべて住居址検出のもの、グリッドから検出された破片が接合したものである。494 は側縁の片側にのみ挟りがある打製石斧で頭部の一部が破損している。頭部は12号住居址内から検出され、刃部はほぼ同一標高にある、AH-58 グリッドより出土した。約10m程はなれた地点である。495 の打製石斧は頭部が11号住居址から、刃部は南約20mはなれた AK-48 グリッドから検出されている。約2mの比高差がある。496 の石槍状石器は、2片とも12号住居址の西方から出土し、約1m50cmはなれ、刃部が下方より出土している。比高差はほとんどない。459 の磨製石ノミは頭部が9号住居址にあり、刃部は東南約17m、AM-47 グリッドから検出された。比高差は約1mある。469 の打製石斧は刃部が12号住居址に、頭部は比高差約1m上方、東の AK-40 グリッドから検出された。約29m離れている。自然面が多く残り、側縁の調整も一部中途半端な状態で、製作途中の打製石斧であろう。

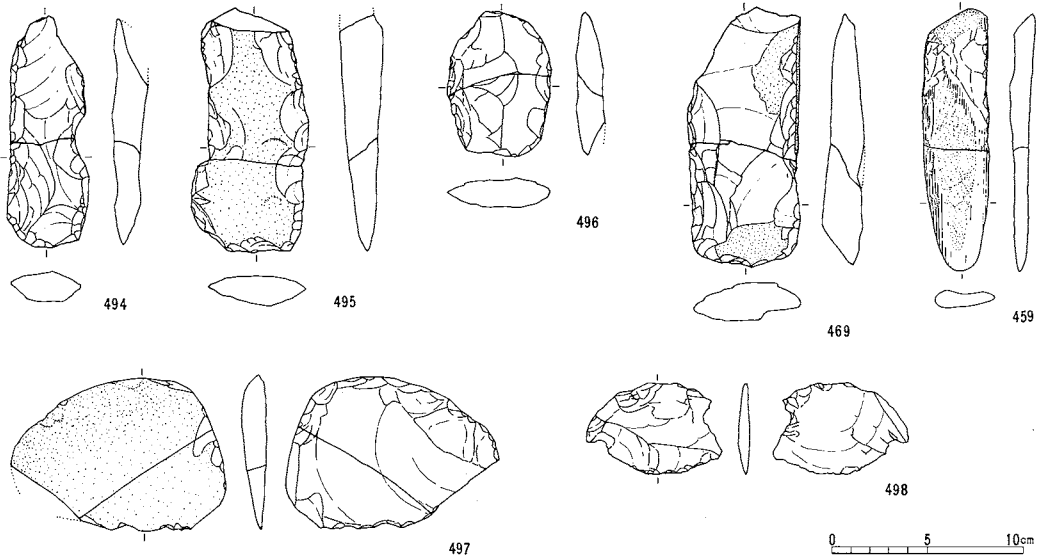
接合された石器のうち住居址内より検出された部位は、頭部が2点、刃部が2点であり、少ない資料であるが、住居址内に残された石器の部位に一貫性は認められない。又、接合された2片の距離差が最高29m、最低1m50cm、比高差は最高2mから同一レベルまで、2片の離れている方向も一定性はない。これらのことを考え合わせると、破損した石器の一方が人為的に他の場所に破棄されたのではなく、遺跡が傾斜地に立地していることも考えあわせると、長い年月の間の凍上、震動、土の移動等により、一方が流されたと考えた方が妥当であると思われる。この時期における打製石器類が接合された例はほとんど見ることができないが、今後、新資料が増加し、また、石器各部位の出土状態、出土位置等の分析ができれば、破損した石器の廃棄のされ方等が解明できるかも知れない。

L. 石材

本遺跡より出土した石器の石材別石器数は第13表にまとめてある通りである。最も多用されている石材は緑泥片岩



第34図 接合された石器の位置関係図



第35図 接合された石器実測図

で31点、次が硬砂岩の27点であるが、緑簾石、石墨、点紋岩、滑石が含まれている緑泥片岩をあわせると、39点が緑泥片岩類となり、石器全体の35%を占めていることがわかる。緑泥片岩類、硬砂岩に続いて多く用いられている石材は輝石安山岩で16点、黒耀石10点と続く。礫自体を加工している凹石・磨石・石皿は全て輝石安山岩が用いられているが、礫から剥片をとり、その剥片を加工し石器とする、打製石斧、横刃型石器、大形粗製石匙等は石材に統一性がなく、各種の石材が使用されている。石鏃は黒耀石製がほとんどであり、磨製石斧、磨製石ノミはすべて緑泥片岩が使用されている。

石器名	石	石	剥片	打製	横刃	大形粗製	磨製	磨製	凹	磨	石	石	石	器	合
石 材	鏃	匙	石 器	石 斧	型 石 器	石 匙	石 斧	石 ノミ	石	石	皿	状 石 器	種 不 明	計	
黒 耀 石	5		5												10
チ ャ ー ト	1														1
硬 砂 岩		1		14	6	2							1	3	27
緑 泥 片 岩				13	10	1	4	3							31
緑簾緑泥片岩				3											3
石墨緑泥片岩				1	1			1							3
点紋緑泥片岩				1											1
滑石緑泥片岩				1											1
粘 板 岩				1	2										3
硅質粘板岩		1		2	1	1									5
砂 岩				1	1										2
硅質砂岩				4	1	1									6
輝石安山岩									9	3	4				16
ホルンフェルス		1			1										2
合 計	6	3	5	41	23	5	4	4	9	3	4	1	3		111

第13表 判の木山東遺跡出土石器石材別数

石質の鑑定は信州大学教養部、田中邦雄教授にお願いした。氏のご指摘によると、輝石安山岩、黒耀石は遺跡のある八ヶ岳山系のものであるが、他の石材はすべて、赤石山系から産出される石材とのことである。礫そのものを使用する石器は遺跡の近辺で得られる石材を使用し、剥片を加工調整する石器は、他地域より搬入していたことがわかる。剥片石器に適した石材は遺跡近辺にはなかったことになり、石を得るために当時の人々はかなり広範囲の地域と交易していたであろうことが知れ、さらに石器の製作にあたりかなり石の吟味をしていたこともうかがい知ることができる。

M. まとめ

以上出土した石器について器種別に概述し、接合された石器、石材等にもふれた。縄文時代の中期中葉から末葉にかけての石器組成のあり方として、植物採集活動関係の石器が占める割合が高くなることが指摘されているが、本遺跡にもそれが言える。全体の出土石器に対する器種別の割合を見ると、打製石斧37%、横刃型石器20%、凹石、磨石11%、大形石匙5%、石皿4%、合計77%。約8割が植物採集関係の石器で占められていることがわかる。これらのうちでも打製石斧の占める割合が高く、打製石斧が多用されていたことがうかがえる。住居址の時期差における石器の差はないと言えよう。強いてあげれば、9号住居址(新)に石器の集中がみられ23点、中期初頭の8号住居址5点、井戸尻I期の11号住居址3点と、縄文中期初頭から中葉の古い時期にかけての住居址よりの石器出土量が少ないことであろうか。(青沼博之)

イ、平安時代の遺構と遺物

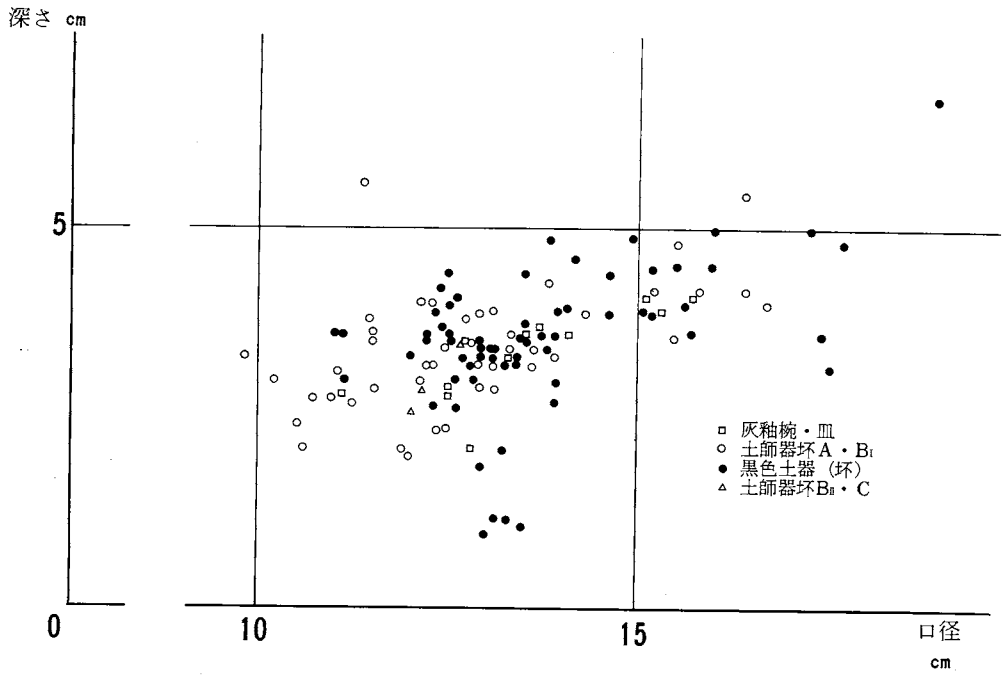
1・4・6・7・10号住居址及び土壙2は若干の時間差はあるもののほぼ同時期・平安時代後期に営まれたものである。遺跡は用地外へ広がる可能性が十分あり集落の全貌を把握できたわけではないが大まかな傾向は指摘できるかもしれない。住居址相互の切り合い関係から同時に存在した住居は3軒以上ということになるが、配置については特に規則性は認められない。カマドは10号住居址を除けば原則として東壁につくられている。入口はカマドの反対側だと考えればおおむね西向きで、等高線に沿っている。各住居址とも黒色土中につくられており、検出は困難を極め、屋内・屋外施設も十分掘みきれなかったが、火災で壊滅した1号住居址は上屋構造等を知る手がかりとなろう。出土遺物は各住居址とも相似た日常生活用具ばかりであったが、その中では6号住居址出土の鉄製紡錘車が注目されよう。紡織は単に衣料の問題に留まらず納税等に関わる問題だけに今後取り組むべき課題かと思われる。

判の木山東遺跡出土の平安時代の土器について概観する。住居址の切り合いに示される時間差はあるものの大まかにみて一時期の傾向を示すものと考えて良いだろう。器形の判明したもの98個体のうち、土師器の杯が46個体(47%)、同じく甕が34個体(35%)、灰釉陶器が18個体(18%)となっている。器種別にみると、土師器の杯はごく少数の例外を除き設定した類型の中に収まっており、Aa・B・C類がほぼ量的に等しく、山梨県地方に多いAb類も3個体加わっている(註27)。黒色土器は少ない。土師器甕はその半数近くがC類であるが、これは山梨県にみられる甕に近似しており(註28)関連が予測される。又、E類の羽釜も7個体あり少なくない。しかし、この分類基準に加えられない小破片も存在し、器種は多様で

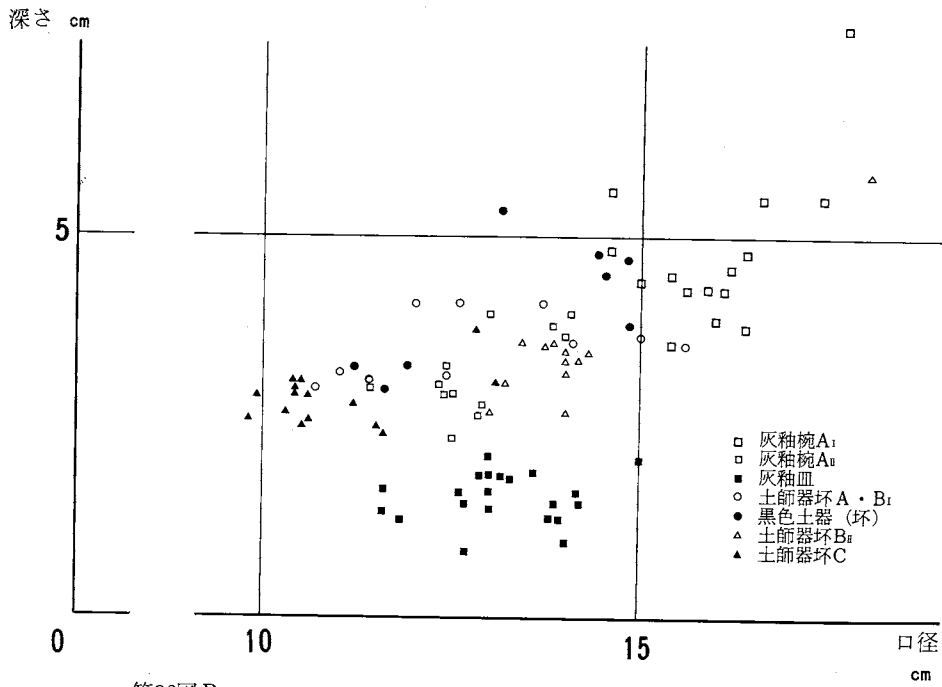
あると言えよう。設定した類型に収まる杯のあり方とは対称的な一面を見せる。灰釉陶器の内訳をみると、量的には椀、皿、瓶の順であるが総個体数がやや少ないので厳密なことは言えないかも知れない。生産地別では、生産窯がほぼ判別できる18個体中14個体までが篠岡窯の製品で、残り4個体が東濃の産である。時期的には折戸53号窯期のものが大半である。

さて、以上のような傾向を、近隣でほぼ同時期に営まれたと思われる本報告書中の頭殿沢遺跡と比較してみたい(表6)。まず全体の種別のバランスでは灰釉陶器の占める割合がやや異なっており、特に頭殿沢遺跡での比率は高いようである。続いて土師器杯に関してみると、両遺跡とも共通の器種から構成されており、杯A・BⅠ類と杯BⅡ・C類、或いは黒色土器とのバランスはやや異なっているものの、概ね、相似た傾向を示していると言えよう。ところが、土師器甕では、C類の比重が大きい点で共通するものの、B・C・E類が大半を占める頭殿沢遺跡に対し、本遺跡ではC類が卓越し他器種が少量ずつ存在するという多様性を見せており、やや様相を異にしていると考えられる。次に灰釉陶器では、器種に特に差は認められないものの、生産窯は少々異なっている。本遺跡では既に述べた通り篠岡窯と東濃窯との比率は14対4である。頭殿沢遺跡では生産窯の判別が十分にできておらず厳密さはないが、確認しえたものの中では、篠岡窯と東濃窯の比率は逆転し7個体対13個体となっている。折戸53号窯期の全般的な動向として、信州では東濃諸窯の製品が激増して主体的となるのに対し、猿投窯は激減、篠岡窯をはじめとする尾北諸窯も減少するという指摘がなされている(註29)。頭殿沢遺跡はこのような傾向に一致するかも知れないが、本遺跡は全般的な動向からはずれる模様である。

最後に供膳形態の土器全体に関する問題を考えてみたい。第36図Aは足場・新井南・新井北遺跡(註30)出土の供膳形態の土器について、第36図Bはオシキ・判の木山東・頭殿沢遺跡出土の供膳形態の土器について、それぞれ口径と深さを軸とした容量のグラフである。両者とも種別・器種の差を無視すればよく似た分布を示す。さて、図36Aの方は灰釉陶器をほとんど持たず、黒色土器が主体であるが、この黒色土器の容量は多様で特に規格性が認められそうもない。ところが灰釉陶器がセットの中に完全に組み込まれたとみられる図36Bに示した遺跡では、灰釉陶器の皿類・椀AⅠ・椀AⅡ・土師器の杯BⅡ・杯Cの各類は各々独自の規格をもち、各々競合せずむしろ相互補完的な傾向をみせて分布している。但し、灰釉陶器椀AⅡと土師器杯BⅡとは競合する可能性もある。容量差がどれ程用途差を反映するものか、ここでは問題があるものの、製作者は当然一定の容量を意図しているのであろう。灰釉陶器が土師器の一部にとって代わり日常雑器として定着するのは言うまでもないが、その形態・容量は生産者側の規格に基づくものであろうから、需要者側の要求を完全には満たし得ず、その不足部分を埋め合わせる形で、土師器杯BⅡやCが生産されたため、図36Bのような規格性が生じた、と解せないものだろうか。又、灰釉陶器の供給は安定的・継続である事が望ましい訳だが、本遺跡でみられた特定産地の製品が卓越するという状態は、供給先とのつながりを知る手がかりとなろう。こうした資料の増加が望まれるところである。最後に編年の問題にもなるが、図36Aに示されるような諸遺跡と図36Bに示されるようなそれとの間の差は、時間差と解すべきか否かで、意味が大きく異なる。すなわち、時間差ならばこの地域で灰釉陶器が日常雑器化する時期がつかめそうだし、時間差でないならば何らかの政治的関係に規定されたことすら想定される小地域差が指摘できるかも知れない。両者とも折戸53号窯期の灰釉陶器をもつが、いわゆるカワラケに近い形態の杯を主体とする後者の方が若干新しい様相を示していると言えるかも知れない。とはいえ、土師器(杯・甕)



第36図A



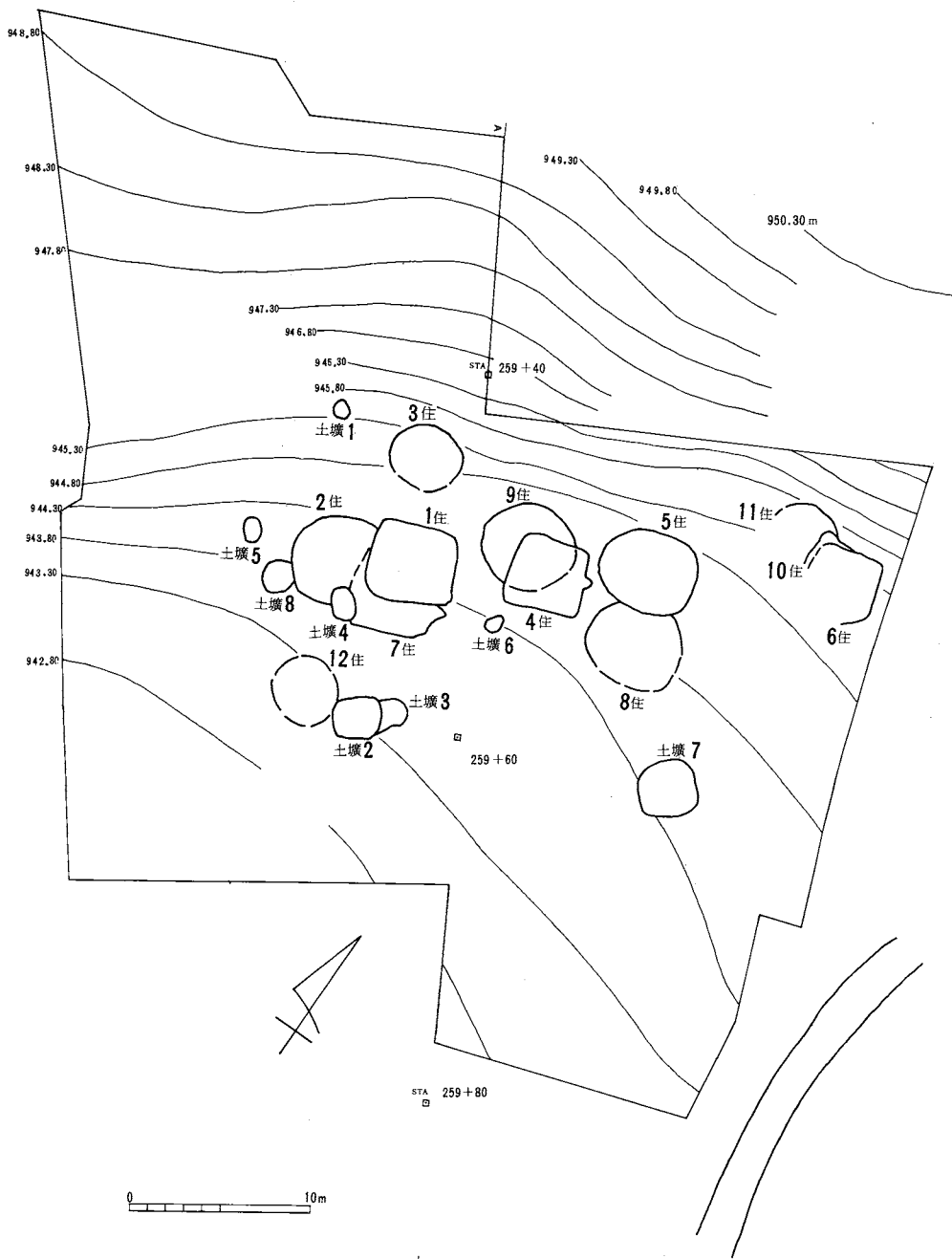
第36図B

第36図 供膳形態の土器の容量グラフ

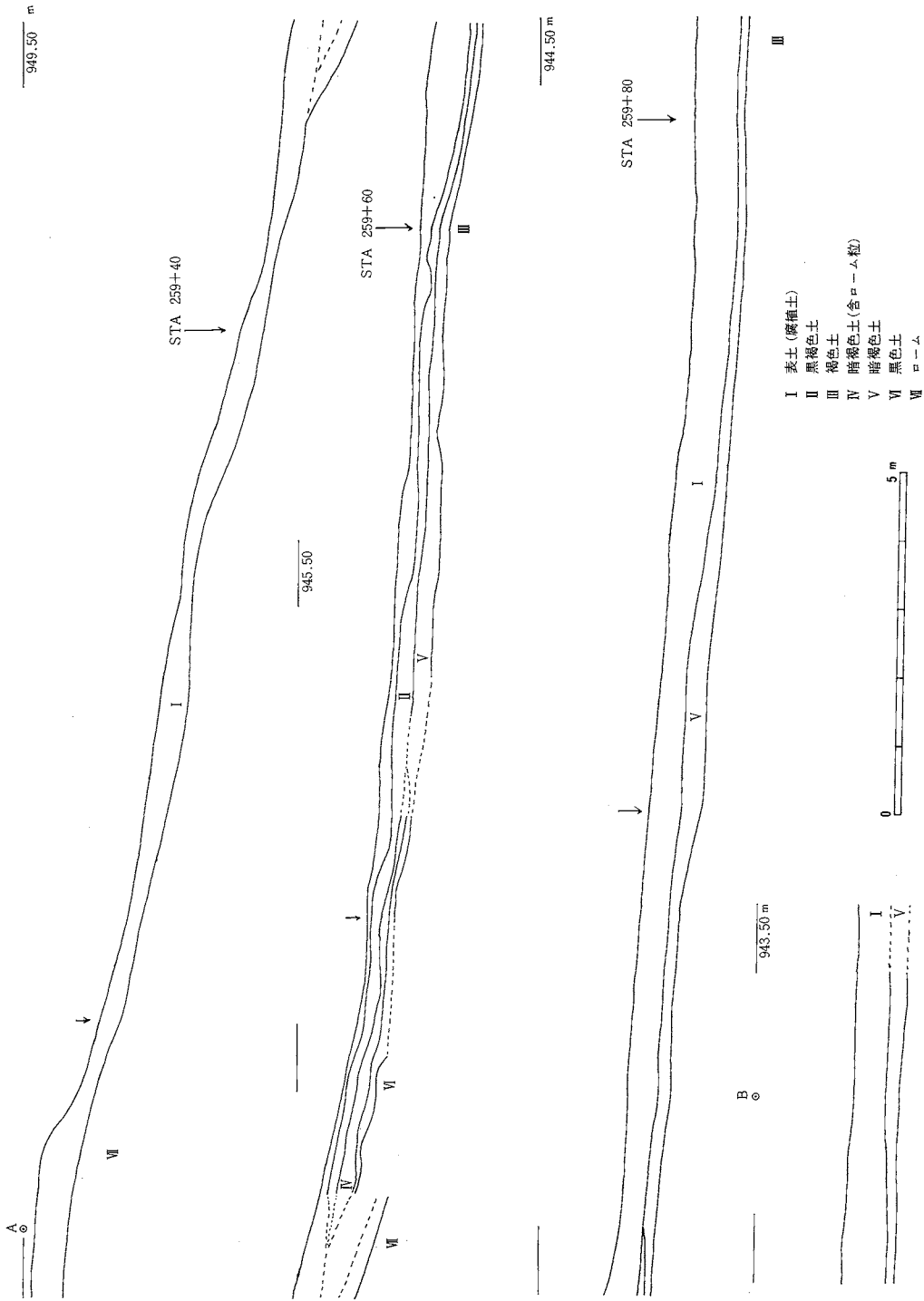
自体の編年が先決であることは言うまでもない。以上若干の問題点を指摘してまとめに代えたい。

(百瀬長秀)

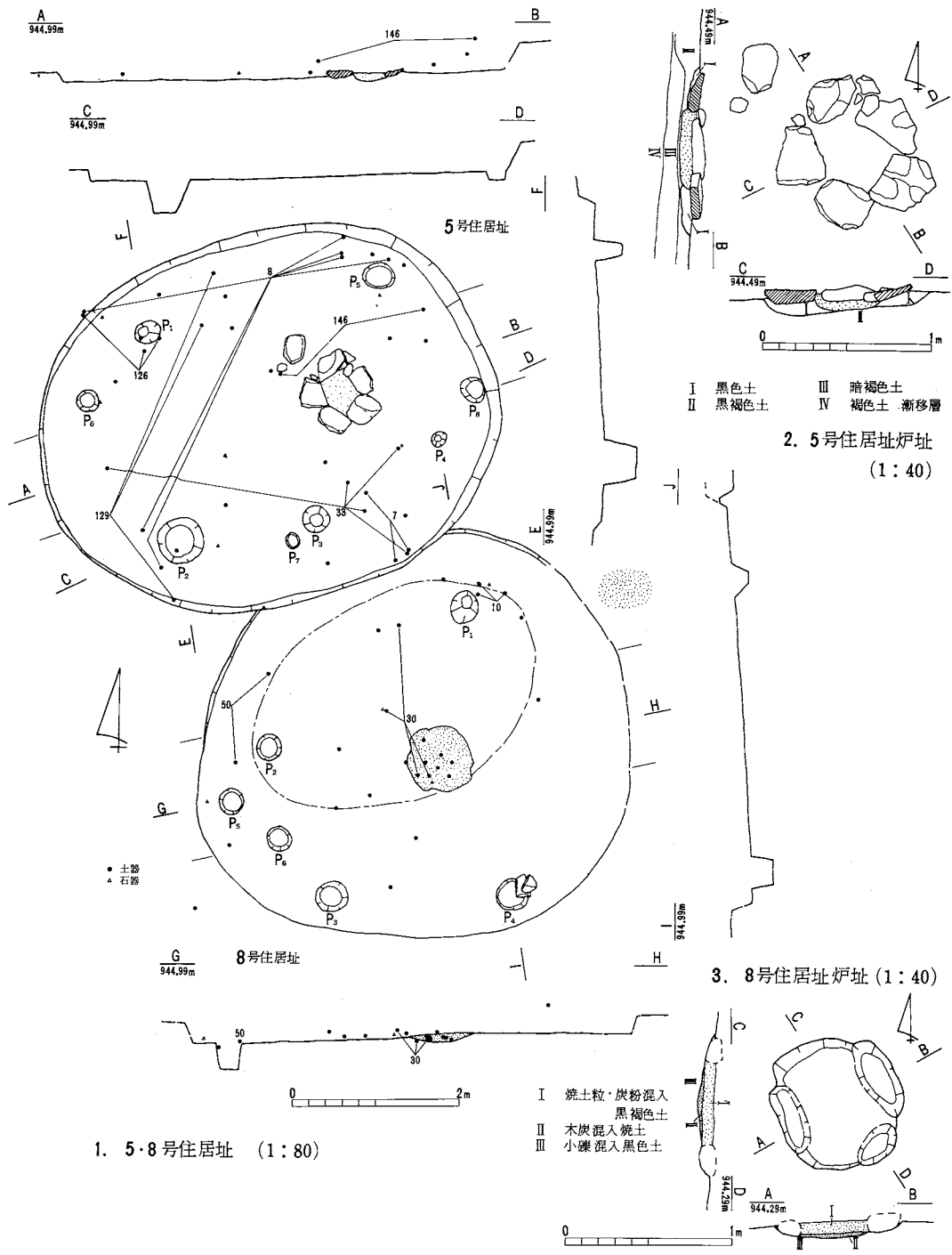
- 註1 「南原」駒ヶ根市教育委員会発掘調査報告第5集 1977
- 2 「小池・宮城・神送塚」飯田市教育委員会 1974
- 3 「清水ノ上貝塚」愛知県知多郡南知多町教育委員会 1976
- 4 「長野県塩尻市焼町遺跡発掘調査報告書」塩尻市教育委員会 1970
- 5 「小段遺跡」長野県塩尻市教育委員会 1979
- 6 「中央道報告書 諏訪市内その1・その2」1973
- 7 「中央道報告書 岡谷市その3」1975
- 8 「中央道報告書 諏訪郡富士見町内その1」1973
- 9 註8に同じ
- 10 「中央道報告書 下伊那郡阿智村斜坑広場その2」1973
- 11 「中央道報告書 伊那市西春近」1972
- 12 菊島美夫「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」甲斐考古12巻2号 1976
- 13 註6に同じ
- 14 「海戸第2次調査報告書」長野県考古学会 1968
- 15 註4に同じ
- 16 註5に同じ
- 17 「中央道報告書 諏訪市その3」1976
- 18 註17に同じ
- 19 「岡谷市史」上巻 1973
- 20 「丸山南遺跡」駒ヶ根市教育委員会 1977
- 21 註3に同じ
- 22 「大城林・北方・湯原」駒ヶ根市教育委員会発掘調査報告書第4集 1974
- 23 註20に同じ
- 24 註1に同じ
- 25 「伊久間」長野県下伊那郡喬木村教育委員会 1978
- 26 註2に同じ
- 27 註12に同じ
- 28 註12に同じ
- 29 檜崎彰一「瓷器の道(1)」名古屋大学文学部20周年記念論集 1968
- 30 註7・8に同じ



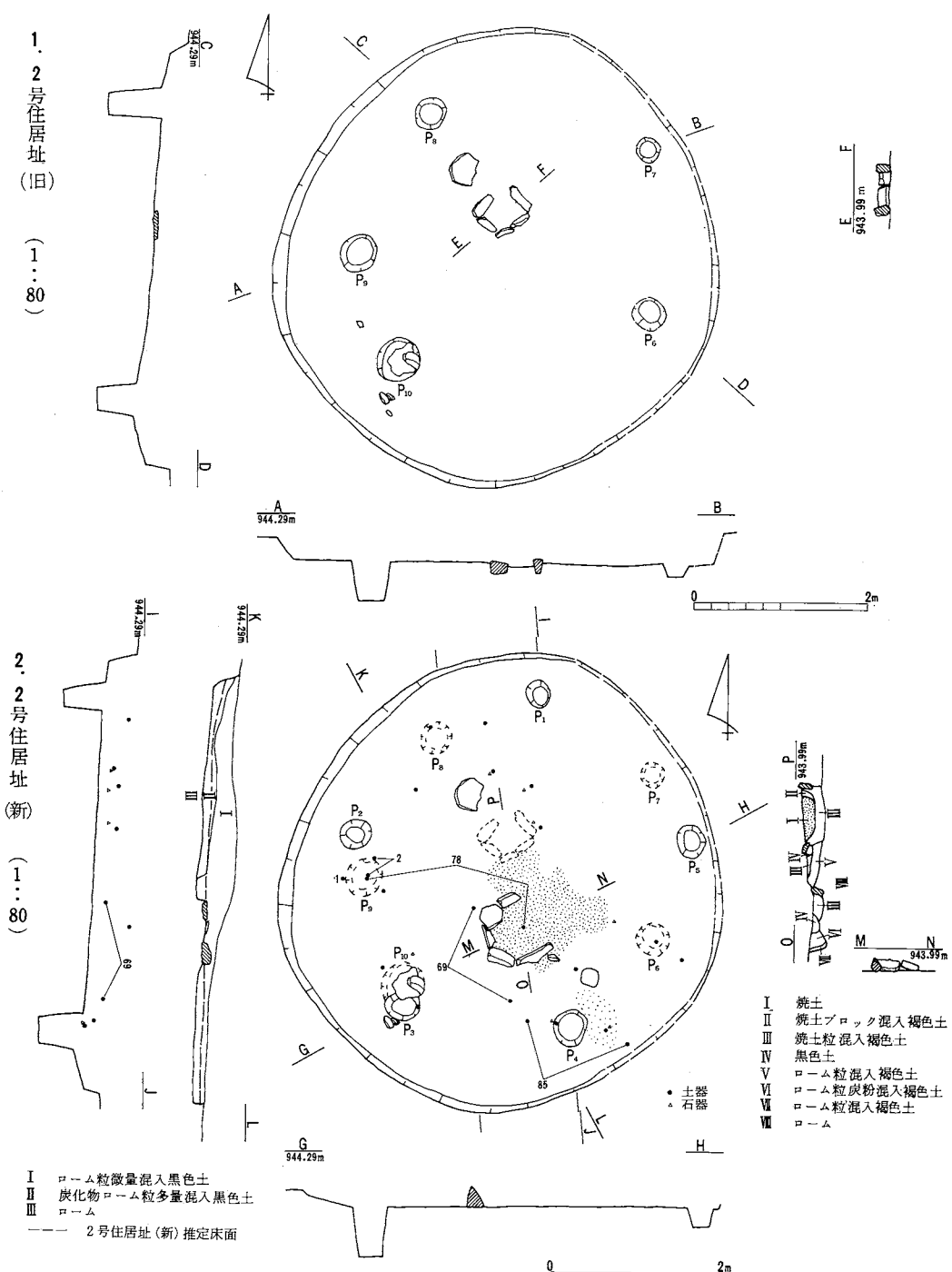
第37図 判の木山東遺跡遺構全体図(1:400)



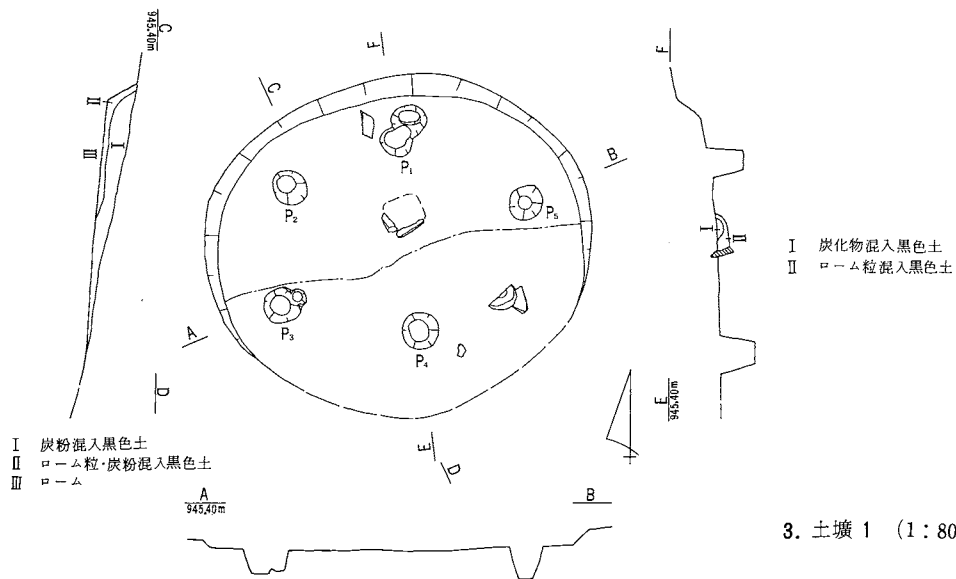
第38図 判の木山東遺跡土層図(1:100)



第39図 判の木山東遺跡5・8号住居址実測図(1 1:80, 2・3 1:40)

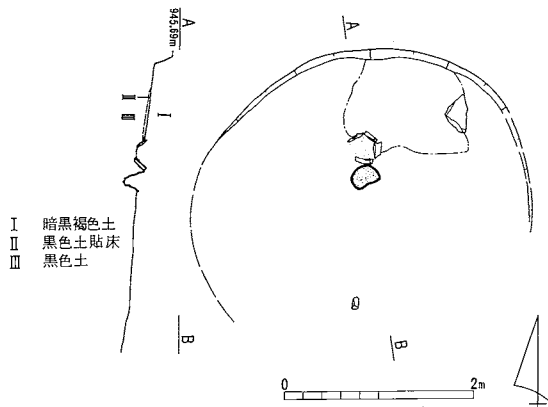


第40図 判の木山東遺跡2号住居址(旧)・(新)実測図(1:80)

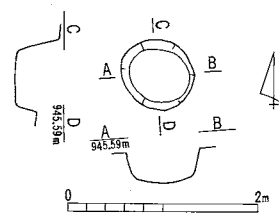


1. 3号住居址 (1:80)

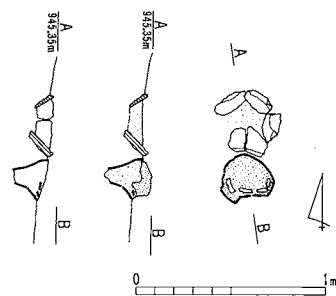
2. 11号住居址 (1:80)



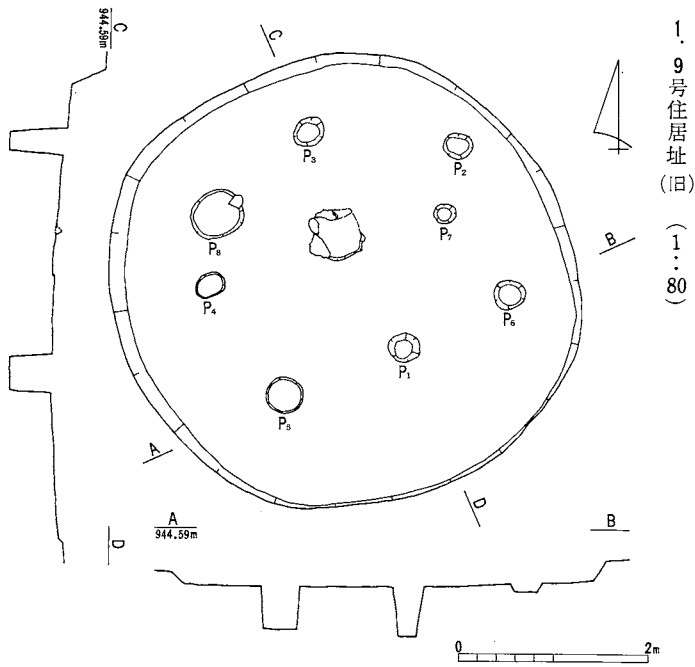
3. 土壇 1 (1:80)



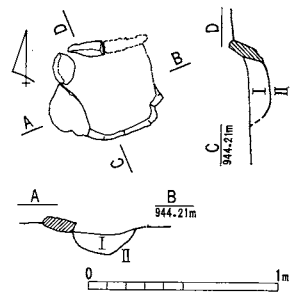
4. 11号住居址炉址 (1:40)



第41図 判の木山東遺跡3・11号住居址, 土壇1実測図(4 1:40, 他は1:80)

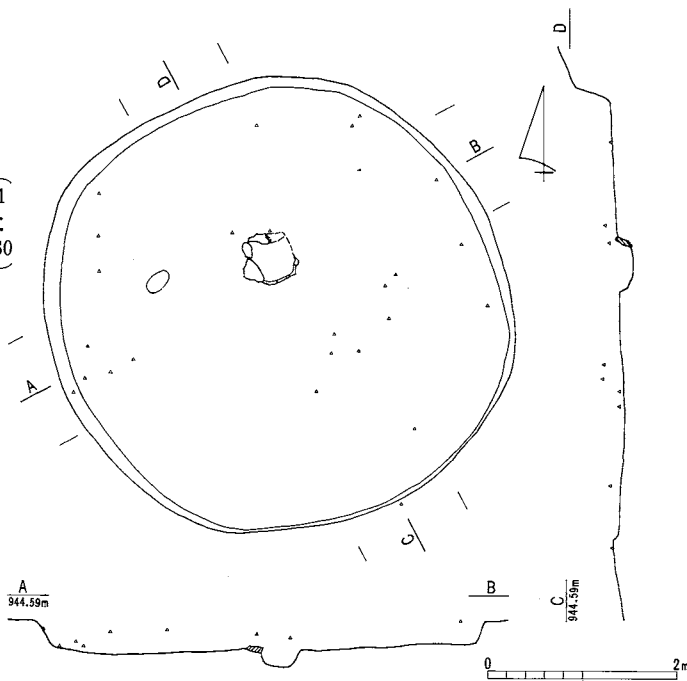


3. 9号住居址(旧)炉址 (1:40)

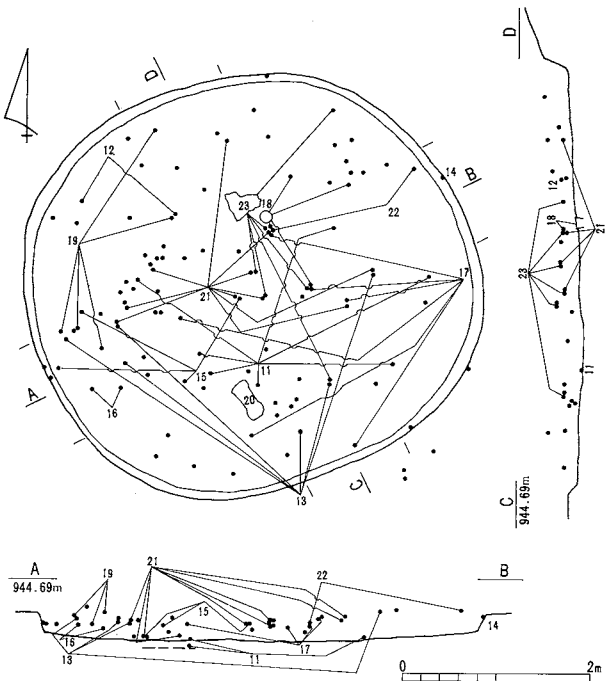
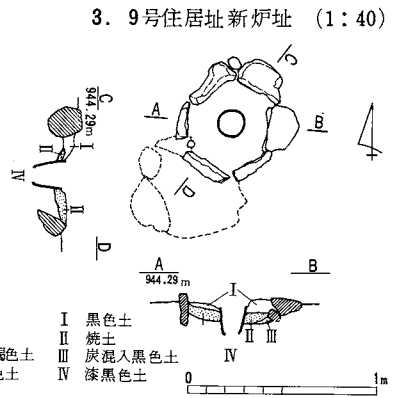
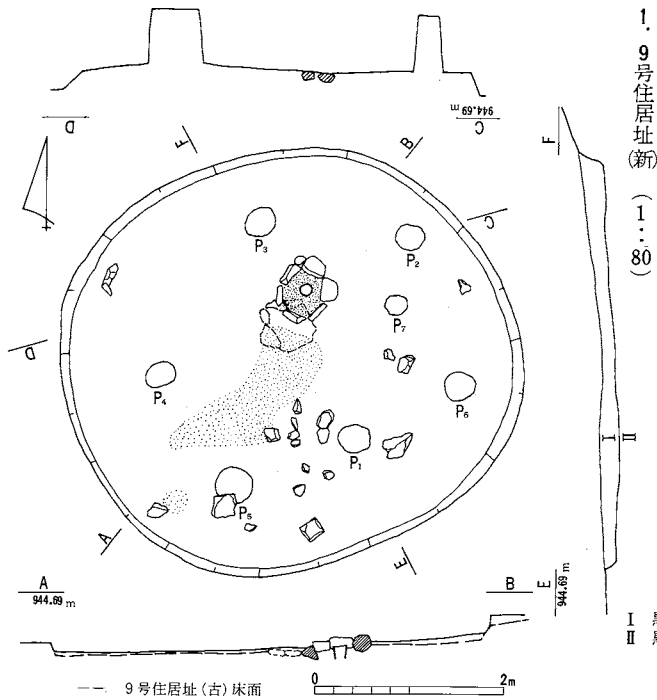


I 炭化物混入黑色土
II 黑色土

2. 9号住居址(新)石器出土状況 (1:80)

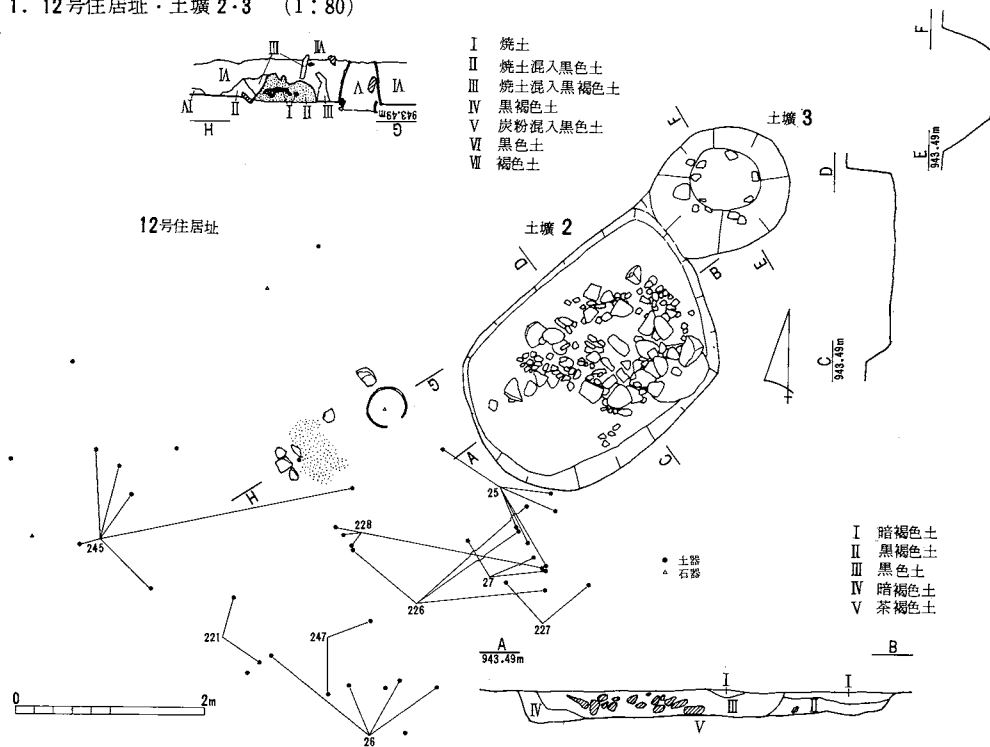


第42図 判の木山東遺跡9号住居址(旧)実測図(1・2 1:80, 3 1:40)

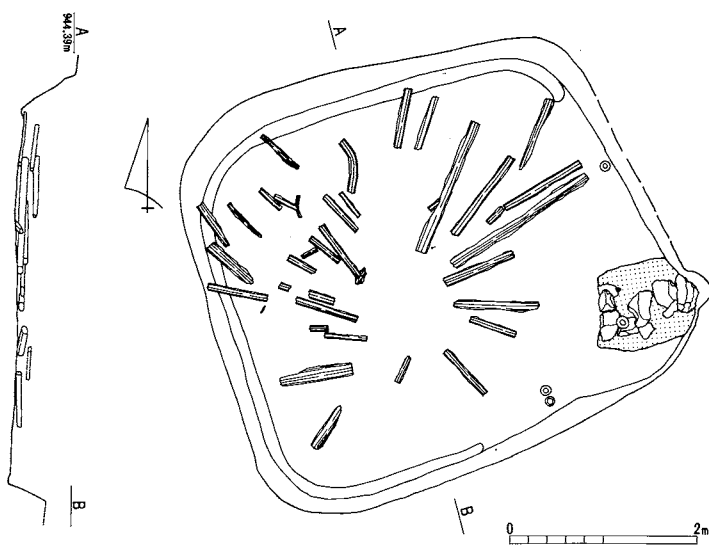


第43図 判の木山東遺跡9号住居址(新), 土坑6実測図(3 1:40, 他は1:80)

1. 12号住居址・土壇 2・3 (1:80)

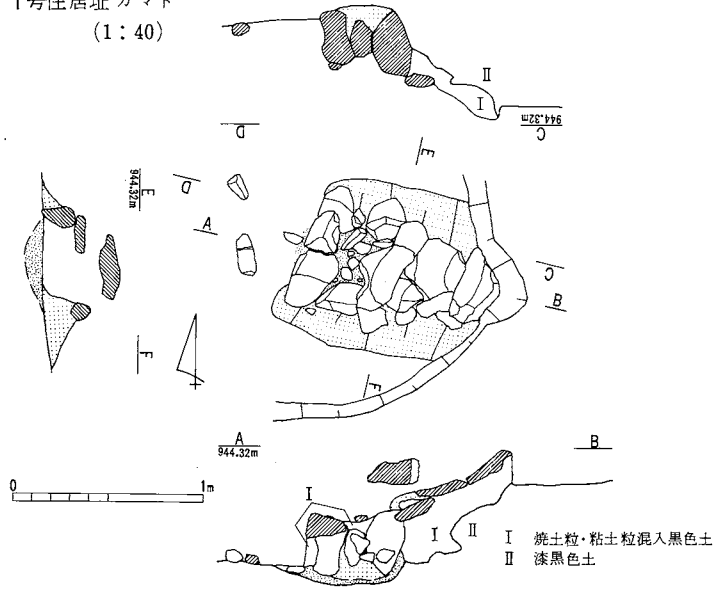


2. 1号住居址 炭化材出土状況 (1:80)

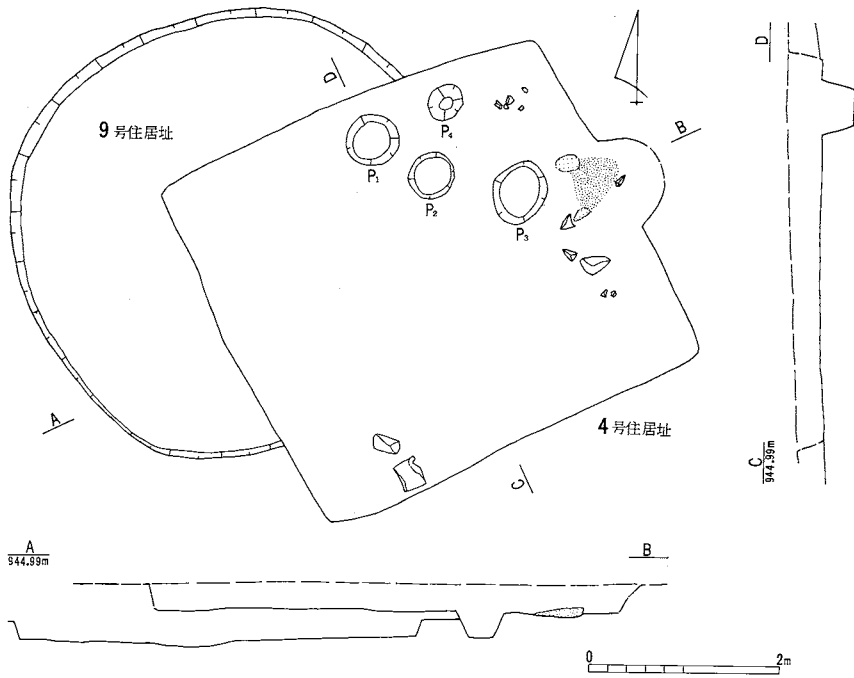


第44図 判の木山東遺跡1・12号住居址, 土壇 2・3 実測図(1:80)

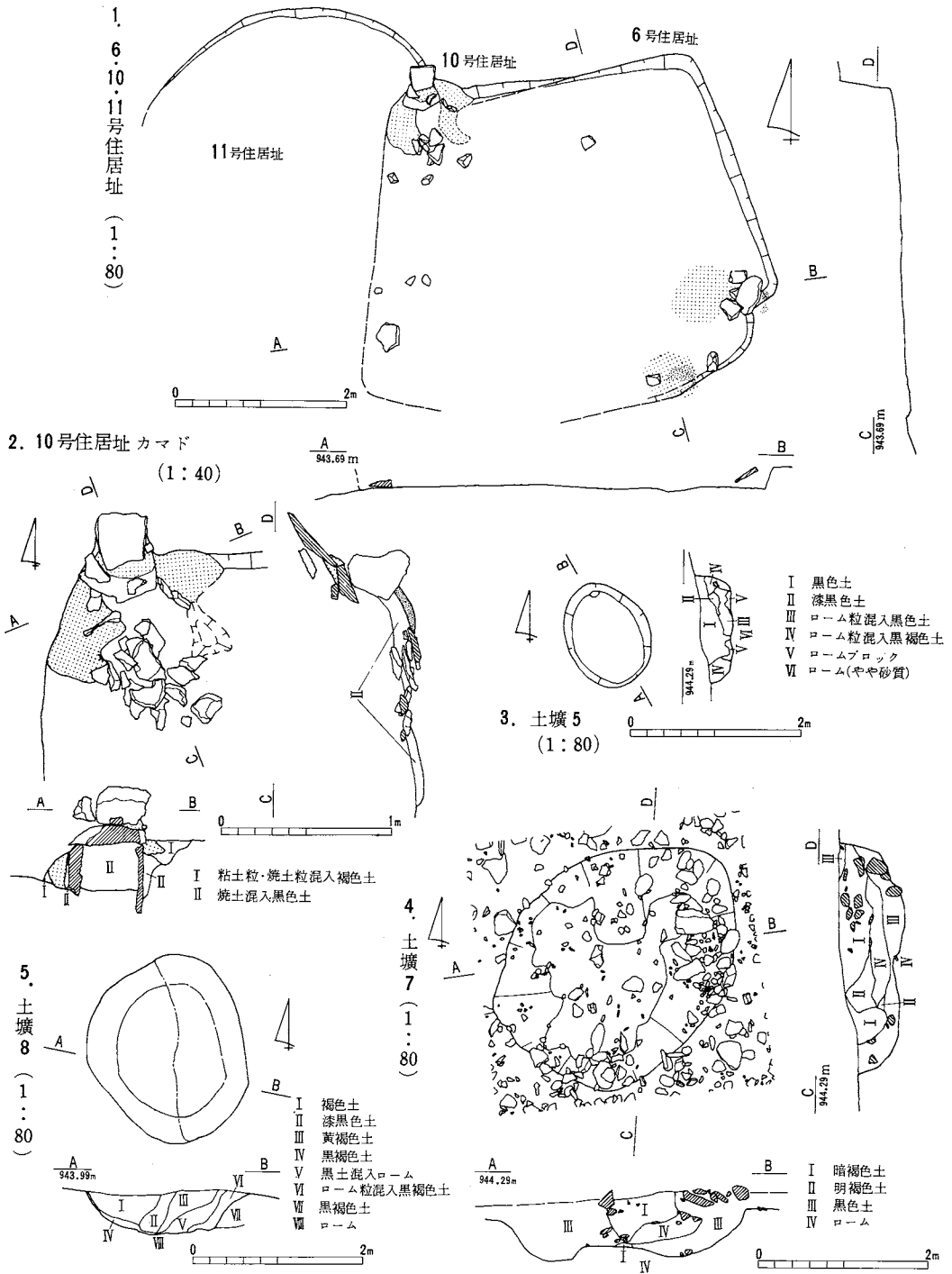
1. 1号住居址 カマド
(1:40)



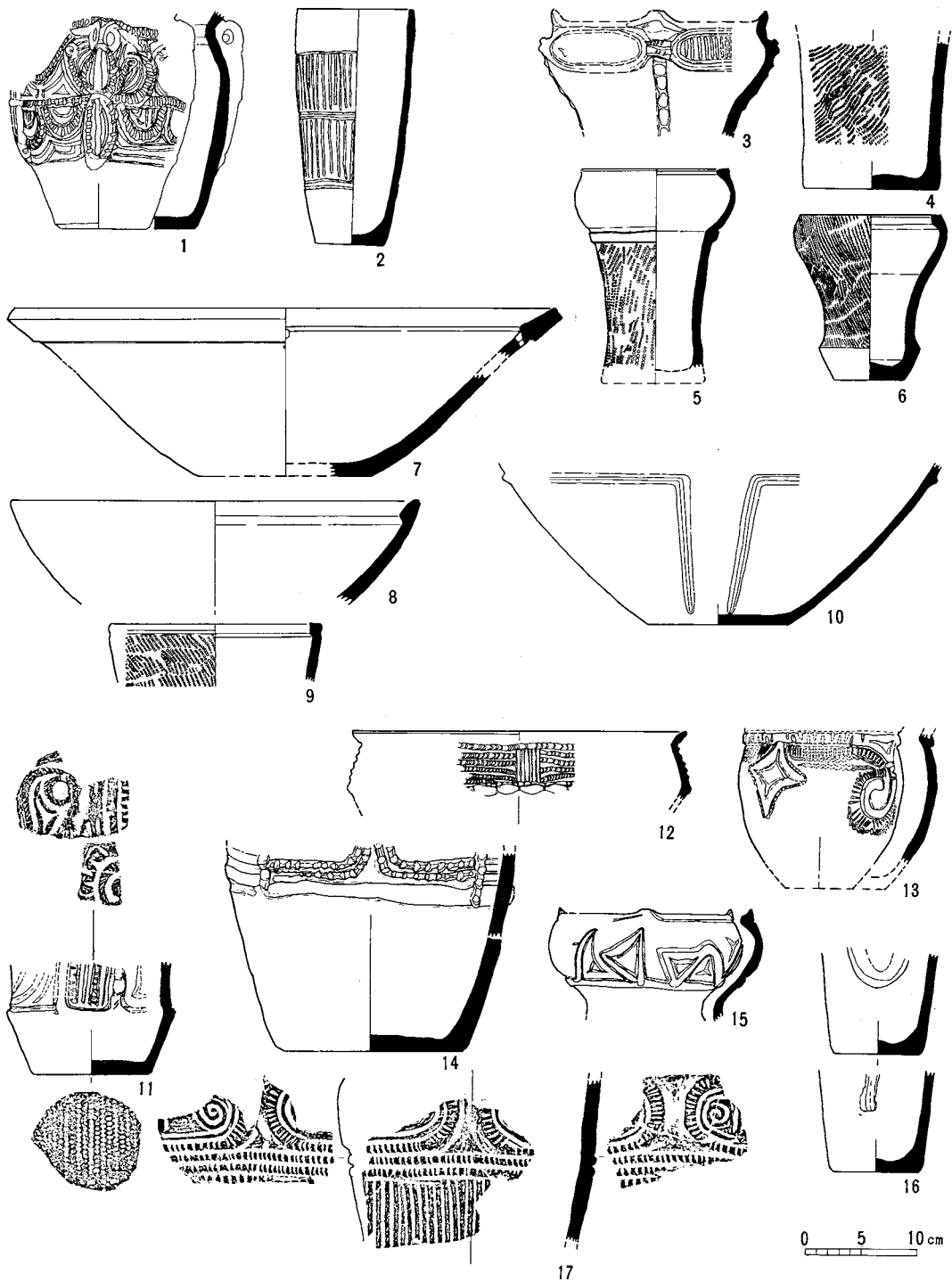
2. 4・9号住居址 (1:80)



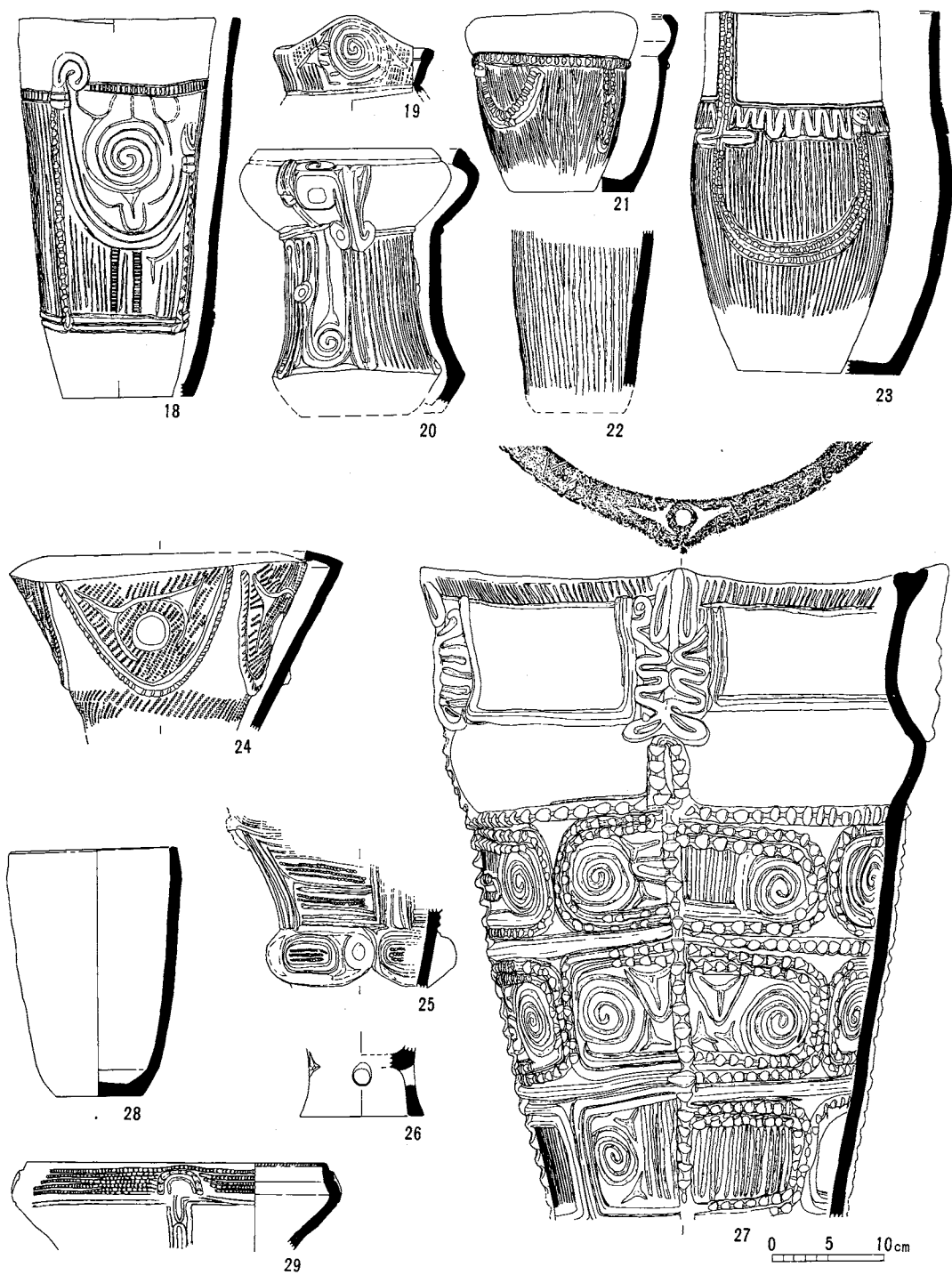
第46図 判の木山東遺跡4・9号住居址実測図(1:80), 1号住居址カマド実測図(1:40)



第47図 判の木山東遺跡 6・10・11号住居址, 土壌 5・7・8実測図(2 1:40, 他は1:80)



第48図 判の木山東遺跡 2・3・5・8・9号住居址出土土器実測図(1:6) 〈1・2 2号住居址(新),
3~6 3号住居址, 7~9 5号住居址, 10 8号住居址, 11 9号住居址(旧), 12~17 9号住居址(新)〉

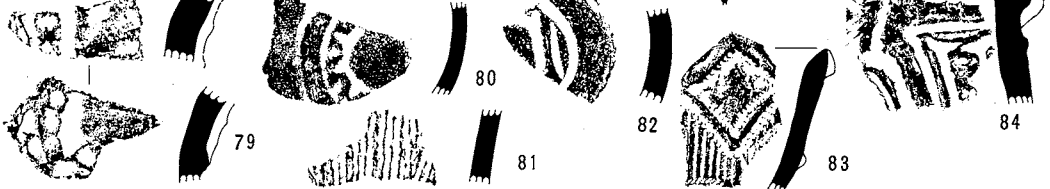
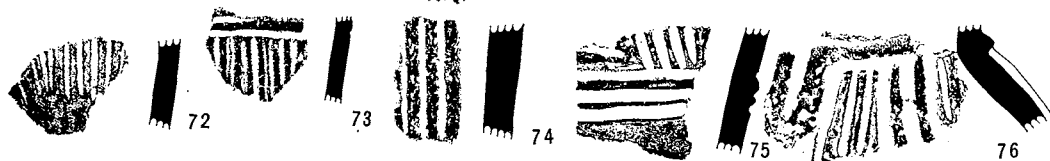
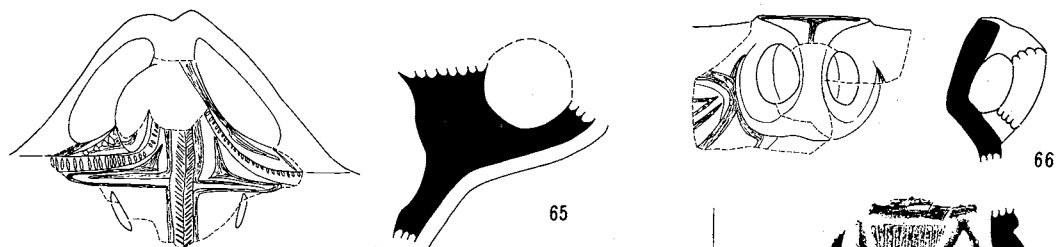
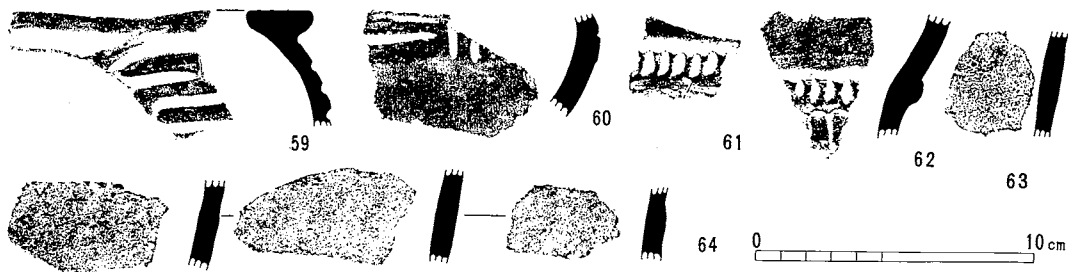


第49図 判の木山東遺跡 9・11・12号住居址，土壇5，遺構外出土土器実測図(1:6)

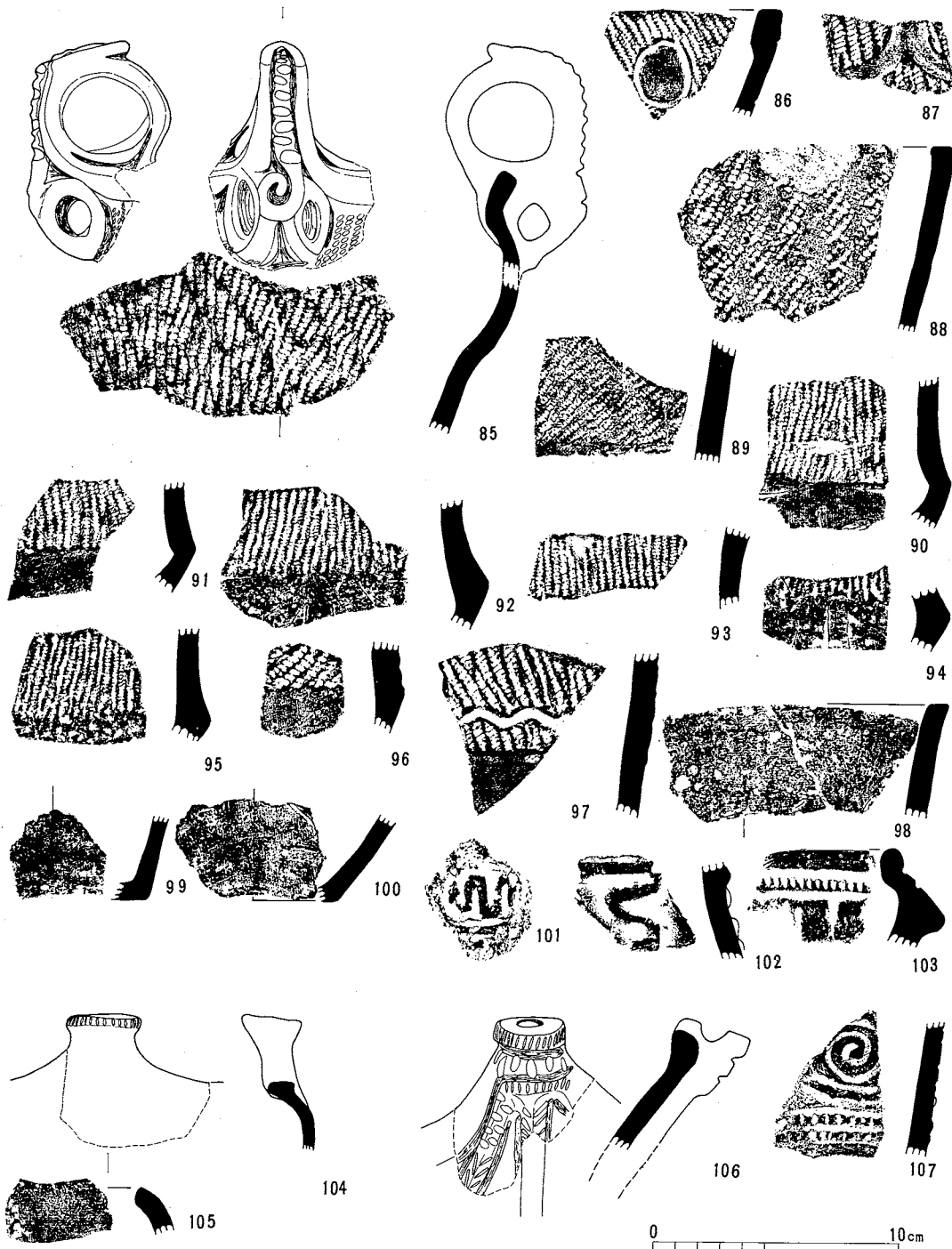
(18~23 9号住居址(新)，24 11号住居址，25~27 12号住居址，28 土壇5，29 遺構外)



第50図 判の木山東遺跡8号住居址出土土器拓影図(1:3)



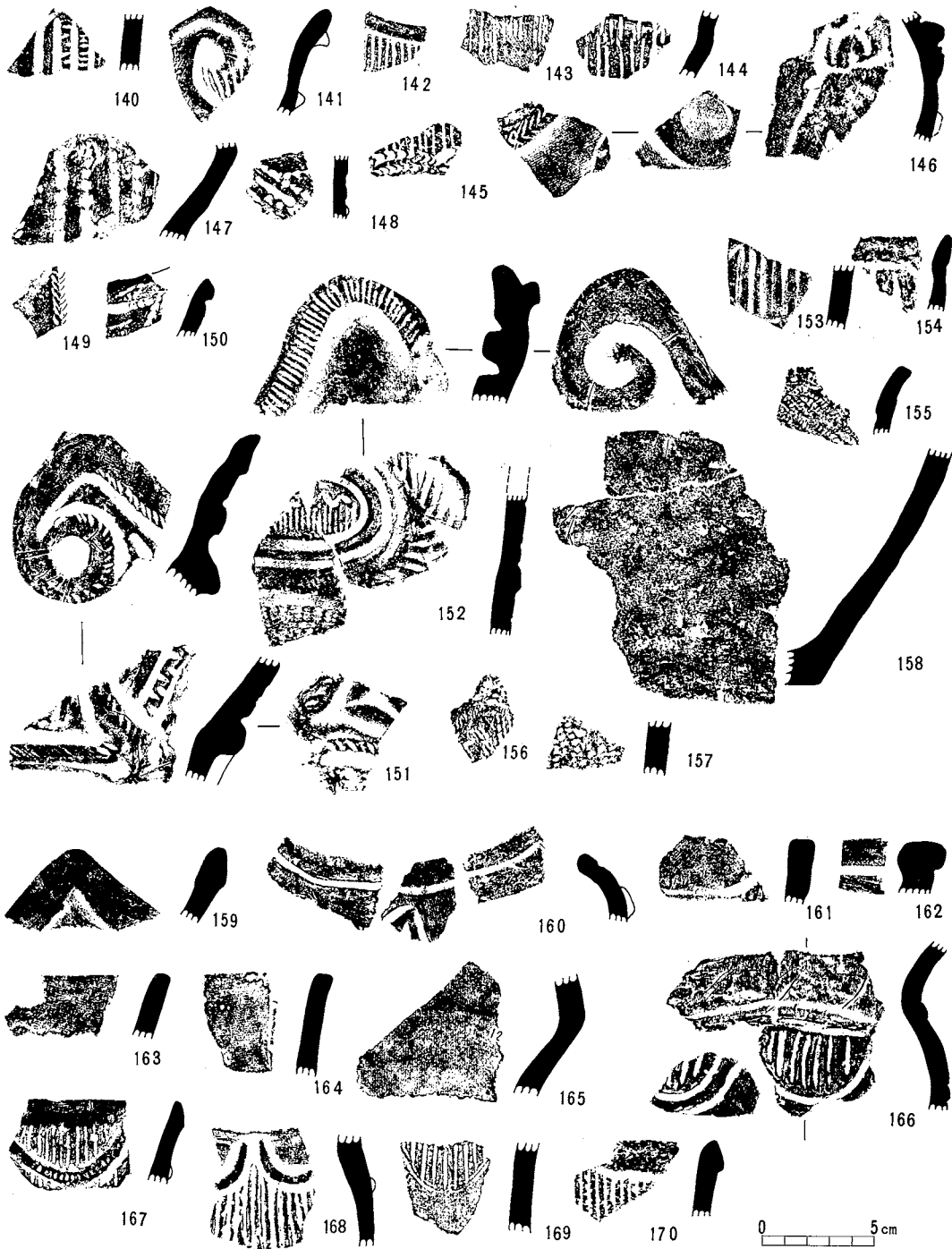
第51図 判の木山東遺跡2号住居址(旧)・(新)出土土器実測・拓影図(1:3)
 (59~64 2号住居址(旧), 65~84 2号住居址(新))



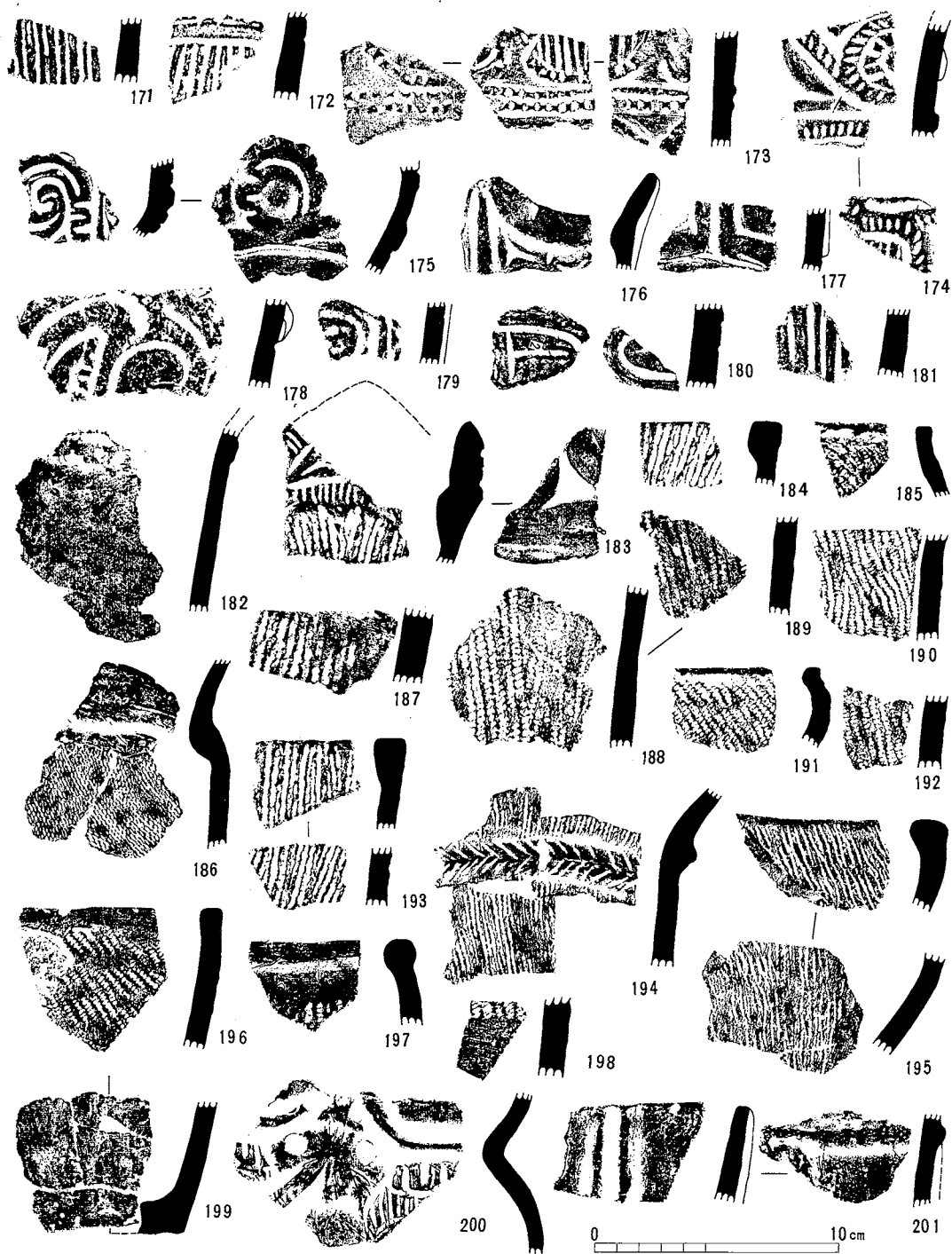
第52図 判の木山東遺跡2号住居址(新), 3・5号住居址出土土器実測・拓影図(1:3)
 (85~103 2号住居址(新), 104~106 3号住居址, 107 5号住居址)



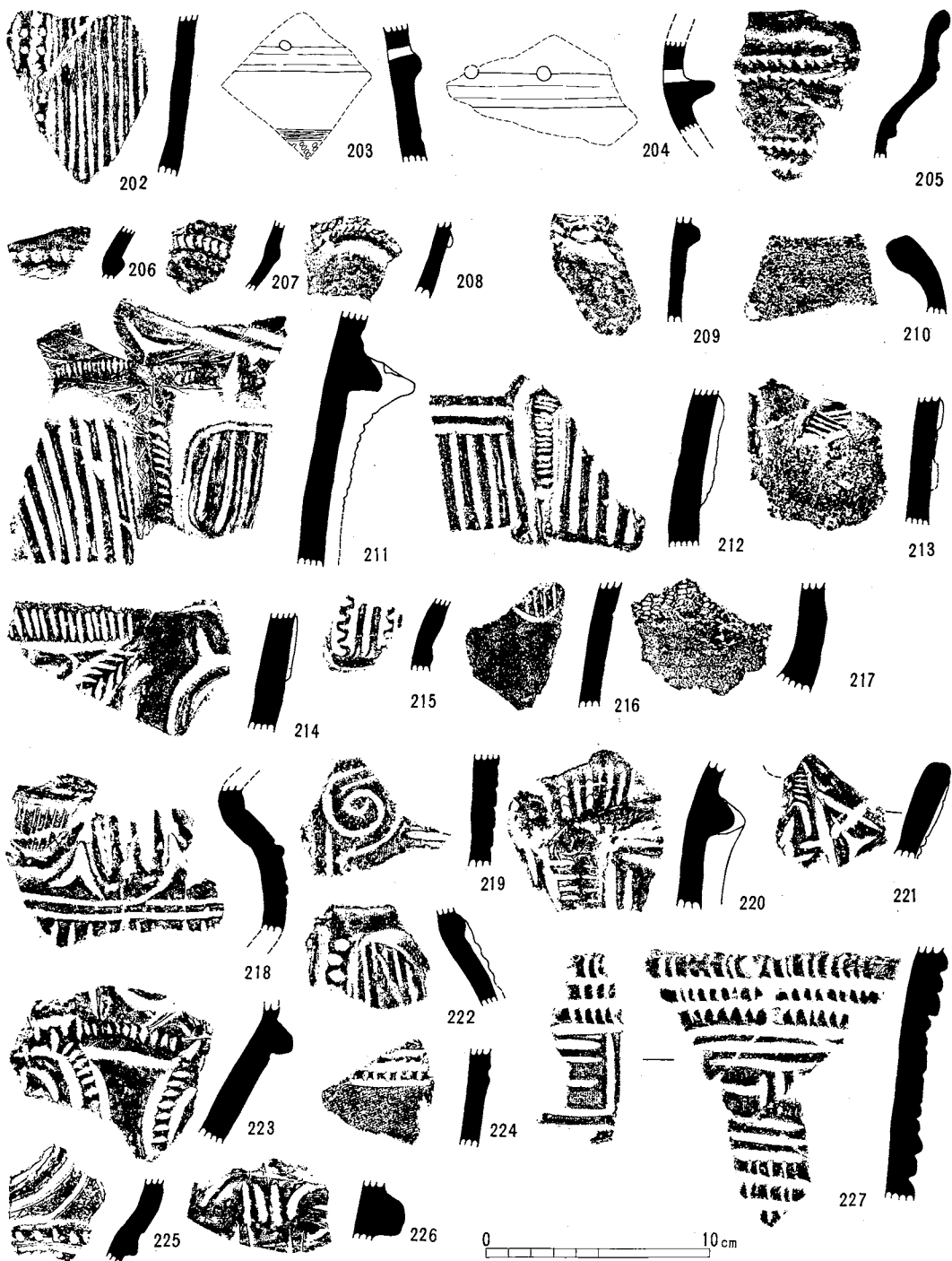
第53図 判の木山東遺跡3・5号住居址出土土器実測・拓影図(1:3) (108~122 3号住居址, 123~139 5号住居址)



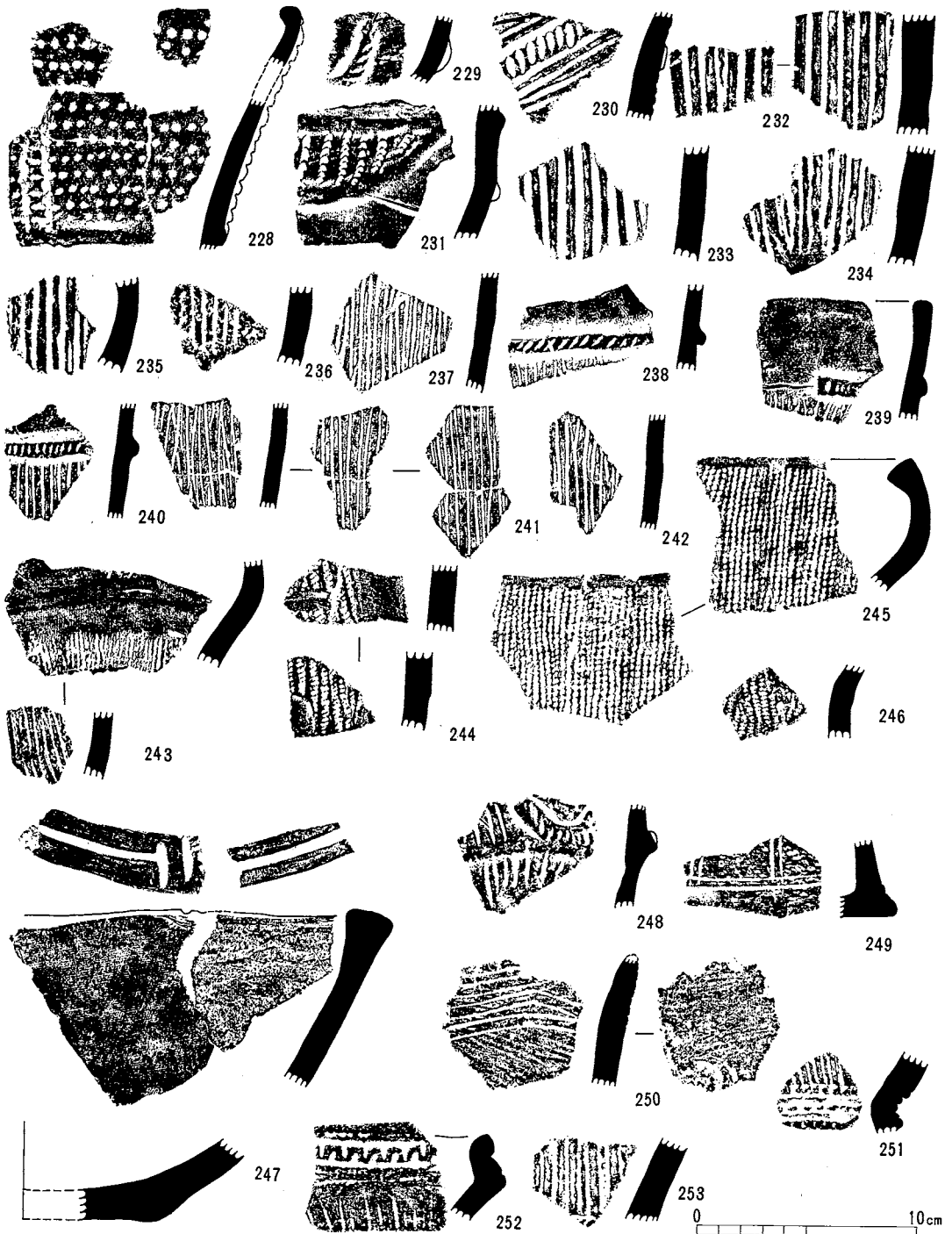
第54図 判の木山東遺跡 5号住居址, 9号住居址(旧)・(新)出土土器拓影図(1:3)
 (140~150 5号住居址, 151~158 9号住居址(旧), 159~170 9号住居址(新))



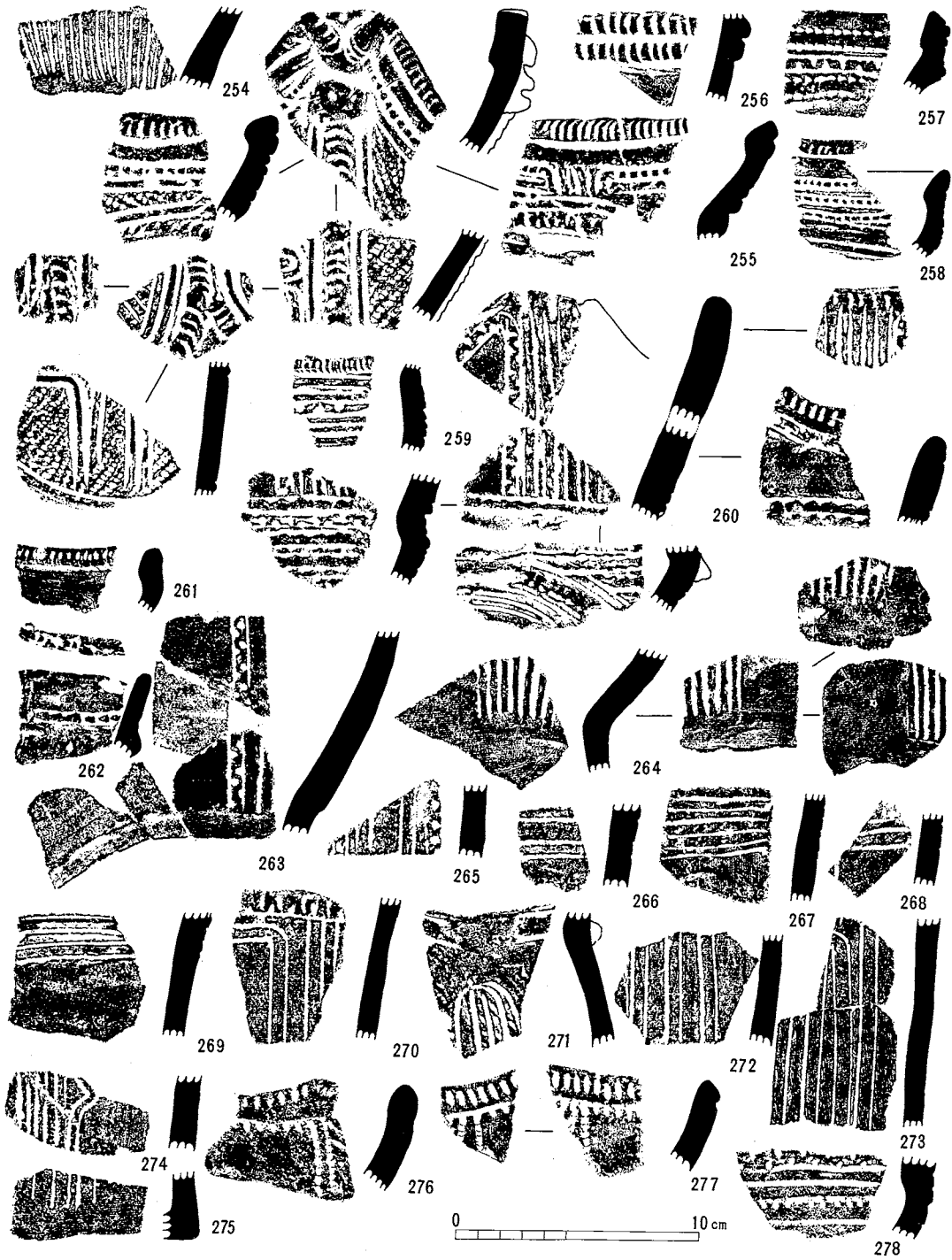
第55图 判の木山東遺跡9号住居址(新)出土土器拓影图(1:3)



第56図 判の木山東遺跡 9号住居址(新)、11・12号住居址出土土器実測・拓影図(1:3)
 (202~208 9号住居址(新), 209~217 11号住居址, 218~227 12号住居址)



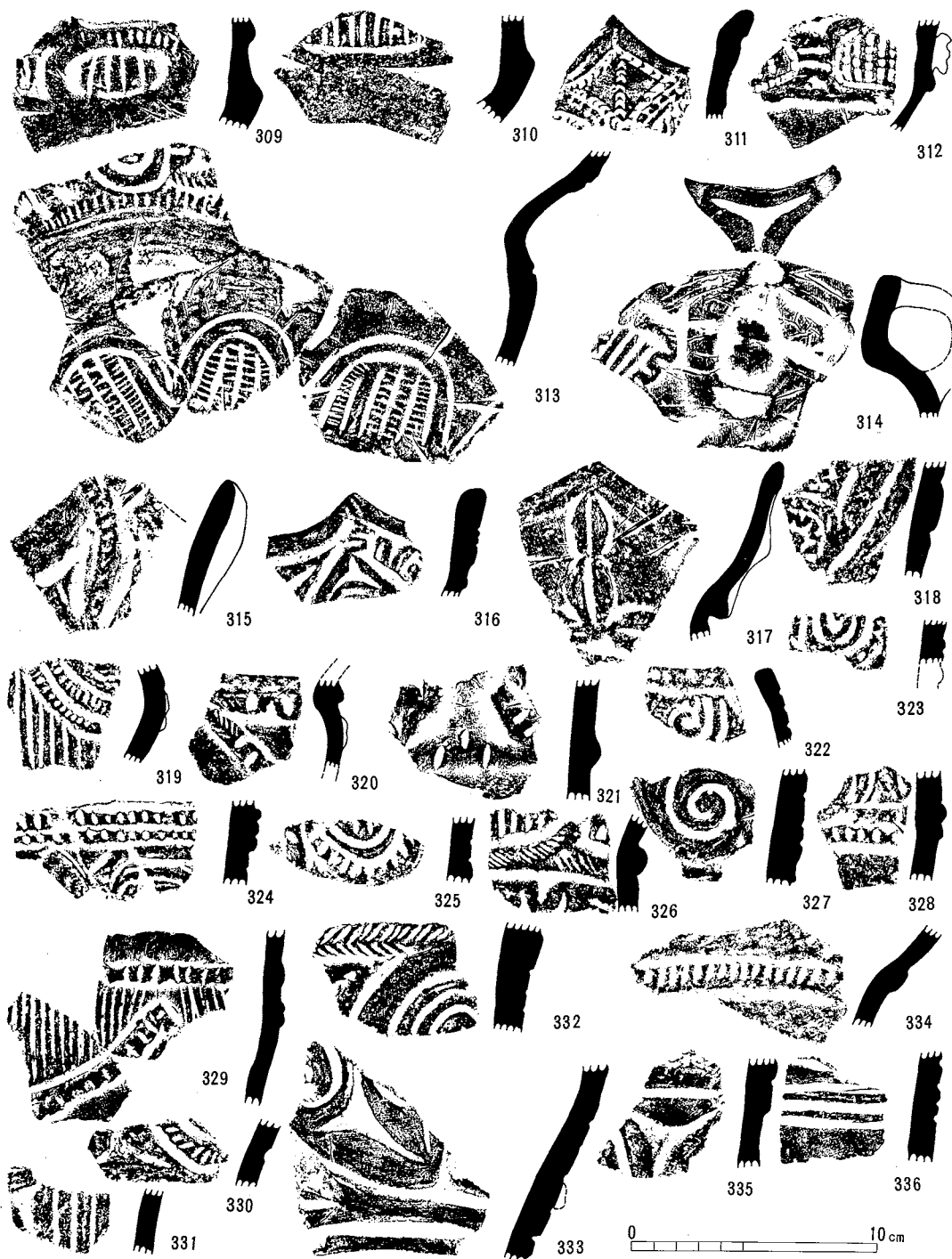
第57図 判の木山東遺跡12号住居址，土壙3・7出土土器実測図(1:3)，遺構外出土土器拓影図
 (その1)(1:3) (228~247 12号住居址，248，土壙3，249，土壙7，他は遺構外)



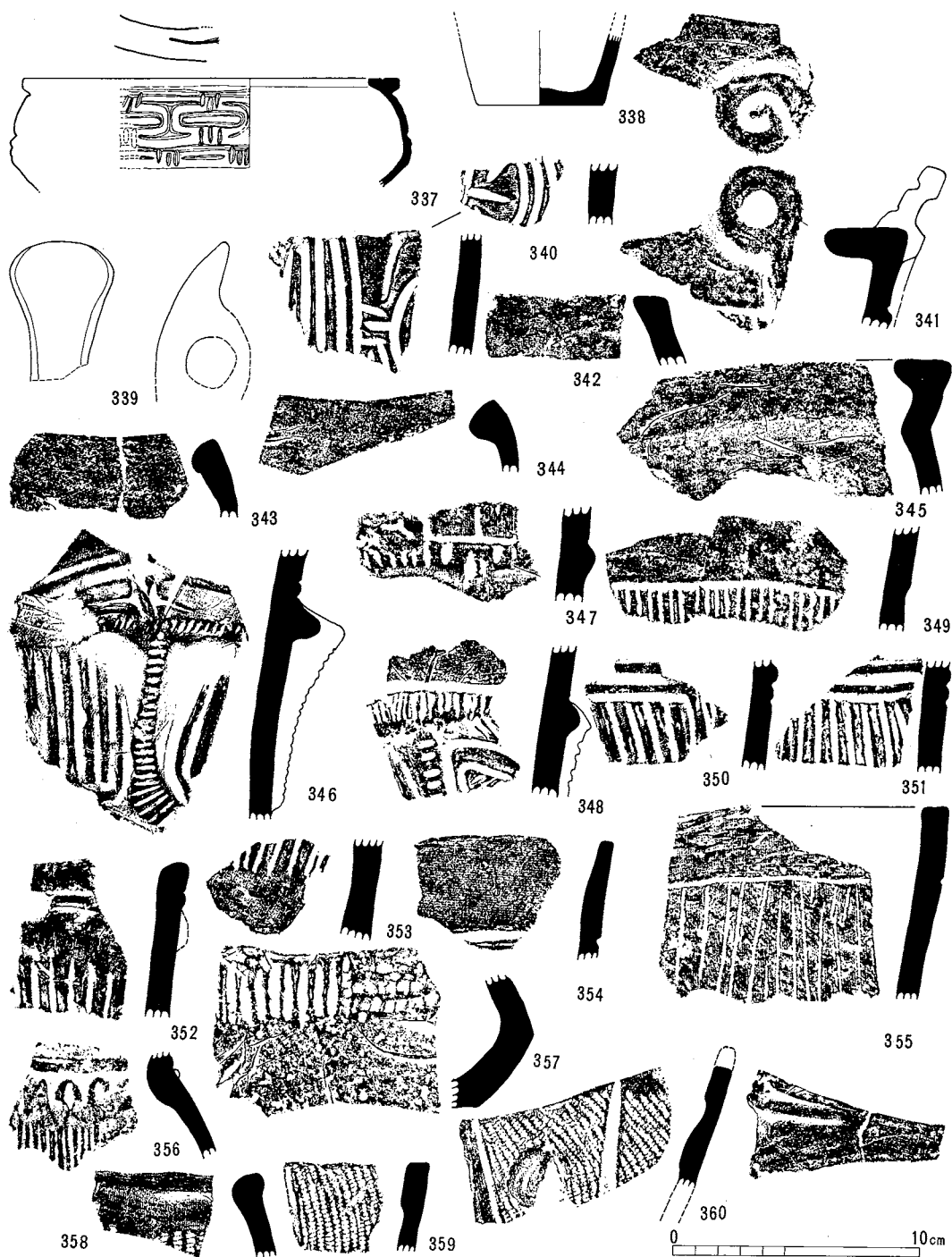
第58図 判の木山東遺跡遺構外出土土器拓影図(その2)(1:3)



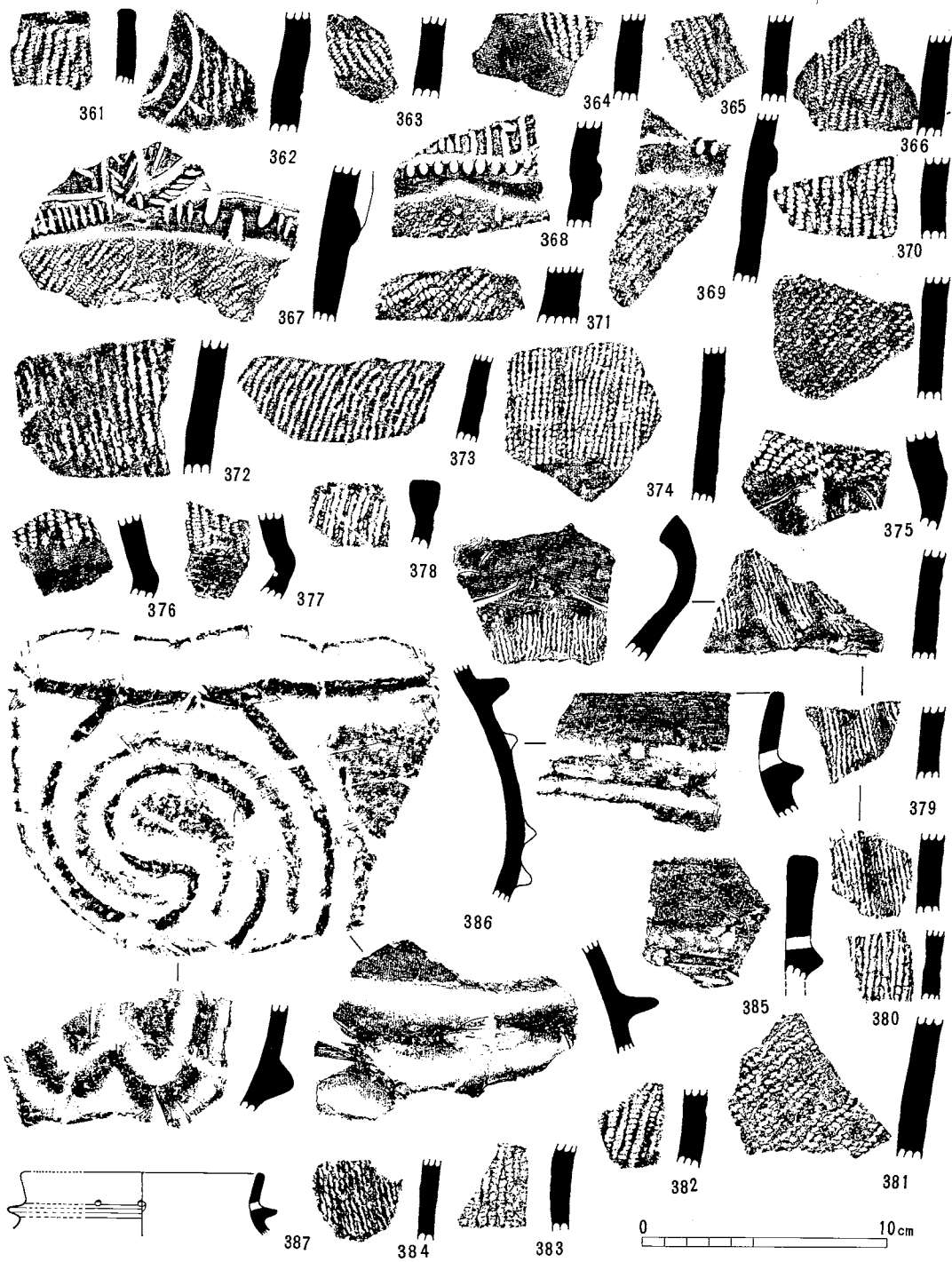
第59図 判の木山東遺跡遺構外出土器拓影図(その3)(1:3)



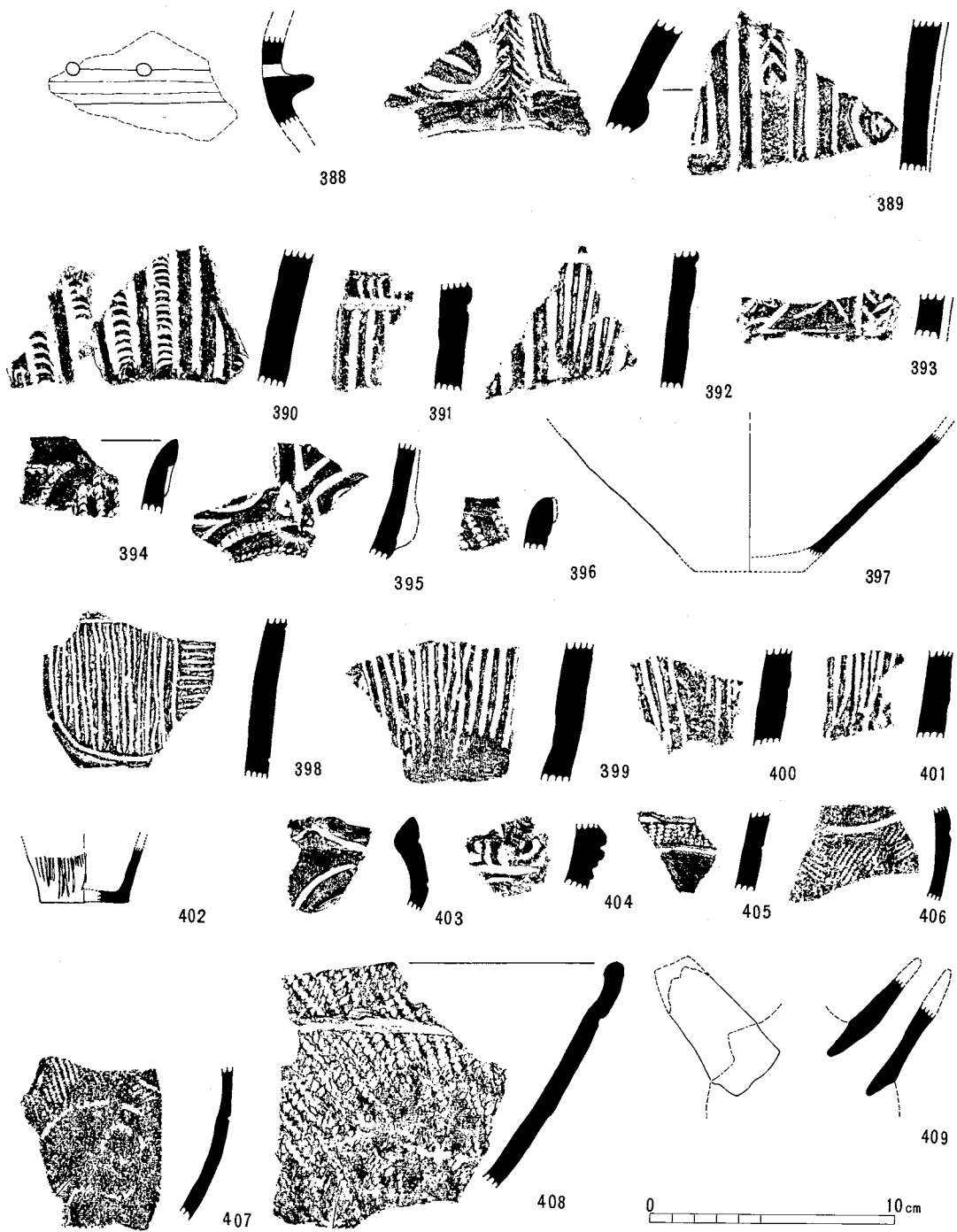
第60図 判の木山東遺跡遺構外出土土器拓影図(その4)(1:3)



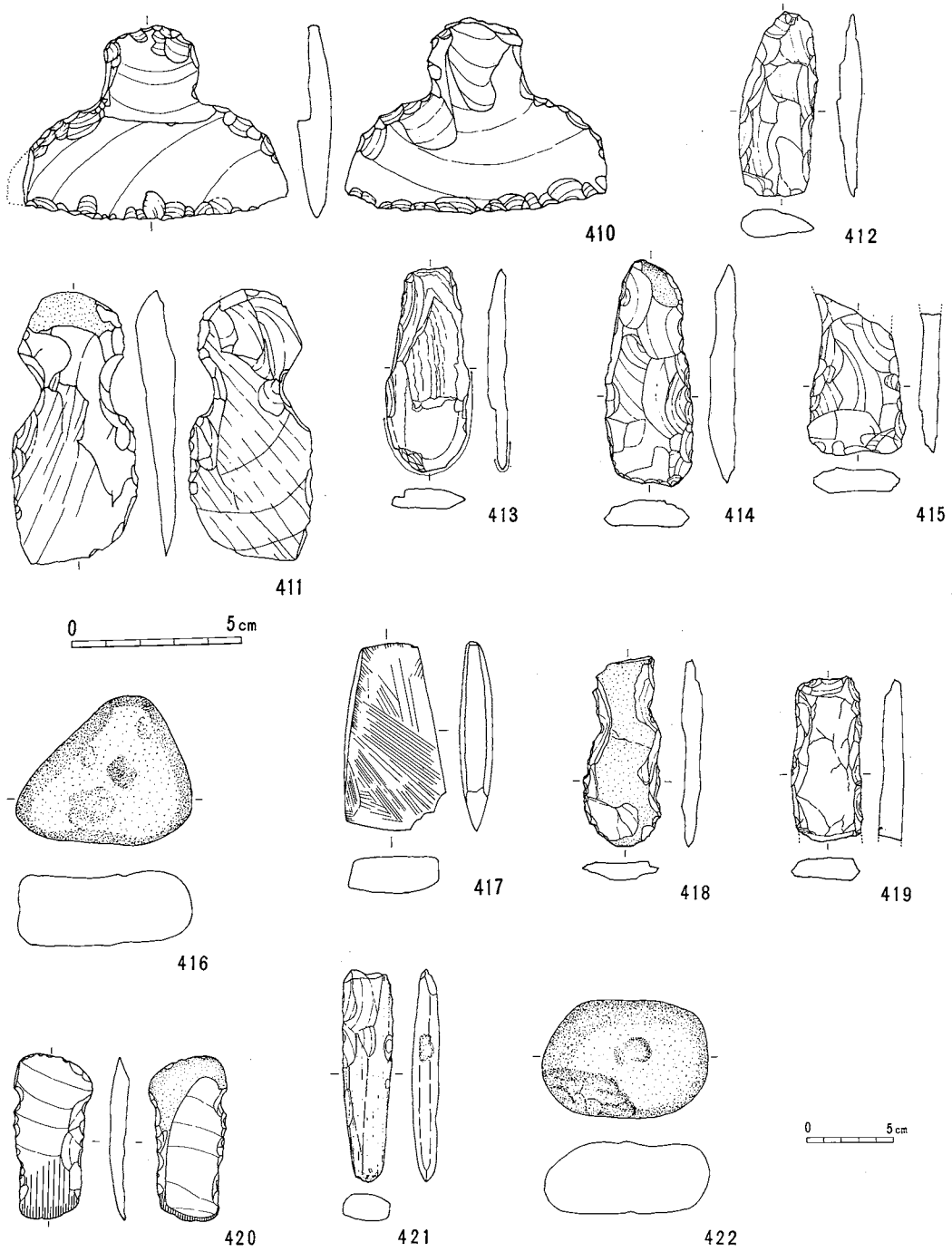
第61図 判の木山東遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その5)(337・338 1:6, 他は1:3)



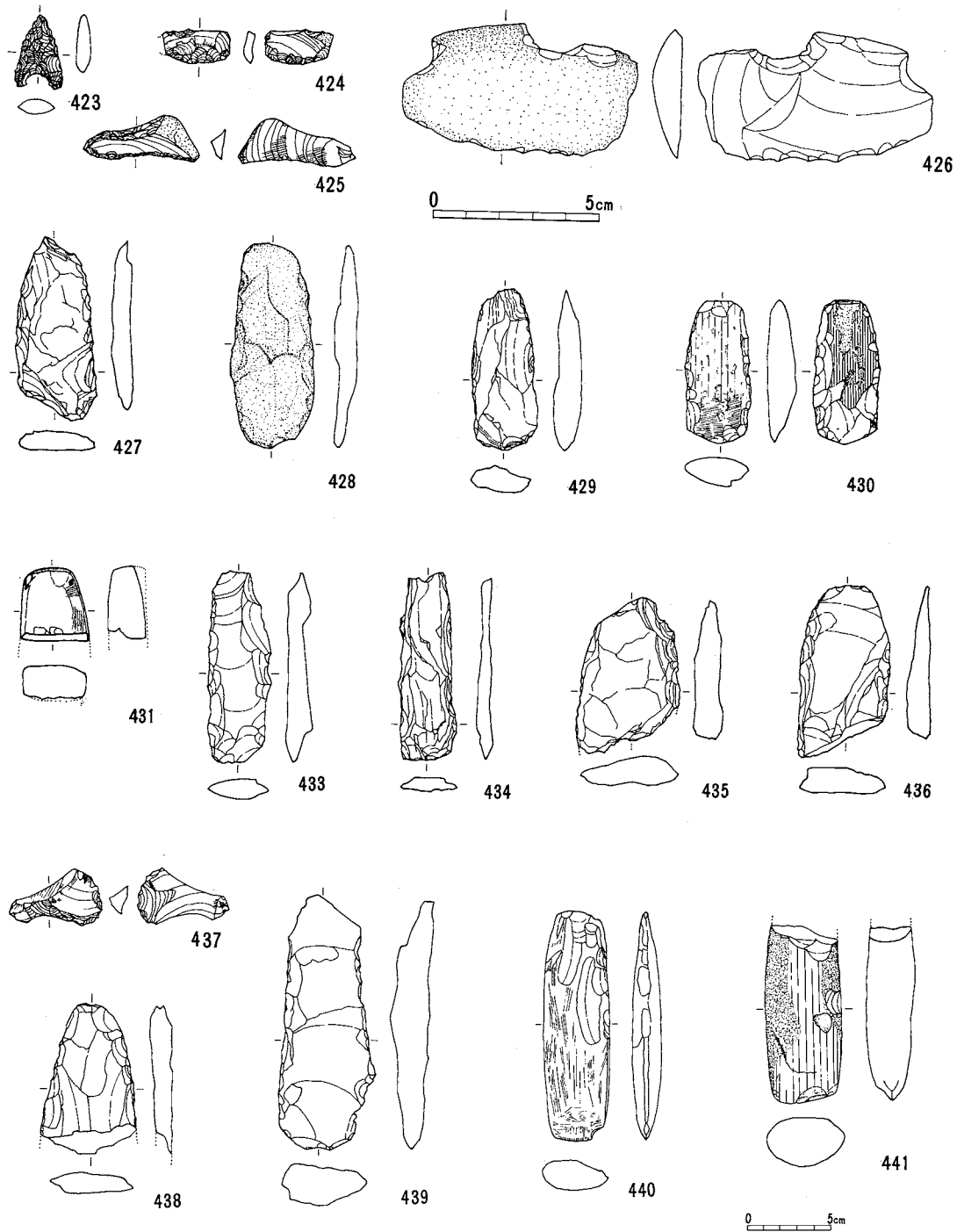
第62図 判の木山東遺跡遺構外出土器実測・拓影図(その6)(387 1:6, 他は1:3)



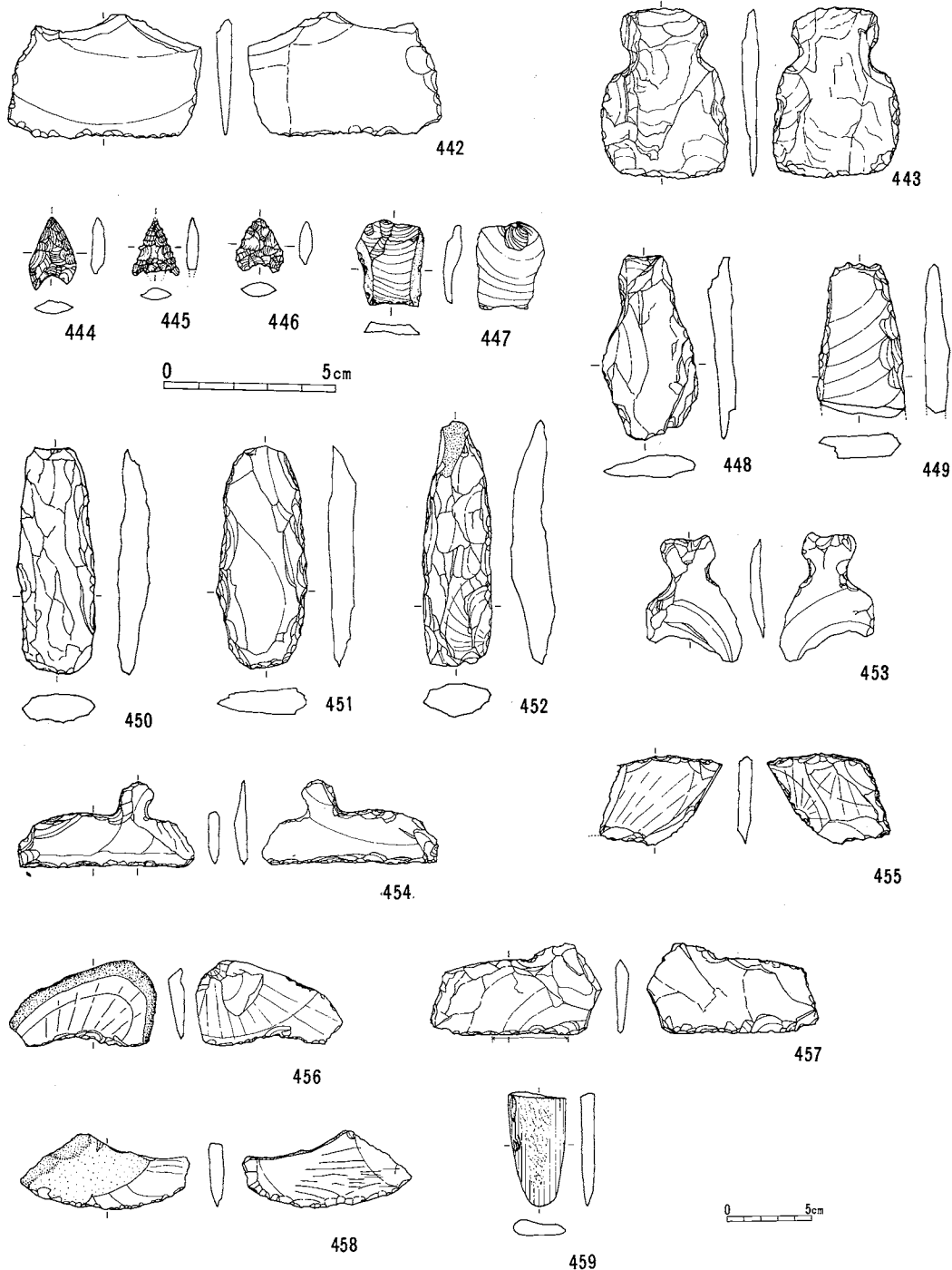
第63図 判の木山東遺跡遺構外出土土器実測・拓影図(その7)(397 1:6, 他は1:3)



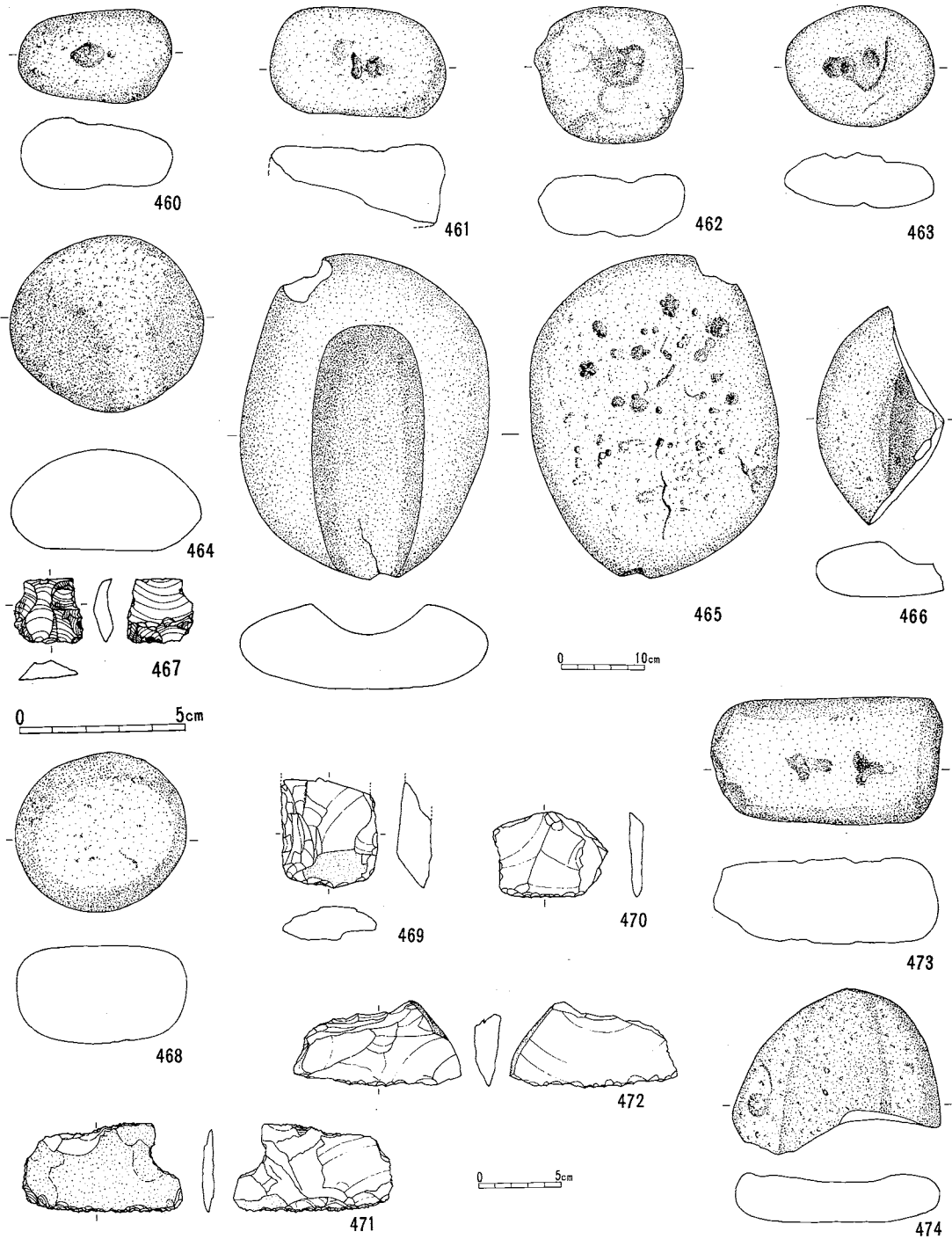
第64図 判の木山東遺跡2・3号住居址出土石器実測図(410・411・417 1:2, 他は1:4)
 (412 2号住居址(旧), 410・411・413~416 2号住居址(新), 417~422 3号住居址)



第65図 判の木山東遺跡 5・8・9号住居址出土石器実測図(423~426・437 1:2, 他は1:4)
 (423~430 5号住居址, 431~436 8号住居址, 437~441 9号住居址(旧))

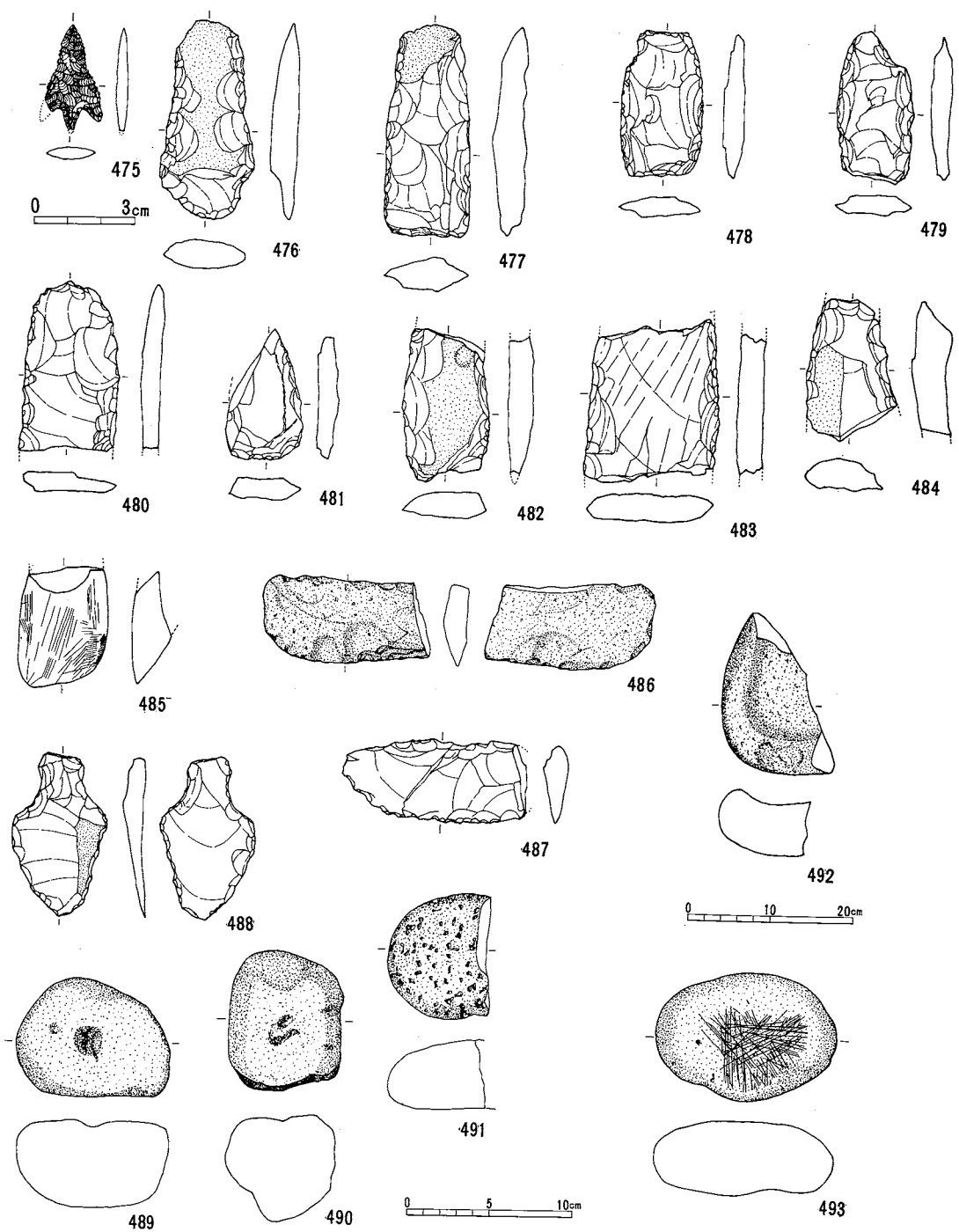


第66図 判の木山東遺跡9号住居址出土石器実測図(444~447 1:2, 他は1:4)
 (442・443 9号住居址(旧), 他は9号住居址(新))

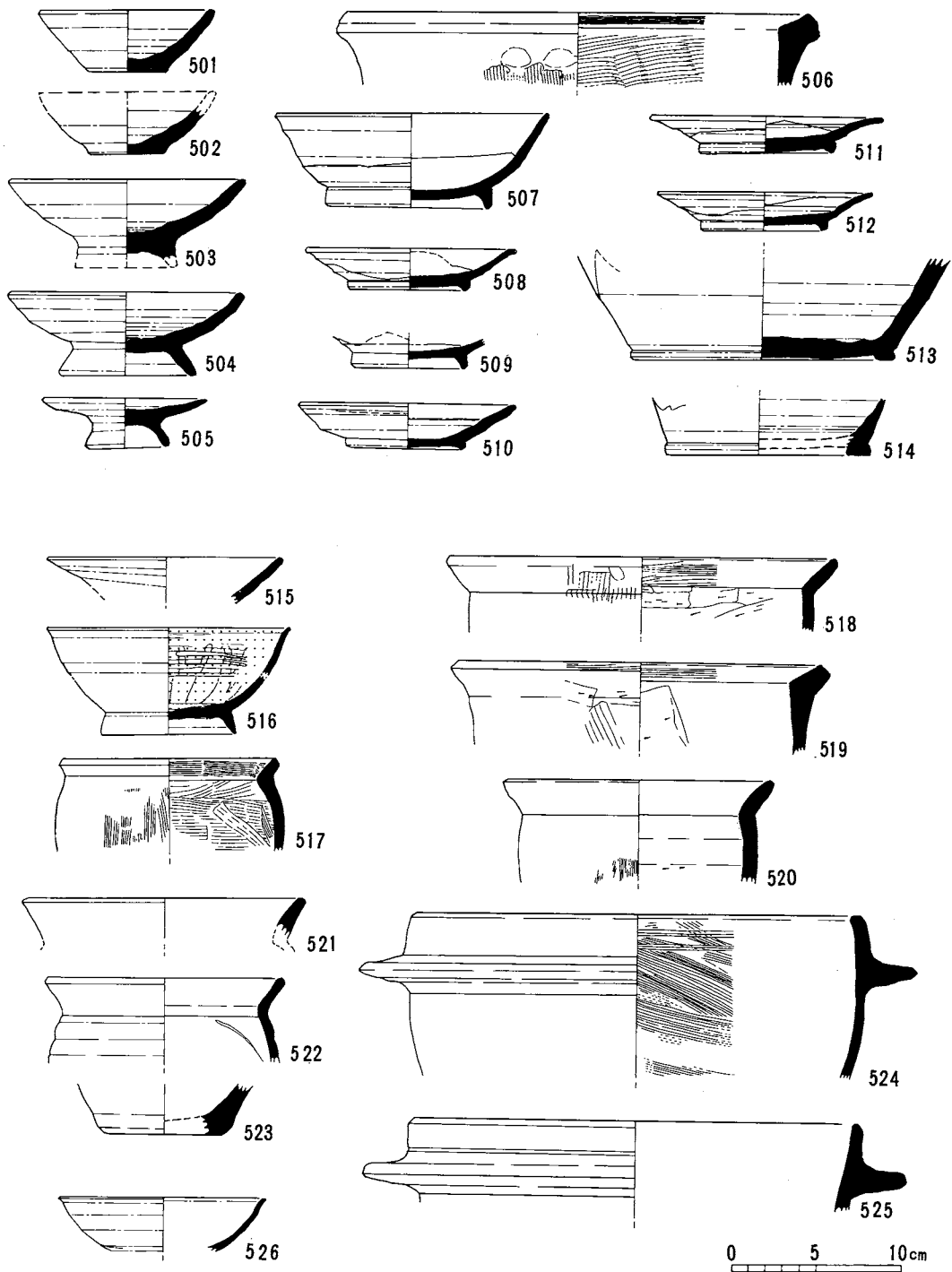


第67図 判の木山東遺跡9・11・12号住居址出土石器実測図(467 1:2, 465・466・474 1:8, 他は1:4)

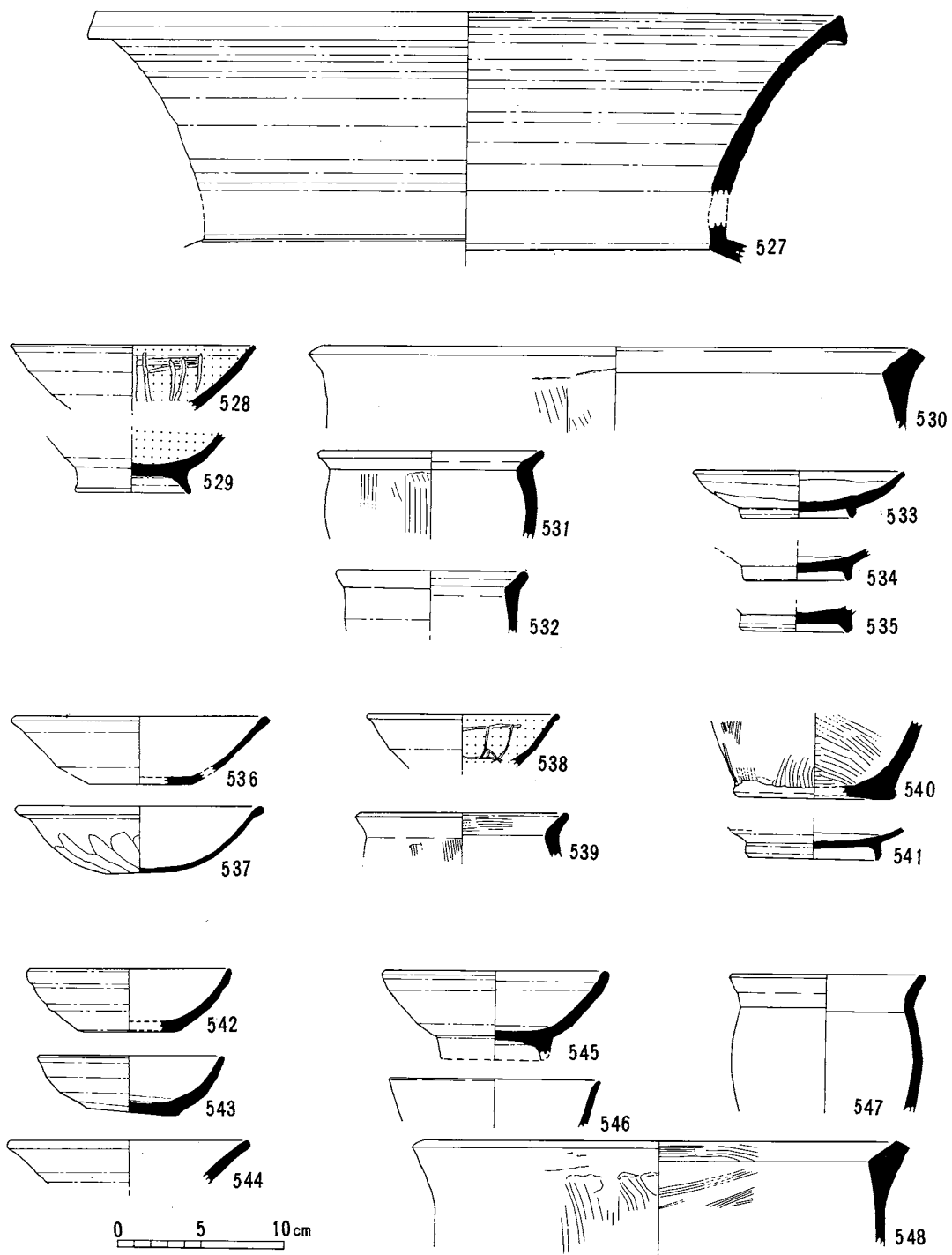
(460~466 9号住居址(新), 467・468 11号住居址, 469~474 12号住居址)



第68図 判の木山東遺跡6号住居址，土壌2，遺構外出土石器実測図(475 1:2, 492・493 1:8, 他は1:4) (493 6号住居址, 475 土壌2, 他は遺構外)

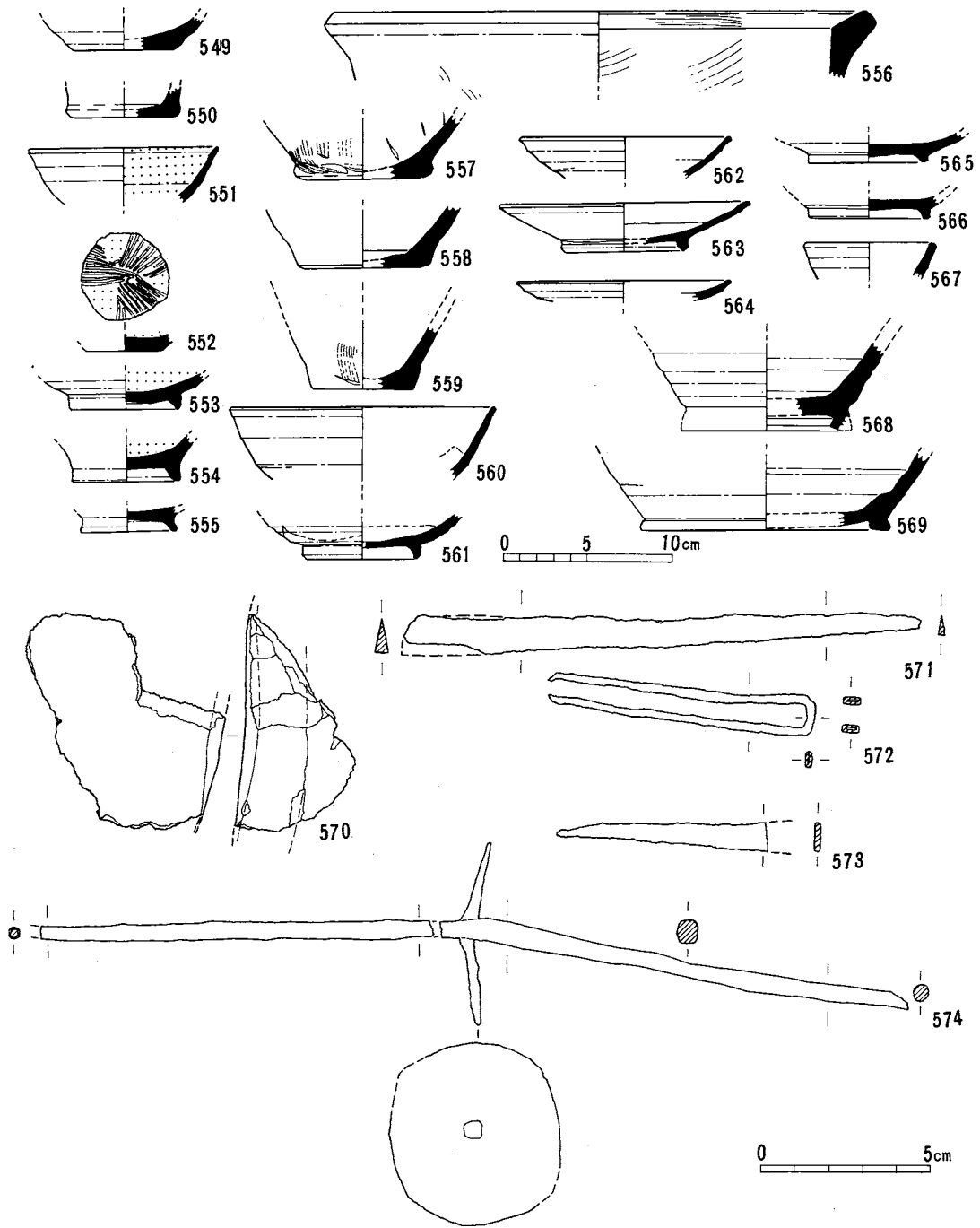


第69図 判の木山東遺跡1・4号住居址出土土器実測図(1:4)
 (501~514 1号住居址, 515~526 4号住居址)



第70図 判の木山東遺跡 4・6・7・10号住居址出土土器実測図(1:4)

(527 4号住居址, 528~535 6号住居址, 536~541 7号住居址, 542~548 10号住居址)



第71図 判の木山東遺跡遺構外出土土器(1:4), 1・4・6号住居址出土石器・金属器
 (1:2) 実測図 (571・572 1号住居址, 570・573 4号住居址, 574 6号住居址 他は遺構外)

第14表 判の木山東遺跡出土石器一覧表

挿図番号	出土遺構	器種	長さ _{cm}	巾 _{cm}	最大厚 _{cm}	重さ _g	石質	備考
64-410	2号住居址	石匙	5.6	7.7	1.0	35	硅質粘板岩	
411	〃	〃	7.9	3.7	0.9	30	ホルンフェルス	火をうける
412	〃	打製石斧	10.8	4.4	1.5	100	緑簾緑泥片岩	2号住居址(旧)ⅡA
413	〃	〃	11.8	4.9	1.1	80	緑泥片岩	ⅡB
414	〃	〃	13.2	5.2	1.7	130	硬砂岩	ⅡB
415	〃	〃	(11.4)	5.6	1.5	(95)	硅質砂岩	ⅢA
416	〃	凹石	10.2	8.4	4.0	485	輝石安山岩	
417	3号住居址	磨製石斧	5.4	3.1	1.0	25	緑泥片岩	定角式、小形
418	〃	打製石斧	11.1	4.5	1.2	72	〃	ⅡB
419	〃	〃	(9.2)	4.0	1.3	90	〃	Ⅱ
420	〃	大形粗製石匙	9.6	4.7	1.0	60	硬砂岩	
421	〃	磨製石ノミ	12.4	2.9	1.6	100	石墨緑泥片岩	
422	〃	凹石	9.8	6.8	4.0	410	輝石安山岩	
65-423	5号住居址	石鏃	2.17	1.45	0.4	1.1	黒耀石	
424	〃	剥片石器	0.95	1.9	0.3	0.7	〃	
425	〃	〃	1.4	3.45	0.65	1.5	〃	
426	〃	石匙	3.7	6.8	0.8	22	硬砂岩	
427	〃	打製石斧	10.9	4.7	1.3	90	点紋緑泥片岩	ⅡC
428	〃	〃	12.3	5.0	1.5	110	硅質砂岩	ⅡC
429	〃	〃	9.6	3.8	1.4	75	緑泥片岩	ⅡB
430	〃	磨製石斧	8.5	3.9	1.7	90	〃	半製品
431	8号住居址	〃	(4.6)	(4.2)	(2.2)	(70)	〃	定角式(頭部のみ)
433	〃	打製石斧	11.5	3.8	1.6	75	硬砂岩	ⅡC
434	〃	〃	(11.8)	3.5	0.8	45	滑石緑泥片岩	ⅡA
435	〃	〃	(10.0)	6.2	1.8	(132)	石墨緑泥片岩	Ⅱ
436	〃	〃	(10.4)	5.3	1.8	(115)	硬砂岩	Ⅱ
437	9号住居址(旧)	剥片石器	1.65	2.8	0.5	2	黒耀石	
438	〃	打製石斧	(11.1)	5.8	1.2	(80)	緑簾緑泥片岩	I
439	〃	〃	15.2	5.6	2.4	200	砂岩	火をうけるⅡB
440	〃	磨製石ノミ	13.9	3.9	1.7	160	緑泥片岩	
441	〃	磨製石斧	(10.7)	4.6	2.9	(240)	〃	乳棒状
66-442	〃	横刃型石器	7.2	10.5	1.0	90	硬砂岩	I A
443	〃	大形粗製石匙	9.9	7.2	6.5	70	硅質粘板岩	
444	9号住居址(新)	石鏃	2.6	1.4	0.4	1	チャート	
445	〃	〃	(1.6)	1.35	0.4	0.5	黒耀石	
446	〃	〃	1.5	1.35	0.4	0.7	〃	
447	〃	剥片石器	2.55	2.0	0.5	2.5	〃	
448	〃	打製石斧	10.8	5.4	1.4	80	硅質粘板岩	I C
449	〃	〃	(10.3)	5.1	1.4	(80)	硬砂岩	I
450	〃	〃	13.2	4.5	1.9	150	緑泥片岩	ⅡB
451	〃	〃	13.0	5.2	1.3	160	〃	ⅡB
452	〃	〃	14.3	4.0	2.1	175	緑簾緑泥片岩	I B
453	〃	大形粗製石匙	7.5	5.5	0.7	25	砂岩	
454	〃	〃	4.9	10.4	0.7	42	緑泥片岩	
455	〃	横刃型石器	5.6	(5.9)	0.7	(40)	〃	I A

挿図番号	出土遺構	器種	長さ _{cm}	巾 _{cm}	最大厚 _{cm}	重さ _g	石質	備考
456	9号住居址(新)	横刃型石器	5.0	8.8	1.0	50	緑泥片岩	I A
457	〃	〃	5.4	10.0	0.8	50	粘板岩	I A
458	〃	〃	4.4	9.8	0.9	40	硬砂岩	II A
459	〃	磨製石ノミ	(6.8)	3.5	0.9	(30)	緑泥片岩	
67-460	〃	凹石	9.4	5.6	4.4	280	輝石安山岩	
461	〃	〃	10.5	6.4	(4.9)	(360)	〃	
462	〃	〃	8.5	8.1	4.1	370	〃	
463	〃	〃	8.9	7.4	3.1	230	〃	
464	〃	磨石	11.4	10.7	6.2	940	〃	
465	〃	石皿	38.2	29.0	9.6		〃	
466	〃	〃	(26.3)	(15.0)	6.7	(2640)	〃	
467	11号住居址	剥片石器	1.9	2.0	0.5	2.1	黒耀石	
468	〃	磨石	10.3	9.5	5.7	780	輝石安山岩	
469	12号住居址	打製石斧	(6.6)	5.6	2.0	(90)	硬砂岩	A
470	〃	横刃型石器	5.1	6.5	0.9	40	緑泥片岩	I A
471	〃	〃	5.2	9.5	0.7	40	粘板岩	I C
472	〃	〃	5.1	10.0	1.6	85	緑泥片岩	I B
473	〃	凹石	13.7	7.5	5.2	785	輝石安山岩	
474	〃	石皿	(17.5)	24.9	5.8	2960	〃	
68-475	土 壇 2	石 鏃	3.2	1.6	0.4	1.3	黒耀石	
476	そ の 他	打製石斧	13.3	5.7	1.7	120	硬砂岩	II B
477	〃	〃	13.7	5.2	2.0	160	〃	II A
478	〃	〃	8.7	4.9	1.3	80	緑泥片岩	II A
479	〃	〃	9.2	4.4	1.2	70	〃	II C
480	〃	〃	(10.3)	5.7	1.3	(110)	硬砂岩	II
481	〃	〃	(7.8)	4.7	1.4	(50)	硅質粘板岩	I B
482	〃	〃	(9.1)	5.1	1.4	(90)	粘板岩	II A
483	〃	〃	(9.8)	7.9	1.7	(250)	緑泥片岩	II
484	〃	〃	(8.4)	5.5	2.0	(110)	硬砂岩	I
485	〃	磨製石ノミ	(8.6)	5.3	2.5	(125)	緑泥片岩	
486	〃	横刃型石器	5.5	(10.1)	1.5	(100)	ホルンフェルス	II B
487	〃	〃	4.9	11.1	1.9	(140)	石墨緑泥片岩	II B
488	〃	大形粗製石匙	9.7	5.7	1.2	50	硬砂岩	
489	〃	凹石	9.2	8.5	5.9	395	輝石安山岩	
490	〃	〃	8.6	6.7	7.0	400	〃	
491	〃	磨石	7.8	(5.7)	4.2	(240)	〃	
492	〃	石皿	(21.0)	(11.0)	7.9	(2000)	〃	
493	6号住居址	線刻石	21.6	15.3	8.9	3320	〃	砥石
35-494	〃	打製石斧	(12.1)	4.3	1.5	100	硬砂岩	接合 II B
495	〃	〃	(14.3)	7.1	2.8	(190)	〃	〃 II A
496	〃	石槍状石器	7.4	5.2	1.6	80	〃	〃
497	〃	横刃型石器	7.9	(10.6)	1.3	120	〃	〃 I B
498	〃	〃	5.5	7.9	0.9	50	緑泥片岩	III C

第15表 判の木山東遺跡出土平安時代土器一覧表

挿図番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
501	1号住居址	H	杯 C	10.2	3.6	4.6	
502	〃	H	杯 C	(10.3)	(3.7)	(4.3)	
503	〃	H	杯 BⅡ	13.7	(5.3)	(6.0)	
504	〃	H	杯 BⅡ	13.7	5.0	8.1	
505	〃	H	杯	9.5	3.0	5.0	ごく浅い酒杯状、口縁部内外面とも煤状炭化物付着
506	〃	H	甕 C	27.3	—	—	
507	〃	K	碗 AⅠ	16.0	5.7	9.5	篠岡
508	〃	K	皿 AⅠ	12.5	2.5	6.9	篠岡 0-53
509	〃	K	皿	—	—	6.5	底部は糸切り、ケズリ用いず、東濃0-53に近似
510	〃	K	皿 C	12.7	2.7	6.5	篠岡
511	〃	K	皿 C	13.6	2.2	7.8	篠岡 0-53
512	〃	K	皿 C	12.5	2.3	7.0	篠岡 0-53 初頭
513	〃	K	瓶	—	—	15.2	東濃
514	〃	K	瓶	—	—	12.0	
515	4号住居址	H	杯 Aa	13.7	—	—	
516	〃	H	黒色 B	14.2	6.3	7.9	体部内面にハケメ状の痕跡、外面に炭化物付着
517	〃	H	甕 A	12.6	—	—	
518	〃	H	甕 C	22.9	—	—	口縁部は折り返さず、胴部内面はヘラケズリ
519	〃	H	甕 C	21.5	—	—	胴部内面はヘラケズリ
520	〃	H	甕 D	15.7	—	—	胴部内面はヘラケズリ
521	〃	H	甕	16.0	—	—	
522	〃	H	甕 F	13.9	—	—	
523	〃	H	甕	—	—	6.6	
524	〃	H	甕 E	26.3	—	—	
525	〃	H	甕 E	26.0	—	—	
526	〃	K	碗 AⅡ	12.1	—	—	篠岡に近似、ケズリは用いないらしい
527	〃	S	甕	44.2	—	—	頸部はロクロナデ、胴部はタタキ
528	6号住居址	H	黒色 B	14.5	—	—	
529	〃	H	黒色 B	—	—	6.9	
530	〃	H	甕 C	35.5	—	—	
531	〃	H	甕 A	13.4	—	—	
532	〃	H	甕 B	11.1	—	—	
533	〃	K	皿 AⅠ	12.5	2.8	6.5	篠岡 0-53
534	〃	K	皿 AⅠ	—	—	6.0	ケズリ用いず、東濃0-53
535	〃	K	皿	—	—	6.0	ケズリ用いず
536	7号住居址	H	杯 Ab	15.0	4.0	6.2	
537	〃	H	杯 Ab	14.5	4.0	4.4	
538	〃	H	黒色	11.5	—	—	
539	〃	H	甕 B	12.3	—	—	
540	〃	H	甕 C	—	—	9.0	
541	〃	K	皿	—	—	7.7	篠岡 K89

挿図番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
542	10号住居址	H	杯 (A)	12.0	3.8	5.5	
543	〃	H	杯 C	11.0	3.5	5.6	
544	〃	H	杯 BⅡ	14.4	—	—	
545	〃	H	杯 BⅡ	13.5	(5.4)	(6.2)	
546	〃	H	黒色	12.6	—	—	
547	〃	H	甕 D	11.6	—	—	
548	〃	H	甕 C	28.4	—	—	
549	遺構外	H	杯 C	11.1	—	6.0	
550	〃	H	杯	—	—	6.0	
551	〃	H	黒色	11.1	—	—	
552	〃	H	黒色 A	—	—	4.6	
553	〃	H	黒色 B	—	—	6.5	外面体部下半から底部外周にかけて回転ヘラケズリ
554	〃	H	黒色 B	—	—	6.2	
555	〃	H	黒色 B	—	—	5.7	
556	〃	H	甕 C	31.5	—	—	
557	〃	H	甕 C	—	—	6.6	
558	〃	H	甕 C	—	—	6.8	
559	〃	H	甕	—	—	6.0	
560	〃	K	椀 AⅠ	15.6	—	—	篠岡近似
561	〃	K	椀	—	—	6.5	篠岡近似
562	〃	K	椀 AⅡ	12.4	—	—	篠岡近似
563	〃	K	皿 AⅠ	14.8	2.9	7.0	篠岡近似
564	〃	K	皿 AⅠ	12.5	—	—	篠岡近似
565	〃	K	皿	—	—	6.8	篠岡近似 ケズリを用いず
566	〃	K	皿	—	—	6.9	東濃近似 ケズリを用いず
567	〃	K	壺	7.5	—	—	
568	〃	K	瓶	—	—	(10.0)	
569	〃	K	瓶	—	—	14.6	

10. 頭殿沢遺跡(STDB)

1) 位置 (図1・3・72)

茅野市御狩野南御狩野5754番地の畑地に所在する(図1、3)。八ヶ岳山麓からの広い台地は本遺跡のある台地縁部では宮川の支流の小河川によって開折され、掌指状に長尾根を宮川に向かって張り出す。

本遺跡ののる長尾根は茅野市御狩野部落の南端にあり、北西側は頭殿沢と南東側は御射山沢に浸蝕されたもので、その先端部に近い。遺跡地周辺での両沢との比高差は、まだ小さく、尾根頂部と頭殿沢で8m、同じく、御射山沢とで10m程度である。

主になる尾根は東西に走るが、それに直交する方向に中央道用地に沿って支尾根を張りだし、頂部は平坦である。このため頭殿沢側の用地両側に西へ開口するカール状の地形を2カ所、御射山沢側には南へ開口するものを1カ所作っている。御射山沢寄りには2m程の崖をなして、同沢の氾濫原となるが、ここは宮ノ沢地籍となり谷水田で遺構の存在は考えられない。

本遺跡は昭和50年度の御狩野遺跡調査の際に発見された新遺跡である。頭殿沢の対岸には鉄鐸等豊富な副葬品を出土した平安時代後期の土壌1基が存在した御狩野遺跡(註1)があり、本遺跡との間の頭殿沢の氾濫原は水田となっているが、平安時代にも谷水田として利用された可能性も残されよう。御狩野遺跡と一体をなすもので、平安時代には尾根頂部から頭殿沢側斜面に集落が展開したもののようで、用地外西側の窪地の方は表採でも多量の遺物が採集されるのに比し、東側では微量である(図版30-1)。

また、本遺跡東方900mに御射山神社があり、諏訪社信仰遺跡群の中でも重要な地位を占めており、御狩野・頭殿沢・宮ノ沢等神社に関連する地名が多い。本遺跡の小字名御狩野は御射山神社一帯の原野をさしていたといわれ、古くは原村等も含む八ヶ岳山麓台地の広大な原野を指していたとも考えられている。

この一帯は大部分戦後の入植で開拓された土地が多い。(伴 信夫)

2) 調査の経過 (図72・73・図版30)

昭和50年、御狩野遺跡発掘調査の際に周辺遺物の表採で発見した。5月22日～24日に範囲確認調査を行った上で、公団と協議し、昭和51年度に発掘調査を実施することになった。

第一次調査は昭和51年4月5日より準備に入り、本遺跡の調査を開始したのは4月19日である。第1号住居址等の存在する農道より頭殿沢側の遺構調査は土壌実測作業を除いて6月29日には終了した。黒土中或いは傾斜面に一部残るのみの遺構が多く、検出には多くの時間をさかなければならなかった。尾根頂部から御射山沢寄りの調査に入ってから、全面に土壌と早期遺物の散布する部分があり全面発掘に切り替えたが、農道より御射山沢寄りの頂部から斜面中腹にかけ長芋栽培のため深耕されている部分はグリット

掘りに留めた。

尾根の南斜面の下半部に縄文中期の住居址が検出され、しかも、黒土中にあるものが多く予想外に時間と労力を取られ、調査を終了したのは8月17日であった。

グリットはSTA 267+80を基点AAとし、20m毎のセンター杭を結ぶ線に直交させる方向でグリットを設定している。基点より小牧よりも遺構がかかることが判明したため、基点より小牧寄りにもY区を設定しYV～YX列のグリット掘りを行なっている。

第一次調査で検出した遺構は縄文中期初頭から中葉の住居址10軒、平安時代後期の住居址5軒、土壌367基である。整理作業は遺構図整理、遺物の水洗い・注記作業までを年度内に終了させたが、2月上旬、小林調査員の退団、根津調査員の入院という事情と、前年度報告書に全力を集中させるという団の方針で凍結された。昭和54年度には白田を中心に別組織が分担し、現場作業不能な日に順次整理作業を進め、1～3月までを実測・図版作成にあてている。今回は平安時代の遺構・遺物に限定して報告した。

(伴 信夫)

3) 土 層

尾根頂部のグリット掘りに止めた部分はローム上層まで耕作され、表土も褐色土である。土壌2の部分頂部より下ると20～25cmのローム粒混入暗褐色土が表土となり、その下部に黒土層が20cmの厚さで堆積しロームとなる。下方のテラス部へ行く程、黒土層は厚くなり、25～30cmの表土(黒土)層の下部に漆黒色土層が約50cm入り、礫混入漸移層、ロームとなる。

(伴 信夫)

4) 遺構と遺物

ア、平安時代の遺構と遺物

ア) 第1号住居址(図74-1～3、76、79-106・107、図版30-1・2、31、33-5～9・11、34-3・7・8・10、35-2・6)

遺構 地表下40～50cmの黒土層中に検出された住居址で、覆土に少量の炭粉・焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土が落ち込むため、これを手懸りにプランの輪郭を把握した。

プランは南西隅が突出する台形に近い隅丸竪穴住居址で、壁中央部での計測値は東西3.60m、南北3.50mである。地形を考えると西壁に入口部が設けられた可能性が強く、従って、主軸方向はN58°Wとなる。傾斜地のため南東はローム、西・北は黒土であり、壁高は南で58cm、東で56cmと高く、北隅12cm、西で8cmと低い。屋外施設は確認できなかった。床面は南東の $\frac{2}{3}$ はロームで硬く、北西部は黒土中の床面で軟弱である。床面は焼土の広がりから判断した(図74-1、図版30・31)。

南東隅の石組粘土カマドはS34°E、2.0×0.6mの規模で良好な遺存状況であった。袖・煙道部もしっかりした石組で、焚口部から煙道部にかけて焼土が多い。焚口部から土師器杯、灰釉陶器皿完形品各1が出

土し、カマド周辺上面に土師器・灰釉陶器片が集中した（図74-2、図版30-2）。

周溝はカマドから北隅の東側半分に存在し、深さは5cm前後である。支柱穴はP₁~P₅で、P₄は半分壁中に入り、斜めになっている。P₁ 53×41 -31cm、P₂ 64×60 -35cm P₃ 56×34 -30cm、P₄ 45×44 -25cm、P₅ 44×39 -19cm。補助柱穴P₆は径17、-8cmである。

本址は火災にあった住居址である。上屋構造を知る程ではないが、多くの炭化材が中央部へ向かい、中央床面で炭化種子（桃・梅）や板材（樹皮？）の半炭化材もあった。カヤが2箇所から集中して発見されたが、炭化材の多くは焼土中に含まれ、焼土の厚さは10cmを越える部分もある。中央部の炭化材の中には刃物で切断した痕跡の認められるものが二・三ある（図74-1、図版31）。

鉄滓が多く出土していることは鉄器利用を示す一材料である。カマド焚口には獣骨と思われる骨片があり食糧なのか、その他のものか問題である。（小林正春）

遺物 出土遺物は比較的多い。床面遺物では4・6が2点重ねられてP₆のカマド寄りで、16はP₁東側、5・7・14・24はカマド前で、8・9・18はカマド部出土である。他に床面では3・10・11・15・22がある。23は煙道脇、17はP₄の南側壁上で出土しているが本址に所属するものであろう。特記しないものは覆土遺物である。

土師器は杯形土器1~13と甕形土器14・15である。杯形土器には、口縁部が底部から直線的に開く杯A 1・2と、杯Aに比べ器肉が6mm前後とやや厚目で、口縁部が腰部でくびれて立ち上がる杯C 3~7がある。高台杯11~13のうち13は、いわゆる足高の傾向を示す（図版33）。甕形土器は口縁部に最大径をもつ甕Bと甕Cで、特に14は甕Cの中でも口径26.2cmと大形である。灰釉陶器は椀形土器16~18と皿形土器19~24である。皿形土器には、輪花皿の皿B20と段皿の皿C'22~24がみられる（図版34）。22は口縁部がやや外反する。

ふいご羽口は106・107の2点（図版35-2）出土しているが、前者は赤褐色、後者は白色胎土で、外径・内径はそれぞれ8.2cm・2.1cmと7.2cm・2.2cmで先端部に鉄滓が融着している。鉄滓は2100gと多量にあるが、床面出土より浮いたものが多い。なお、刀子112、鎌片113はグリットAI58出土で、本址に伴う可能性の強いものである。出土した灰釉陶器からみて、平安時代後期折戸53号窯期の住居址である。

（白田武正・伴 信夫）

イ) 第2号住居址（図75-1・2、77、79-109~112、図版30、32、33-1・2・10、34-1・4~6・9、35-1・3・4）

遺構 表上下30~40cmの黒土層の中に検出された住居址である。グリット掘りで北壁部を破壊してしまったが、東西3.95m、南北3.80mの隅丸方形の竪穴住居址である。北へ張り出す尾根の裾にあるため東側に尾根を背負う形となり、入口は西側の可能性が強く、主軸方向はN87°Eである。壁は北西隅を除いてロームによる壁で良好である。壁高は東56cmと高く、西15cmと低くなる（図75-1、図版32）。

床面は北側の一部を除き、縄文中期初頭の第5号住居址に貼床しており、貼床部は軟弱である。東壁、北壁下には周溝をめぐらすのが3~8cmの深さである。

南壁よりに1.3×0.8mの石組粘土カマドが構築されており、天井石は崩れているが、袖石は原位置を保っていた。煙道部にも石が組まれている（図75-2、図版30-3）。焚口部より刀子完形品109、右袖外側

に灰釉陶器皿完形品58が左袖に27が出土した。

主柱穴はP₁~P₄で、P₄上には上部の一部に貼床があり、貯蔵穴と考えているが、主柱穴としても一部利用していると考えた方が妥当と思われる。P₁ 48×37 -18cmでや、袋状となり、P₂ 40×39 -23cm、P₃ 45×28 -28cm、P₄ 77×54 -38cmである。P₄内からは土師器杯30が出土している。P₄~P₇は貯蔵穴としておくが、他に利用された可能性もある。P₅は一部貼床され、187×88 -30cmで土師器杯31・灰釉陶器皿片56が出土した。P₄ P₅には若干の焼土・炭化物が含まれていた。P₆は104×90 -33cm、P₇は93×46 -36cmであり、ともに貼床されていた。これらの貯蔵穴は住居址廃棄時には使われていなかったと考えられる。

(小林正春・辰野伝衛)

遺物 前記した遺物以外の出土状況を記す。49・60がP₃脇で、26は東壁中央部の下、47がP₇内の床面出土である。カマド袖部及びカマドから1m以内の床面出土遺物が殆んどであり、25、27~29、34~38、41、43~45、48~49、51~55、57、61があげられる。特記しないものは覆土内出土である。

土師器は器種の判明するものとして、杯B28~31、39~42と杯C25~27があげられる。内面黒色土器は高台杯の黒色B43・44で共に内面には放射状の暗文が施されている(図版33)。甕形土器は口縁部に最大径をもつ甕45・46と、いわゆる羽釜の甕E47である。灰釉陶器は大別すると碗A48~54と皿A55~59と段皿の皿C60・61の三種に分類される。碗Aの54は底部外面に墨書の痕跡がみられるが判読不能である。皿C60は口縁部が鋭く外反し、様相を異にする(図版34)。

鉄製品では完形の刀子109は全長13.4cm、角釘111は全長4cmを示すが、共にカマド内と焚口部の出土である。刀子片110はP₅内出土で、P₅からは報告もれとなってしまったが鎌が出土している。次回に報告したい。本址は出土した灰釉陶器から判断して平安時代後期折戸53号竈期の住居址である。(臼田武正)

ウ) 第6号住居址(図75-3、78-62~64、図版34-2)

遺構 尾根状台地の中腹にあるため表土が浅く、耕作によって既に大部分が破壊されていたと思われる。耕土を約20cm除去したところ、集石中に焼土や灰釉陶器片がまじり、煙道部である可能性を考え掘り下げたが、遺構の輪郭線を掴むことは不可能であった。カマドの存在と周辺の遺物の散乱から、住居址が存在したことを確認したのみである。

カマドは左袖の一部が残り、焚口と煙道付近に焼土が残り、S17°Eの方向を持っている。カマド部からは62~64の灰釉陶器が出土している。カマド東側の石4個は石組が崩れたものであろう。これと、カマド左袖と認定した石列との間には、焼土が存在しなかった(図75-3)。

遺物 前記62~64のカマド部出土以外では、71・91がグリット遺物ではあるが、本址の想定範囲内出土である。灰釉陶器碗の63は、口径17.4cmと大形で、口縁部内側に一条の沈線がめぐる。本址は出土遺物から、折戸53号竈期、平安時代後期の住居址である。

(伴 信夫・小林正春)

エ) 第7号住居址(図74-4、75-4、78-65~68、図版32-2)

遺構 第6号住居址と同様に急傾斜地にあり、東側の一部を残存させるだけであった。本址は第8号住居址に貼床していたものと考えられる。方形の竅穴住居址であったと推定する。東壁の残存高5cm、南壁は11cmであり、床面はロームだが軟弱不良、東隅に約10cmをなして高いテラス状部がある(図74-4、図

版32-2)。カマドは石1箇と粘土若干、焚口部と思われる箇所の焼土を残すのみである。(小林正春)

遺物 出土遺物は僅少である。65-68の他に完形石鏃1点が床面より出土しているが、まぎれこんでしまい図示できなかつた。次の報告書で記載したい。また、本址床面出土の鉄片・鉄滓について、調査者小林は8号住居址内で検出された土壌(図75-4)がふいご羽口、鉄片を持っており、第8号住居址床面より低すぎる位置にあることなどから、本址との関連を強く考えており、妥当な結論と考える。本址は出土遺物からみて、折戸53号竈期・平安時代後期の住居址である。(伴 信夫)

オ) 第8号住居址(図74-4、75-4、79-108、図版32-2、35-5・7)

遺構 上記の第7号住居址に切られ貼床されていた住居址である。プランは南東部の $\frac{1}{4}$ を残すのみであるが、方形の竪穴住居址と思われる。残存する壁と壁下床面はロームであるが、大部分は黒土層での床面となり軟弱である。床は南西へ傾斜する(図74-4、図版32-2)。

カマドは南壁ほぼ中央にあると考えられるが、第7号住居址の構築及び傾斜地のため、焚口部に焼土と木炭・石1箇を残し削平される。カマド前に炭化物のブロックがあるが、本址床より約10cm低く、下記の土壌と同様に考えてよいと思われる。

本址の中央部と思われる部分では、本址床面がなくなっているが、本址の床面と推定される高さより40cm下部に95×65cmの楕円形のピットがある。一応、土壌としたが、内部よりふいご羽口、鉄片が検出された(図75-4)。この土壌は本址床面とのレベル差がありすぎ、本址床面が相当傾斜していたにしても、本址施設と考えるには無理があり、第7号住居址床面で鉄滓が多出していることから見ると、第7号址施設と考えられる。(小林正春)

遺物 本址遺物と断定できるものは、小破片若干である。鉄滓少量がある。ふいご羽口片108は推定外径6.9cm、内径2.0cm、残存長16cmに復元されたもので、先端部には鉄滓が付着し、灰桃色を呈する。この羽口には本址内土壌としたピット出土で、第7号住居址の遺物である可能性の強いものである。

(白田武正)

カ) 土 壌

本遺跡で検出された土壌は367基にのぼるが、ここでは平安時代後期の遺物を出土している土壌2・3に限って報告したい。

土壌2(図75-6、78-69、図版33-3)

440×330cmで南北方向に長い不整楕円形を呈するローム・マウンドで、ローム攪乱部の最深部は120cmである。本址東側の周溝状をなす黒色土・褐色土層は中央のマウンド下部までもぐり込む傾向があるが、V層、VIIb層まで縄文深鉢小片、黒耀石フレイクが入り込む。マウンド部の褐色土層は西側へ寄っているが、西への傾斜面にあるため上面部は流され広がったと解釈されよう。内部の状況は、大規模であることから人為的な感じを受けないでもないが、東風を受けての倒木によるものと考えられる。斜面肩部にあるため大きな攪乱部をつくったものであろう。

東側上面に焼土があり、III・IVa層の木炭を多量に含む黒色土・褐色土が溝状にあり、一部、本址北東隅から尾根頂部へ延びていた。平安時代の遺構の存在を予想し調査したが、不規則で性格を把握できな

った。鍛冶工房の可能性も考えたがその痕跡はなく、土壙墓の存在が推定される。(伴 信夫・知名定順)
遺物は、土師器高台杯69が、木炭混入褐色土中から出土。高台を欠くが、欠損部(高台貼付部)の磨滅が著しく、再利用されている。(臼田武正・伴 信夫)

土壙 3 (図75-5、78-70、図版33-4)

112×96cmの楕円形を呈する土壙で深さ31cm、上部で高台を欠く土師杯70が正位で出土した。黒土中に掘り込まれている。底面は黒土中に褐色土の貼床状となり、焼土・木炭片が認められる。杯は供献されたものと思われ、平安時代の火葬墓か、いずれにしても土壙墓である。(伴 信夫・辰野伝衛)

遺物は、褐色土中、土壙60cm上部から土師器高台杯70が出土。69とほぼ同形態を示す。(臼田武正)

キ) 遺構外出土遺物 (図78-71~87、79-88~105・113、図版35-1)

遺物は、すべてグリット掘り段階でのものだが、遺構の覆土遺物となる可能性のあるものを列記する。
第1号住居址 73・80、第2号住居址 74・78・83・88・93、同住周辺84・98・104・105、第6号住居址 71・91、第7・8号住居址 72・82、土壙3周辺102である。

他は、主として、第1号住居址等の存在する斜面から出土したものが多く、尾根頂部の農道脇平坦地から少量、頭殿沢側斜面からも微量の平安時代遺物が出土している。

頭殿沢遺跡の遺構外出土の遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、鉄滓等がある。その殆んどは褐色土層から黒色土層の出土で、検出遺構上層ないしは周辺のグリットに集中する。

土師器は杯71~75、黒色土器76~81、甕83~87で、他に小型手捏ね土器82が1点出土している。黒色土器は全て内面が篋磨きされ、暗文が施されている。86・87の甕はロクロ成形され、外面が篋削りされるものである。87底部には糸切りが残る。

須恵器は小破片であるため図示し得ないが、甕片が3点出土している。

灰釉陶器は、碗88~97・101・104と皿98~100・102・103の二器種の他に、壺の破片が2点出土している。105は、内外面の施釉およびトチン使用痕などから、他と所産の時期を異にするものとする。

鉄製品は、AI58から刀子片113と鎌片114が出土しているが、出土層の状況から1号住居址覆土に帰属するものであろう。鉄滓は、A地区第1号住居址周辺の褐色土中から、6点計626gが出土。同住居址の鍛冶工房址的性格と関連づけて考えられるものである。(臼田武正)

5) まとめ (表6、7、16、17、19)

本遺跡での平安時代住居址の選地は尾根状台地頂部の平坦面より、斜面につくられることは隣接する手洗沢遺跡、判の木山東遺跡にもみられ、決して、特殊例ではない。今後、止むを得ず遺跡を破壊しなければならないときには、十分な分布調査(試掘を含めた)をしなければならないと感じる。

八ヶ岳山麓台地西縁部には、中央道用地内の調査だけみても、相当、濃密な平安時代後期遺跡がある。弥生時代から平安時代中期までで中世に入ると殆んど遺物、遺構が確認されない。平安時代後期の折戸53号竈期に下段の沖積地から、台地上への急激な進出がみられ、相当の開発が進められたにもかかわらず、比較

的、短期間で集落は消え原野に戻るようである。この事実は11世紀中頃に気温上昇のピークを迎えたといわれる事実(註2)に符合する。

阿久、居沢尾根、大石、判の木山西、同東、御狩野、手洗沢、等の遺跡であるが、好んで台地縁部の小河川が深い谷を刻み始める位置に立地する例が多いことは、どのような事情によるものであろうか。これらの遺跡の集落が、下方の宮川の形成した沖積地に存在したであろう親集落との関係を意識した結果と考えられる。また、集落を支えた生産形態を考えたときに、温暖化が進んだことと、稲作技術の向上から900mを越す高冷地への水稻栽培の進出を考えるには、阿久・居沢尾根遺跡を除いて、その他の遺跡では考えにくい。水利面でみたら、もう少し、八ヶ岳寄りに立地した方が好都合と思われる。谷水田を利用したにしても、それは補完的なもので、恐らくは焼畑を含めて畑作での雑穀栽培を考えた方が良いのであろう。また、三方を急崖に囲まれる地形は馬の放牧に適している。本遺跡のような場合、集落のある部分にだけ短い柵を設けるだけで、急崖斜面の柵は馬の習性からして不要だといわれる。1～2頭の小規模な放牧なら十分可能な面積は先端部まで含めると持っている。

本遺跡での第1・7号住居址は鍛冶工房址の色彩が、確かに濃い。第7号住居址のカマドが小さく、出土遺物も少なく急傾斜地を選んでいること、鍛冶施設とみられる土壌の存在からみて、第7号住居址は作業場で、第1号住居址が生活の場であったと考えることはできないだろうか。

本遺跡の西に接する御狩野遺跡では、鉄鐔等豊富な副葬品を持った土壌が1基検出されている。本遺跡の住居址の出土品は、期待に反して一般的なもので、被葬者を支えた集団の構成員であったにしても直接的には結びつかない。今後、周辺に優れた遺物をもつ住居が発見されるかも知れないが、被葬者は東隣りの緑釉を出している手洗沢遺跡の住人であろうか。時代は若干降るが、1219年には諏訪上社荘園の在家が青柳に存在している(註3)。いずれにしても、御射山神社周辺の上記3遺跡は、諏訪上社との関係の深そうな遺跡で、10世紀後半～11世紀には御射山神社を支える集落群が成立していたものであろう。

(伴 信夫)

頭殿沢遺跡で出土した遺物を土師器についてみると、個体数は586片中108個体判別することができ、器種では、杯形土器が最も多く、個体数の約6割近くを占める(表7)。その中では、杯C・杯Bがほぼ同数で、杯Aが少ない。杯Bは、破片が多いため断定できないが、いわゆる足高高台になるものが多いと思われる。杯Cは、整形および器形の特徴、胎土、色調などから、中世のカワラケの祖形とみられるものである。杯Aは、個体数で全体の約1割と少なく、また、本遺跡では、山梨県下で同時期に多く見られる、底部糸切り後ヘラケズリ整形されるAbの存在は認められなかった。甕形土器は、全体の約4割で、甕B・甕Eと口縁部に最大径を持ち折り返しにより肥厚させて「く」の字状に外反する甕Cが多い。甕Cは胎土色調は砂粒が多く赤褐色で、一見して他の器種と区別できるものである。またロクロ成形によるものも含め胴部に最大径をもつ甕Aも見られるが、量的にはそれほど多くない。黒色土器は全体の約1割ほどあり、高台付の黒色Bがほとんどで高台の付かない黒色Aは1例にすぎない。

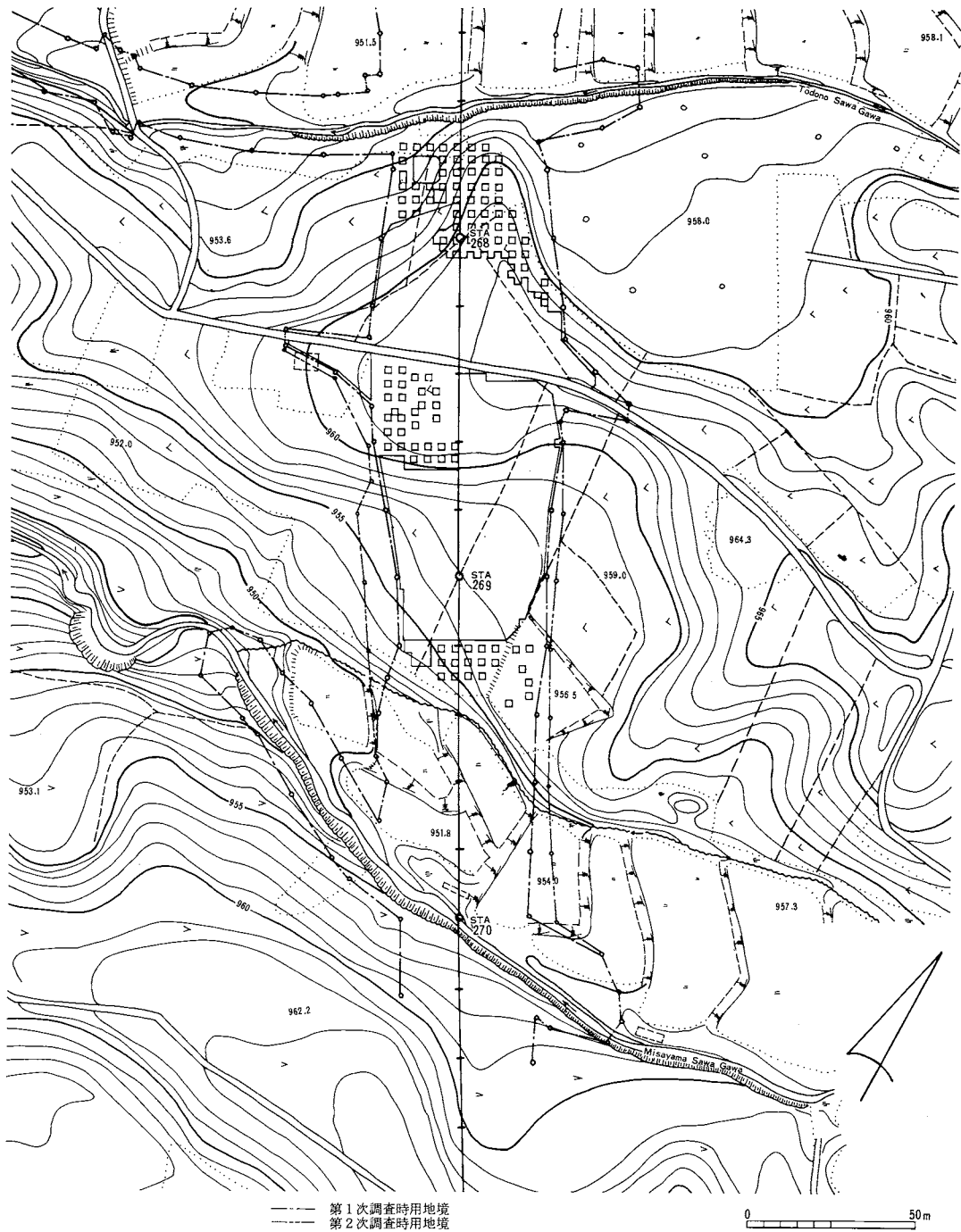
灰釉陶器は、101片中79個体判別することができた。椀形土器が最も多く、半数以上を占める。皿形土器はその約半分で、その他の器種は、瓶とみられる破片が少量認められるのみである。ほとんど東濃系のもので、その所産の時期は、折戸53号窯期に求めることができる。

これら土師器および灰釉陶器の在り方は、編年的には、平安時代後半、に位置付けられる。地域では、

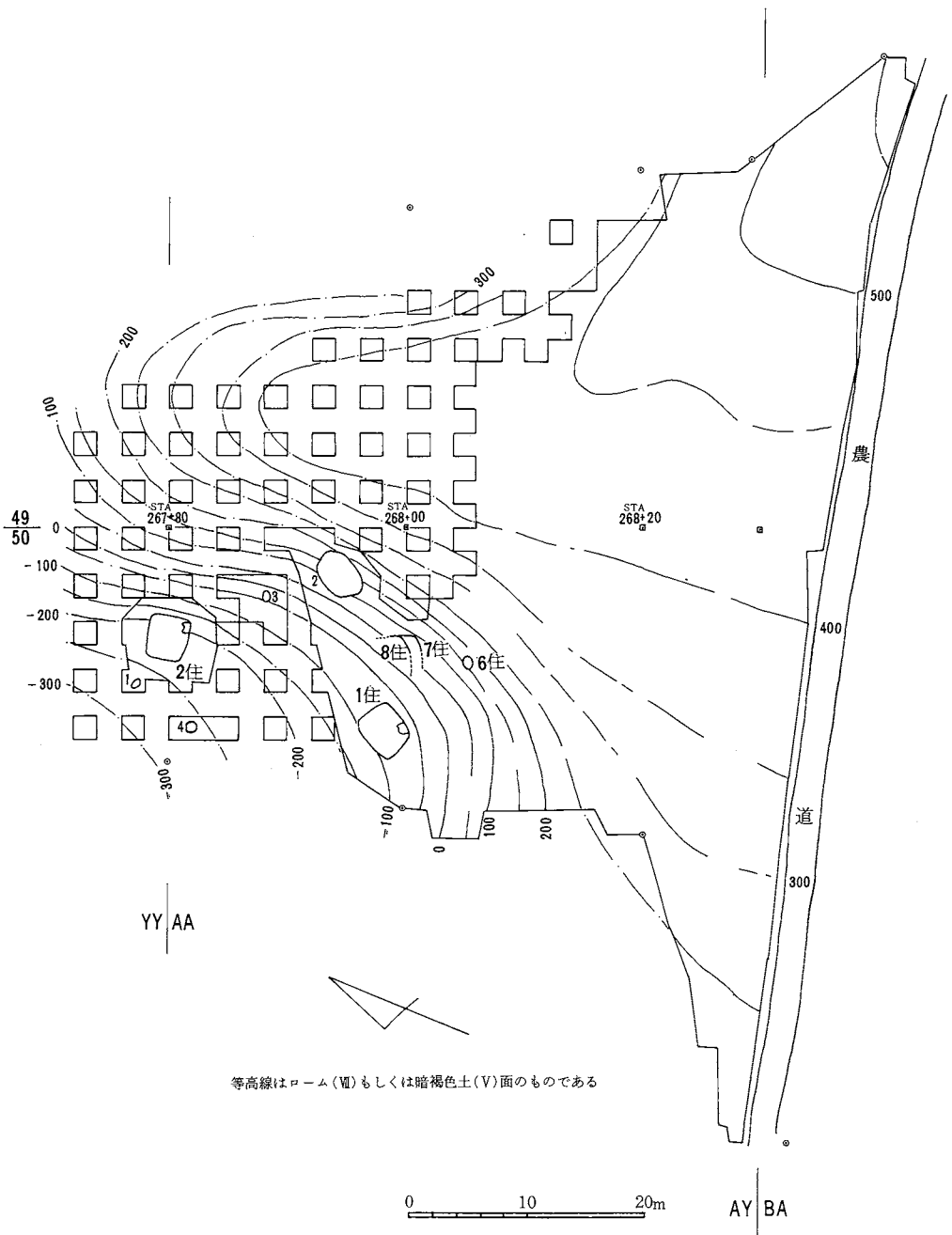
中央道諏訪関係で、諏訪郡富士見町手洗沢（註4）、足場（註5）、諏訪市本城（註6）、千鹿頭社（註7）、女帝垣外（註8）、荒神山（註9）、大熊道上（註10）、城山（註11）各遺跡など、また、隣接する山梨県例では北巨摩郡小淵沢町中原遺跡・上平出遺跡（註12）、同郡長坂町柳坪B地区遺跡（註13）、同郡須玉町大豆生田遺跡（註14）などにその類例がみられる。特に土師器甕Cの在り方は山梨県側からの強い影響によるものと考えられる。

その他の遺物では、第1・8号住居址を中心に羽口と鉄滓及び鍛冶滓が検出され、鉄滓は本遺跡で総量3608gに及ぶ（表17）。また、第1号住居址出土の鎌、刀子片などの鉄製品ともあわせて、この時期には、鉄製農具等の製作技術がかなり普及していたものとみられる。これら生産史的な面の検討は、今後さらに加えていきたいところである。（白田武正）

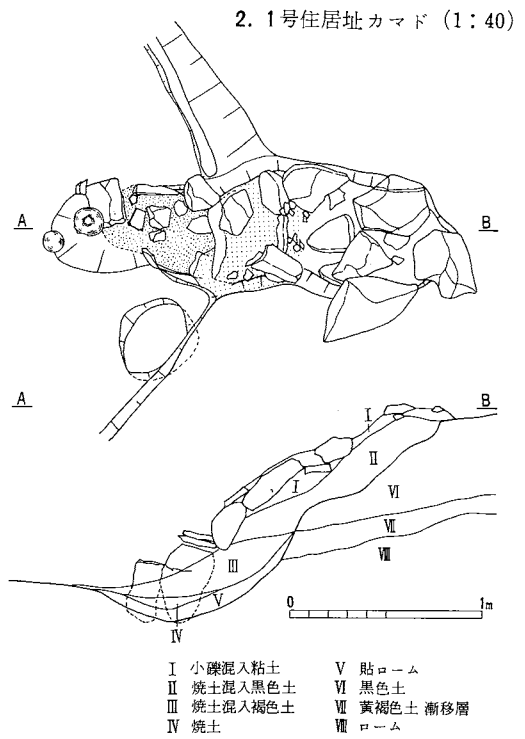
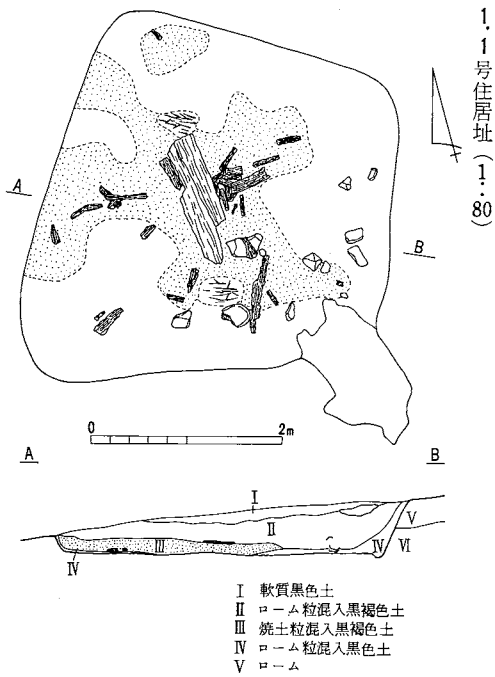
- 註1 松永満夫「鉄鏝を出した土壌墓」信濃第30巻12号 1978
- 2 川井直人・檜崎彰一「気候と歴史を変える地磁気」科学朝日4270号 1976
- 3 「岡谷市史」上巻
- 4 「中央道報告書 富士見町その1」1974
- 5 註4に同じ
- 6 「中央道報告書 諏訪市その3」1975
- 7 註6に同じ
- 8 註6に同じ
- 9 註6に同じ
- 10 「中央道報告書 諏訪市その1・2」1974
- 11 註10に同じ
- 12 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・北巨摩郡小淵沢町地区内」山梨県教育委員会 1974
- 13 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・北巨摩郡長坂・明野・葦崎地区内」山梨考古学研究会 1975
- 14 註13に同じ



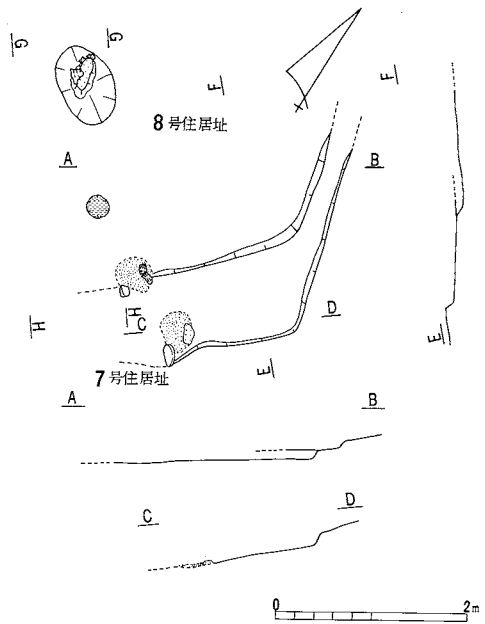
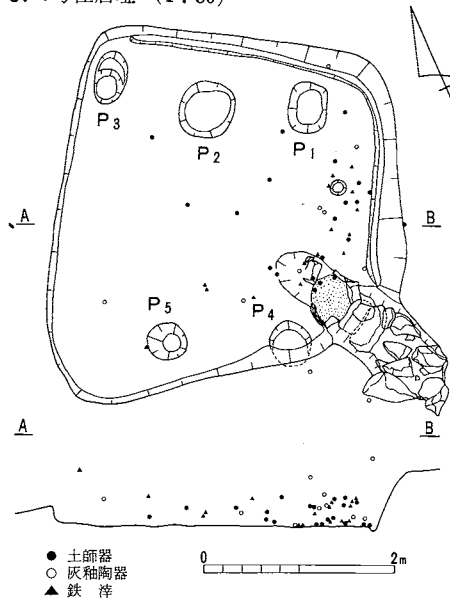
第72図 頭殿沢遺跡地形・発掘図(1:2000)



第73図 頭殿沢遺跡平安時代遺構全体図(1:600)



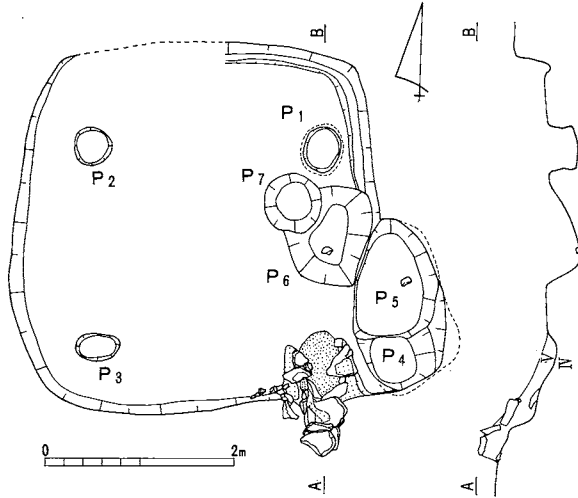
3. 1号住居址 (1:80)



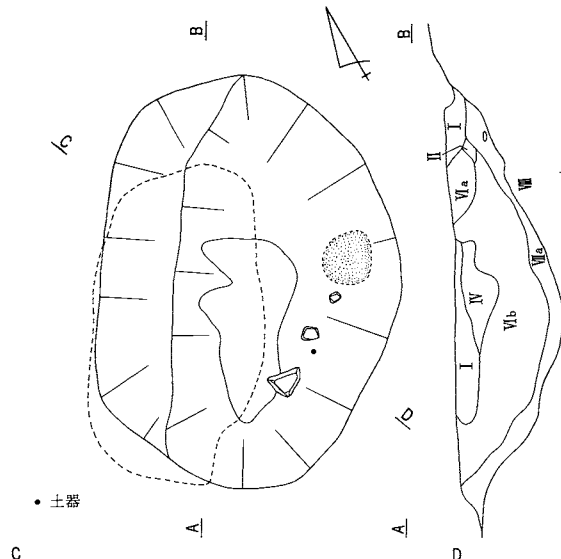
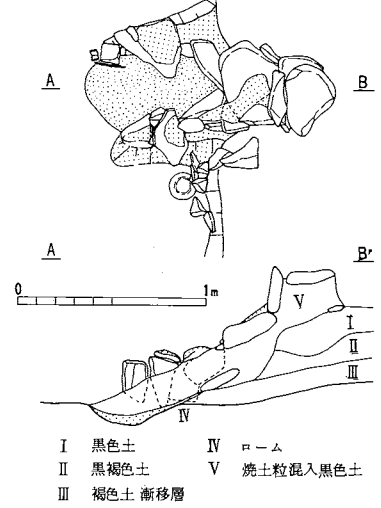
4. 7・8号住居址・8号住居址内土壙 (1:80)

第74図 頭殿沢遺跡 1・7・8号住居址実測図(2 1:40, 他は1:80)

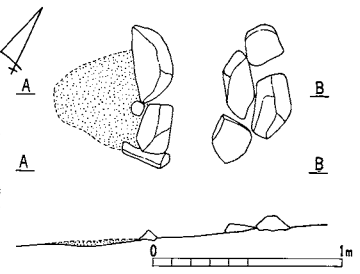
1. 2号住居址 (1:80)



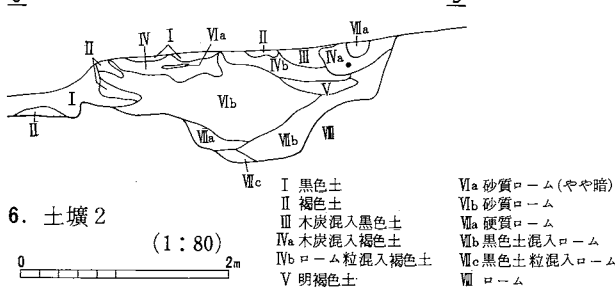
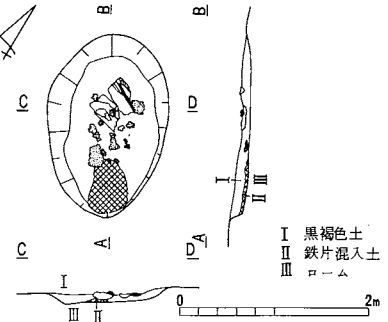
2. 2号住居址カマド (1:40)



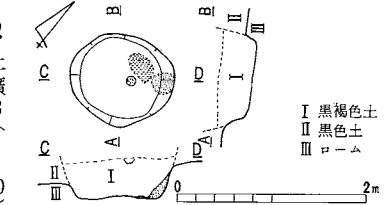
3. 6号住居址カマド (1:40)



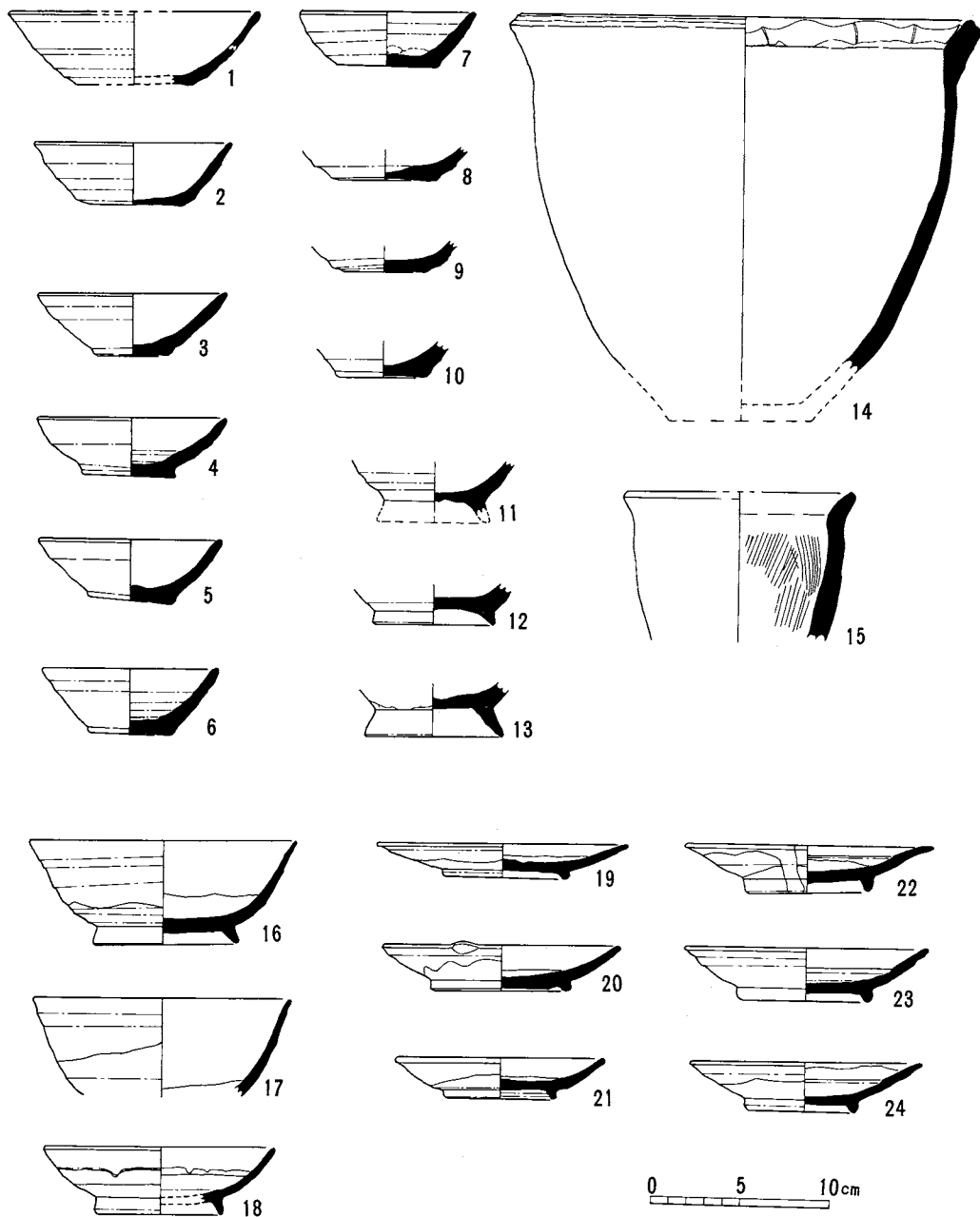
4. 8号住居址内土壌 (1:80)



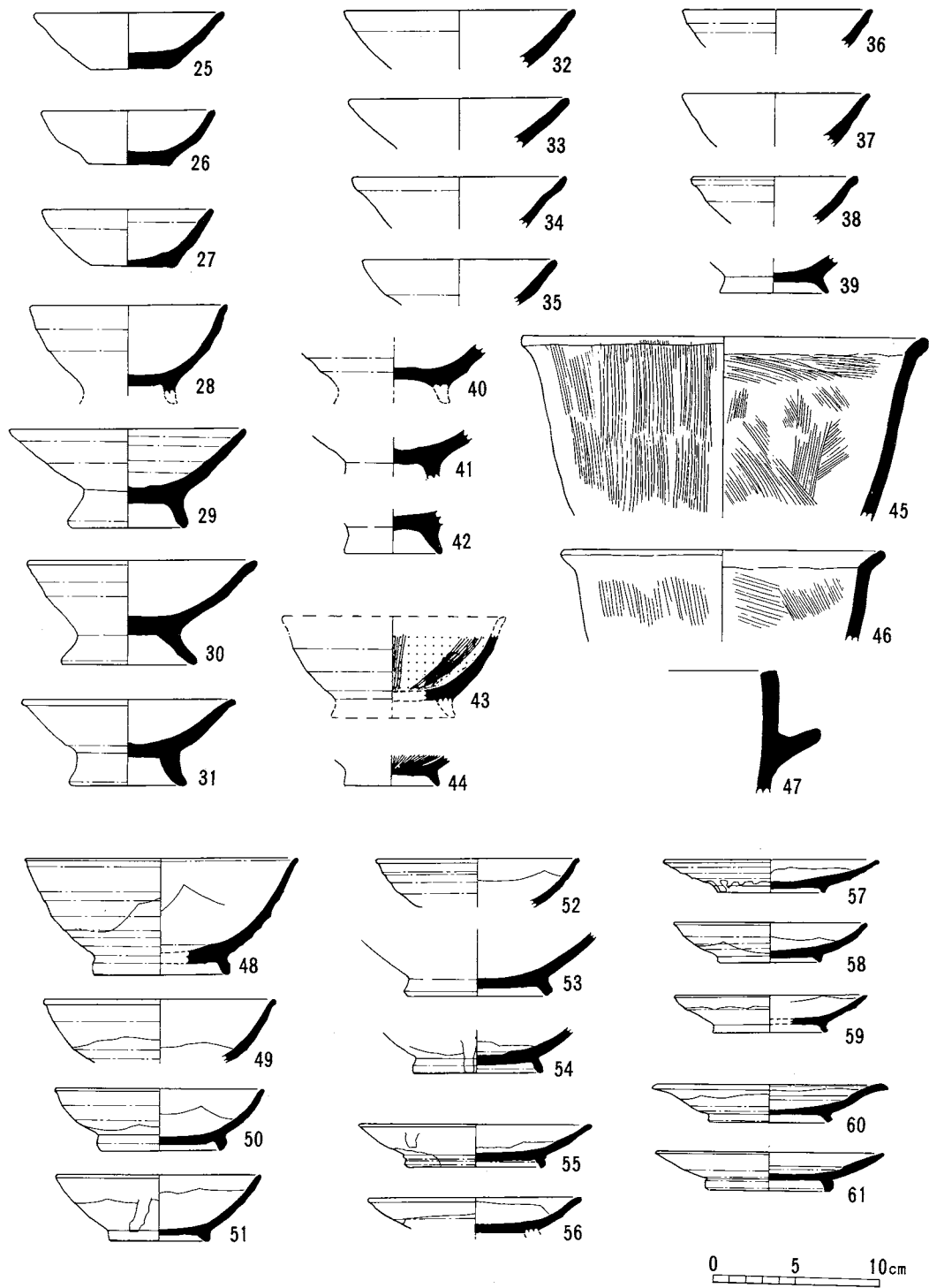
5. 土壌3 (1:80)



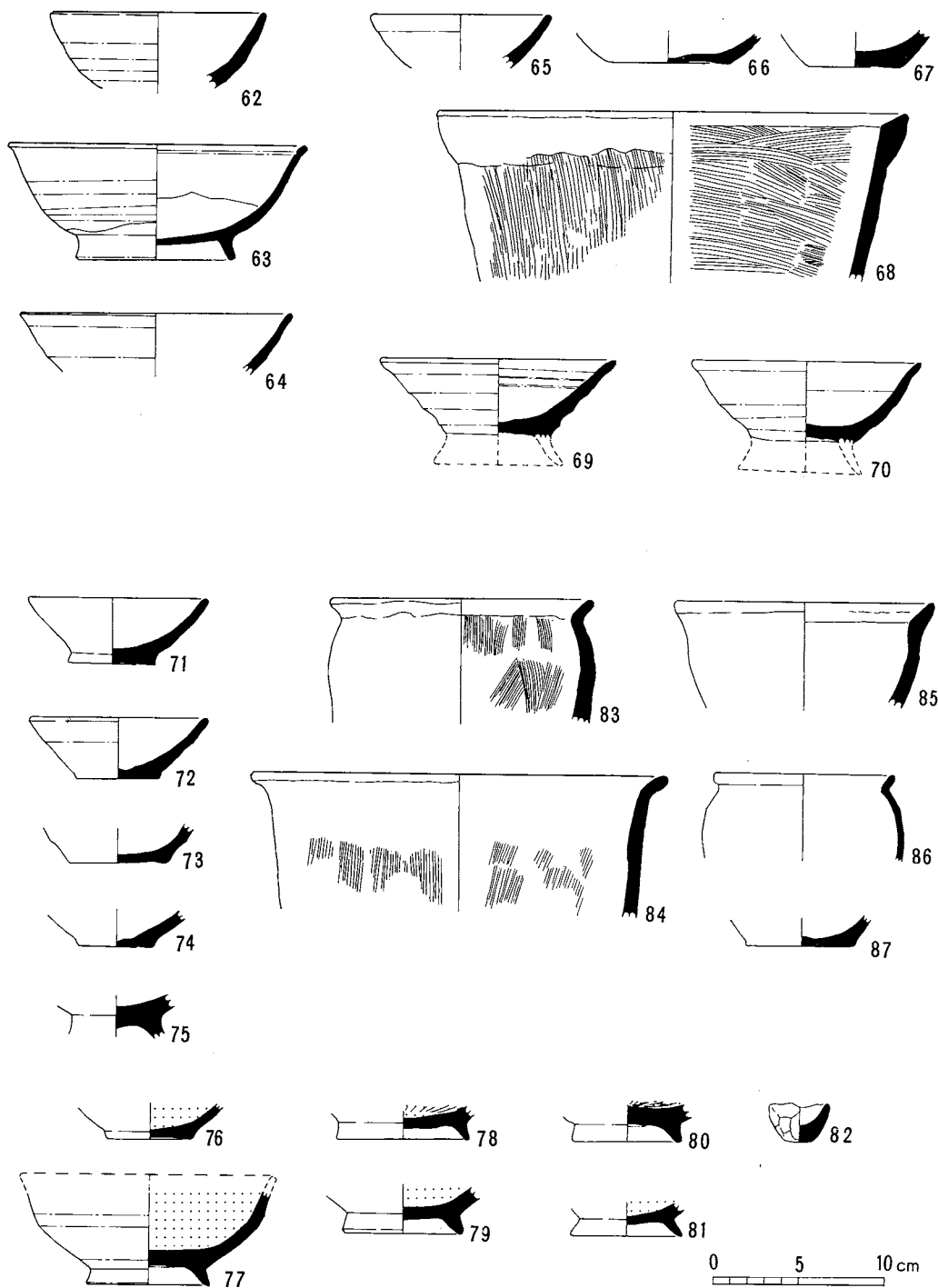
第75図 頭殿沢遺跡2号住居址, 8号住居址内土壌, 土壌2・3実測図(1:80), 2・6号住居址カマド実測図(1:40)



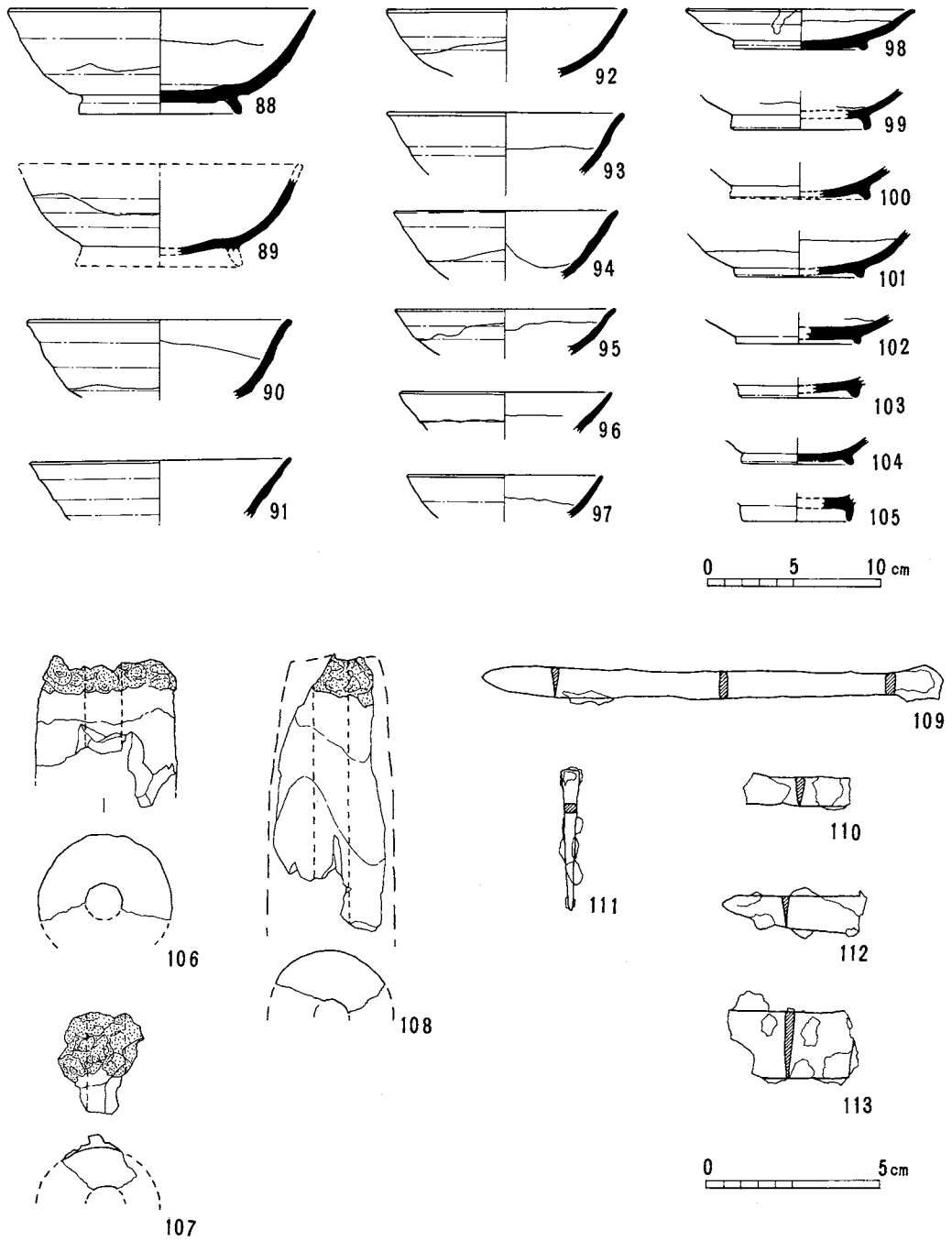
第76图 頭殿沢遺跡1号住居址出土土器実測図(1:4)



第77图 頭殿沢遺跡2号住居址出土土器実測图(1:4)



第78図 頭殿沢遺跡6・7号住居址，土壇2・3，遺構外出土土器実測図(1:4)
 (62~64 6号住居址，65~68 7号住居址，69 土壇2，70 土壇3，他は遺構外)



第79図 頭殿沢遺跡遺構外出土土器，1・8号住居址出土羽口実測図(1:4)，2号住居址出土金属器
 実測図(1:2) (106・107 1号住居址，109~112 2号住居址，108 8号住居址，他は遺構外)

第16表 頭殿沢遺跡出土平安時代土器一覽表

挿図番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
1	1号住居址	H	杯 Aa	(14.2)	(4.1)	(6.4)	
2	〃	H	杯 Aa	11.0	3.5	5.2	
3	〃	H	杯 C	10.6	3.5	4.0	
4	〃	H	杯 C	10.6	3.4	5.3	
5	〃	H	杯 C	10.3	3.6	4.8	
6	〃	H	杯 C	9.8	3.7	4.6	
7	〃	H	杯 C	9.8	3.1	5.6	
8	〃	H	杯 Aa	—	—	5.9	
9	〃	H	杯 Aa	—	—	4.6	
10	〃	H	杯 C	—	—	5.2	
11	〃	H	杯 BI	—	—	6.8	
12	〃	H	杯 BI	—	—	6.9	
13	〃	H	杯 BII	—	—	7.8	
14	〃	H	甕 C	26.2	(22.7)	—	
15	〃	H	甕 B	13.0	(11.5)	—	胴部外面タテのヘラケズリ
16	〃	K	碗 AI	15.0	5.9	8.2	篠岡 K-87 外面回転ヘラケズリ
17	〃	K	碗 AI	14.4	(7.0)	—	
18	〃	K	碗 AII	12.9	3.8	7.2	外面回転ヘラケズリ
19	〃	K	皿 AI	14.0	2.0	7.1	
20	〃	K	皿 B	13.4	2.6	7.9	輪花部4ヶ所中2ヶ所残る
21	〃	K	皿 AII	11.8	2.3	6.4	外面回転ヘラケズリ
22	〃	K	皿 C	13.8	2.8	7.1	篠岡 0-53 外面回転ヘラケズリ
23	〃	K	皿 C	13.6	3.0	7.6	外面回転ヘラケズリ
24	〃	K	皿 C	13.0	2.8	6.5	
25	2号住居址	H	杯 C	11.6	3.4	4.7	
26	〃	H	杯 C	10.6	3.4	5.1	底部は糸切り後ナデ
27	〃	H	杯 C	10.4	3.5	4.9	
28	〃	H	杯 BI	12.0	(6.1)	6.0	
29	〃	H	杯 BII	14.4	6.0	7.3	高台が高く鋭く張り出す。歪み大
30	〃	H	杯 BII	14.0	6.3	8.3	
31	〃	H	杯 BII	13.0	5.3	7.2	
32	〃	H	杯	14.0	—	—	
33	〃	H	杯	13.4	—	—	
34	〃	H	杯	13.0	—	—	
35	〃	H	杯	11.8	—	—	
36	〃	H	杯	11.4	—	—	
37	〃	H	杯	11.2	—	—	
38	〃	H	杯	10.0	—	—	
39	〃	H	杯 BI	—	—	6.5	
40	〃	H	杯 B	—	—	(7.1)	
41	〃	H	杯 B	—	—	(6.9)	
42	〃	H	杯 B	—	—	6.0	
43	〃	H	黒色 B	(14.8)	(6.3)	(7.3)	
44	〃	H	黒色 B	—	—	5.8	
45	〃	H	甕 B	24.6	—	—	

捕図番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
46	2号住居址	H	甕 B	19.6	—	—	
47	〃	H	甕 E	—	—	—	
48	〃	K	椀 A I	16.6	7.0	8.3	
49	〃	K	椀 A II	14.2	—	—	外面回転ヘラケズリ
50	〃	K	椀 A II	12.7	3.8	7.9	内面ミダレナデ
51	〃	K	椀 A II	12.4	4.0	6.1	外面回転ヘラケズリ
52	〃	K	椀 A II	12.4	—	—	
53	〃	K	椀 A I	—	—	9.0	東濃0-53 外面回転ヘラケズリ、後ロクロナデ
54	〃	K	椀 A II	—	—	7.9	東濃K-89 底部に墨書
55	〃	K	皿 A I	14.2	2.6	8.6	
56	〃	K	皿 A I	13.0	(2.5)	—	東濃0-53 外面回転ヘラケズリ
57	〃	K	皿 A I	13.0	2.0	6.5	
58	〃	K	皿 A II	11.7	2.4	6.2	外面回転ヘラケズリ
59	〃	K	皿 A II	11.6	2.3	6.9	
60	〃	K	皿 C	14.2	2.3	7.4	東濃0-53 外面回転ヘラケズリ 後ロクロナデ
61	〃	K	皿 C	13.8	2.3	7.3	東濃0-53 外面回転ヘラケズリ 後ロクロナデ
62	6号住居址	H	杯	12.6	—	—	内面クテヘラミガキ
63	〃	K	椀 A I	17.4	6.8	9.3	外面回転ヘラケズリ 内面口縁に沈線
64	〃	K	椀 A I	16.0	—	—	
65	7号住居址	H	杯	10.6	—	—	
66	〃	H	杯 Aa	—	—	7.0	
67	〃	H	杯	—	—	5.3	
68	〃	H	甕 C	27.5	—	—	
69	土 城 2	H	杯 B II	13.8	(6.2)	(7.5)	
70	土 城 3	H	杯 B II	13.4	6.6	(7.3)	
71	遺 構 外	H	杯 C	10.5	3.9	5.1	内面一部ヘラミガキ
72	〃	H	杯 C	10.4	3.6	4.9	
73	〃	H	杯	—	—	5.6	
74	〃	H	杯 Aa	—	—	4.4	
75	〃	H	杯 B	—	—	—	
76	〃	H	黒色 A	—	—	4.8	
77	〃	H	黒色 B	(15.4)	(6.6)	7.2	外面回転ヘラケズリ 後ロクロナデ
78	〃	H	黒色 B	—	—	7.9	
79	〃	H	黒色 B	—	—	7.2	
80	〃	H	黒色 B	—	—	6.5	
81	〃	H	黒色 B	—	—	6.6	高台は鋭く外方へ張り出す
82	〃	H	杯	3.5	2.3	1.8	手捏ねの杯形土器、外面は指頭オサエ、内面はナデ
83	〃	H	甕 A	15.6	—	—	
84	〃	H	甕 B	24.6	—	—	
85	〃	H	甕 B	15.2	—	—	
86	〃	H	甕 A	10.6	—	—	器肉極く薄い。外面はヘラケズリの後ナデ。内面はロクロナデ
87	〃	H	甕 A	—	—	6.4	底部糸切。内外面ともロクロナデ
88	〃	K	椀 A I	17.8	6.1	9.4	
89	〃	K	椀 A I	16.4	(6.0)	(9.6)	外面回転ヘラケズリ後ナデ 内面ミダレナデ
90	〃	K	椀 A I	15.4	—	—	篠岡近似、底部は回転ヘラケズリ

挿図番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
91	遺構外	K	椀 A I	15.1	—	—	外面回転ヘラケズリ
92	〃	K	椀 A II	14.0	—	—	
93	〃	K	椀 A II	13.8	—	—	
94	〃	K	椀 A II	13.0	—	—	
95	〃	K	椀 A II	12.8	—	—	
96	〃	K	椀 A II	12.3	—	—	
97	〃	K	椀 A II	11.4	—	—	
98	〃	K	皿 A I	13.2	2.4	7.8	
99	〃	K	皿	—	—	8.2	
100	〃	K	皿	—	—	8.1	
101	〃	K	椀	—	—	7.5	外面回転ヘラケズリ
102	〃	K	皿	—	—	7.2	
103	〃	K	皿	—	—	7.0	
104	〃	K	椀	—	—	6.6	
105	〃	K	不明	—	—	6.2	

第17表 頭殿沢遺跡出土鉄滓一覧表

No.	出土地点	長径 (cm)	数量	重量(g)	備考	No.	出土地点	長径 (cm)	数量	重量(g)	備考	
1	第1号住居址覆土 ①	Ⅲ	1	25	} 椀状	17	第8号住居址内土壌 火床	Ⅲ Ⅳ Ⅴ	2 20 24	40 69 17	小計 126g	
2	〃 ②	Ⅲ	1	42		18	第8号住居址内土壌①	Ⅱ	1	155	} 小計 596g	
3	〃 ③	Ⅲ	1	29		19	〃 ②	Ⅱ	1	79		
4	〃 ④	Ⅱ	1	36		20	〃 ③	Ⅱ	1	200		
5	〃 ⑤	Ⅱ	1	84		21	〃 ④	Ⅲ Ⅳ	1 4	16 12		
6	〃 ⑥	Ⅱ	1	226		22	〃 ⑤	Ⅱ Ⅳ	1 4	66 14		
7	〃 ⑦	Ⅱ	1	96		23	〃 ⑥	Ⅲ Ⅳ	1 1	52 2		
8	〃 ⑧	Ⅲ	1	30		24	AI 58	Ⅱ	1	246		
9	〃 ⑨	Ⅱ	1	230		25	AE 56	Ⅱ	1	154		
10	〃 ⑩	Ⅲ	1	38		26	AI 56	Ⅲ Ⅳ	1 1	52 6		
11	〃 ⑪	Ⅲ	1	38		27	AO 61	Ⅲ Ⅳ	1 1	59 9		
12	〃 ⑫	Ⅰ	2	{ 463 602		重量合計		3608g				
13	〃 ⑬	Ⅱ	1	115		(長径分類基準)						
14	〃 ⑭	Ⅲ	1	24		Ⅰ・10cm以上 Ⅱ・5~10cm Ⅲ・3~5cm						
15	〃 ⑮	Ⅳ	2	22		Ⅳ・1~3cm Ⅴ・1cm未満						
16	カマド内	Ⅲ Ⅳ	1 2	29 9	小計 2100g							
17	第7号住居址床面	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	1 1 6	102 48 50	小計 200g							
18	第8号住居址床面	Ⅲ Ⅳ	1 6	41 19	小計 60g							

第18表 柏木南・判の木山東遺跡縄文時代住居址一覽表

<土器個体数は完・半完形品、()内は破片からの推定>

遺跡名	判の木山										住12
	柏木南	3	5	8	9住(旧)	9住(新)	11	12	住		
遺構名	1	2住(旧)	2住(新)	3	5	8	9住(旧)	9住(新)	11	12	住
時期	藤	井戸尻I	井戸尻II	藤内II	井戸尻III	丸兵衛尾根I	井戸尻I	井戸尻III	井戸尻I	井戸尻III	井戸尻I
プラン	不整円形	円形	円形	楕円形	楕円形	卵形	円形	楕円形	円形	円形	?
長軸×短軸(m)	約4.50	4.30(?)	5.30×5.20	4.10×3.60	5.45×4.30	5.40×4.70	4.90?×4.75?	4.90×4.75	3.50	?	?
主軸方向	N3°W	N16°W	N9°E	N26°E	N70°E	N66°E	N12°W?	N5°E	N6°W?	?	?
炉形	方形石囲炉	円形石囲炉	円形石囲炉	方形石囲炉	円形石囲炉	地床炉	円形石囲炉?	円形石囲炉	円形石囲炉(竈埋)	焼土を残すのみ	
炉位置	北寄り	北寄り	南寄り	北寄り	東寄り	中央	北寄り	北寄り	北寄り	?	?
主柱穴	4(6?)	5	5	5	5	4	6	?	?	?	?
備考	北東部約半分は未掘	新住よりやや小さく大部分新住に切り取られる。同心円的拡張される。1住、7住に新に貼床される。	火災にたい、炭化材、焼土が多い。旧住の同心円的拡張。1住、7住に切り取られ、2住新に貼床される。	石囲炉北側の石は抜かれる	補助柱穴3	補助柱穴2	補助柱穴1	柱穴は新旧住区分不能。石囲炉内に埋竈炉を持つ。4住に貼床され9住古に貼床する。	斜面黒土中で不明な点が多い。火災にあっている。	炉脇に大型深鉢埋設	
深鉢	2	(6)	2(20以上)	3	(20以上)	(20以上)	(7)	5(30以上)	1	2	
浅鉢	1	(1)	(1)		(2)		(1)				
その他				破片の個体数は多いが少量である。馬高系あり	有孔罎付土器2個体分片	有孔罎付土器底部は井戸尻期		有孔罎付土器2個体分片東海系の溝水ノ上第3群2類Aがある。	関連グリット遺物8個体分の破片あり	馬高系半完1あり	
打製石斧	4	1	3	1	3	4	2	5		1	
横刃	10						1	4		4	
凹石	1		1	1				4		1	
石皿								2		1	
磨製石斧				1	1	1	2				
石鏃			2		1		1	3			
粗大石匙	1				1		1	2			
石匙					1						
細片石器	1		2	2	2		1	1	1	1	石筒状石器1
その他				石ノミ				石ノミ	磨石	磨石	

第19表 オシキ・判の木山東・頭殿沢遺跡住居址一覽表

遺跡名	オシキ			判			木			山東			頭			殿			沢					
	1住	1,1住	1住	4住	6住	7住	7住	7住	10住	10住	10住	1住	2住	2住	2住	6住	6住	6住	7住	7住	7住	8住	8住	8住
遺時	平安後期 隅丸方形 4.60×4.35	平安後期 隅丸方形 4.80×4.45	平安後期 隅丸方形 4.45×4.05	平安後期 方形 4.45×4.05	平安後期 隅丸方形 3.60×(3.60)	平安後期 方形又は隅丸方形 5.30×?	平安後期 方形又は隅丸方形 ?	平安後期 隅丸の台形 3.60×3.50	平安後期 隅丸方形 3.95×3.80	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?	平安後期 隅丸方形 ?
遺	主軸方向 N 79° E	主軸方向 N 67° E	主軸方向 N 64° E	主軸方向 N 64° E	主軸方向 N 70° E	主軸方向 N 60° E	主軸方向 N 3° E	主軸方向 N 58° W	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E	主軸方向 N 87° E
遺構	石組粘土カマド 東壁中央	石組粘土カマド 南東隅	石組粘土カマド 東壁中央	石組粘土カマド 東壁中央	石組粘土カマド 南東隅	石組粘土カマド 東壁南隅	石組粘土カマド 北壁西隅	石組粘土カマド 南東隅	石組粘土カマド 南壁東隅	石組粘土カマド 南壁東隅	石組粘土カマド 南壁東隅	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央	石組粘土カマド 南壁中央
遺構	主柱穴 4?	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	柱穴のうち1つ は貯蔵穴か?	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土	貯蔵穴 1 貯蔵全周 (除カマド付近) 火災にあい、建 築材、屋根材 出土
遺物	土 杯 A 5 B 5 C 5	土 杯 A 1 B 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1	土 杯 A 1 B 1 C 2 D 2 E 2 F 1
遺物	灰 椀 5	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2	灰 皿 A 1 B 3 C 2
遺物	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考	鉄 器 考

あ と が き

昭和51年4月19日に開始された、茅野市・原村その2地区、10遺跡の発掘調査は、予想外の大規模遺跡に遭遇し、予定を大幅に変更せざるを得なくなった。その間のいきさつは既に触れられている通り、阿久・居沢尾根・判の木山西の3遺跡の発掘調査は次年度へ継続され、整理作業もその主要部分が昭和53年度へ繰り延べになったのである。こうした迂余曲折の中、発掘調査では幾多の新知見が得られることとなったが、調査の成果が大きくなる程に関係各位の御苦労も又大きくなるわけで、茅野市・原村各教育委員会をはじめとする諸氏・諸団体の御支援、御配慮に厚く感謝し、調査員各位の献身的な労苦を賛えたい。

茅野市・原村は古くから縄文時代中期を中心とした遺跡の密集地帯として知られ、尖石遺跡の発掘調査をはじめとして地元研究者による調査・研究が大変進んでいる地域である。その中において中央道西宮線の通過する八ヶ岳裾野の丘陵最先端部は比較的調査例が少なく、今迄とは別の期待がかけられていた。その結果は期待通りのものとなったが、阿久以下主要な3遺跡の報告を次回にせざるを得なくなったのは残念である。

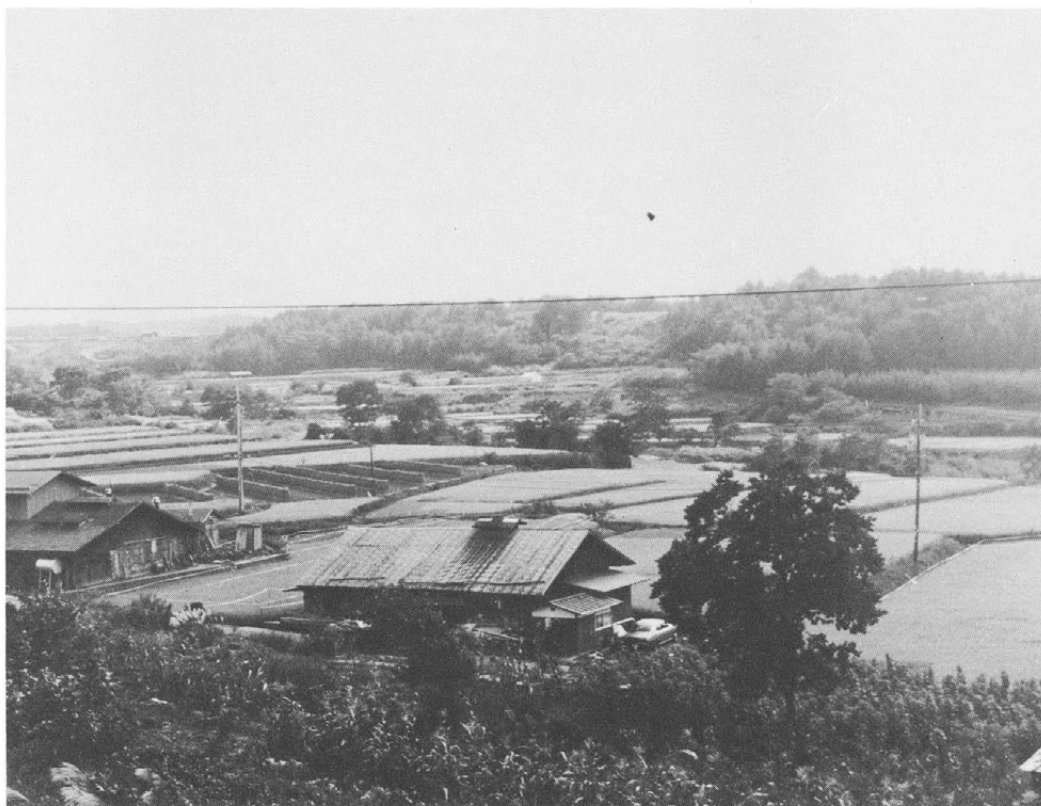
調査結果は既に各遺跡の項に詳しく述べられている通りである。入の日影遺跡は近世のものと思われる集石等の遺構に加え、縄文時代晩期末の遺物を得た。当該期の諏訪盆地の様相を知る貴重な資料となろう。柏木南遺跡とオシキ遺跡は共に遺跡の中心部分はずれたようである。しかし前者からは旧石器時代・縄文時代前期及び中期中葉の良好な資料が得られ、後者からは縄文時代前～中期・平安時代の遺構・遺物に加えてロームマウンドに関する好資料を得ることができた。中阿久遺跡・上の原遺跡はそれぞれ若干の遺物を得たに留まった。遺跡の性格づけはたやすくはないだろうが、一般の集落地以外に残された生活痕跡として検討したいものである。判の木山東遺跡では縄文時代中期中葉及平安時代後期の集落が検出された。竪穴住居址の大半は黒色土中に見出され発掘は大変難しかったが、今後の調査にとって有意義な例となった。いずれの時期についても集落の全貌は明らかにし得なかったものの、縄文時代では他地域の影響を受けた土器の問題や石器の多角的な考察など、平安時代では灰釉陶器の在り方についての資料など、出土遺物に関して様々な問題が提起された。頭殿沢遺跡については諸般の事情から平安時代の資料に限って報告することとなったが、同期の集落が発見され小鍛冶遺構を伴うと思われる住居址が得られたほか、集落の存立条件の問題が提起された。

これら諸遺跡を群として捉えるには未だ資料不十分かと思われるが、大集落のみならず遺構未検出の遺跡も加えて考えねばなるまい。小遺跡といえどもおろそかにできないゆえんで、我々も銘記せねばならない。そうした面からも本報告書が活用され、今後の研究に多少なりとも寄与できれば、これ以上の喜びはない。

最後に、発掘途中で病に倒れ急逝された辰野伝衛調査員の霊前に本報告書を捧げたい。

今 村 善 興

圖 版



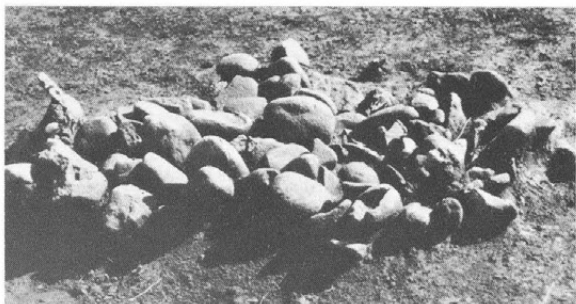
1. 全景（北西より）



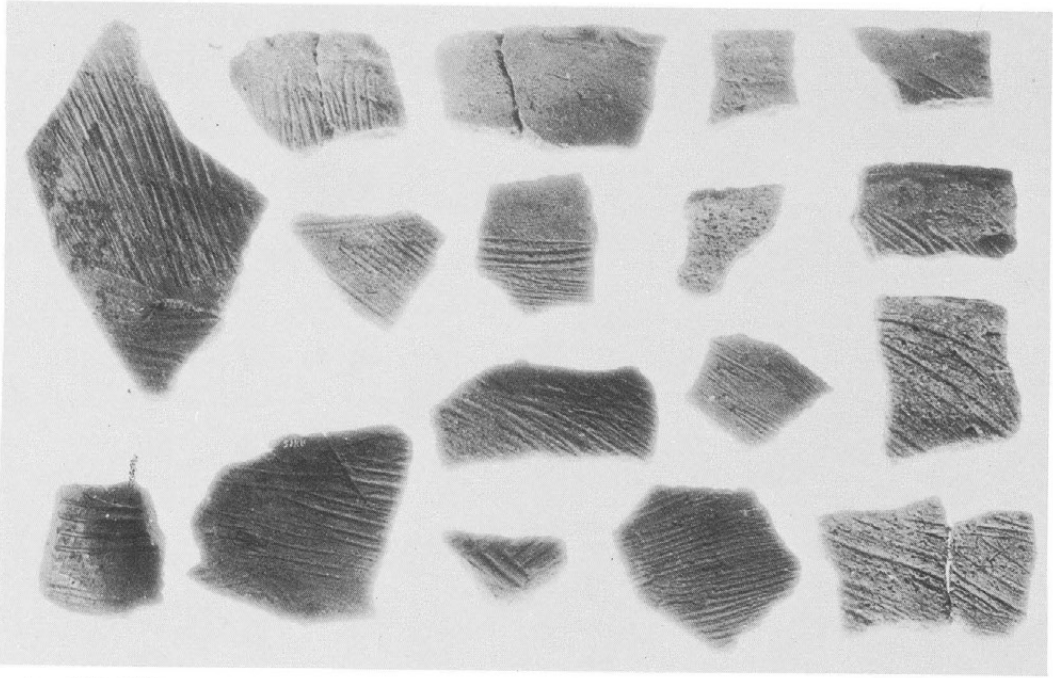
2. 近景（西より）



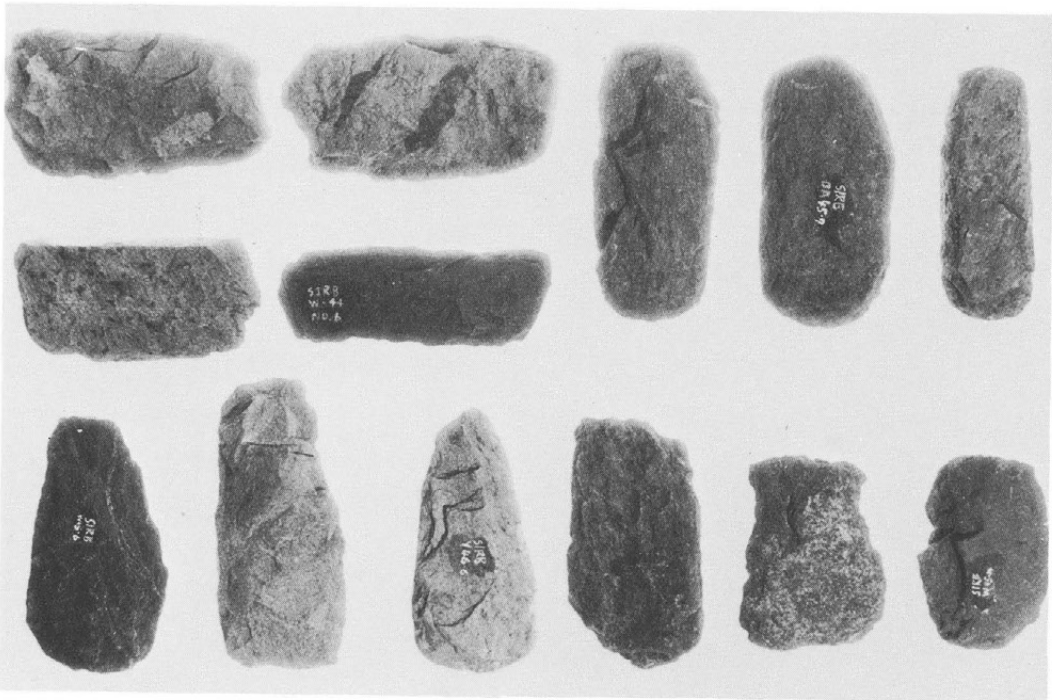
1. 遺構全景（西より）



2. 集石土壇（平面および断面）



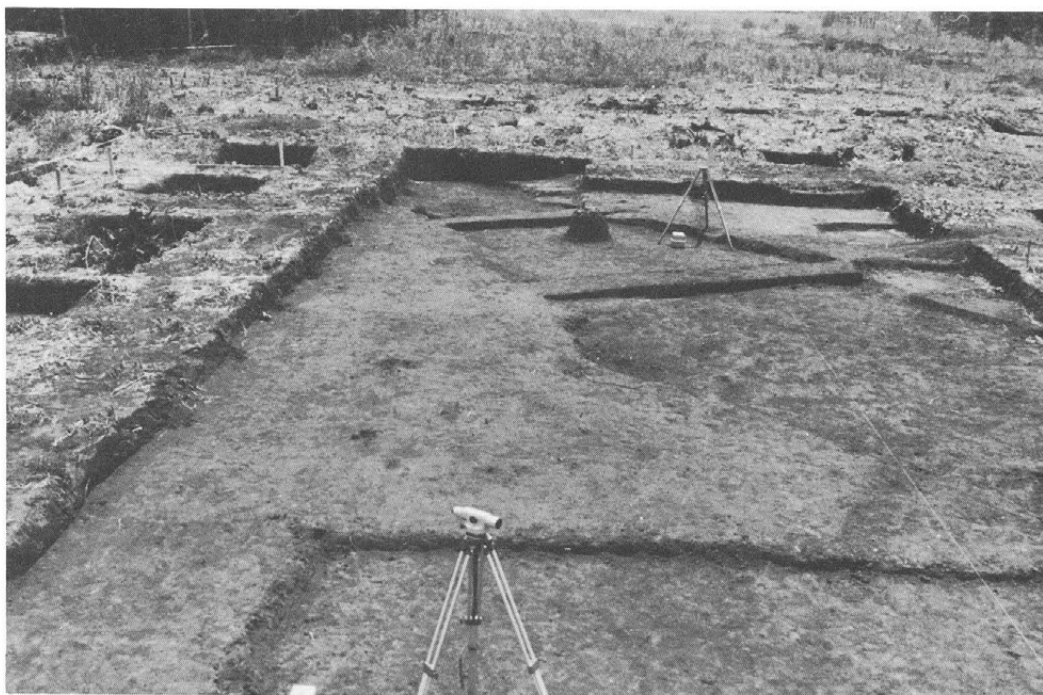
1. 土器 (1/3)



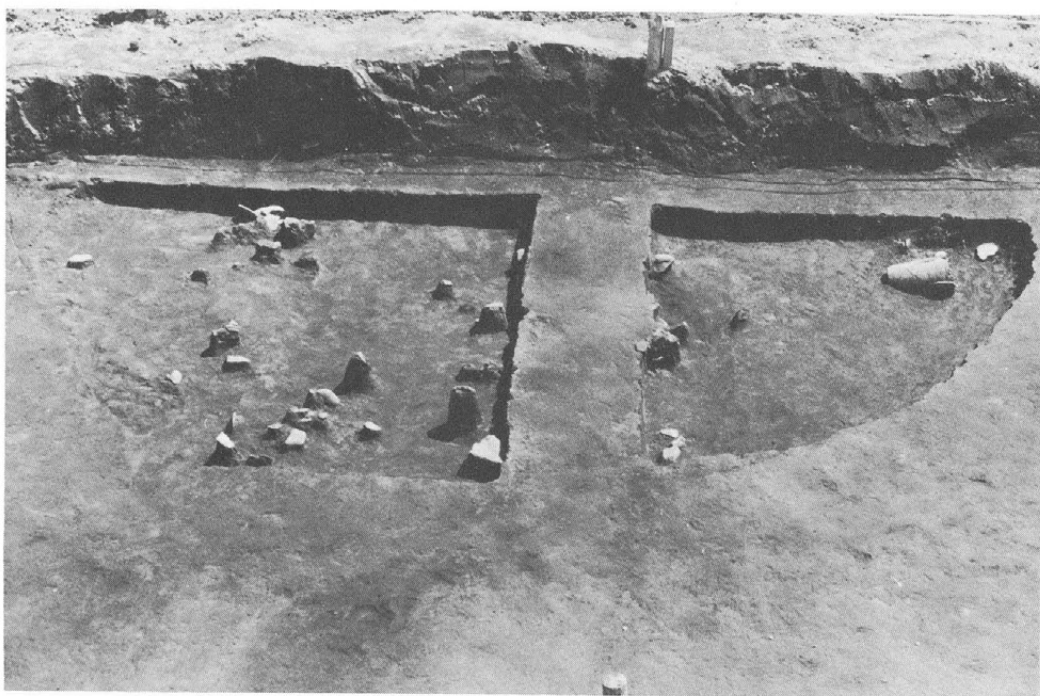
2. 石器 (1/3)



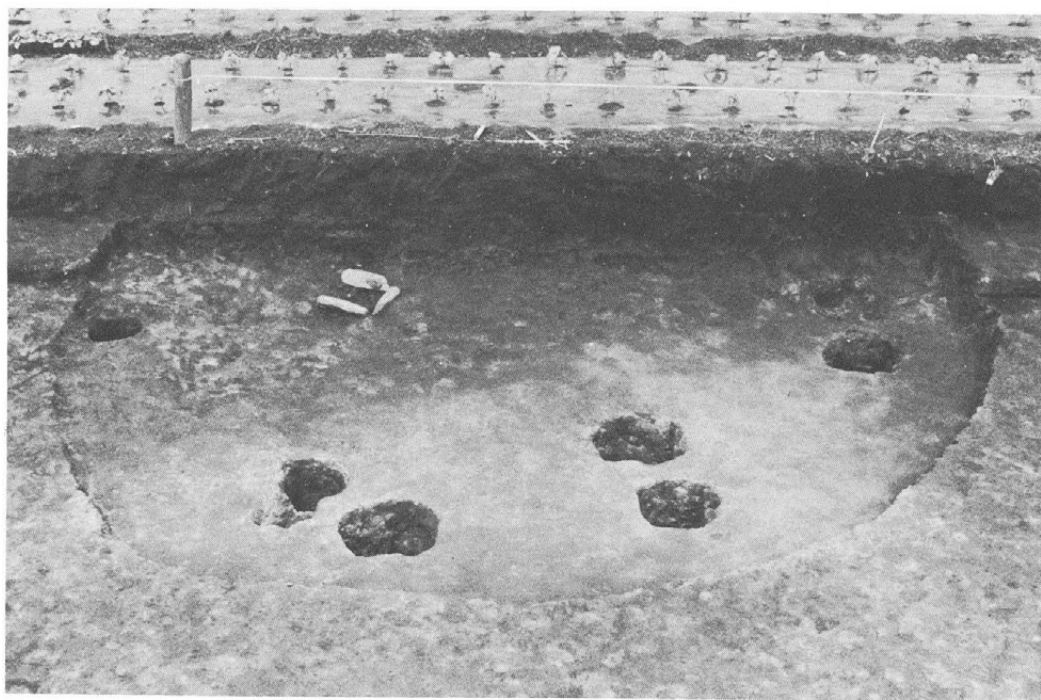
1. 全景 (南より)



2. 溝 (北より)



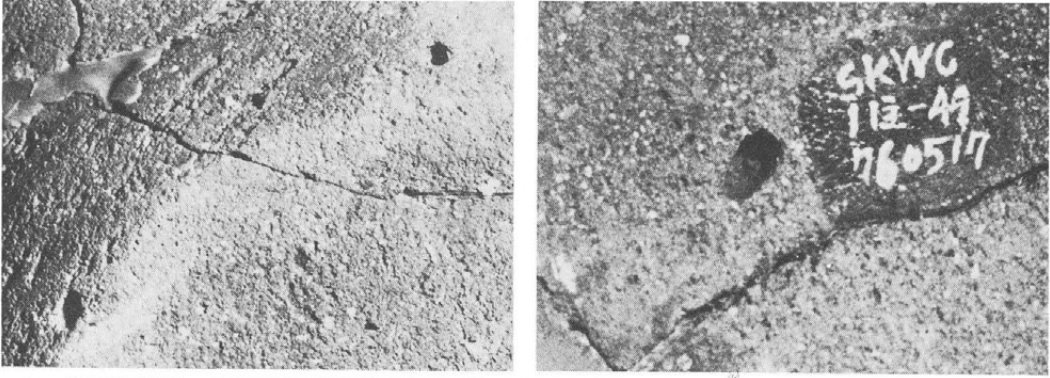
1. 第1号住居址遺物出土状態（西より）



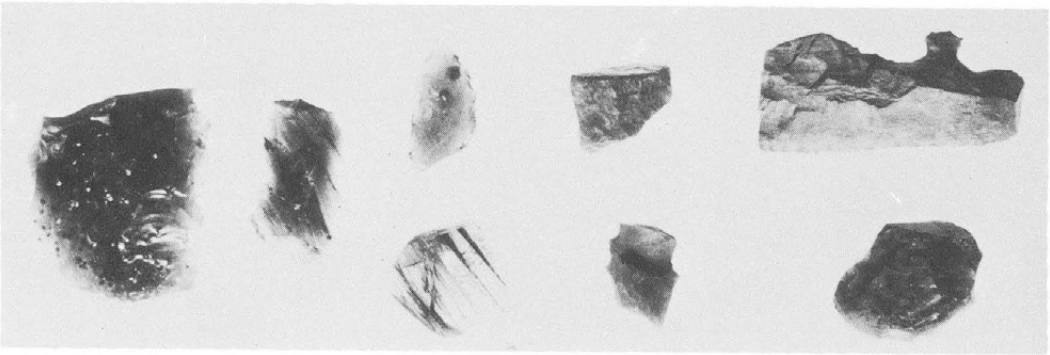
2. 第1号住居址（西より）



土器 1~3 第1号住居址 (1/3)



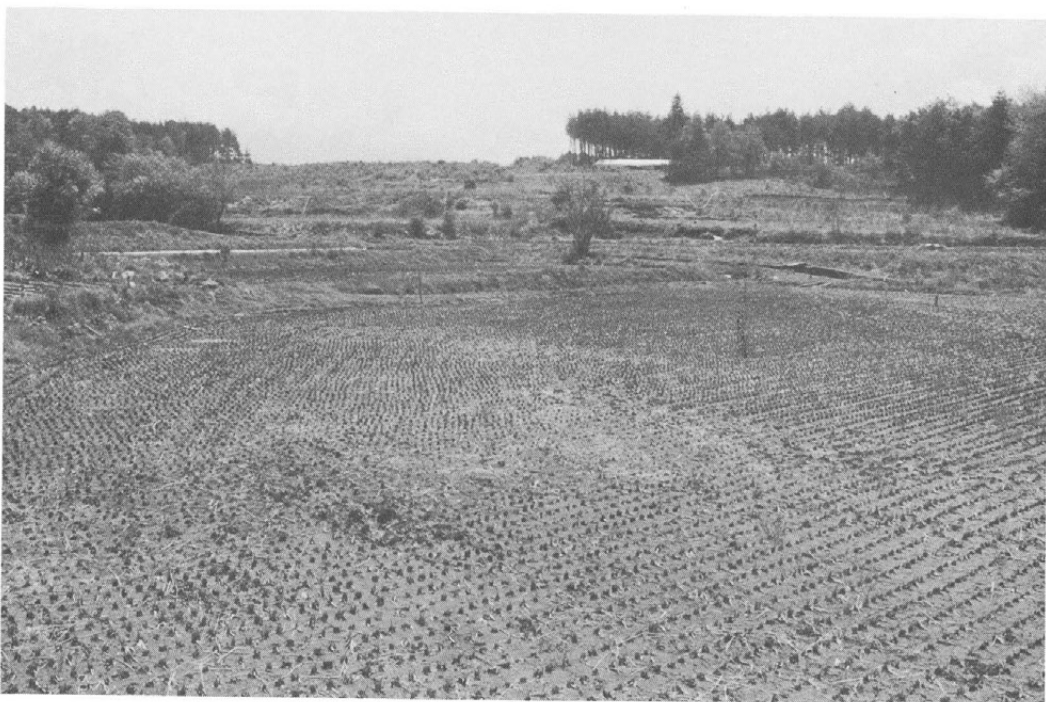
1. 浅鉢(図版6-3)壁面の炭化種子圧痕(左1×1, 右1×2)



2. 石器(その1) (1/2)



3. 石器(その2) (1/3)



1. 中阿久遺跡遠景（北西より）尾根は居沢尾根遺跡



2. 上の原遺跡（東南より）



1. 近景（西より）



2. 第1号住居址（西より）



1. 1号住居 カマド周辺



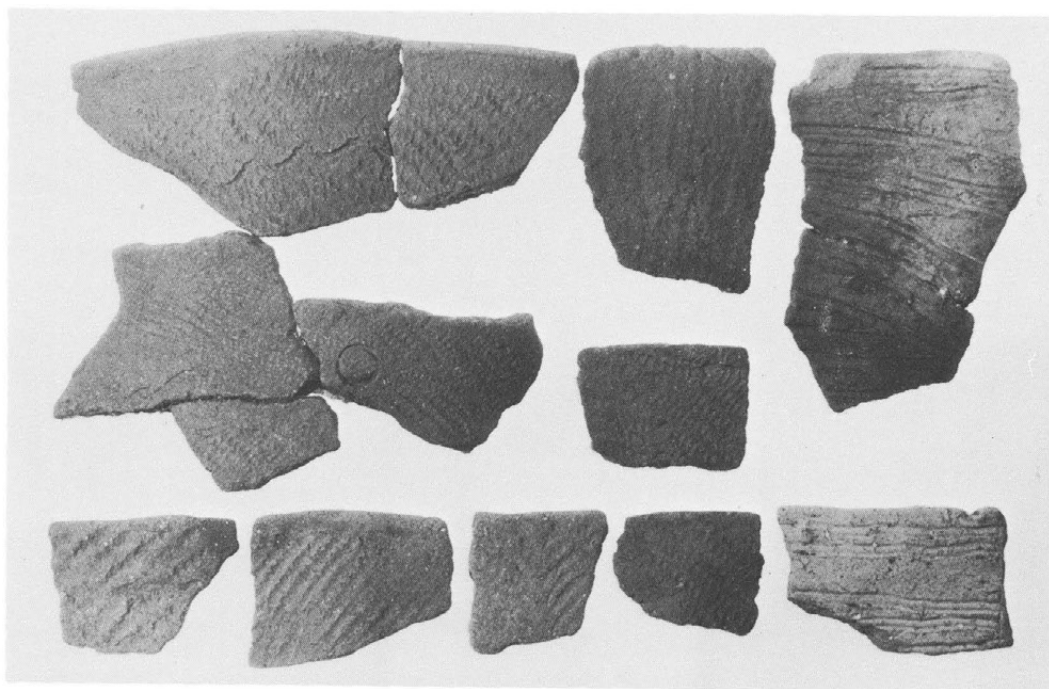
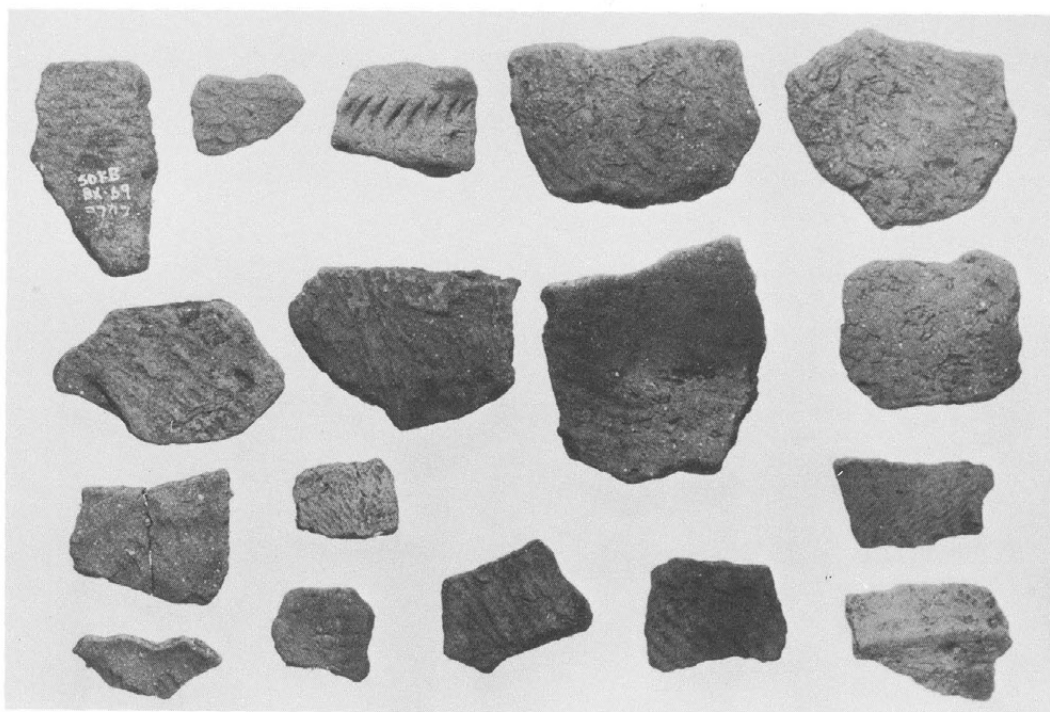
2. 2号ロームマウンド断面



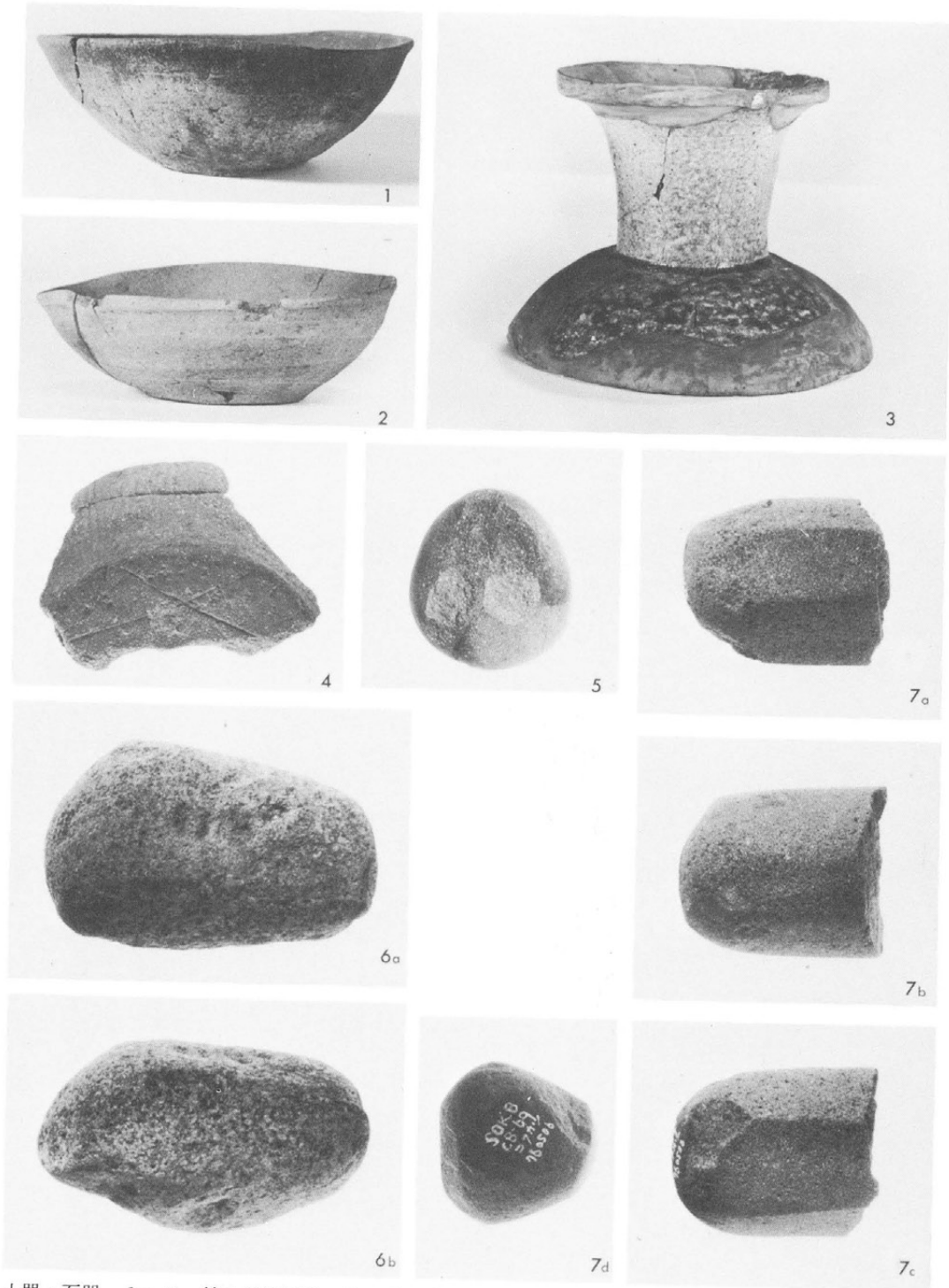
1. 5号ルームマウンド（手前）と6号ルームマウンド



2. 同断面



グリッド出土遺物



土器・石器 1～5 第1号住居址 6. 7 グリッド
 1 - (28-3) 2 - (28-2) 3 - (28-17) 4 - (28-16) 5 - (27-1) 6 - (27-11) 7 - (27-10)



1. 全景（発掘前）



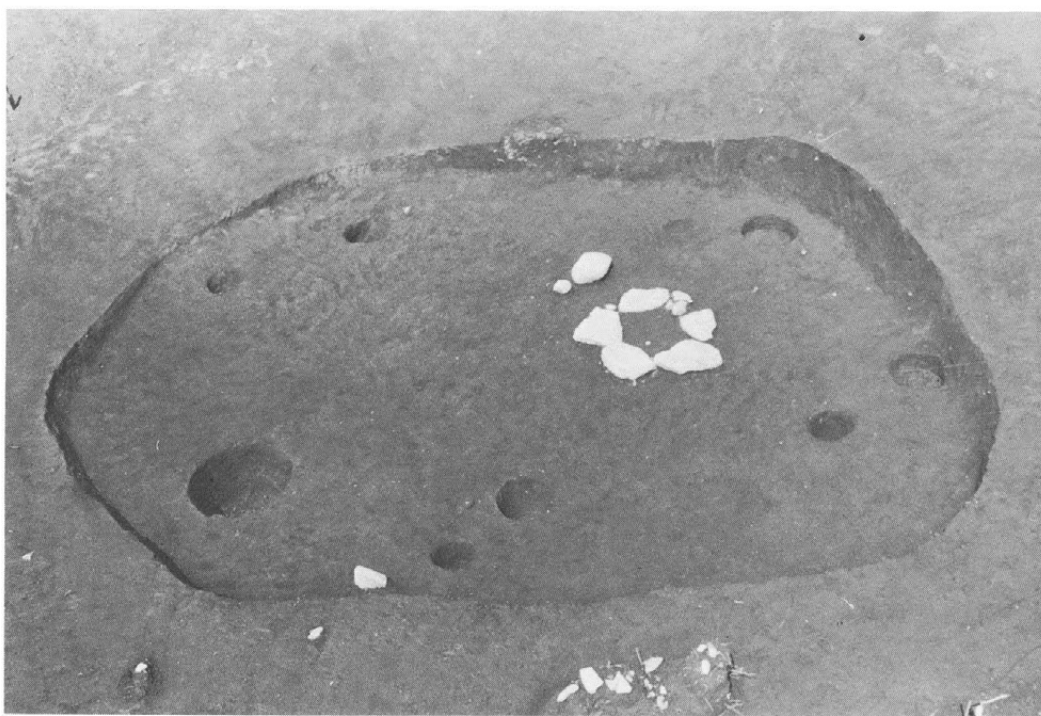
2. 全景（発掘後）



1. 2号住居址（新）



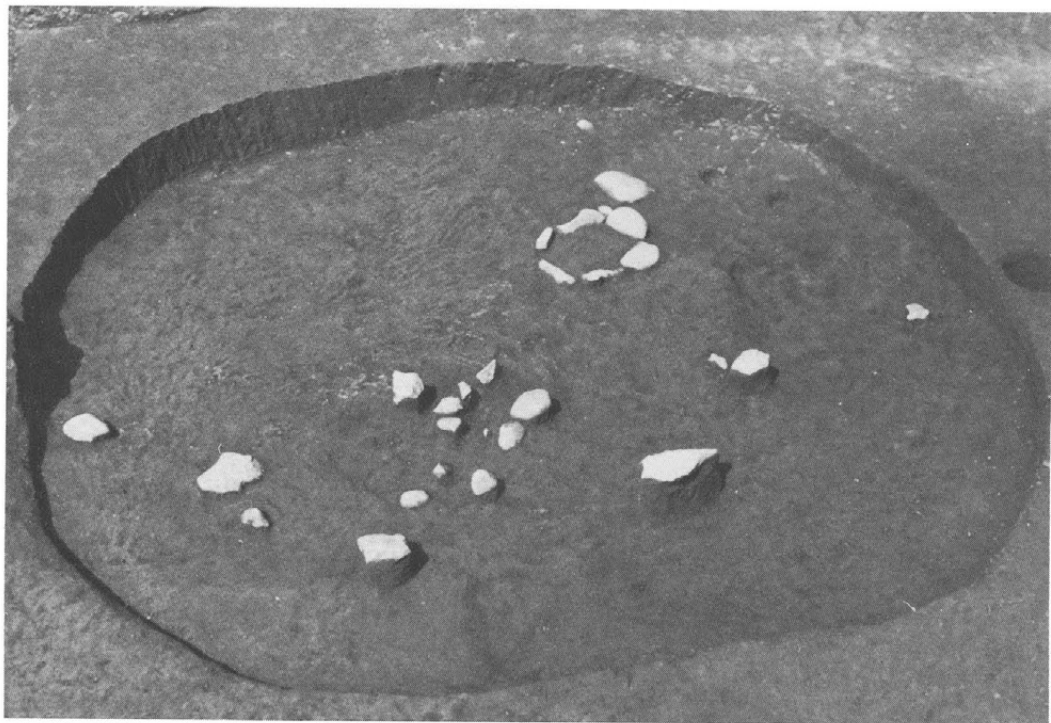
2. 3号住居址



1. 5号住居址



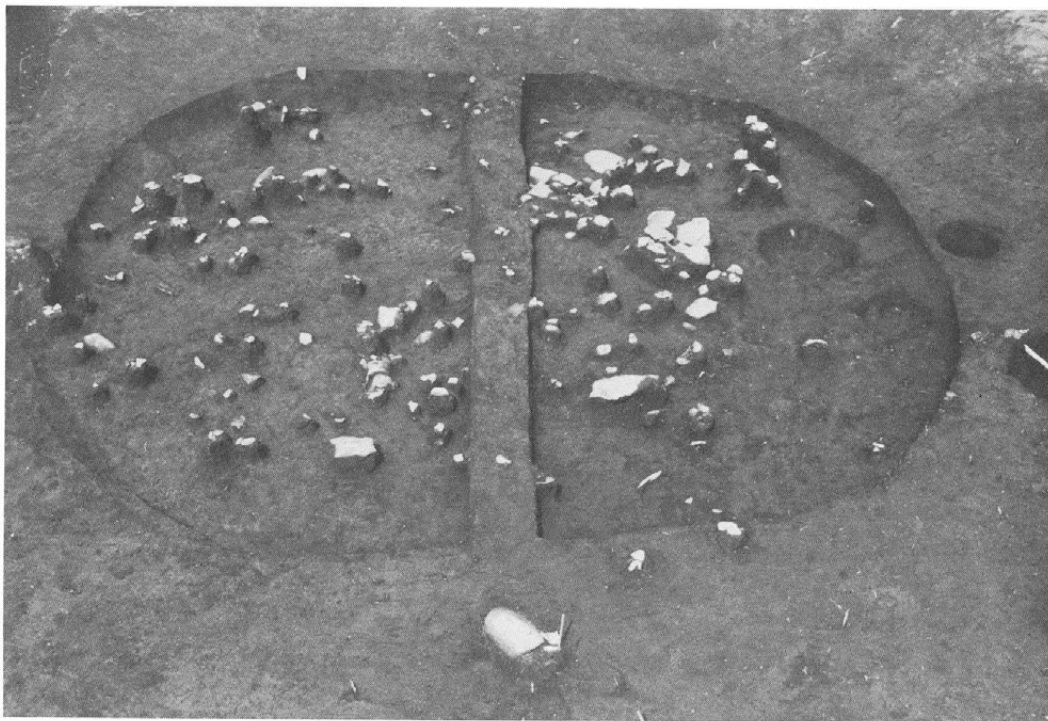
2. 8号住居址



1. 9号住居址（新）



2. 9号住居址（旧）



1. 9号住居址遺物出土状況



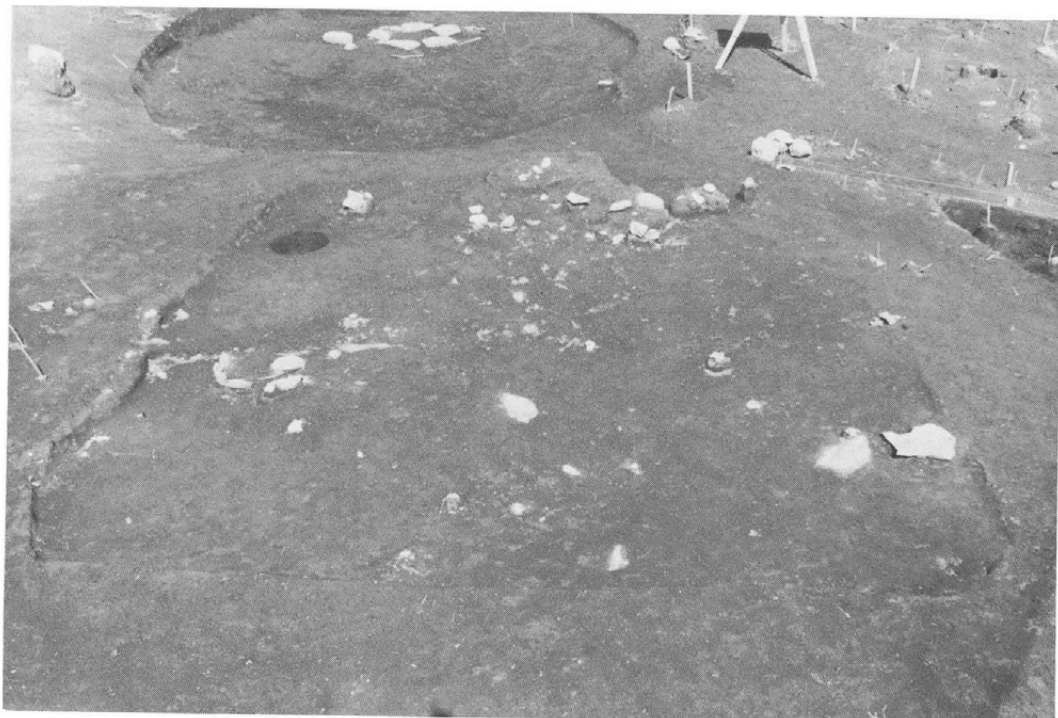
2. 11号住居址



1. 1号住居址炭化材出土状況



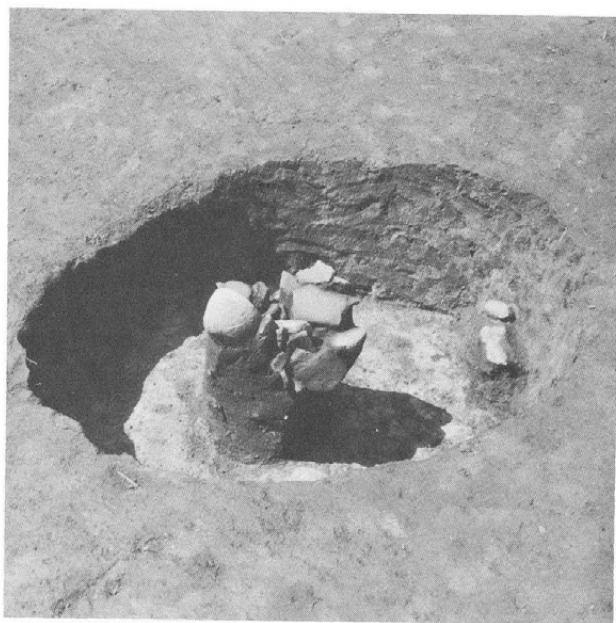
2. 1号住居址



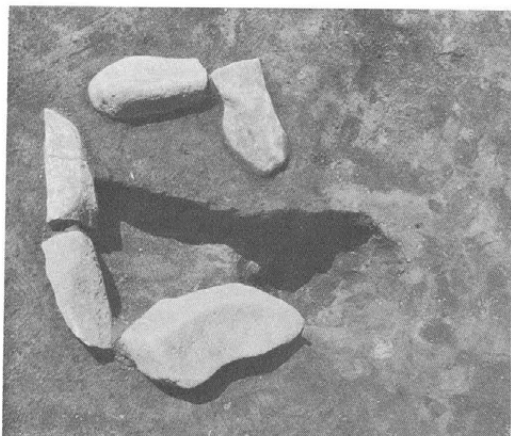
1. 4号住居址



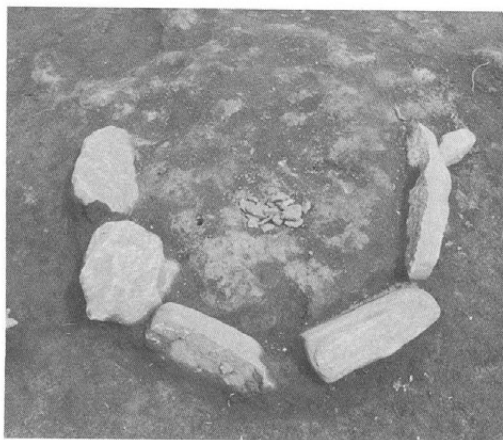
2. 1号住居址カマド



3. 土壇5



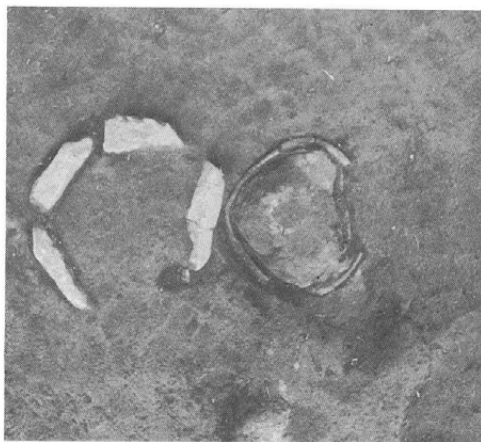
1. 2号住居址(旧)炉址



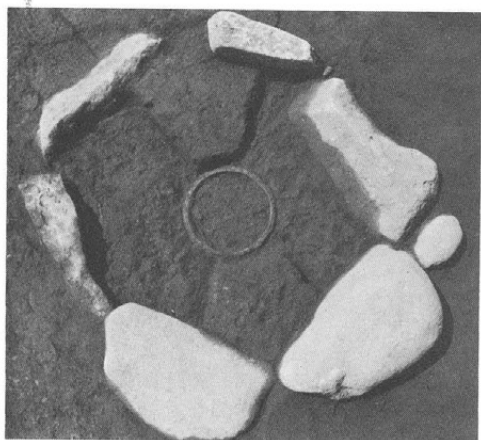
2. 2号住居址(新)炉址



3. 11号住居址炉址(断面)



4. 11号住居址炉址(平面)



5. 9号住居址(新)炉址



6. 12号住居址炉址と埋設土器



1a



1b



1c

土器 (1/3.5) 1. 第11号住居址 (24)

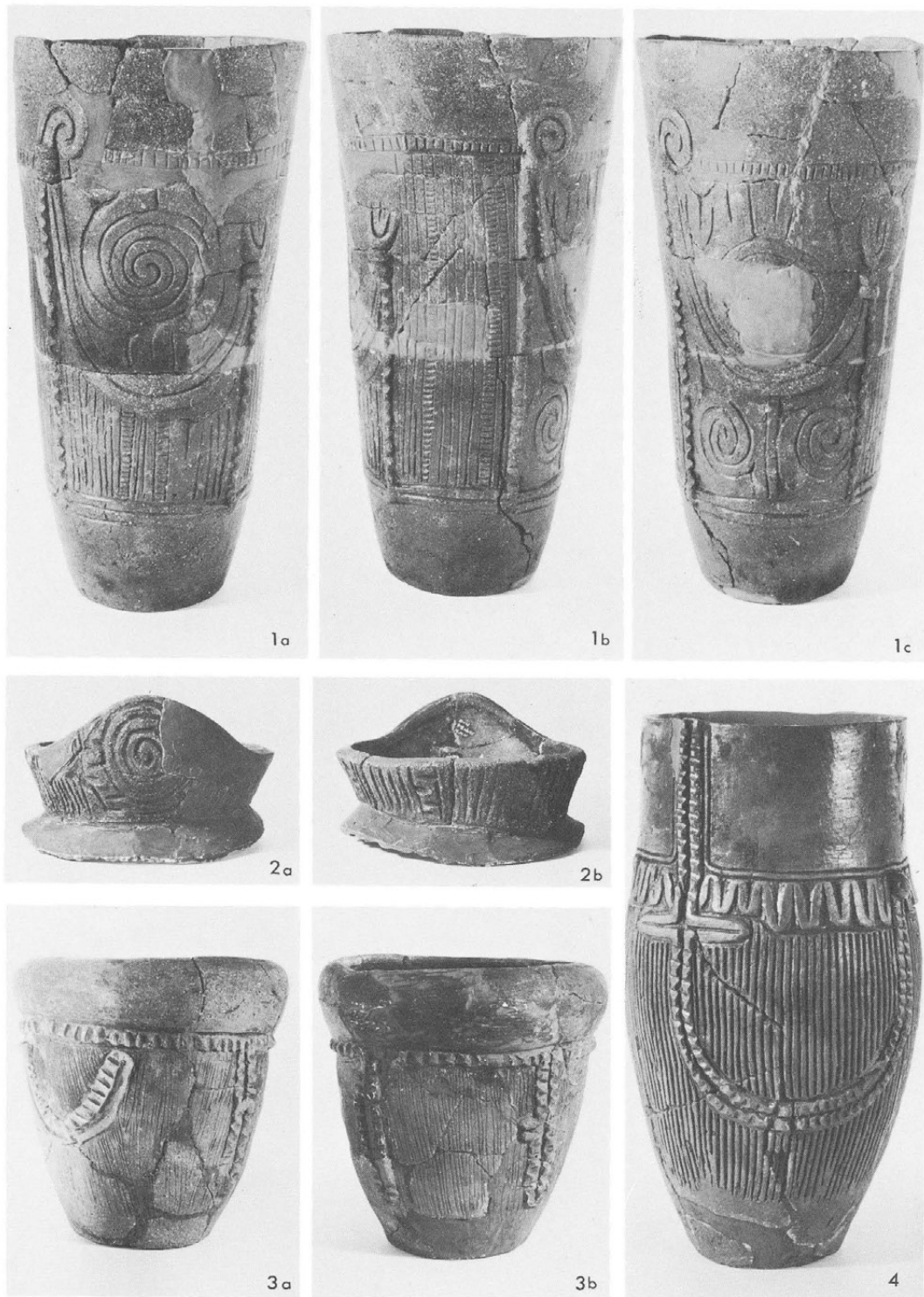


2a

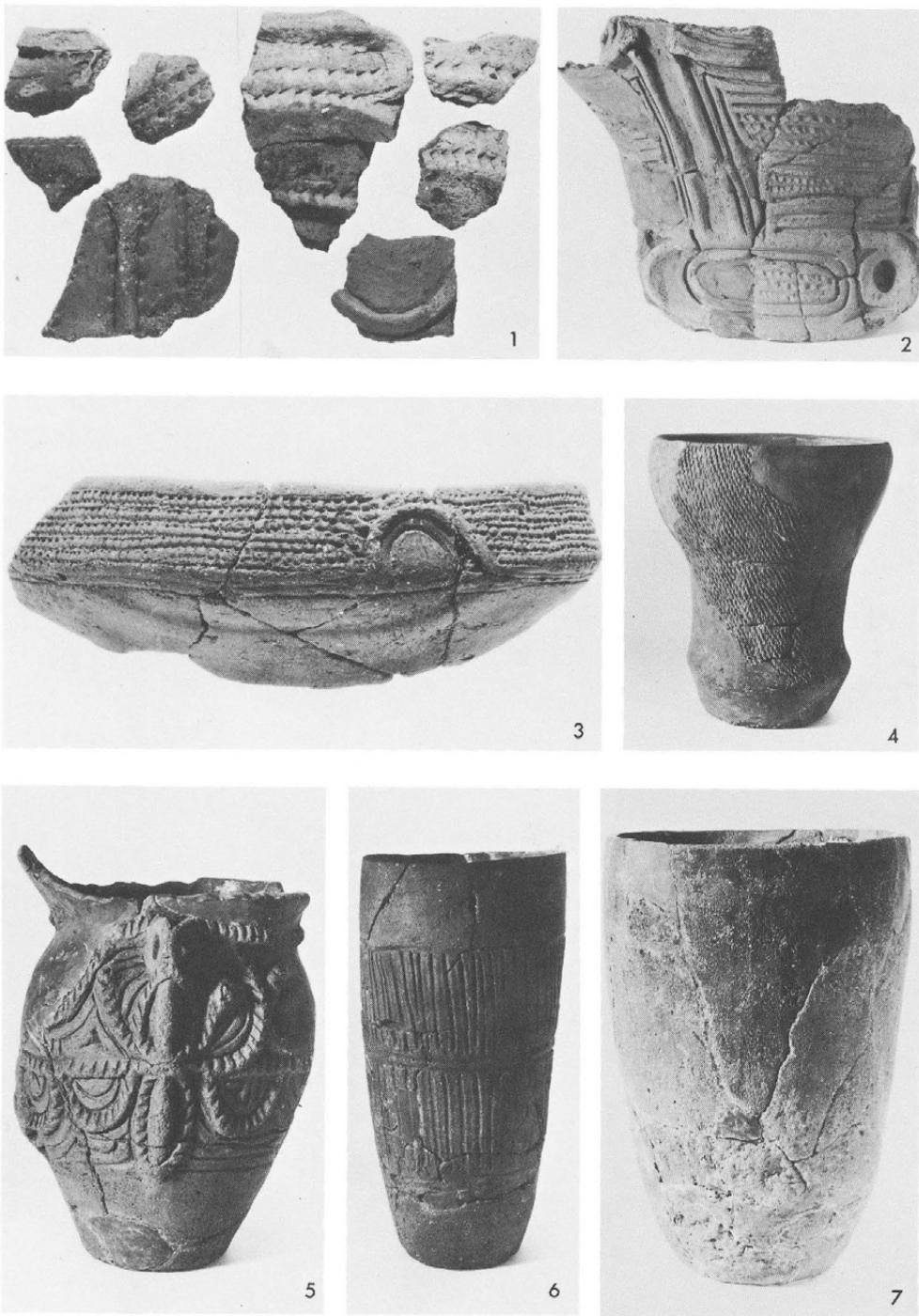


2b

2. 第9号住居址 (新) (20)



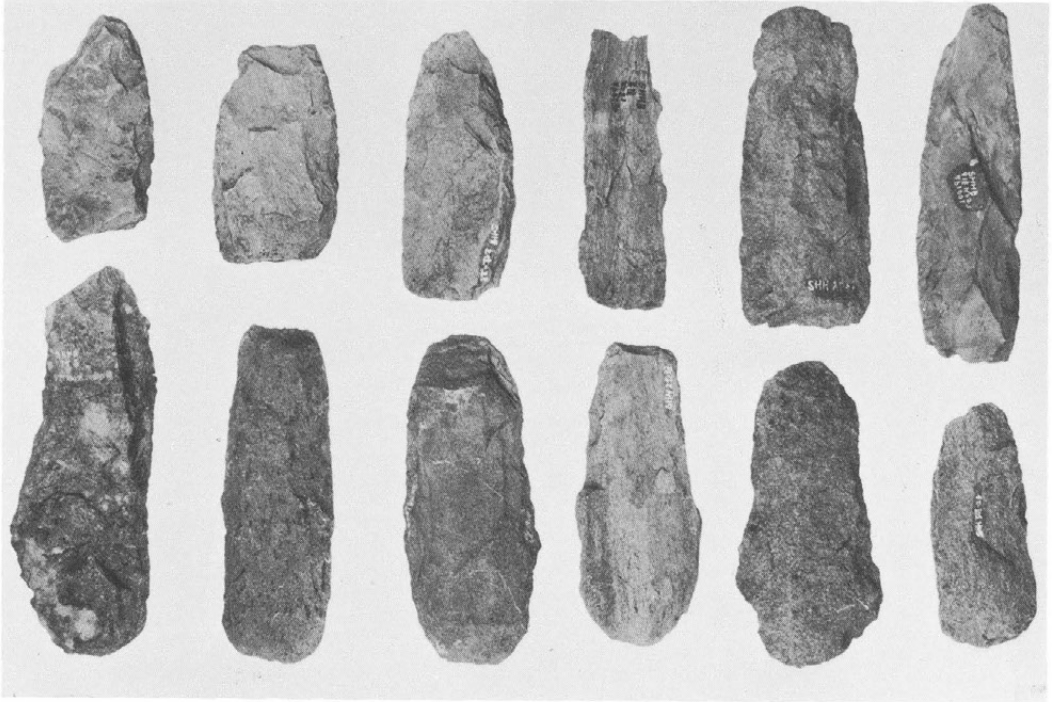
土器 (以) 1~4 第9号住居址 (新) 1-(18) 2-(19) 3-(21) 4-(23)



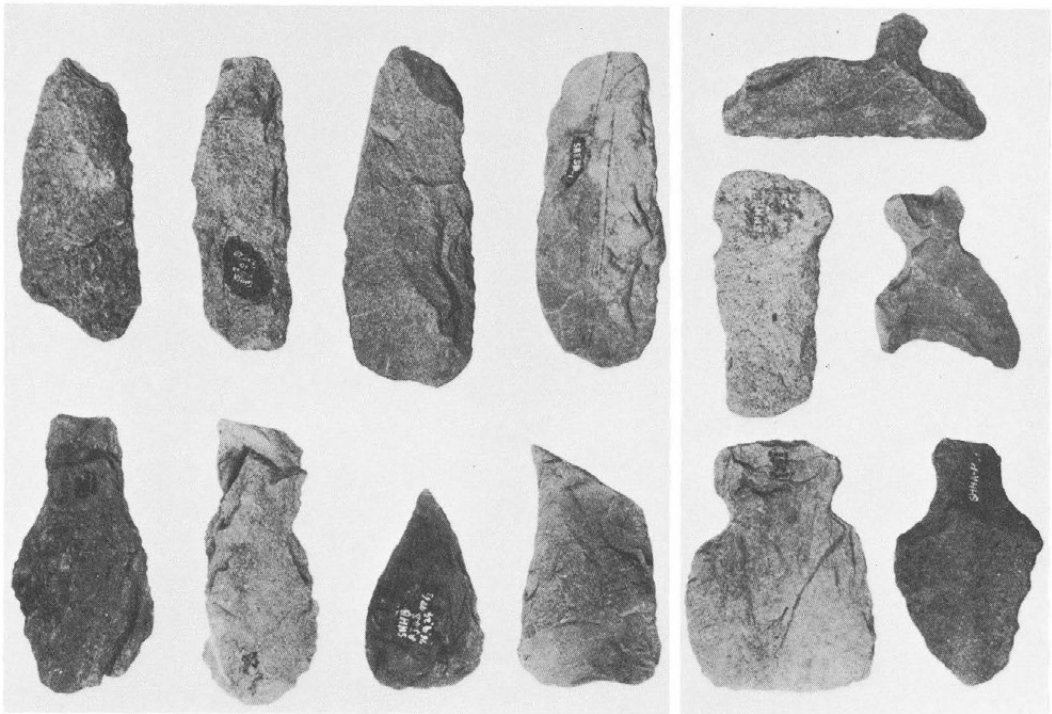
土器(⅓) 1. 第9号住居址(新) (205~208) 2. 第12号住居址(25) 3. 遺構外(29)
4. 第3号住居址(6) 5. 第2号住居址(新)(1) 6. 第2号住居址(新)(2)
7. 土壇5(28)



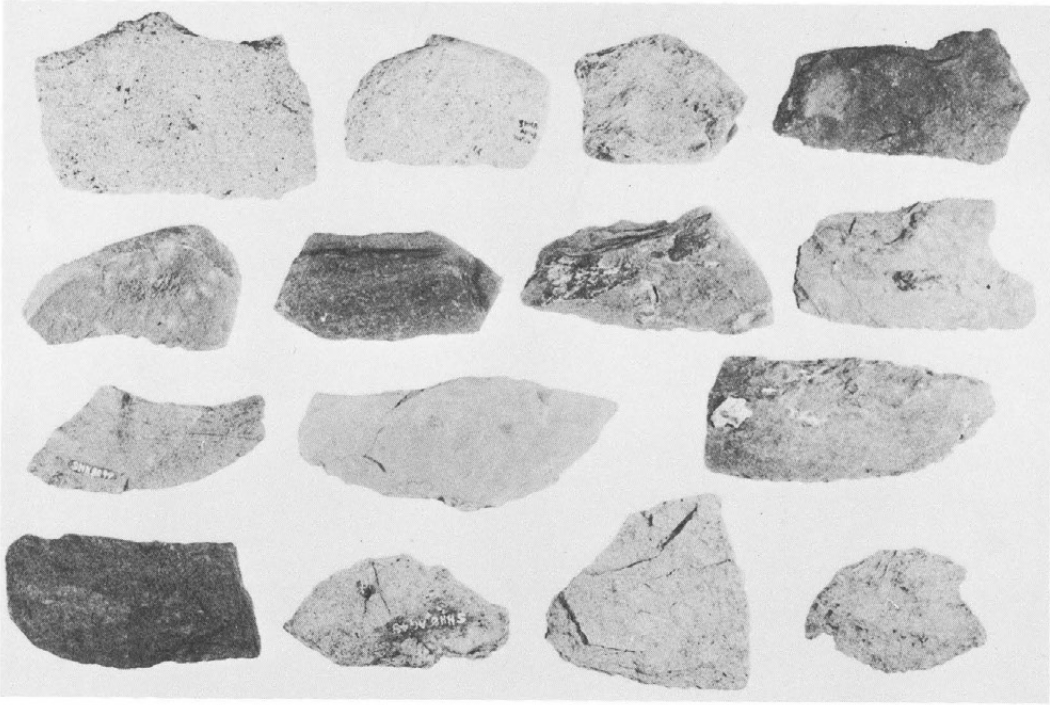
土器 12号住居址 (26) 27



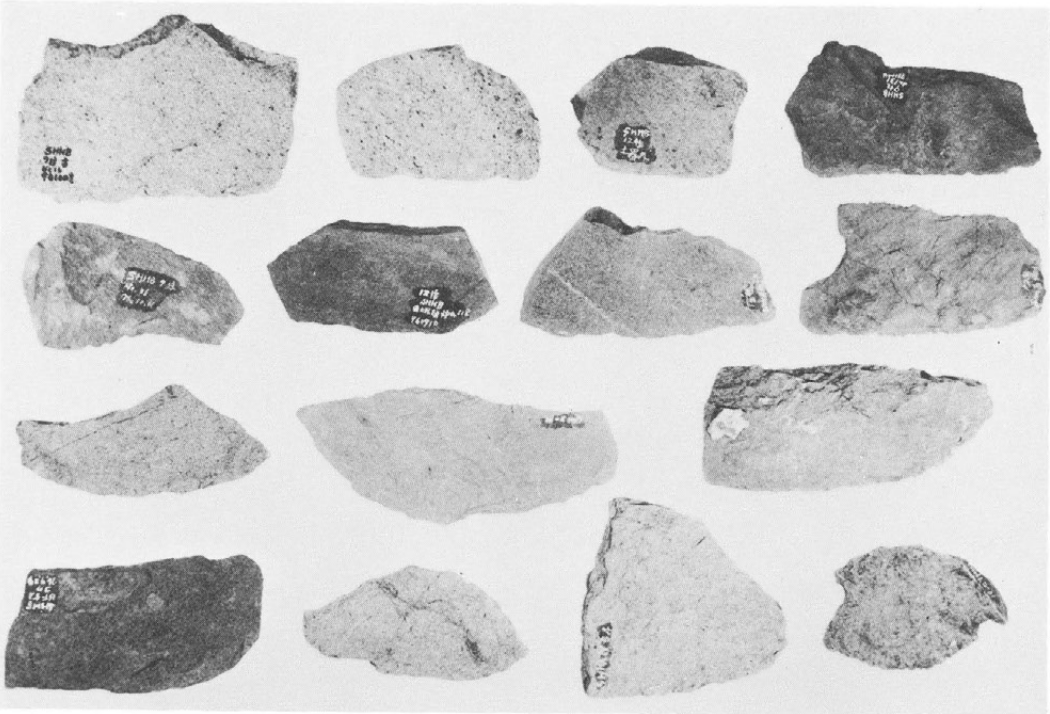
打製石斧 (1/2) 上段II A類 下段II B類



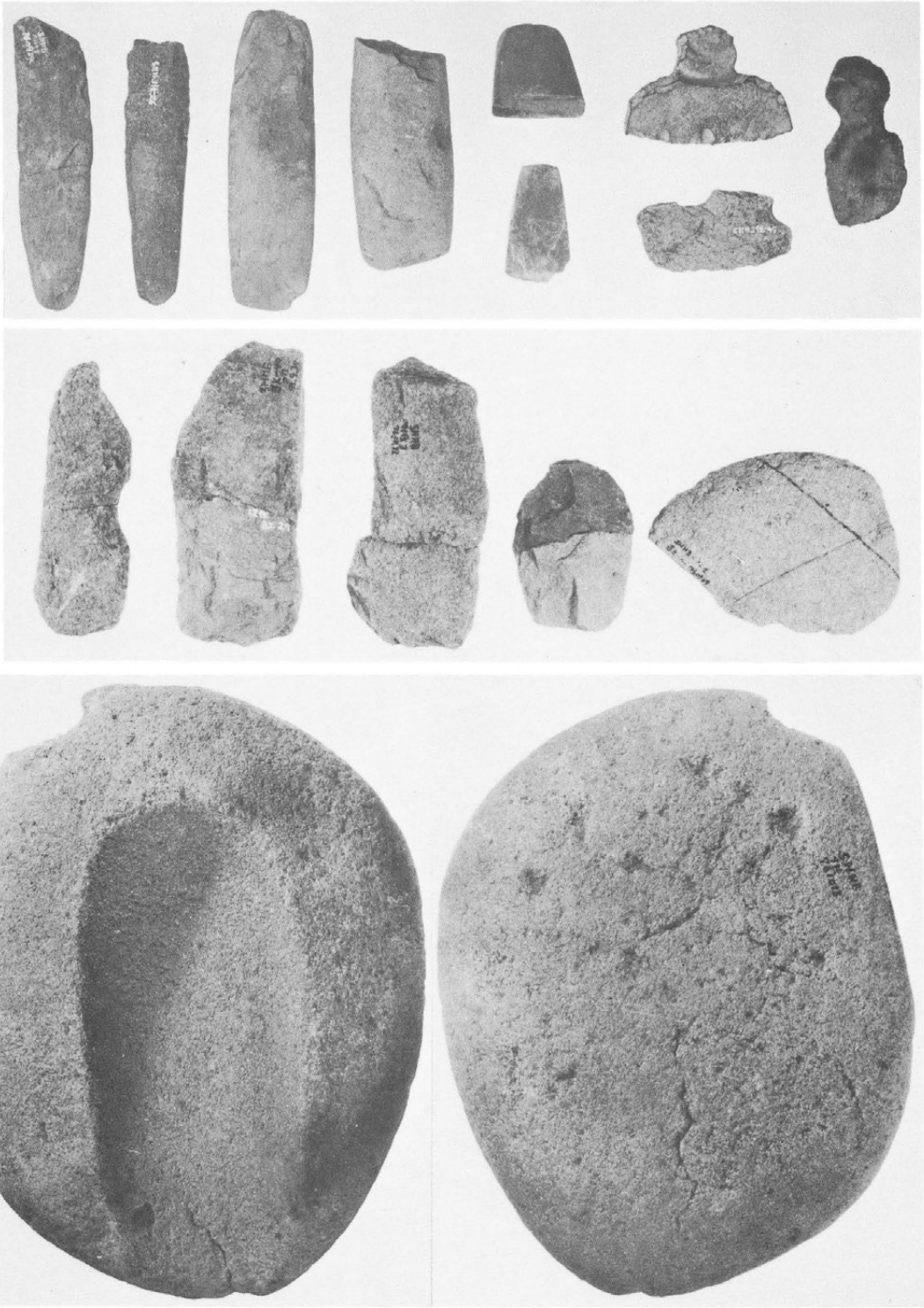
打製石斧 (左8点) (1/2) 上段II C類、下段左より、I C, I C, I B, III A類
大形粗製石匙(右5点) 1/2



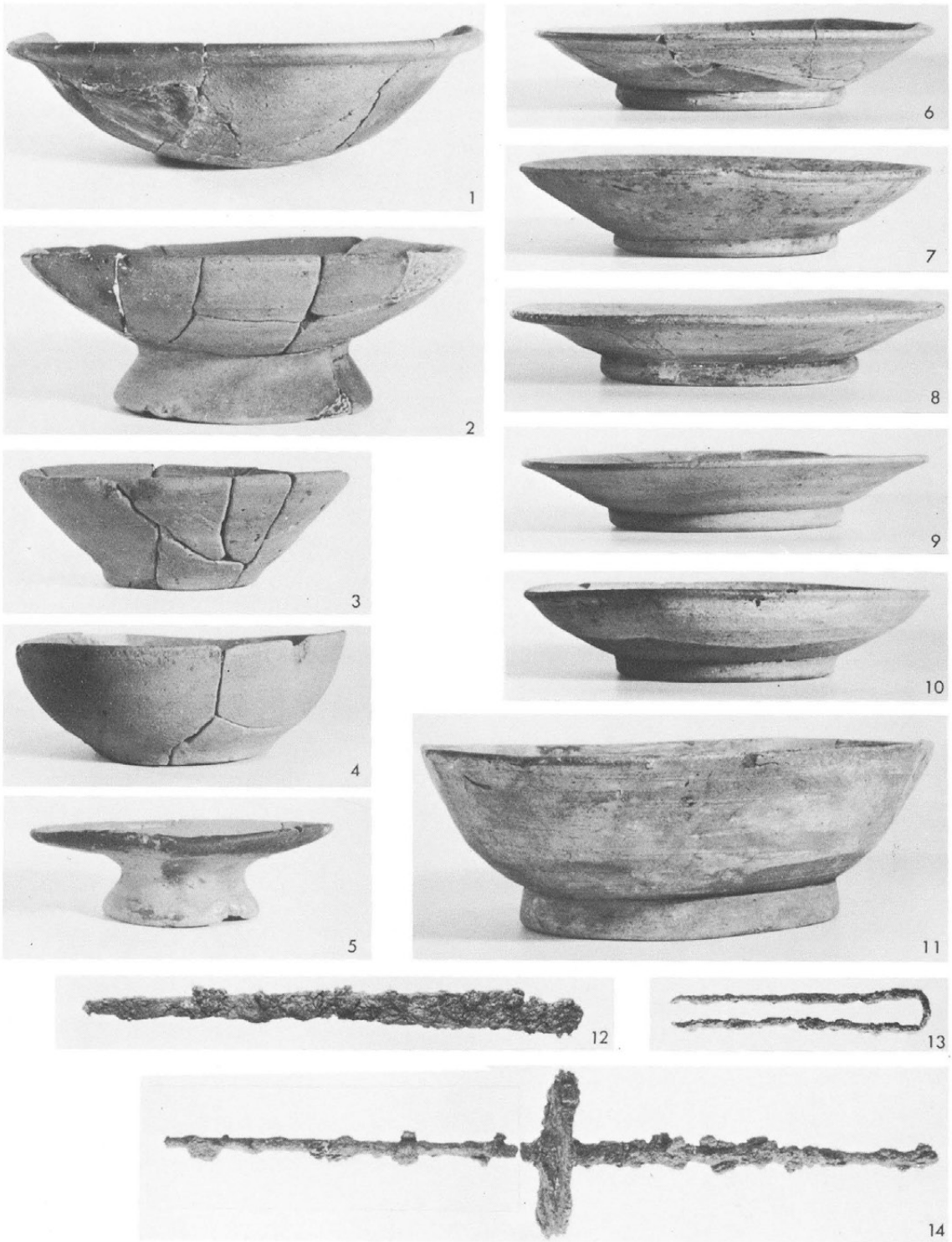
横刃型石器(1/3) A面



横刃型石器(1/3) B面 第1段ⅠA類, 第2段左より, ⅠA, ⅠB, ⅠB, ⅠC類
第3段ⅡA, ⅡA, ⅡB類, 第4段ⅡB, ⅡB, ⅡA, ⅢA類



石器 上段 (1/3) 左3点磨製石ノミ, 中3点磨製石斧, 右3点石匙
 中段 (1/3) 接合された打製石斧・石槍状石器, 横刃型石器
 下段 (1/4) 裏面に蜂巢状の凹みがある石皿



土器・金属器(1/2) 2・3・5～9・11～13第1号住居址, 1・10・14第6号住居址, 4.第10号住居址
 土師器 1.坏Ab(536) 2.坏BII(504) 3.坏C(501) 4.坏C(543) 5.(505)
 灰釉陶器 6.皿AI(508) 7.皿AI(510) 8.皿AI(511) 9.皿C(512) 10.皿C(533) 11.碗AI(507)
 鉄器 12.刀子(571) 13.ピンセット状鉄器(572) 14.紡錘車(576)

図版 30 頭殿沢遺跡



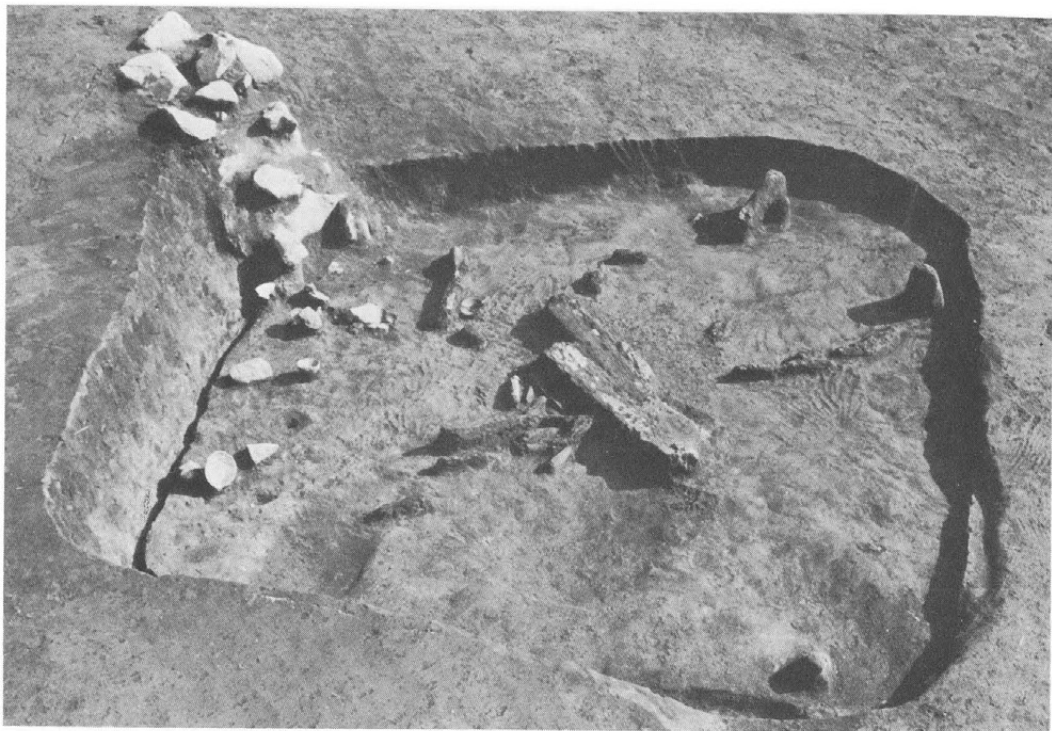
1. 全景（南西より）



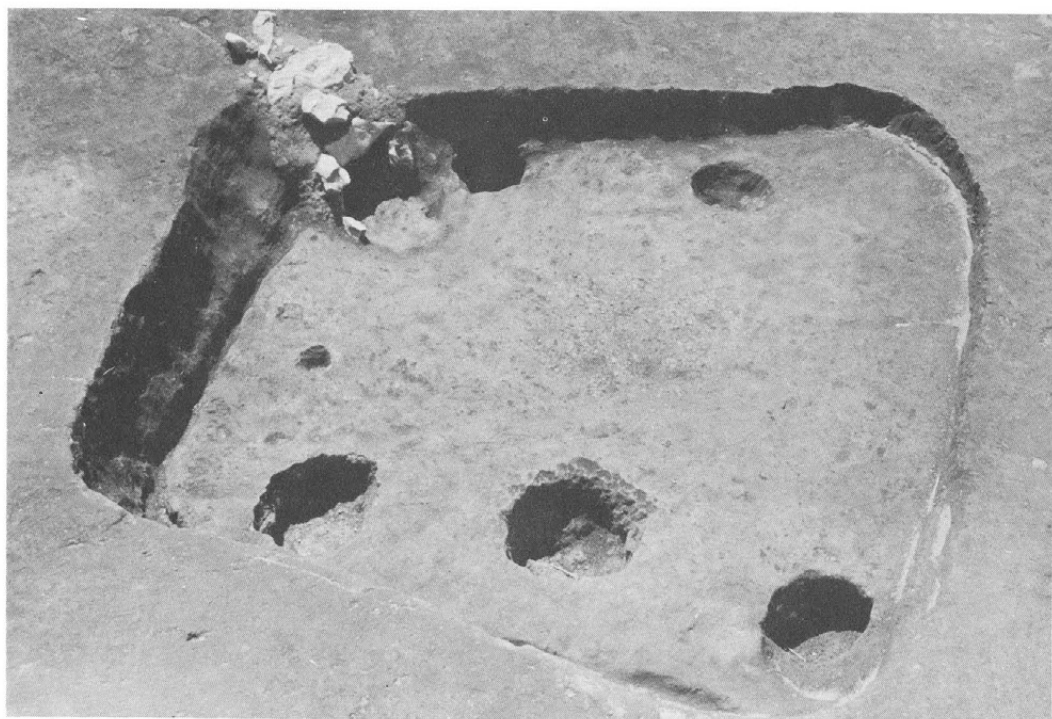
2. 1号住居址カマド



3. 2号住居址カマド



1. 1号住居址炭化材出土状況



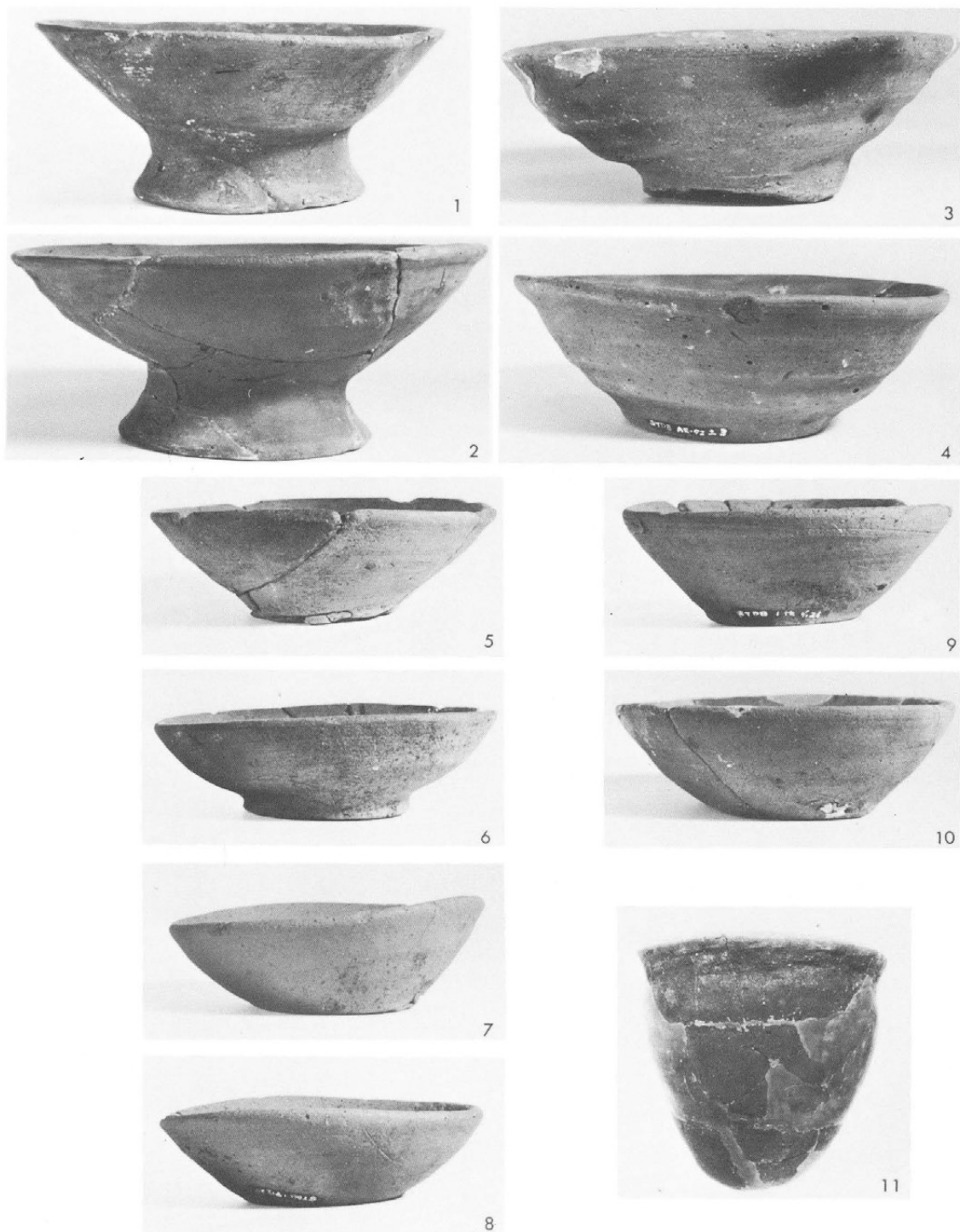
2. 1号住居址



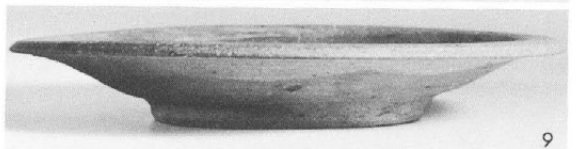
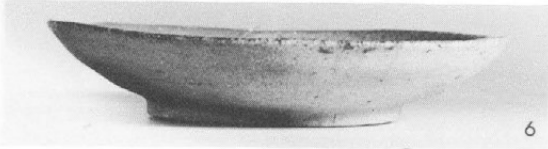
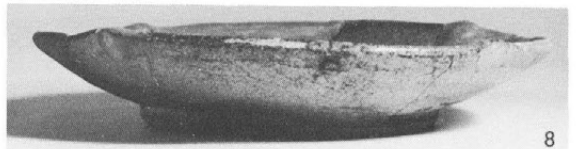
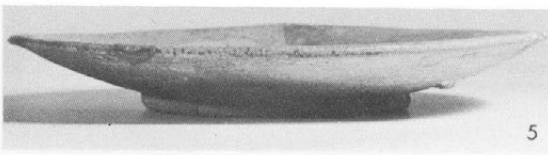
1. 2号住居址



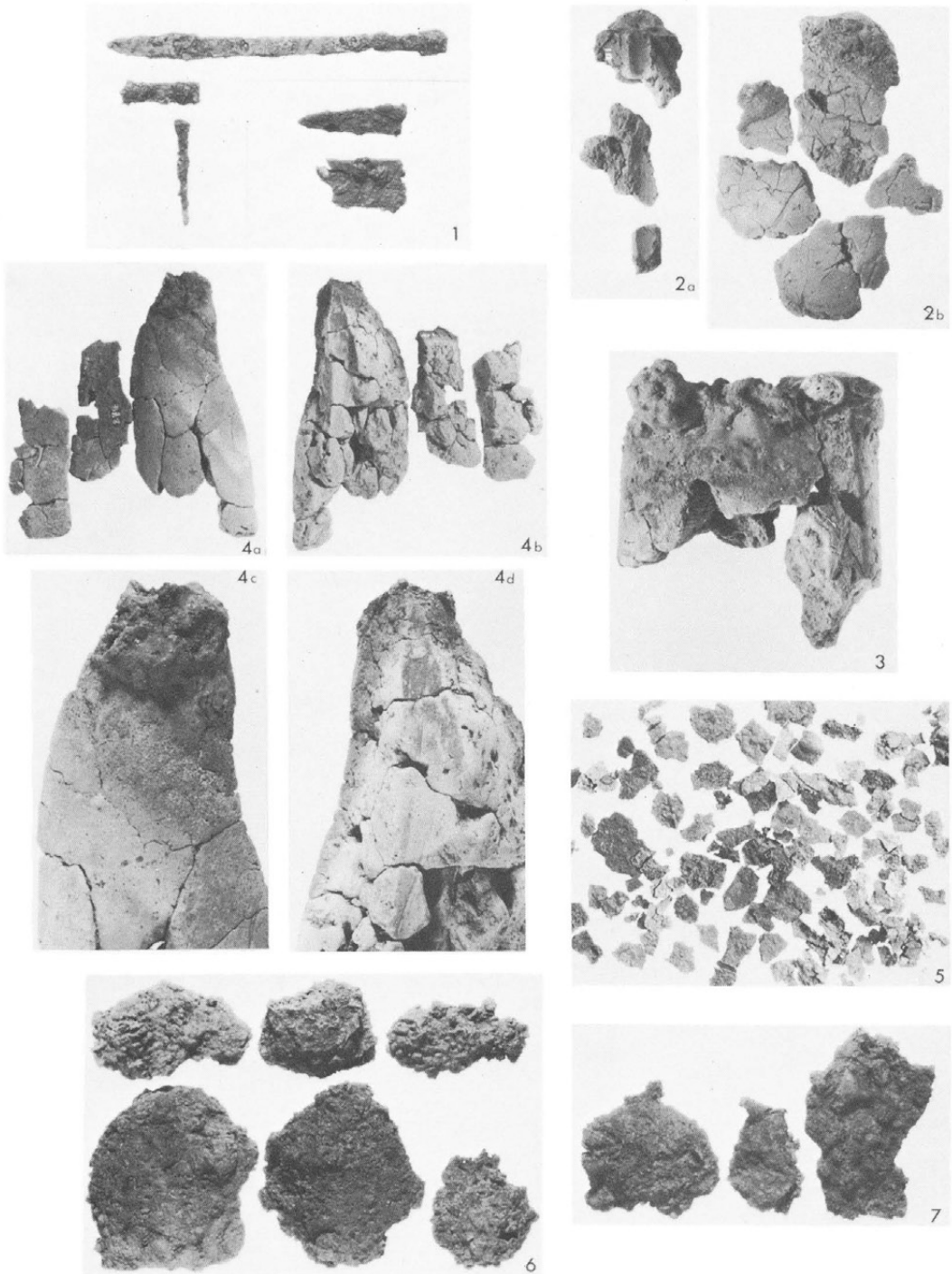
2. 7・8号住居址



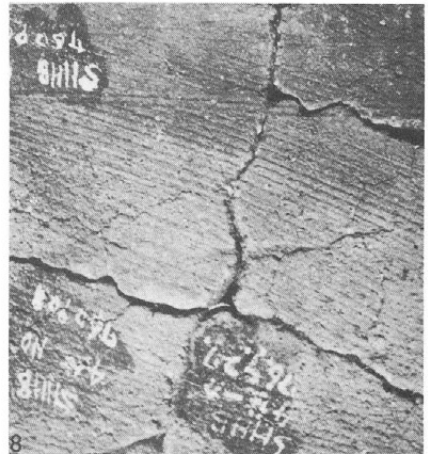
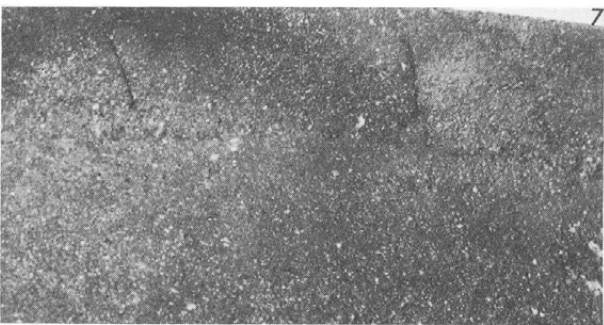
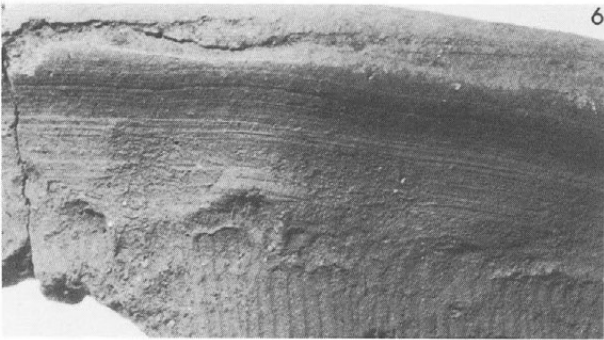
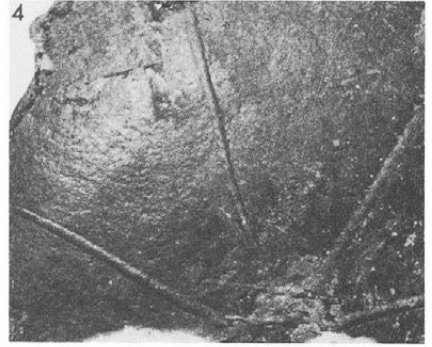
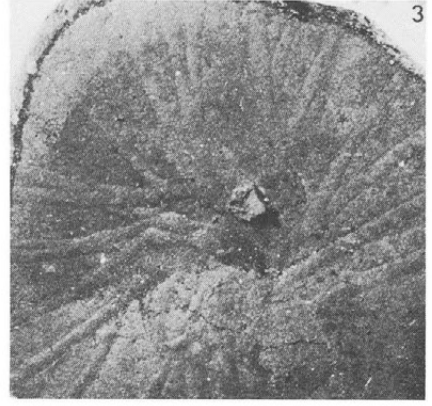
土師器 (1/2, 11のみ1/6) 5~9・11 第1号住居址、1・2・10 第2号住居址 3.土抃2 4.土抃3
 1.坏BⅡ(31) 2.坏BⅡ(29) 3.坏BⅡ(69) 4.坏BⅡ(70) 5.坏C(5) 6.坏C(4)
 7.坏C(3) 8.坏C(7) 9.坏C(6) 10.坏C(27) 11.甕C(14)



灰釉陶器 (1/2) 3・7・8・10第1号住居址, 1・4~6・9第2号住居址, 2. 第6号住居址
 1. 碗AI(48) 2. 碗AI(63) 3. 碗AI(16) 4. 碗AII(50) 5. 皿AI(57)
 6. 皿AII(58) 7. 皿AII(19) 8. 皿B(20) 9. 皿C(60) 10. 皿C(21)



鉄器・鉄滓 1. 鉄器類 (第2号住居址・遺構外) 2~5. 羽口 (2・3. 第1号住居址, 4・5. 第8号住居址) 6. 鍛冶滓 (第8号住居址) 7・8. 鉄滓 (7. 第1号住居址, 8. 第8号住居址)



1. 土師坏Abのヘラケズリ 2. 灰釉陶器皿のヘラケズリ

3～5. 黒色土器のミガキと暗文

6～8. 土師器甕C・Eの器面調整

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

—— 茅野市・原村 その2 ——

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月20日 発行

発行者 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

印刷所 松本市筑摩3270
電算印刷株式会社
電話 (25)4329 (代表)

〔非売品〕

